女學世界



第八巻
第一號

博文館發行

◎美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり◎

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令嬢佳人爭ふて之を用ひ賞賛の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

〜本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ〜

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す



恭賀新年

我國に於ける

流行の源泉

デパアトメントストアーの元祖

三越呉服店

女學世界　第八巻第壹號目次

▲新年の感（三）……渡邊千冬
▲威嚴ある女性となれ（四）……
元旦のことほぎ
▲デーリーメード永田美知子の生活（一一）……芙蓉
▲井上大勳位の家庭（一七）……夢蝶
頑健なる老侯爵＝一家親類の顔觸＝お菜は河豚とスツポン＝殿様の料理自慢＝總理大臣の手紙＝模範的賢婦人
▲九十九媼の長命實驗談（三〇）……糸左近
▲女子をして家庭の實務に熟練せしむる法（三八）……羽仁もと子
▲着實なる婦德の涵養（四二）……横倉秀子
▲新春三題（四五）……杉浦翠子
門松＝かるた會＝梅
▲かるたに勝つ法（四七）……紅葉會員
▲正月料理（五二）……龜井まき子
新年の膳部いろ〳〵寒中心得草
▲春の遊戲女の掌（六一）……竹貫直人
▲美人は何故に多く美男子に嫁せざるか（六五）……元祿姉さん
▲樂天の趣味笑の研究（七七）……吉野臥城
▲筆のパノラマ（八四）……高北貞子
▲令孃日記（九三）……峰子

▲春興小品（一〇五）……齋藤吊花
春遊び寶引合語
▲衛生評釋百人一首（一一三）……糸左近
▲表情を基礎とする美容法（一四七）……尾關數夫
▲婦人美と服色（一五三）……田添幸枝
▲諸國正月物語（一六一）……春告鳥
▲新婚日記……牛芦
▲染色と模樣（一七〇）……觀風子
今年の流行界
▲外交官の妻となる資格（一七六）
▲詞藻——和歌、短文、一口噺其他
▲妾の半生（一九二）……愛染女史

口繪

▲繪葉書（太田三郎）▲舞初め（上村松園）▲晴れ姿（榊原蕉園）▲初音（加藤南山）▲猿猴（狩野探幽）▲福壽草（河崎蘭香）▲筆蹟（多田介子）▲彈初め（宮崎與平）

寫眞版

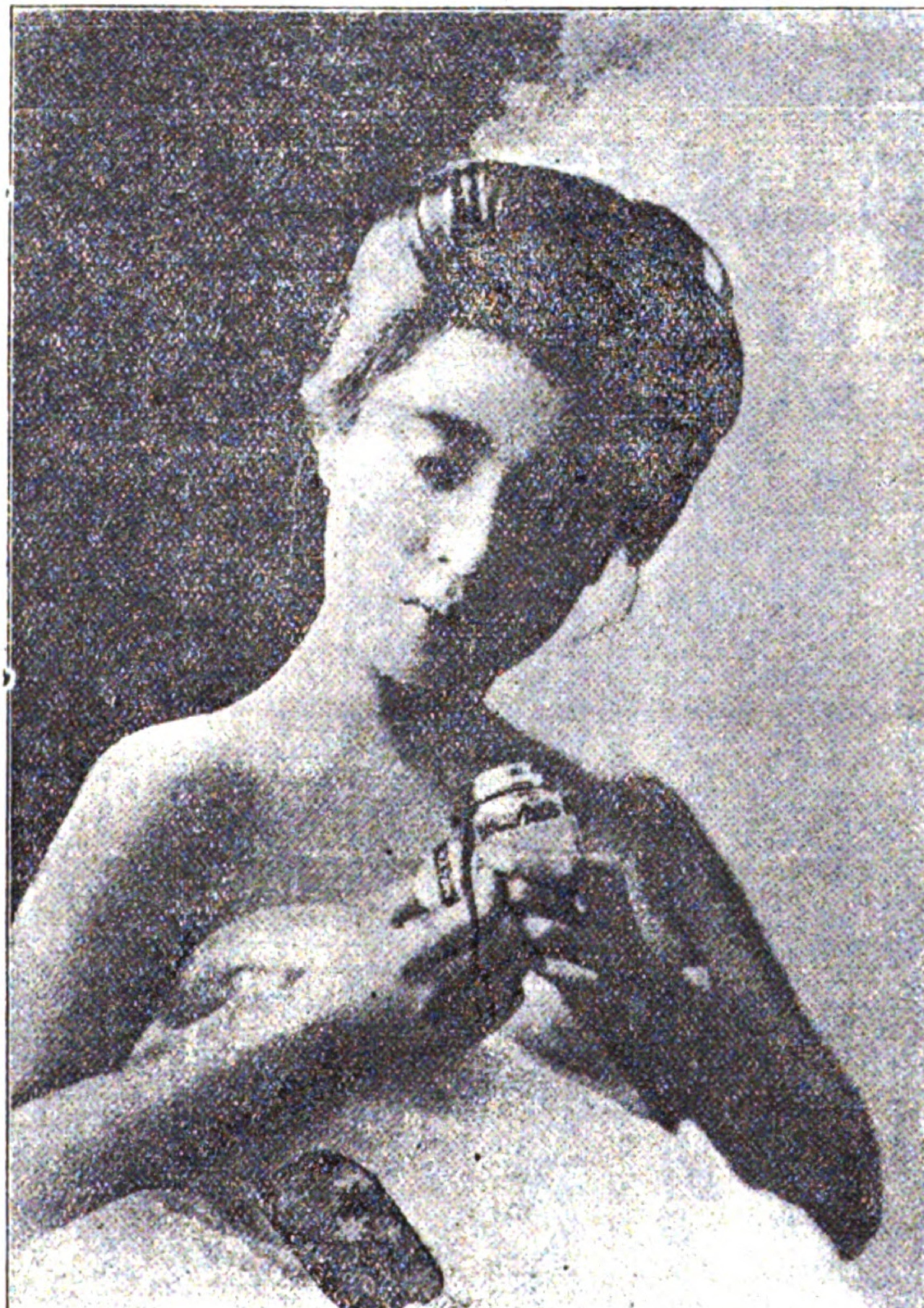
◎有栖川宮妃殿下◎久邇宮王子王女殿下◎西太皇と其侍女◎松方侯爵の一族◎庭園の美趣◎才媛畫家◎吉松侍醫の家庭◎社頭の松◎同胞十一人の家庭◎成美女學校の集り

新年附錄 百人一首歌かるた 一條成美

関西に一名物あり曰く

たつた白粉

如何にして新春の美容を粧はんか



然り理想の令色はたつた白粉に限る

本舗大阪仁壽堂分店

全國到る處に取次販賣す

破天荒の珍趣向

大懸賞「寶さがし」

賞品價格金一千圓

來る二月一日發行の女學世界は春季特別大附錄として『寶さがし』といふ極めて趣味ある珍趣向を案出し、別表目錄の通り金一千圓に價する大景品を愛讀諸君へ贈呈する事に致しました、さて面白い珍趣向とは、一體どんな事でせうか、皆樣試に當てごらんなさい、天機は洩すべからず、併し別段むづかしい事はなく、一寸考へれば誰にでも出來る、やさしい方法で、そして當れば目錄通りの大景品が得られます。

注意!! 同上景品附號は　數十萬部を刷出致し候も注文意外に澤山に候へば忽ち品切に相成やも知れ不申候間、讀者諸君は　二月一日の發行日を御失念なく御求めあらん事を希望仕候

懸賞 寶さがし 景品目錄

第一等（一名）三越呉服店切符（價格金百圓）

第二等（二名）玉寶堂製女持金時計（價格各金五拾圓宛）

第三等（五名）玉寶堂製金指環（價格各金貳拾圓宛）

第四等（十名）三越呉服店切符（價格各金拾圓宛）

第五等（二十名）内｛十名懷中化粧道具　十名婦人用肩掛｝（價格各金五圓宛）

第六等（百名）内｛二十名衛生腹卷　二十名束髮用三枚櫛　二十名婦人用駒下駄　二十名千代田草履　二十名縮緬帶上げ｝（價格各金貳圓宛）

第七等（二百名）内｛五十名婦人用（ハンカチーフ）　五十名上等香水　五十名銀貨入　五十名婦人用羽織紐｝（價格各金壹圓宛）

第八等（三百名）｛リボン、ハンカチーフ、西洋手拭、エビス袋、髷留、石鹸、煉白粉、其他｝（價格各金參拾錢宛）

品數總計　六百三十八點＝價格金壹千圓


恭賀新年
東京市京橋南傳馬町
大西白牡丹
電話本局三十番、三千番
振替口座九二九三番

上品の容姿は完全なる前髮じんに依りて裝ふ事を得る！

米國製

束髮前髮じん

REGISTERED
TRADE MARK
ヘヤロール

○一大注意　ヘヤロールは今や歐米に流行しつゝある束髮前髮じんなり、從來の毛製品は彼の忌むべき癩病患者又は肺病患者の遺髮の混りある憂ひありて衞生上恐るべきは勿論、常に鬱陶しく頭部に痒みを起し果ては禿げる心配等ありて知らず〳〵一生の不幸を來す恐れあり、大に注意すべし。



○本品の特長　ヘヤロールは微細なる金線にて製し輕き事鳥羽の如く空氣の流通至極宜しフケを生ぜず伸縮自在なれば大小の前髮になづみ最とも上品の容姿を裝ふべし且、腦病又頭痛の方には衞生上最も有益の新輸入品と謂ふ可きなり故に外部を優美なる絲網に覆へば毛を損じスベリ出す憂なし。

類似の粗品續々現はるに付特に「米國製」と御指定を乞ふ

定價一個卅八錢　送料八錢

團體にて多數御注文の際は割引御便利可致候

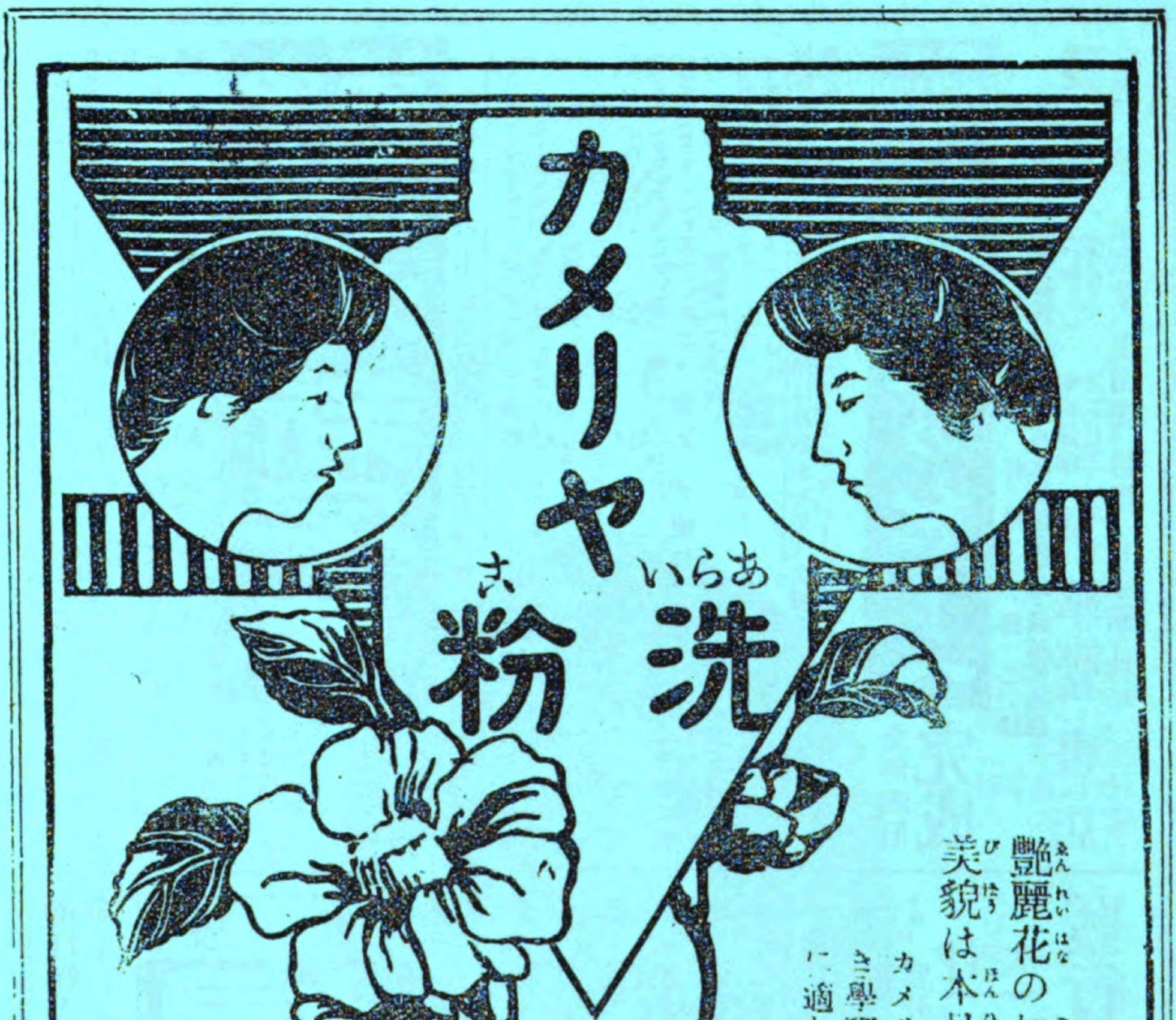
輸入元　東京々橋區鎗屋町一　日加商店　振替貯金口座八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四　御園おしろい本舖　丸見屋商店
大阪東區南久寶寺三　婦人小間物問屋　小栗小三郎

販賣店　各地和洋小間物化粧品店

女(いの二)

(八の三)


カメリヤ
洗粉
艶麗花の如く純潔雪の如き
美貌は本品の愛用によりて顯る
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を増し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ
殊に寒冷に遇ふて肌を荒害する憂なきは全く本品の純良なるが故なり
定價
大瓶 壹個 廿五錢
小瓶 同 十五錢
大袋 同 五錢
小袋 同 三錢
鑵入 同 十三錢
發賣元 ライオン歯磨
本舗 東京神田 小林富次郎

(いの四)

舞初め



上村松園筆


東京上野廣小路
◎高等美髮油◎
松みどり香油
定價
大壜四十五錢
中壜二十錢
小壜十二錢
一合卅五錢
山崎油店


恭賀新年
千九百七年式巴里流行
乳狀薄化粧
フェスクリーム
最も日本婦人に適應して而も皮膚の營養滑澤に實効ある佛蘭西新式
煉白粉代用品
注意(普通のおしろいの如く多量に用ゆべからず)
顏面美的の價値は
FACE
CREAM
使用後一回毎に
實現す
(定價一瓶金三十五錢)
東京市日本橋區本町二丁目
高等香油 チエリーオイル本舖
發賣元 高橋初次郎
(全國至る處の化粧品店小間物店に在ります)

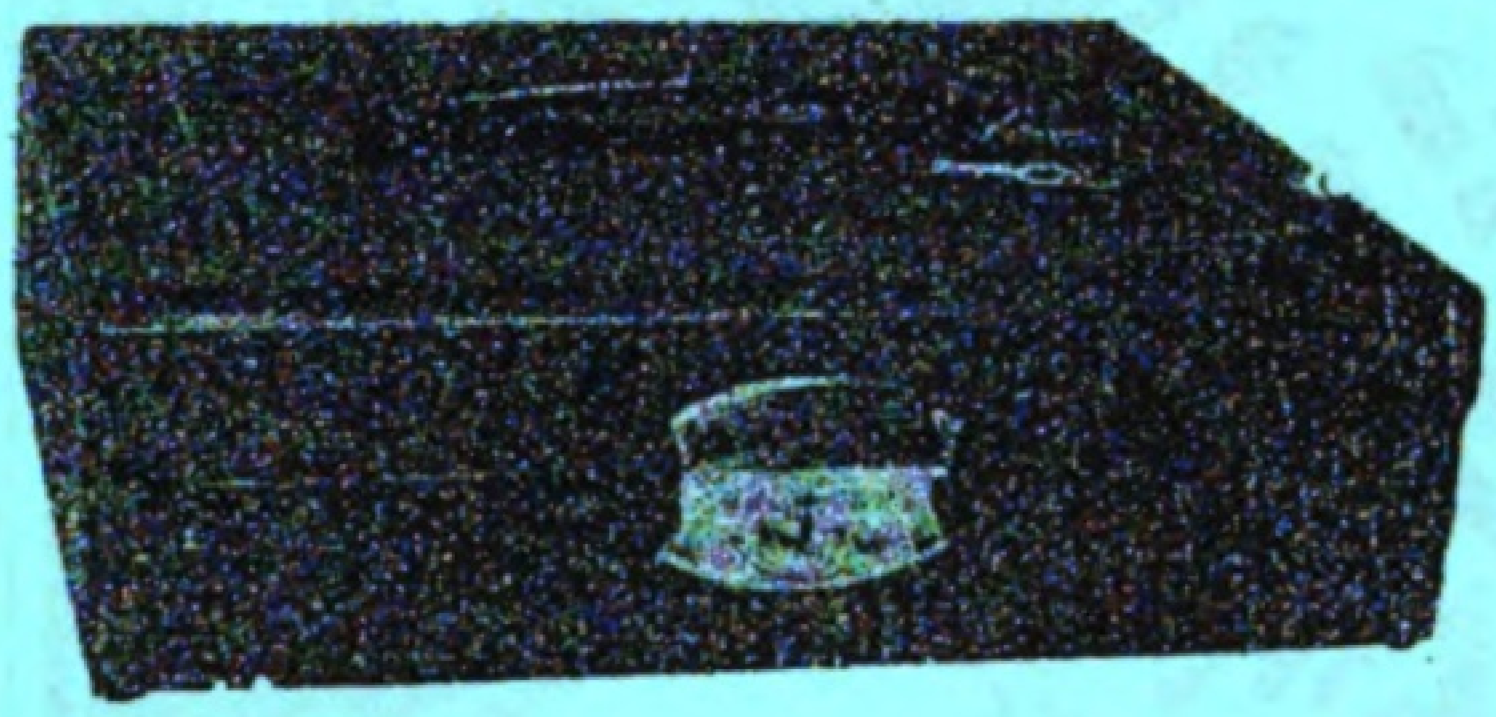
女(ろの一)

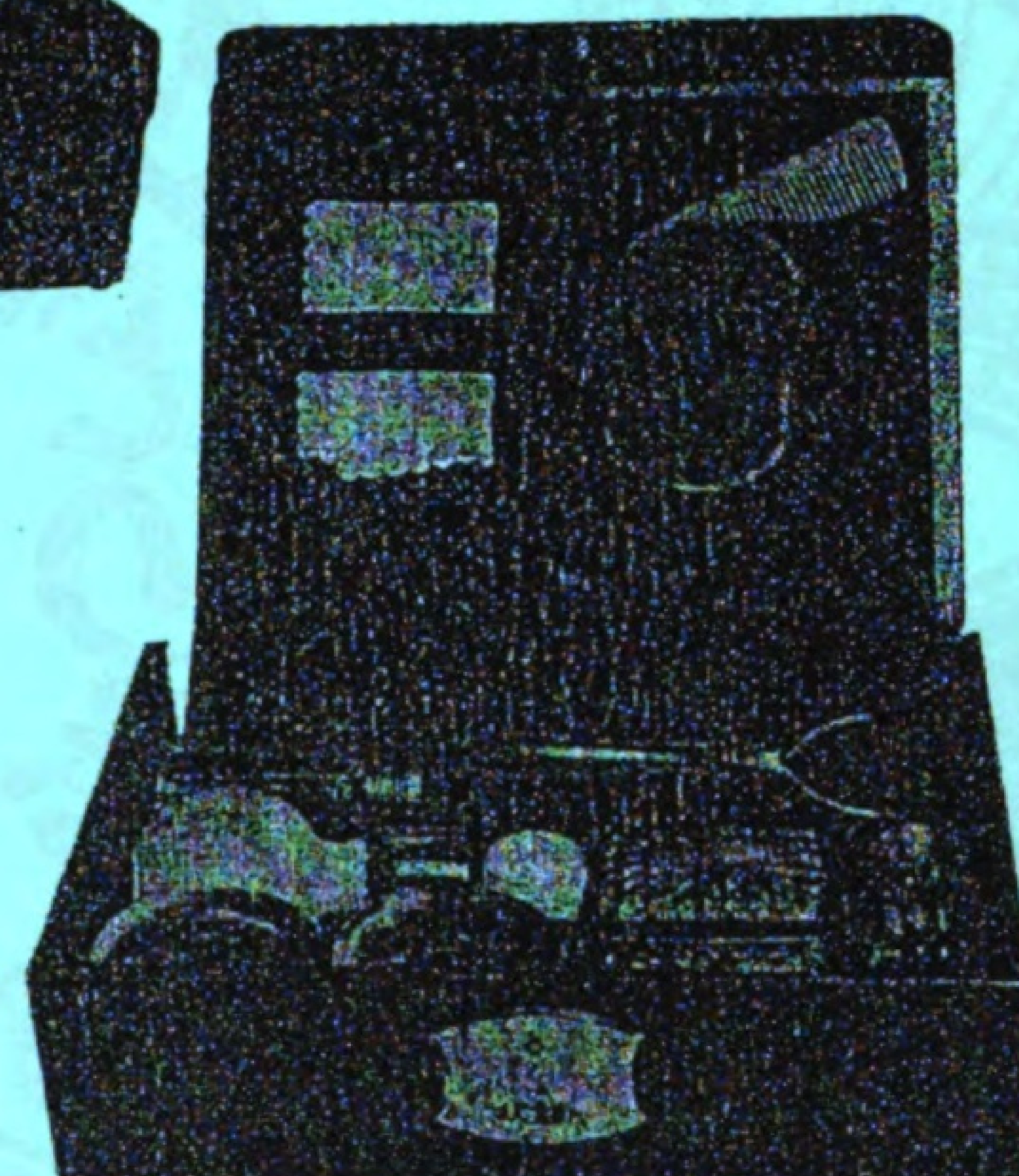
謹賀新年

旅行携帶に便利なる樣[illegible]製

家庭用美顔術機械

（詳細なる使用説明書附）





定價（金八圓より／金拾六圓迄）

◎本器お買入れのお方に限り無料にて施術

東京京橋區竹川町十二番地

（シガラミ新道）

理容館本部

電話新橋三八〇四番

男女

ちゞれ くせ毛 赤毛 は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵劵封入申込の方に

無料敎授致て美髪にして差上げます

東京 麻布區材木町 岩阪澄子

黑岩式簿記授業開始

本年ヨリ更ニ我國商取引ヲ組立タル黑岩式商業簿記ノ授業ヲ開始ス志望者ハ申込アレ規則書入用郵劵貳錢要ス

東京市神田區裏猿樂町四番地

女子計算員養成所

恭賀新年

黑岩規

エハガキ

出版製造 吉川日本葉書會

發賣 東京本町 博文館

袴乃親玉



恭賀新年

卸 ㋯ 部

東京日本橋長谷川町

美濃磯本店

(電話浪花二八五九番)

本郷五丁目 美濃磯支店 (電話下谷二四一五番)
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

第二回新學年

會員大募集

婦人技藝講義

見本は四十錢にて送る

本科一ケ年 去十一月初め初號發行 會費參拾七錢
高等科六ケ月 四十一年一月第一號發行 會費同上
撰科(本科)六ケ月 會費一科目一ケ月貳拾錢六ケ月分金壹圓

十七術科、八學科を各專門大家が最も平易の文章にて親切に講述し、多くの着色石版、寫眞版及び木版を入れて恰も教師の傍にある如く修習し得る我國唯一の技藝講義錄なり

營業部

諸種技藝の講習上に必要の器具材料、製作上の見本及び美麗斬新の製作品を精々安價に販賣す

技藝練習部

通信講義にある各術科を最も親切に實地に就て教授す正規の學校以外に於て手藝を學ばんとする人には最適の講習所なり(詳細規則營業目錄は郵劵貳錢又往復葉書にて送る)

東京市小石川區新諏訪町十三番地

帝國婦人技藝協會

振替口座一七〇二

女(ろの三)



ゼム一粒の　馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用ひて終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる

ゼム二粒は　煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる

ゼム三粒は　音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる

ゼム五粒を　食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずる士の常用劑として愛用せらる

ゼム十粒は　異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる

ゼム定價			
	七十五粒入十錢	四百卅粒入五十錢	容器入ゼム
	百六十粒入廿錢	九百粒入一圓	二十錢

日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎

支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會

其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

はれ姿



榊原蕉園筆

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衛 印

陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印

海軍軍醫少監從六位 日向次作 印

海軍大軍醫正七位 横井太郎 印

陸軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

●醫藥用胃活錠 は有名なる五大軍醫の合議製劑胃活を加減し更に二三の新特効藥を加へた新式の錠劑であつて、完全なる健胃劑として現今の世界に知られたる藥品中其類が無い重に醫藥用として作られしが、今回廣く世上に發賣することとなりぬ

⊙胃活錠は携帯に便に飲むに湯水を要せず、飲めば直に溶解し他出の際頓時服用の益有り

⊙歐米の民間療法とは、胃活錠にて胃弱症を治するの類なり

理想的 健胃劑



(注意) ◉胃活は女の如し、胃活錠は男の如く、胃活よりは其力強し

但し胃活の廢する事の出來ぬのは女の廢する事の出來ぬと同じ道理である

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎膓滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	胃活錠
壹圓	壹圓
六拾五錢	五拾錢
四拾五錢	貳拾錢
二拾五錢	

●全國郵送料●

發賣本舗 東京銀座一丁目廿番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

世界唯一 麻病消渇の根治新薬

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範薬なり、本剤はありふれたる普通の賣薬と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新薬を主剤とし是を内服して「麻病消渇の病原たるゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製剤せし新薬に付軽症は壹剤重症は特別製分にて必ず驚て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌剤の如き迂遠無効有害の姑息薬と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ薬價不廉なり用薬者豫め之を諒せよ薬價壹剤壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館薬房

白色特効 ペーアス石鹼

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗悪品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館薬房

世界無比 最新發明薬

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 美麗に除去 目に必らず

保険附 新發明薬にして患部の大小軽重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を遺さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし、實に世界唯一の新薬也但し本剤は其製剤を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する薬を送付すべし價は各壹剤分壹圓拾錢參剤半分參圓拾錢六剤分五圓拾錢拾貳剤分拾圓拾錢でゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大剤を求むるを適用とす）着金即刻小包郵送す

梅毒根治新剤

本剤（薬名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年苦辛經營の結果成功したる最新最良の薬物なれば現世紀に於ける唯一のばい毒根治特効新薬なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。蓄毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても誓って根治することを確證す從來醫療賣薬等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本剤を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ 薬價壹剤分壹圓拾錢貳剤分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢以上着金次第送薬す郵便切手代用貳割増しの事

●式薬 専賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館薬房

眞正極秘 粋珍書案内

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絶快絶眞に粋士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 東雲堂書店

女（はの二）

詳細目錄御望ノ方ハ郵券二錢相添へ御申込被下度候

和洋樂器大販賣所

電話新橋 一二五九　　振替口座 七一五八

十字屋樂器店

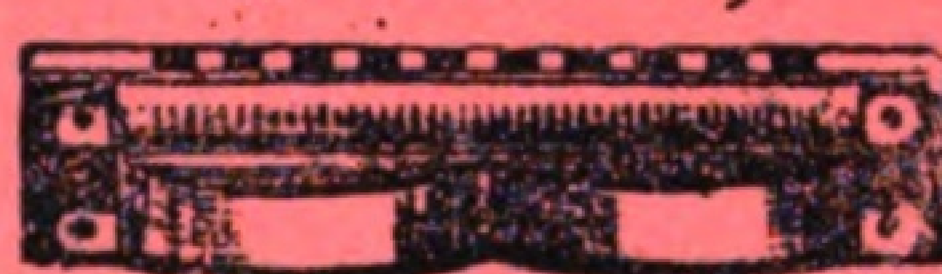
◎好適品各種新荷到着

大聲發音器



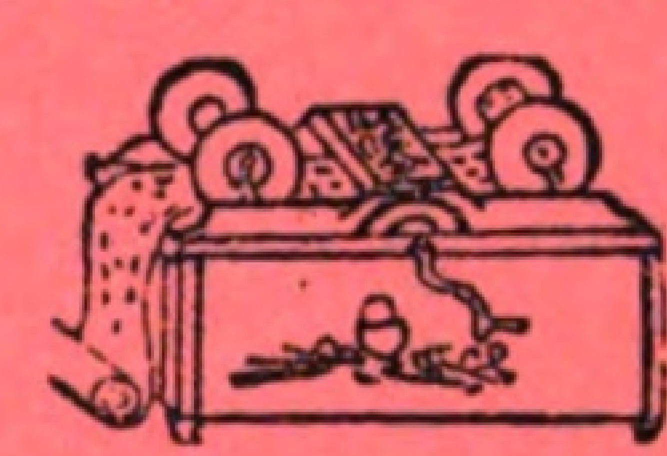
各製造會社特約

西洋横笛（ハーモニカ）



金卅五錢以上金二圓迄

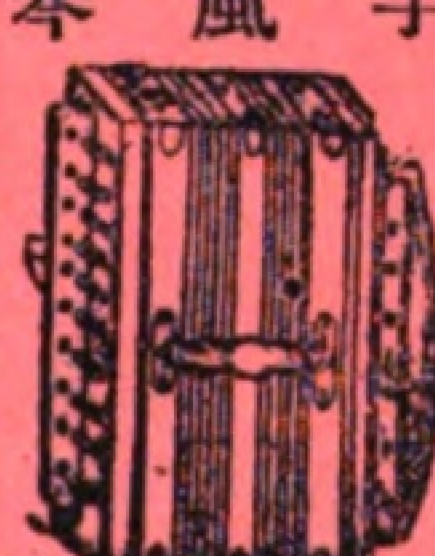
無師獨奏 紙腔琴



上製金拾五圓　中製金拾圓　小形金五圓

西洋横笛新荷着

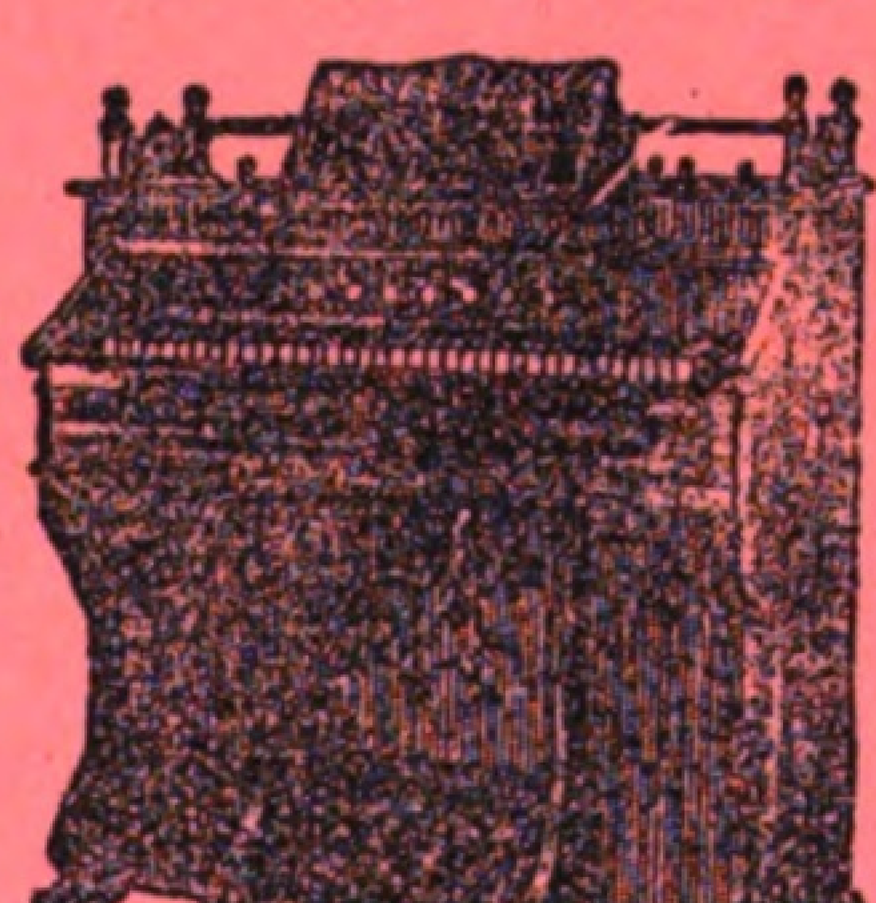
舶來 手風琴



金參圓卅錢以上 金貳拾圓迄

手風琴新荷着

東京博覽會一等賞牌
日本製造元祖
西川風琴



第一號金拾八圓以上 第廿號金四百圓迄

和洋 バイオリン



◎舶來バイオリン新荷着

附屬品各種

◎箏曲 松風 バイオリン樂譜　正價廿五錢 郵税貳錢

◎同 椿盡し 同　正價參拾錢 郵税貳錢

◎同 江の島の曲　正價參拾錢 郵税貳錢

◎同 うすの聲　正價參拾錢 郵税貳錢

◎根曳の松　正價四拾錢 郵税貳錢

◎ケンダル氏著 英語唱歌集 全三冊　正價各拾五錢 郵税各二錢

右第一集久敷品切の處今般再版發行候條陸續御用命願上候

東京銀座三丁目

女（はの四）

猴



狩野探幽斎筆

福壽草



河崎蘭香筆

謹賀新年

山葉風琴　金拾八圓以上金参百五拾圓迄各種
山葉洋琴　金参百参拾圓以上金壹千参百圓迄各種
鈴木ヴァイオリン　金貳圓以上金百貳拾圓迄各種



(ピアノ・オルガン調律修繕應需)

船來洋琴、風琴、ヴァイオリン各種
樂隊用吹奏樂器、手風琴、ハーモニカ各種
和洋音樂書各種
郵券貳錢御送附アレ詳細ナル目錄進呈

(その二)

東京市京橋竹川町拾三　合資會社　共益商社樂器店　振替貯金口座一五八〇　電話新橋五二九番


恭賀新年
◉東京樂器製造所製
オルガン(金拾八圓以上)
◉山葉製オルガン(金拾八圓以上)
ピアノ(金參百卅圓以上)
◉鈴木製ヴァイオリン(金貳圓以上)
◉獨逸國直輸入ピアノ(金五百圓以上)
オルガン(金參百五拾圓以上)ヴァイオリン(金八圓以上)同上附屬品吹奏樂器
絃樂器各種
◉舶來樂譜
◉獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は御申越次第直に御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一五五〇番 振替貯金口座一四九番

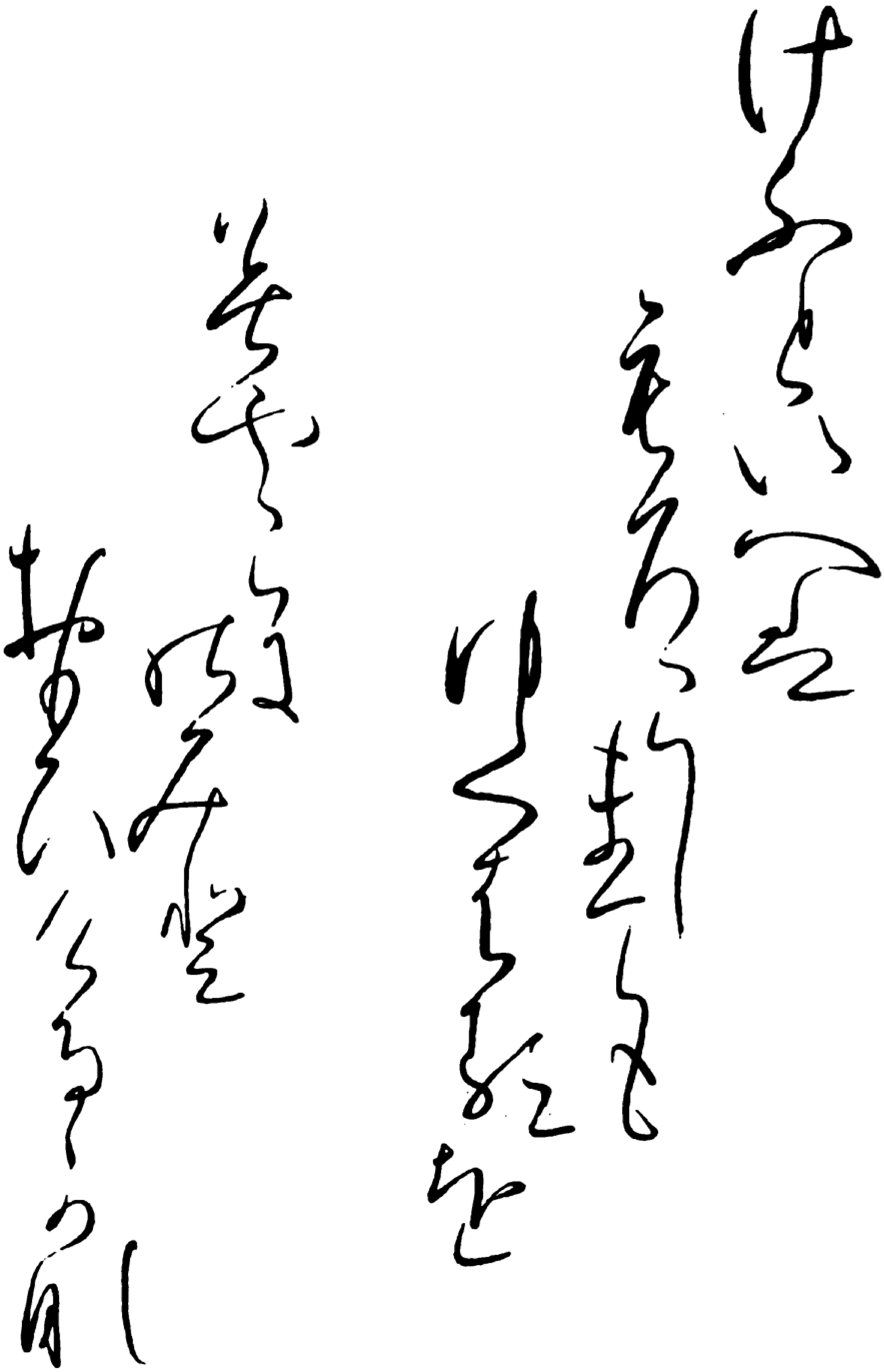
女(にの三)


御料
畏き邊りの御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造元 東京芝 胡蝶園
發賣元 東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
ねり製 御園白粉
水製 御園白粉
こな製 御園白粉
化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等水油 御園香油
高等香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

はつね



加藤南山筆



多田令子筆


美術
造花材料
謹賀新年
發賣御案内
造花用電燈
盛籠用、花輪用、花簪用、枝花用等各種
營業概目。造花半製品、造花用染料、造花用器具、摘ミ細工材料、金銀モール、擬寶石、電氣用眞線、
東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地
美術造花材料商 天野卯兵衛商店
持長電話浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番
造花用カタログ及營業案内御入用ナレバ此切取相添へ御申越被下度候
縣 郡 町村
切取線
女學世界

女(その一)

女（ほの二）

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑)の如き一時おさふムネスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

(藥價)一劑四十二錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入
美容料
肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は 並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて確實顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の大盛を奏み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證
新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房 (電話下谷五四六番)

最も進歩せる美顔法

皮膚の衛生と牛乳

（その四）

世界中で最も美しい皮膚を有つて居るといふ佛國婦人はどんな皮膚衛生を行つて居るかといへば常にミルク劑を用ゐて居る即ち美顔料として用ゐるのは固より入浴にさへ牛乳浴を用ゐるといふことでミルクには皮膚を美艶にするだけの營養分を有して居るから之を用ゐれば皮膚に營養を與へる故に近來歐米各國では何れもミルク劑の化粧品を賞用するのでミルク劑の主材としたものが非常に貴婦人間に歡迎されて居るといへば牛乳を直接使用すれば此上ないと思ふであらうが牛乳には水分が多量に含み使用に多量を要し不便の點が多いそれで實際皮膚の艶麗といふことを心掛けるものは牛乳の有効なる成分のみを精製して牛乳の臭分なく腐敗し易き缺點を除いた上に少量で充分の効果があつて皮膚を滑らかに色を白くする上皮膚に營養を與へ皮膚の細胞作用を活潑にするので艶麗絶美となり皮膚のあらゆる故障を去り脂肪の過多なるも少なきも用て効能が多く天然の色澤を保つて生來の美人となる事が出來ます併し日本には此の種の完全なる化粧品が少ないたゞ獨り以上の効能を具備した上高貴なる香料を配合したる理想的化粧水としては東京日本橋區馬喰町一丁目の平尾賛平から發賣した『乳白化粧水**レート**』あるのみで現今紳士淑女間に可驚歡迎を受けたるのみならず畏くも　東宮妃殿下の御用命に接しました苟も素顔の美を望む方々は白粉を御用ひなくも**レート**を朝夕御用ゐあれ定價は特別大瓶金一圓大瓶金五十錢小瓶金三十錢送料金八錢殊に高尚なる御進物に適當の品にて各地の文明的化粧品販賣店にありますが近頃類似のにせものがありますから『乳白化粧水**レート**』文字と平尾賛平發賣に御注意願ます

發賣元　東京市馬喰町一丁目　平尾賛平

同　大阪市南久寶寺町二丁目　平尾賛平支店

彈初め



宮崎與平筆

畫報界の大王

學校と家庭

教育畫報

◎教育勅語と君が代◎二宮尊德翁の像（説明付 修身教育）◎養鷄の畫（説明付 實業教育）横濱、神戸、長崎、小樽、敦賀（地理教育）◎色板排（手工科 説明付）◎日用の名詞（外國語教育）◎觀兵式の繪（二頁大額用）◎正月の攝生（衛生）◎各國の國旗（軍事教育）

△教育畫報は繪の力によりて智識を與ふる雑誌です。

△教育畫報は小學校の教科書の不足を補ふよい雑誌です。

△教育畫報は家庭に於ける兒童のよいお伽です。

◎上野戰爭と西鄉像（歴史教育）◎蝦と橙の寫生と略畫法（圖畫）◎獵夫の失策（繪ポンチ）◎春の屋外運動（遊戲教育）其他材料精選

◎毎月一回 ◎一日發行

定價 一冊金拾錢郵税壹錢 前金六冊分六拾錢 十二冊分壹圓十五錢（郵税共）

發兌 東京神田猿樂町二 振替口座八五七〇 建文館 （大賣捌所）東京堂●良明堂●東海堂●上田屋●北隆館●寶文館

（一〇）

女（への三）



女(への四)

有栖川宮妃殿下



久邇宮殿下の王子王女

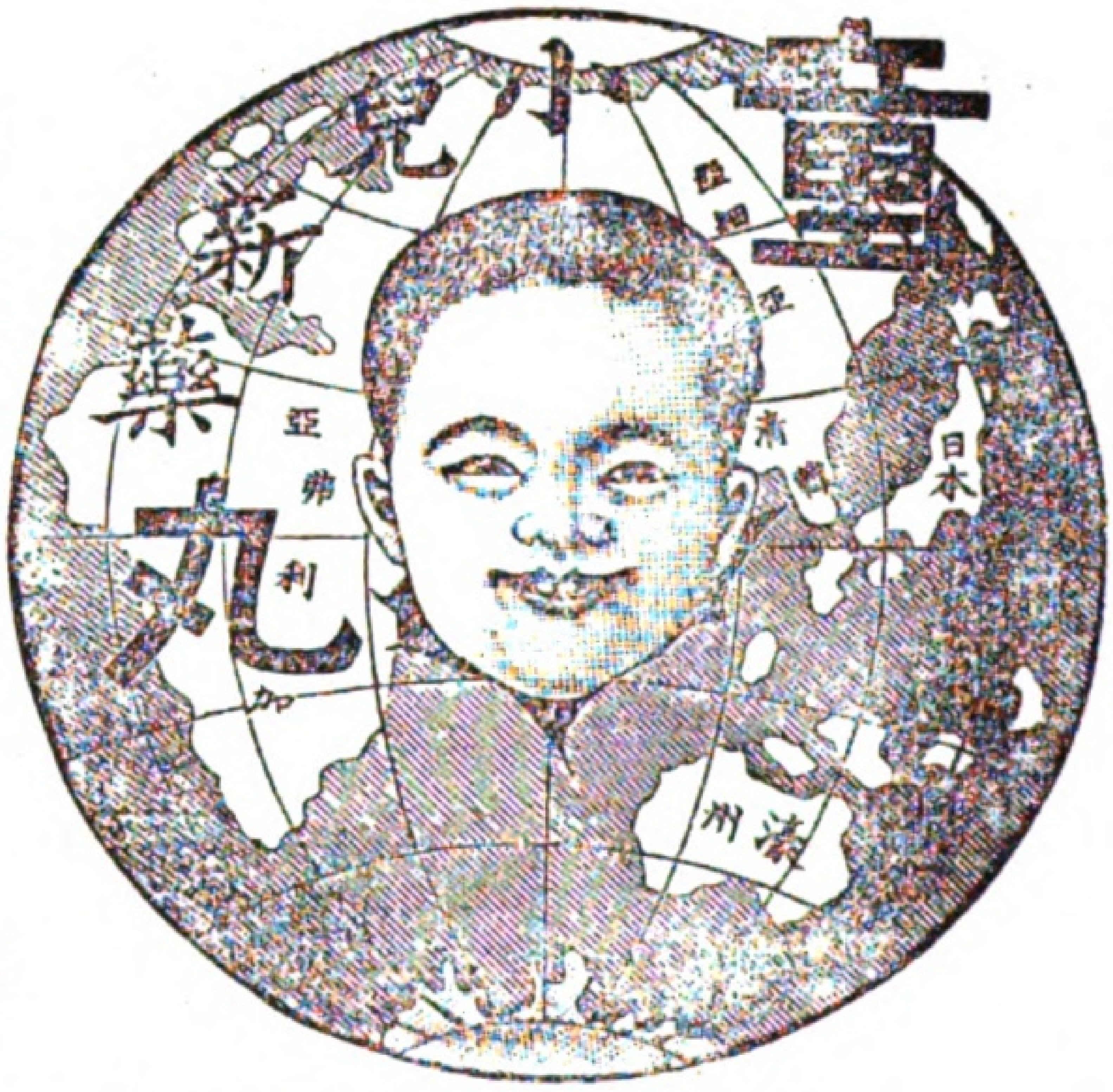


第一王子朝融王、第二王子邦久王、第一王女良子女王、第二王女信子女王、第三王女智子女王

恭賀新年

小兒科專門醫學博士

瀨川昌耆先生方劑



發賣元

●童丸は健童強兒の源泉なり

●童丸は二十世紀の育兒法に適す

●童丸は幼兒の生命也第二の慈母也

効能

●五疳驚風●小兒失氣●吐乳病

●腸加答兒●小兒食欲不進又は飲過

●小兒吐氣●腹痛中毒●ちゐねつ・・・・・

●小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入	金五錢
廿二粒入	金拾錢
五拾粒入	金二拾錢
八拾粒入	金參拾錢
百四十粒入	金五拾錢
三百粒入	金壹圓

●童丸は有名藥店にあり若無くば發賣元へ御注文あれ

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

女(その一)

女（その二）

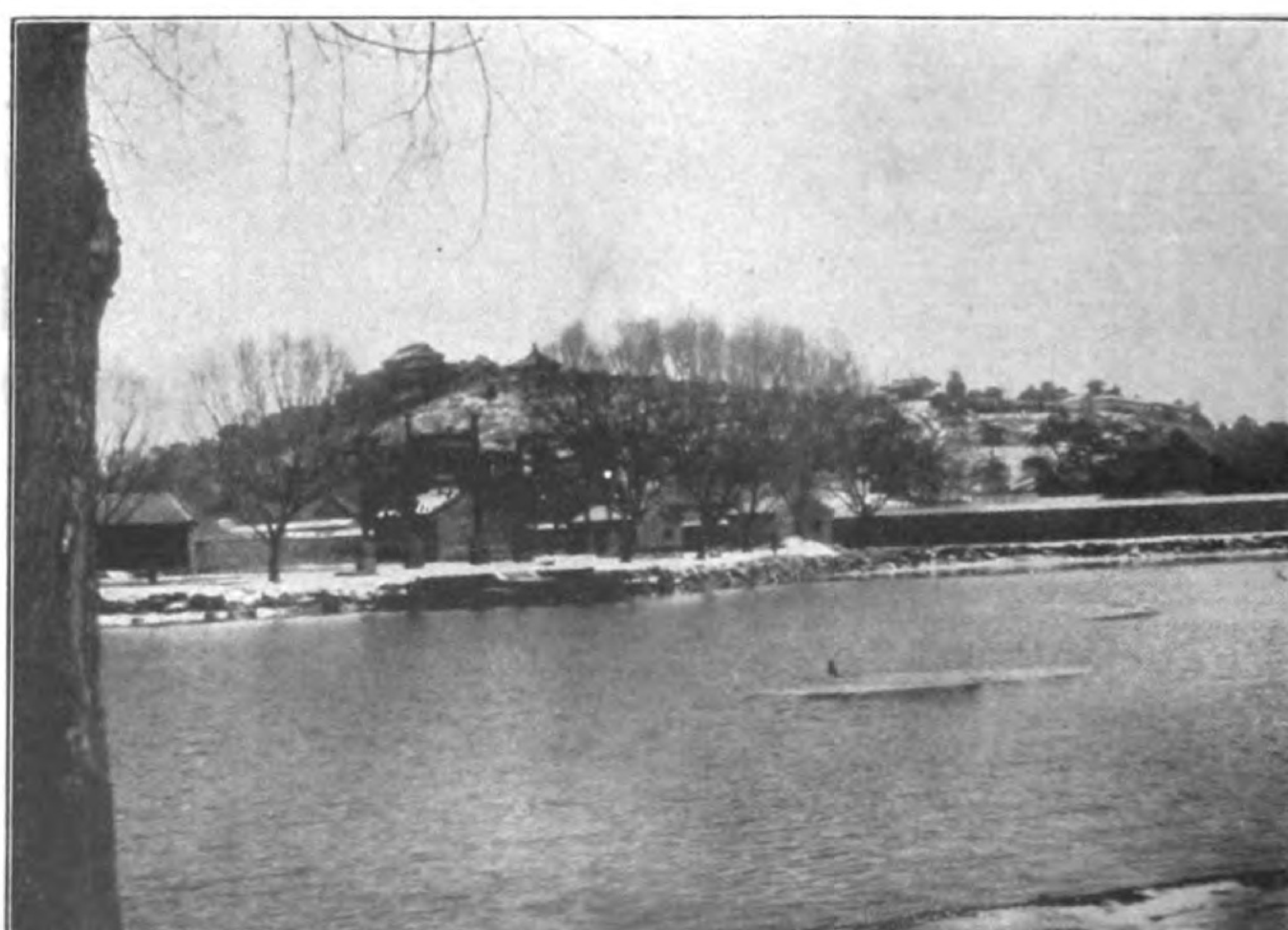
女(との三)



謹賀新年
旧年中ハ種々御愛情を蒙り難有奉謝候
当年も不相変御愛顧之程奉希上候
營業品目
貴金屬、彫刻品
ダイヤモンド眞珠寶石入装身具
婦人用頭飾各種
金銀盃及茶器
美術品、袋物
嘉
丸嘉
東京日本橋區若松町
長 電話浪花七六八番
振替口座第九〇一四番

清國西太后と其侍女





北京宮殿萬壽山の冬景色

松方侯爵の一族



釀造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

天下一品　最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

毛はへ

最新薬ハロールは歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新薬を配合したる世界無比の學理的最新薬なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する莞菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛剤や粗悪の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本剤を試みよ頭髪はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合薬價送料共一剤八十錢二剤一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●●●●取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ●●●●●●●●

毛はへ薬〜東京市本郷六丁目赤門前　瓜生薬局

取次所〜名古屋市鐵砲町　谷田薬局

らい病

●●●●●●●●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れることなし安心服用あれ●●●●●●●●

チノサール　一ヶ月分　貳圓

複方チノサール　一ヶ月分　參圓

此のらい病薬は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新薬を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配剤したる新薬なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二薬を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本剤は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非ず

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

本舗　醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

女(ちの一)

リウマチス病の舶來靈藥

リウマテア

一日分廿五錢 送料貳錢
五日分壹圓 送料十錢

靈藥リウマテアがリウマチス病に卓効あることは讀者の間に認められ特に醫師社會に迄使用せらるゝに至りし所なるが**村井弦齋先生**も亦本劑の**有功**を**認識**せられ婦人世界第一卷第十二號『婦人の日常生活法』中大要左の如く記載せられたり

私の友人川井運吉君が米國から持つて來た**リウマテア**と云ふ奇藥は**リウマチス**に特効がありまして私の親戚や友人の中にもそれを飲んで忽ち全快したものが幾人もあります、高名な人では山梨縣知事の武田千三郎君の御夫人や、前暹羅國政府の顧問官たりし外山龜太郎、報知新聞記者谷新太郎君、女子大學の教授戸川殘花君の令孃なども皆此藥で多年の**リウマチス**が全癒したと云ふことで禮狀を川井君に寄せられました、川井君は米國で**リウマチス**に罹つた時その藥で即座に全快した爲め同病者を救はんと米國から輸入されたのです云々。

請ふ同病症に惱める所の人士よ此安價にして奇効ある靈藥を速に御服用ありて永く幸福を受け給はんことを

産科諸大家御使用

最新良藥

乳源

一名ラクトレア

藥價三日分卅五錢
七日分七十錢
二週間分一圓廿錢

本劑は我が祖爲仙が産科の泰斗賀川先生より得たるところの秘方を基ひとし之れに當代名家の實驗劑を調合したるものであつて乳汁分泌の不足な人や全くなき人に用ひて其効驗の著しきことは從來幾千名の服用者に依つて確實に證明されて居る御安心の上御服用の程願上候
（製劑者記）

發賣所 東京市日本橋區箔屋町十四番地 丸山舍衛生部

醫學士 佐藤得齋先生監修 大增補第十八版

實用問答 生殖器篇

總ふりがな付 紙數三百餘頁 正價郵税共金五十六錢

◎結婚▲結婚に適當なる時期と年齢▲血族結婚の害▲夫婦の年齢相違▲遺傳病の害▲結婚すべき女の心得▲異人種間の結婚▲體格強壮なるも月經なき場合の結婚◎生殖器の作用▲生殖作用の必要▲生殖作用に適當なる時期▲房事の度數▲月經中の房事▲妊娠中の房事▲分娩後の同衾▲醉中の交接▲房事中の出血▲淫慾の節制▲淫慾の制止▲食物と淫慾の關係▲乳房と生殖器の關係▲處女の鑑別▲不感症▲遺漏の療法▲生殖器の養生▲男女生殖器の構造▲手淫の大害▲過淫の害▲女子の手淫▲女子の過淫▲ホリック博士の催春藥▲男女生殖器の不完全▲包莖▲陰莖の彎曲▲陰嚢の弛緩▲少年時期亂交の害▲月經の話▲月經に困難する婦人▲無月經の場合▲通經劑妄用の弊害▲陰部洗滌の誤解▲近か小便▲手淫の妨遏法▲男女生殖器の疾病▲遺精▲陰萎▲女子の陰萎▲陰莖強直▲龜頭の糜爛▲陰部の惡臭▲毛虱驅除法▲睪丸炎▲睪丸炎と生殖▲攝護腺肥大症▲陰嚢水症▲精系靜脈瘤▲陰部搔痒症▲膣加答兒▲子宮膜炎▲子宮實質炎▲子宮前屈症▲子宮病と溫泉▲夜小便▲尿道狭窄◎妊娠論▲妊娠期▲妊娠知覺▲強姦と妊娠▲催眠中の受胎▲妊娠補助藥▲不妊症▲房事と身體の位置▲妊娠と溫泉▲避妊法▲花柳病▲梅毒▲淋病▲軟性下疳の養生法遺傳々染性病との關係豫防及治療等七章百五節三百三十二項

増補

▲離婚に就て▲日本に於ける離婚數▲歐米各國に於ける離婚數▲日本は最も多し▲合婚▲情婚▲體婚▲背婚▲離婚の大原因▲長與翁の婚姻弊害論▲離婚救濟策▲結婚當夜にかける夫妻の注意▲春情發動期▲男女學生發情期に於ける注意▲一般生活狀態と生殖力との關係▲氣候▲住居▲衣服▲飲食物▲生活狀態▲疾病と生殖力との關係▲消化器病▲寄生蟲疾▲結核病▲心臟病▲神經衰弱症▲ヒステリー▲精液に就て▲其性質▲其成分▲其作用▲精蟲の性質▲睪丸炎と精蟲▲卵珠に就て▲子女に生殖上の智識を授くべし▲處女に於ける生理教授の擴張▲中陰萎▲房事過度と云ふこと▲兼好法師の色慾を戒むる文▲貝原翁の同上▲淫奇欠之症▲淫慾欠乏症 家庭に及ぼす影響▲不妊症を兼ぬる病原と療法▲其實例▲雞姦と獸姦▲強姦に就て▲壻と云ふこと▲奇胎に就て▲陰部無毛症の療法▲婦人科の内診に就て▲附錄▲生殖神經衰弱症に就きて(ドクトル、エムアー、ステルン述)▲體臭と生殖亂能(醫學博士近立文太郎氏談)

發兌 東京日本橋箔屋町十四番地 (振替貯金口座五八九二一番) 丸山舍書籍部

女(ちの二)

洋畫講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪、木炭畫、ペイ畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す、毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

繪畫講習錄

新學期開始！

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ、毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯

川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

東京市麻布飯倉四丁目　**大日本繪畫講習會**

三大博士

發明

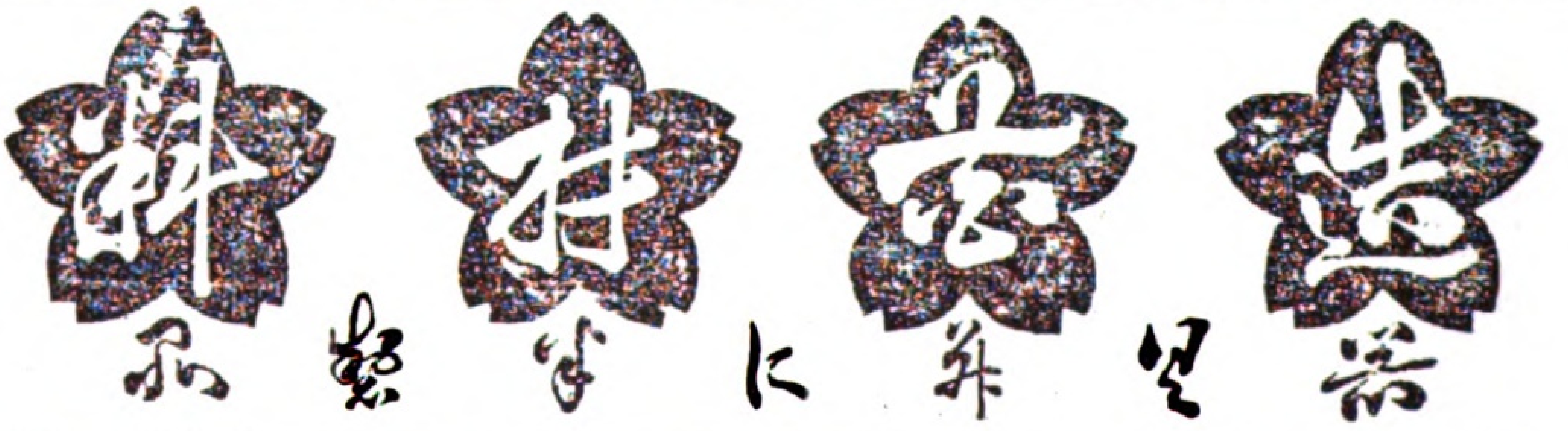
神經衰弱　貧血　頭痛

ヒステリー　依卜昆的里　**陰痿**等通俗的症候解說療法攝生法根治藥詳說の雜誌をハガキで申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長廿七名の**不思議**の効果を確認せる全治報告根治醫家實驗療法詳說の雜誌を救濟の爲無代進呈ハガキで申込……

東京京橋越前堀　**樂天堂藥房**



恭賀新年

○**刺繡用器具**並に材料

○**袋物器具**並に材料

○**摘ミ細工**　**壜細工材料**

○**造果用材料**並に**木型**

切取線

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す（女學世界）

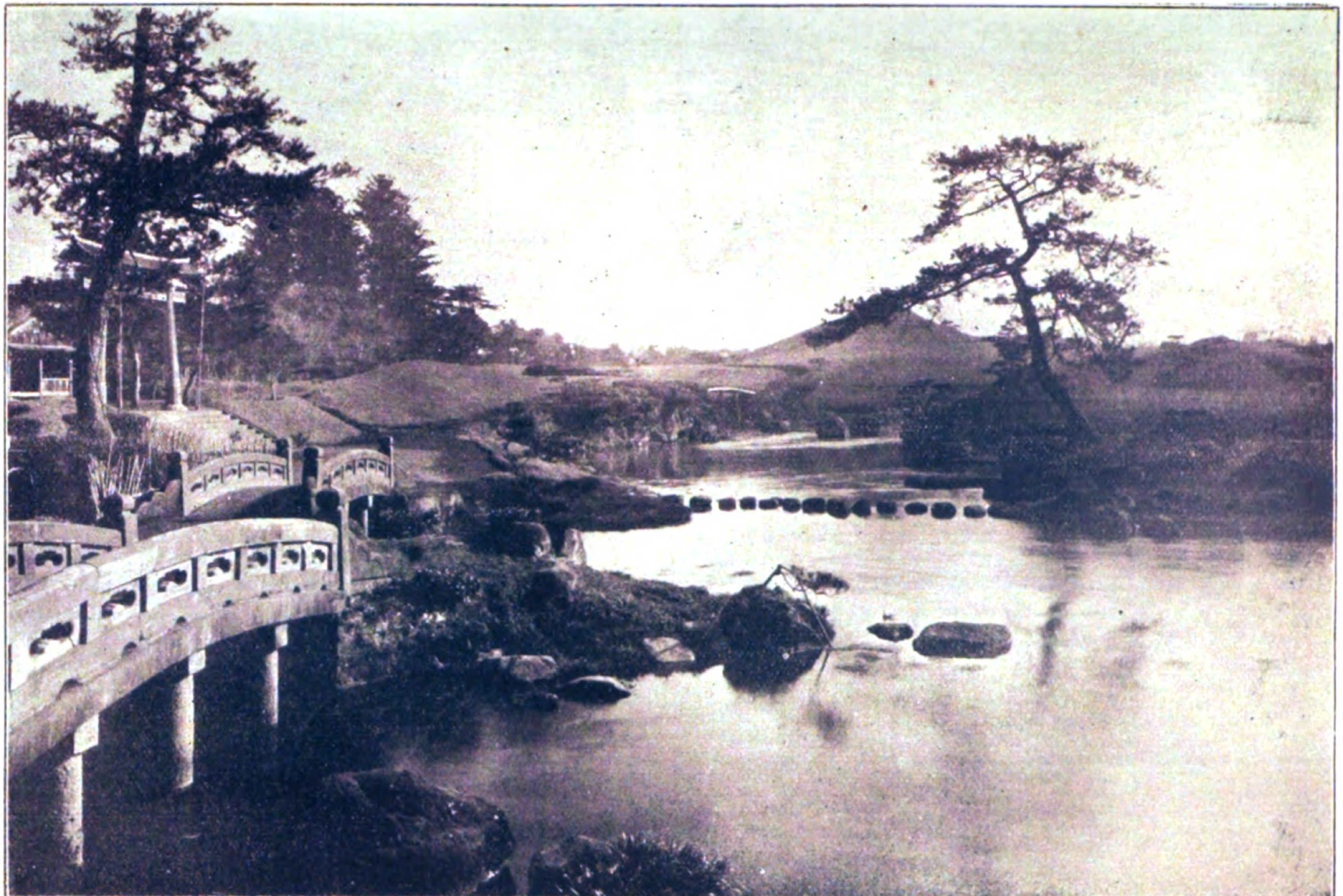
東京市本郷區弓町二丁目　**倉持商店**

女（ちの三）



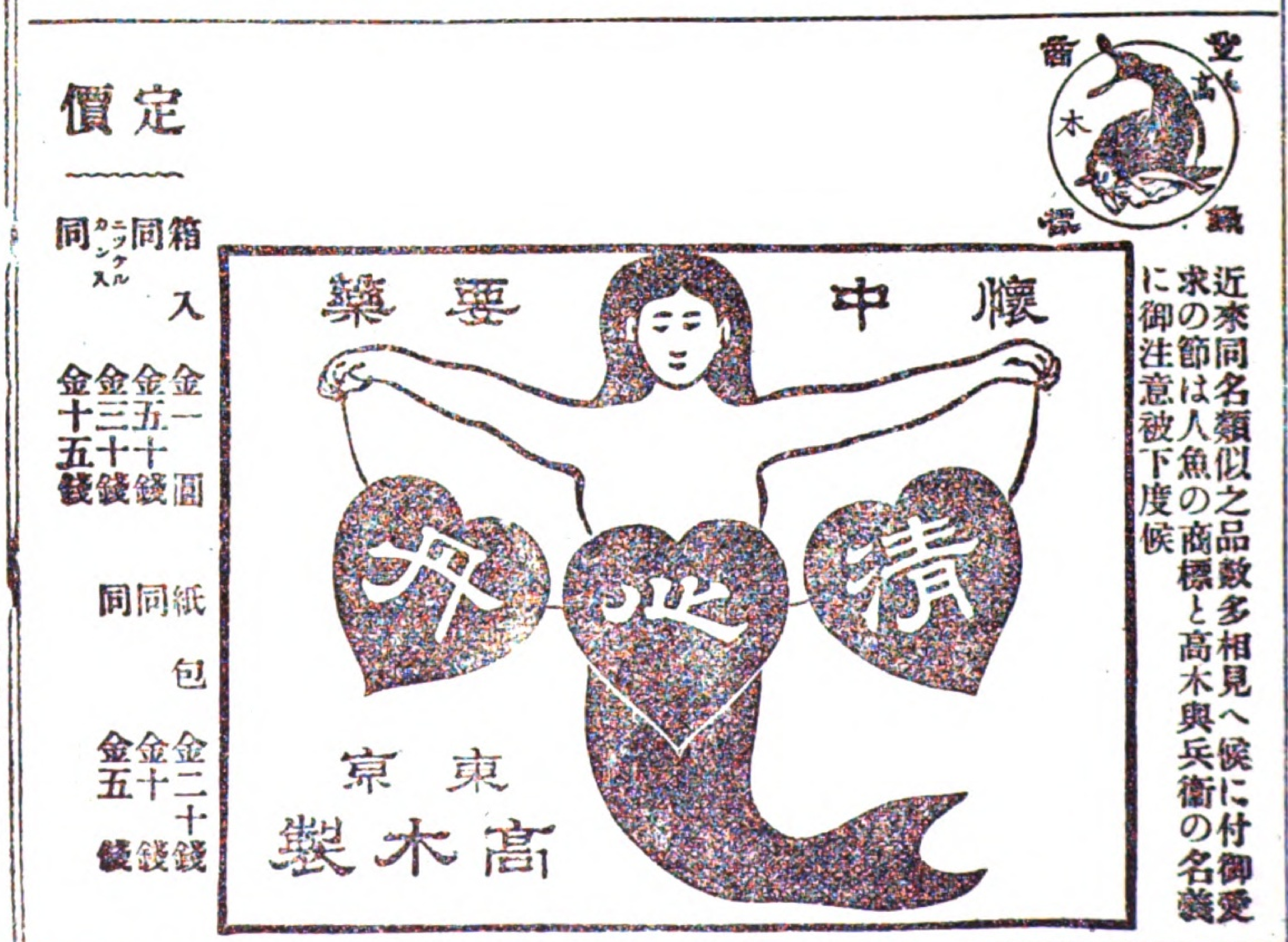
女(ちの四)

冬の庭園



熊本水前寺庭園の冬景


東京博覧会賞牌受領
パール
毛髪料
美顔料
二種
四季ノ化粧及ビ毛髪ノ養生ニ適シ世界的流行逸品ナリ
宮内省御買上ノ光栄ヲ得タリ
東京ハマ町一
平尾商店


登録 高木 商標
近来同名類似之品数多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候
懐中要薬
清心丹
東京
高木製
定價
箱入 金一圓
同 金五十錢
ニッケルカン入 同 金三十錢
同 金十五錢
紙包 金二十錢
同 金十錢
同 金五錢

(その一)



にきび●そばかす●こせがさ皮膚病一切如何なる難病も根本的全治せしむる一大奇藥を予が歐米巡遊中發見の結果餘りの不思議さに同病患者救濟の爲其由來冊子を進呈す郵券貳錢送れ

●東京品川海岸元芝 岡 別 邸

院長醫學士 國光勉造

山龍堂病院

往診入院隨意 （神田小川町電本二二二〇）

●生徒募集

各級共補缺あり志望の方は此際至急申込まるべし

規則書入用の方は御申込次第送呈す

東京神田區北神保町三番地

裁縫實修女學校



あかげちゞれげくせあを

赤毛縮毛癖直

獨逸醫學博士發見化學應用赤毛縮毛くせ忽ち直り黒艶美髪となる說明書藥名詳說の雜誌ハガキで申込次第無代進呈

東京市京橋越前堀 樂天堂

肺病

東京府下大森入新井

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

川名助次郎

引風一切

太陽散

速治新藥

人常に此の、風邪早治しの最新良藥なる（太陽散）を家庭に備へ置き、殊に旅行の折は必ず携へ機に臨み服用し以て後難を遁れ給へよ

藥價（桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す）

東京日本橋本町三丁目 藥種問屋 博愛堂

（りの二）


MADE BEAUTIFUL BY
BEAUTIFUL HAIR.
TRY
KEIBA OIL.
ケーバ香油
文明的學理を應用して配劑せるもの貴婦人紳士方平素御使用するに最も適當なる良品なり其の毛の色を濃くし生育を好くし芳香馥郁として精神を爽快ならしむるの特効は他に多く類を見ず今や歐米各國到る處の交際場裡唯一の化粧料として名聲高く使用の廣きはライン河の廣きもヒマラヤ山の高きも更に及ぶ所にあらず
東京日本橋區橘町二
化粧品直輸入商 竹間商店
電、浪、一六一四

才媛畫家



沖山鉀子孃



マリーイーストレーキ孃



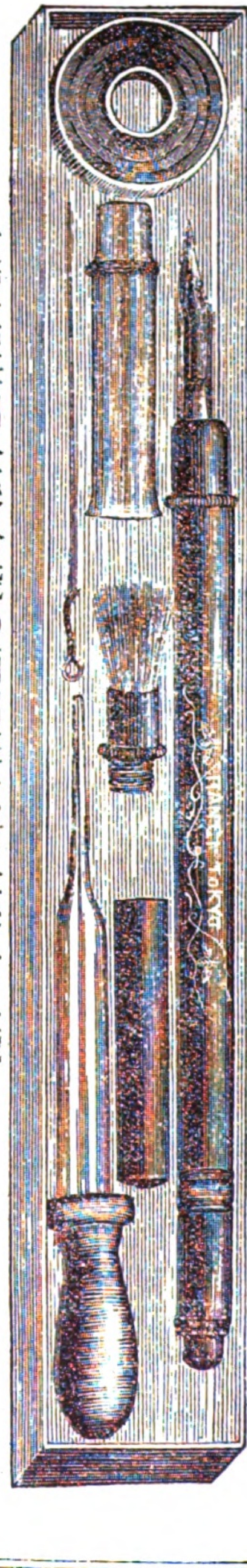
椎塚蕉華女史

皇后陛下
東宮殿下
御買上之光榮を賜ふ

特許 改良如意軸

(兩用萬年筆)

○如意軸は毛筆ペン兩用の軸内より自由に墨汁を出す大便利筆

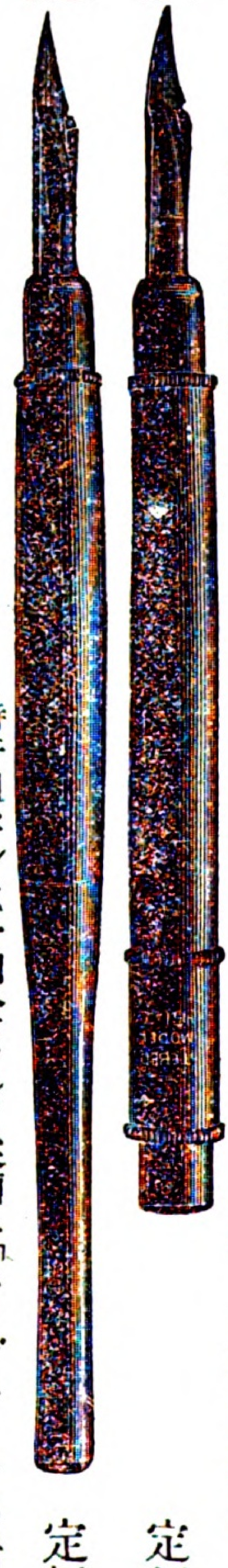


定價毛筆用金參拾錢○兩用筆立附金參拾八錢

實用新案 ランギペン

(新式泉ペン)

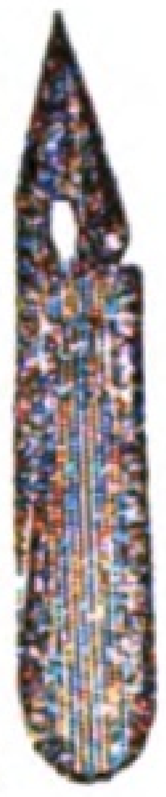
○實用新案ランギペンは自動的に軸内よりインキの出し入れ自由なり



甲號 定價卅五錢

乙號 定價卅五錢

特許組ペン



特許組ペンは十四金にして尖頭へ「ヱリヂユーム」を附着しある故永久腐蝕摩滅の憂なき廉價の實用完全の金ペンにてランギペン用及び普通ペン軸用としても至極適當なり

定價未定 製造中

○送料各一打迄金八錢
○郵劵代用壹割増
○賣捌所は全國到る處文具店にあり

東京市神田區鍋町六番地

(長電話本局一六二七番)
(振替貯金口座六〇四三番)

欄木商會

女(その一)

明治四十一年適齡者は勿論陸軍に出身せんと欲する者の必讀書

陸軍步兵大佐 龜岡泰辰校閲
陸軍步兵中尉 龜岡泰躬校正
軍事普及會編纂

改正 徵兵問答
附入營の準備及諸願届書式

正價廿錢
郵稅四錢

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著
增訂六版

文鑑 千草の錦

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作者の模範と應用とに供せられしば、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、

菊判和裝
定價六拾錢
郵稅拾錢

新編書簡文法式

（男子用）
總クロース金字入
定價五十錢
郵稅六錢

新編女子書簡文法式

洋裝美本
定價六十錢
郵稅六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは古來未だ嘗て有らず蓋し書簡に法式のなからざるは尙人に禮儀なく書簡に法式なからんか其人如何に貴しと雖又如何に富めりと雖一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ即ち男女に就て各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女子部敎授 小野鵞堂先生書

新編手紙

（男子用）
木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵稅四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

（男子用）

新編女子書簡文例

木版半紙摺
頗高尙優美
男女各一册
定價六拾錢
郵稅六錢

本書の文例に現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれは又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番 振替貯金口座四千百〇九番 前川文榮閣

女(ぬの二)

子宮サック

經中局部に狹み置けば起居を便ならしめ經水漏洩を防ぎ梅毒の傳染を防ぎ子宮を疵傷する患なし故に懷姙を望む御婦人は用ふべからず

子宮サツグはゴム製にて御婦人方の衞生上日用欠べからざる必要の良器にして月

價甲壹圓二個入壹圓六拾錢乙七拾錢二個入壹圓廿錢送料八錢

たま川衣

本品は(ルーデサック)を再三精撰したる珍品にして伸縮自在効能は梅毒痳病の豫防又は女子月經中已むを得ざる場合に必要なり

▲價拾貳個五拾錢廿五個壹圓五十五個貳圓九十個參圓送料廿錢

世界第一毛生劑

本品は毛の有べき處に毛のなき人に用ひて可驚特効ある事を確證す(秘密送料八錢)

▲小瓶五十錢　大瓶壹圓　特別製貳圓

御注文切手代用一割增

大阪市南區順慶町板屋橋東へ入

玉川屋商店

代々家傳の妙藥

經通丸

月やく藥

調劑元

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも胃腸子宮等の痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること請合也仙藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ

定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送を望まるゝ方は八錢を要す

東京市丸の內有樂町二ノ二

江戸屋

●圖書目錄

御入用の方は往復葉書にて御申越次第直ちに送呈仕候

東京日本橋區本町

博文館

見本目錄

無代進呈

粹士必携粹珍書畫見本目錄無代進呈す返信料三錢送れ直に密送す

東京市四谷區大番町

大平堂

リウマチス全治

秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵劵二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑

河奈とめ女

ちぢれもくせも

二大奇法

毛はへうけあい

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆樣の御申進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

女髮師

東京麴町區飯田町四ノ十六

安部歌子

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製藥工場

バークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

高峯氏發見消化新劑

タカヂアスターゼはバークデビス社の製品なり。完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、毎瓶强度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舖諸彦！模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の賣品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

代理店　東京南茅場町　三共藥品合資會社

(ぬの四)



侍醫吉松氏の家庭

☛ 實業少年の福音 ☚

▲『實業少年』出でたり

商店會社工場の有爲の少年何ぞ一讀して指導者とせざる。



初號一月一日發行

毎月一回一日發行洋裝大判（四六判二倍大）紙數七十二頁

正價一册金拾錢　郵税一册壹錢五厘

口繪

●日本銀行事務室紙幣山の如し●工業補習夜學校の教室實況●紡績王日比谷氏の家庭新撮影●最珍西洋勸工場街町に屋根あり

本誌內容

實業少年に對する予の精神的注文　男爵　澁澤榮一君

實業界に入る少年の覺悟　三井鑛山部理事　高橋義雄君

欲するまゝに富貴安樂を得る法　大谷嘉兵衛君

米國大商店の盜難豫防請負　堀越商會主　堀越善重郎君

職工の名譽は官吏に劣らず　高等工業學校長　手島精一君

商店員に多き病患と其豫防法　日本橋病院長醫學士　岡本武次君

▲一萬圓の報酬を得たる小僧 日比谷紡績王の奉公時代 ▲日本一の模範職工 ▲補習夜學校 ▲客足を引く法 ▲三百年間營業繁昌秘訣 ▲ねぢと其應用 ▲小切手實用法 ▲商業會話 ▲勸工場町を造れ ▲其他數十件

其他實業界の少年に有益にして面白き事項山の如し

▲新年大附錄◎實業少年出世雙六

新聞紙大、極彩色意匠嶄新、新年附錄中の最新最優のもの也

東京本町　博文館

女（るの二）

出たり◉破天荒の出版◉出たり

每月一回 五日發行

冒險世界

大判（四六判二倍大） 紙數百廿八頁

◉新年大附錄 **冒險壯遊雙六** 空中旅行あり、水上歩行あり、幽靈城探檢あり、寶島占領あり、其面白きこと限りなし。

押川春浪案 小杉未醒畫

初號に限り一月一日發行

正價一册金拾五錢　郵稅一册金貳錢

冒險世界は千變萬化の壯快事を語り、活動的、奮闘的、進取的諸君の親友たらむが爲め、新春第一日を以て生る、初號要目左の如し

◎口繪

◉油繪三色版 空中美人 滿谷國四郎筆 ◉怪浪襲來 ◉林中決闘 ◉寫眞銅版 半獸怪人 ◉奇異の國 等印刷鮮明美麗にして斬新奇拔を極む

本誌內容

◎冒險探檢小說
- ▲怪人鐵塔　押川春浪
- ▲冒險鐵車旅行　春浪漁史

◎冒險探檢實譚
- ▲濠洲活劇 黑眞珠奇譚　絕島漂客
- ▲人間仙境探檢　印度探檢家

◎震天動地
- ▲空中戰爭汽艇　嘯羽生

◎壯快世界
- ▲血闘と決闘　小波山人
- ▲滑稽的事實談 大酒豪傑組　宮崎來城

◎氣焰萬丈
- ▲吾輩は何故に斯く頑健なるか　岩谷松平氏談
- ▲奈翁が敗北せざりならば　金子紫草

◎冒險的成功談
- ▲千辛萬苦 銅山成功談　S H氏談

◎尙武世界
- ▲吾輩は候補生である　激浪庵
- ▲乃公は海軍少尉だ　髭の少尉

◎旅行世界
- ▲米國の初旅　坪谷水哉
- ▲朝鮮旅行 銃獵滑稽談　池田霞汀

◎珍談奇談
- ▲猛獸馴しの名人　閃電子
- ▲火星奇譚　木村小舟
- ▲市街冒險譚　西山渚山
- ▲不得止冒險譚　竹貫佳水

◎運動競技界
- ▲現時野球界短評　運動子
- ▲相撲の冒險　山田春塘
- ▲一月場所勝負豫評　菊雨子

◉初號には金牌銀牌の壯快なる大懸賞問題あり

發兌元　東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番　博文館

女（その三）

謹賀新年

例年の通新春御餘興として

來る六日ゟ同十五日迄

新發明に係る自働電機應用**福引**の趣向に據り大賣出し中毎日左の景品を贈呈仕候間御慰み旁々陸續御來店被成下度偏に奉希上候

大賣出し中

毎日の景品數

一金五拾圓(當店切手一枚)壹個
一金貳拾圓(同 上)壹個
一金拾圓(同 上)貳個
一金五圓(同 上)五個
一金貳圓(同 上)拾個
一金壹圓(ハンカチーフ廿五打 羽金巾裏地廿五反)五十個
一金五拾錢(手拭五十反 皮製紙入五十個)壹百個
一金廿五錢(絹ハンカチフ二百五十枚 ガマグチ二[illegible]五十個)五百個
一金拾五錢(石鹼六百六十六個 タオル六百[illegible]十五枚)千三百卅一個

以上合計貳千個

以上の景品は當日御買上被成下候**金額五圓**以上の御仕拂に對し福引入(もなか)壹個進呈致し**金五圓**を増す毎に壹個宛増呈可仕候◎右(もなか)在中の紙片に記しある景品は直に現品と御引替申上候◎又金額五圓に滿たざる御買上げに對しては福引法によらず手拭一筋宛進呈可仕候

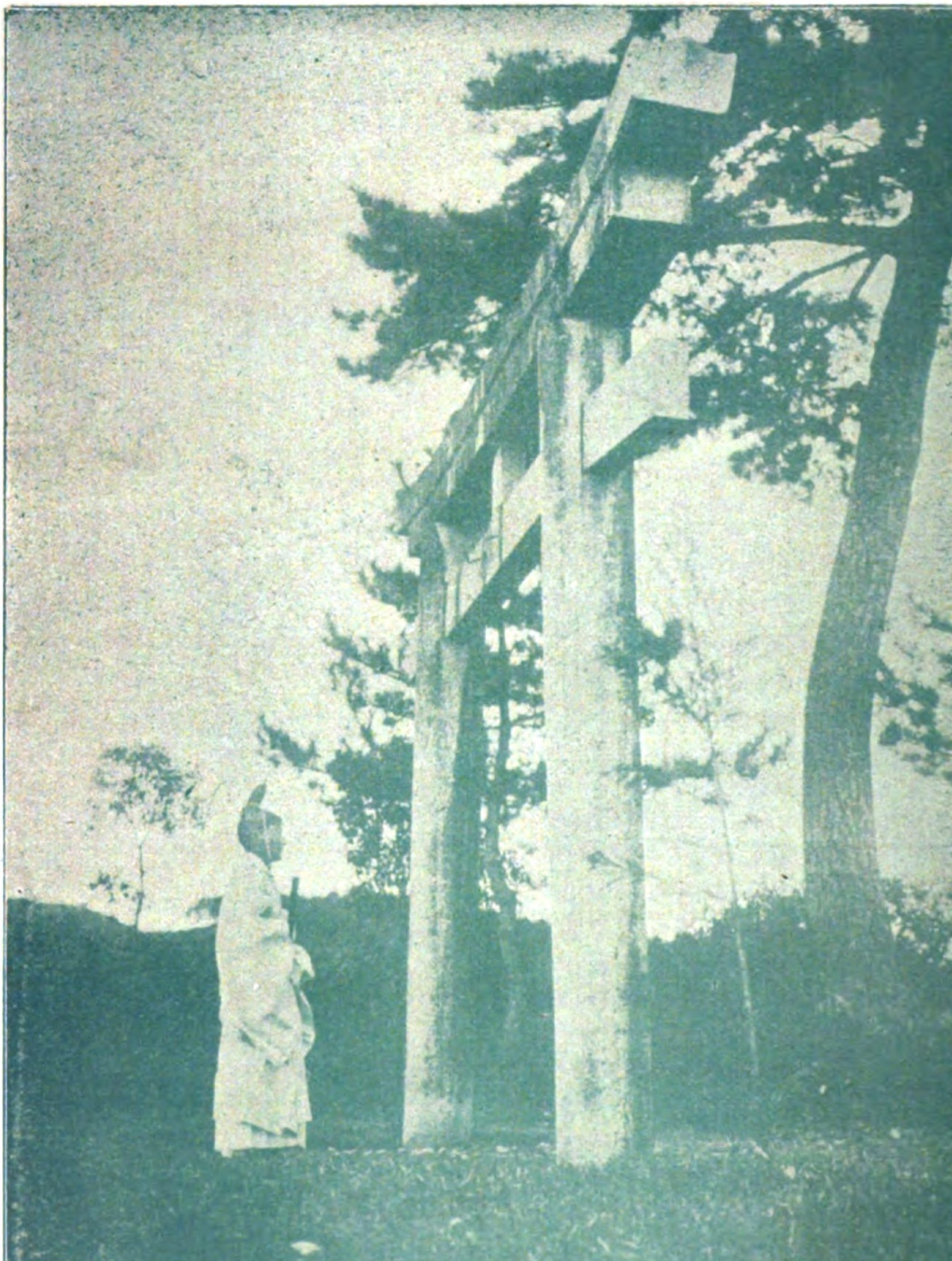
四十一年一月元旦

東京市日本橋

白木屋呉服洋服店

女(ゐの四)

社頭の松



文藝倶樂部　第十四卷第貳號　定期增刊

笑ふ門には福來る――あら玉の年の初めに笑ひ給はゞ、その年に福の來ること、船にも溢れ、藏にも置き餘るは、今更事新らしげにベチャクチャするまでもなし。文藝倶樂部の春期增刊は名さへ『福笑ひ』と題し、當今講談落語界の眞打連が、腕に撚りーオット舌に力を込めたる得意の讀物に、御最負厚き皆々樣方を思ふさまお笑はせ申す所存とござりますれば、御愛讀の上シコ玉福をお取込みなされたく、表紙は山中古洞氏、木版口繪は水野年方氏にて卷中の挿畫は、清方、春汀春帆、古洞、義德、英朋等の諸畫伯が腕くらべ、其の上百美人の寫眞版大附錄をも添へ、善盡し美盡したる新春未曾有の珍本なれば、一月十五日の發行を待たれ、賣切れぬ內永當々々御愛讀の程を、隅から隅までヅラリヅウと願上奉ります！

出版界空前の一大珍書



本號には
▲百美人寫眞版大附錄あり!!!

全一册
洋裝菊判紙數三百廿頁
正價廿五錢郵稅二錢半
（一月十五日發行）

本號には
▲懸賞百美人投票用紙あり!!!

◀目次▶

△安産……橋家圓藏
△太郎太刀……邑井一
△あたぼう……三遊亭圓喬
△磯鮑……都々逸扇歌
△日本號……西尾麟慶
△道具屋……三遊亭圓左
△五色の蔦……寶井馬琴
△稻荷車……柳亭燕枝
△福鶯……猫遊軒伯知
△王子の幇間……故三遊亭圓遊
△見えたか甚兵衞……柴田馨
△狂歌合はせ……柳亭左樂
△松曳き……三遊亭小圓朝
△木村の初陣……一龍齋貞山
△かつぎ屋……春風亭柳枝
△鎧試し……眞龍齋貞水
△厩火事……三遊亭遊三
△締込み……三遊亭圓右
△江戸業……錦城齋典山
△のめる……柳家小さん
△雜錄笑ひ失策譚……口演者一同▽

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目
振替貯金口座第二百四十番

女（その二）

少女世界定期增刊
第三巻第二號



少女と立志

一月十五日發行

全一冊菊判洋裝　正價金拾錢　郵税壹錢五厘

少女お伽芝居

これは、巖谷小波山人得意の新案になツたもので、少女の讀みものとしても、また學校のお遊びとしても、新春第一の面白いものです。

主なる記事

▲勉學の方法
▲少女の世界
▲都の女學校
▲入學試驗
▲少女と技藝
▲少女の職業
▲道子の立志
▲花子の入學

これから後の少女は、男子に負けないやうに、遠大の志を立てゝ、學を修め業を勵まなくてはなりません。將來、少女の伺ふべき舞臺は廣く、執るべき業務は多いのです。何を撰び何を學ぶべきでしようか。速かにこの一冊を熟讀して、前途の方針をお定めなさい。今や、年はあらたまツて氣も亦新たです。一年の計を立てるのは、まさにこの時です少女諸子！　奮勵一番し給へ!!!

敬慕すべき婦人

主なる記事

▲學校顧問
▲女子判任官
▲女醫と看護婦
▲少女獨學の栞
▲英語の學校
▲少女と音樂
▲商家の少女
▲諸學校入學手續

懸賞法を以て、いろ〳〵天下の少女諸子より投票募集した結果を發表します　昔の婦人二名、今の婦人二名、はたして誰が當選するでせう？　お待ち遠さま！

（その三）

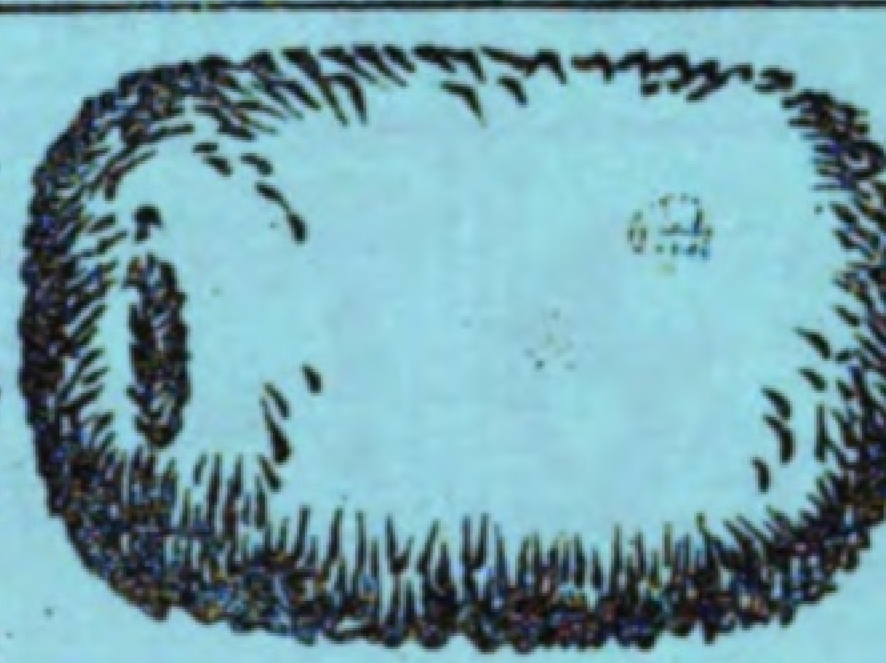
發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館　振替貯金口座第二百四十番　販賣用電話本局二六二〇

實用新案登録済
專賣特許追願中

毛皮製
鳥毛織地製
防寒用

自由マッフ

手ぬくめ
ちよつき
座ふとん
等にも應用せらる



專賣特許出願中

毛皮製

自由カバー

紳士貴婦人用防寒具下駄の鼻緒を包む装置なれば ぬげる憂なく足袋又鼻緒の破損等更になし



大阪市東區南本町四丁目(井池西)

メリヤス卸 河国音店

製造担当者
吉正号謀師 片山榮吉

(御照會は往復はがきに限る)

大日本女學會

新學期を開き會員を募集す

●本會は伏見宮博恭王妃殿下を總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を統べ十三年來通信教授に由りて四萬人の會員に女子必須の諸學科を自修せしめたり

●本會は女學通信教授の鼻祖にして其基礎の確實なる事講義録の有益多趣なる事夙に世の定評ある所也

●本會會費は普通科一箇月金二十五錢高等科同金五十錢入會金を要せず

●十一月廿五日高等科初卷發行

●會則希望者葉書にて申込あれ

新築移轉 東京青山原宿 **大日本女學會**

●電話新橋一八三〇●振替貯金一一八三六

同胞十一人の家庭



右より次女愛子◎三女敏子◎五男忠雄◎令姉琴子◎長女花子◎五女艶子◎六女文子◎三男英雄◎夫人安子◎四男經雄◎次男憲章◎四女潔子

衆議院議員加藤政之助氏の一家

衣わの一

一月一日發行　五巻第一號 ● 本號に限り金拾五錢　郵税二錢

月刊美術文藝雜誌

ハガキ文學

▲内容概目▲

●論ハガキ　坪井正五郎●文學と眞技巧　深山歐雄●青年と新年の覺悟……眞實なる希望……幸田露伴……自我の聲に聽け……沼波瓊音……ドシドシ進め……中島孤島……いつも同じ心組……●坪内逍遙●予の創作　田山花袋●自然主義私觀　生田葵山●言文一致の詩歌　蒲原有明●青露　猪狩水村●福來る　鹿目野徑●西洋のお辨當　物知翁●山水哲學　大町桂月●處世四訓　德冨蘇峯●獨創の道を開け　山路愛山●國樂の將來　如月生●新聞と大人物　横山健堂●影　正富汪洋●れむれぬ夜　一倉慶紀●手紙の趣味　SM生●人間以上の猿　傀儡生●東京歌留多界選手月旦　掬泉生●應募新春餘興福引新題●女優排斥理由　青柳有美●應募諸國珍話奇談●普通文●新體詩●ハガキ文●和歌●俳句●新川柳●其他趣味津々たる記事滿載●表紙太田三郎畫●口繪石版彩色蝶光　和田三造筆●新古小説●十二題（その一）即興詩人　太田三郎筆●挿繪　村上天流　齋藤五百枝●應募スケッチ●漫畫●繪葉書圖案其他寫眞版口繪等數葉記事と相俟つて誌上燗熳

附錄

●繪葉書　西村酔夢●花胡　兒玉花外●音樂師　山本迷羊●新年お日出度う　鈴木秋風●●　水野葉舟●極彩色刷畫面大附錄春裝美人　橋本邦助畫

發行所　東京小石川　東京日本葉書會～賣捌　全國各書林

（甲種）

博文館發行

圖書特別割引券（女學世界新年號）

●圖書御注文は此券を切取り御添附の事●有効期限は明治四十一年二月十日限り●期限中は定價の壹割引を以て特賣仕候

●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす

特別割引券

添呈

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀諸君平素の御眷顧に酬ひんとす●圖書御注文の方は甲種●雜誌御注文の方は乙種を添へ期限中御申込被下度希上候

（乙種）

博文館發行

雜誌特別割引券（女學世界新年號）

●雜誌御注文は此券を切取り御添付の事●有効期限は明治四十一年二月十日限り●期限中一冊實は定價の五分引●冊數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分引とす

●館友ば館友規定引の外割引せず●本券は前金御注文の外は効用なし●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

文（わの三）

英語專門成美女學校の生徒



（校長赤司繁太郎氏、麴町區飯田町にあり）

本品の特色は最も皮膚に有効なる原料を以て精
製したる者なれば色を白く肌を滑らかならしむ

プレスト洗粉



（定價）

袋入	貳錢
同	五錢
大袋入	拾錢
鑵入	七錢
同	拾五錢
特別	壹圓也

本舗 東京牛込西五軒町

山本玉川堂

根治確證

わきが

新治療藥 ラピヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐して悪臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のぱへる

原名ベグネス 毛髪生養液

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にて毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髪増生すひげなどにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品 紡バンドコロン溶液

色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

根治確證 新治療藥

梅毒 キーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこれかんそ骨うづき其他如何なる悪性の梅毒も必根治す

輕症は半劑悪症重症は二劑用よ誓て奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割増

電話下谷二五三五

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

女（かの一）

恭賀新年

博文館主　大橋新太郎

副館主　大橋進一

（かの二）

博文館編輯部

巖谷季雄　石橋助三郎　石坂橘樹　石井民司　伊尾準　伊東祐穀　長谷川誠也　西村惠次郎　西村辭三郎　仁藤保治　鳥谷部銑太郎　沼田藤次　太田善男　押川方存　大竹昌春　金子範二　鹿野直司　海賀篤麿

主幹　坪谷善四郎

河岡英男　武內桂舟　田山錄彌　竹貫登代多　竹貫直人　鷹野勇雄　武田源次郎　長井氏最　內山正如　久留島武彥　松原岩五郎　前田晁　淺田彥一　佐藤豐治　齋木寬直　木村定次郎　神保直藏　鈴木德太郎

（イロハ順）

博文館營業部

支配人　羽田福太郎

宮川大壽　上村恭三　堀野賢龍　田中六藏　愛敬利世　佐藤憲斌　關謹平　金子督太郎　谷俊三　松原濱之助　細野佐藏　玉井喜重郎　古賀豐策

中村慶次郎　佐藤誠　早川多輔　牧武

菅五太郎　神崎新四郎　山本順治　中田國治

小峰正一　兒玉幡太郎　有田利雄　番塲宗八　權藤文雄　橫田地巴　荒井芳太郎　繁田郁藏　今井玉三郎　福澤市太郎　今井淳　永井泰

木村照治　小林長次郎　菊地金五郎　小山瀧之助

大野金太郎　山田靜三　杉山常次郎　林彥之助　青木傳四郎　中村長　矢澤潤三　富所三郎　塚脇十三　磯岡鷲郎　松本勉治　飯塚市郎治　松木玉之助　廣瀨貞一　小林久四郎

高橋常次　渡部吉藏　松澤義一　原田貞助

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳はしい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺(電話本局三千四番) 大日本淑女學會



一月

行事——一日四方拜、一家團欒して屠蘇雜煮を祝ふ、二日初荷、初賣出し、新年試筆、三日元始祭、四日政治始め、五日新年宴會、七日七草の節句とて戶々若草粥を煮て食す、十五日小豆粥、十六日閻魔の祭日、藪入、二十一日大師祭日、二十五日天神祭。

家事——十五日までは松の内とて新姻舊知の往訪廻禮、來客の饗應等にて忙がしきは千門萬戶皆同じ、衣裳、古器物の貯へある家々にては寒乾とて大寒中に風に曝す、寒餅は此月下旬に搗きて網袋に貯へ置き春の點心となす、此月の花は水仙、福壽草、椿。

食品——野菜類は小松菜、ほうれんそう、芹、獨活等にて白魚と獨活と淺草海苔の淸汁、鮒の昆布卷、小鯛の酢漬、蝦の三杯酢、牡蠣の卸生姜、鮒の甘露煮、鮭の粕漬、鱈、章魚、雁、鴨、小鳥類何れも此月の好味なり。

遊樂——寒梅を探り、雪見の風流を遣るも妙、初卯に、龜井戶天神參詣、初甲子には大黑天參り、初庚申には帝釋天參り、東都にては蠣殼町水天宮、淺草觀音、虎の門琴平神社最も賑ふ。

日曜——五日、十二日、十九日、廿六日、卅日(孝明天皇祭)



竹の園生

天皇陛下　聖壽五十七

皇后陛下　寶算五十九

○東宮

皇太子殿下　玉齢三十

皇太子妃殿下　玉齢二十五

○內親王

常宮（玉齢二十一）

富美宮（同　十八）

○皇孫

迪宮（同　八）

光宮（同　四）

○有栖川宮

威仁親王殿下（御歳四十七）

御母（同　五十四）

實枝子女王（同　十八）

○伏見宮

貞愛親王（御歳五十一）

御繼嗣博恭王（同　三十四）

邦芳王（同　二十九）

恭子女王（同　十二）

敦子女王（同　二）

文秀女王（同　六十五）

○閑院宮

載仁親王（御歳四十四）

春仁王（同　七）

篤子女王（同　十二）

寛子女王（同　七）

○東伏見宮

依仁親王（御歳四十二）

周宮（玉齢十九）

泰宮（同　十三）

淳宮（同　七）

親王妃（同　四十五）

栽仁王（同　二十二）

親王妃（御歳五十一）

王妃（同　二十七）

博義王（同　十二）

博忠王（同　七）

知子女王（同　二）

親王妃（御歳三十七）

恭子女王（同　十三）

季子女王（同　十一）

親王妃（御歳三十三）

○華頂宮

博忠王（御歳七）

○山階宮

菊麿王（御歳三十六）

武彦王（同　十二）

藤麿王（同　七）

安子女王（同　八）

○賀陽宮

邦憲王（御歳四十二）

恒憲王（同　九）

佐紀子女王（同　六）

○久邇宮

邦彦王（御歳三十六）

多嘉王（同　三十四）

朝融王（同　八）

良子女王（同　六）

○梨本宮

守正王（御歳三十五）

方子女王（同　八）

○北白川宮

成久王（御歳二十二）

輝久王（同　二十一）

擴子女王（同　十四）

○竹田宮

恒久王（御歳二十七）

○朝香宮

鳩彦王（御歳二十二）

○東久邇宮

稔彦王（御歳二十二）

○小松宮

後室（御歳五十七）

御祖母（同　五十六）

王妃（同　三十五）

芳麿王（同　九）

萩麿王（同　三）

王妃（同　四十四）

由紀子女王（同　十四）

王妃（同　三十）

純子女王（同　二十五）

邦久王（同　七）

信子女王（同　五）

王妃（同　二十七）

規子女王（同　二）

御母（同　四十七）

武子女王（同　二十二）

新年の感想

もう幾つ寢ればと指折り數へて待ち居たるお正月は果して來りて、腹一杯に詰め込みたる餅の唸りは、紙鳶の唸りと相和して、世は相變らず面白く目出度きことなり。お正月といふこと、何處の誰れが始めたるか明かならねど、兎に角數千年來仕古しのものに違ひなし。お互にても三百六十五日毎には、一度ありて、隨分の古馴みなれど、來る度毎に新らしく感せられて、人並みに目出度きも可笑しなどゝは、全く屠蘇が言はする機嫌にて、寒風に面をさらして、たるみし瞼の引締ると共に、つくづく考ふるは、時間のことなり。小さき時は、年の經つが永く、お正月が待遠しく、却々七ツが八ツにならず、九ツが十にならざりしに、この頃の年の經つことは汽車に乘りて電信柱を數ふるが如く、またお正月が來たか、また一ツ年を取つたかと「また」が「また」になりて、イヤ斯う忽圖々々として居れぬ、時間に對して面目なしといふ氣にならざるを得ず。それぞ、人が、昨年中一生懸命に働きて、充分の成績を擧げて、その祝ひと骨休めとを兼ねて、お正月をするなるに、自分は昨年も相變らず怠惰にて何もせず、お正月に對しても申譯なき筈を人がすればよい氣になりて、目出度がつて居る手合も、少しはありとは正月とはいへ、目出度過ぎたり。

「今」は過去と將來との二ツの「永久」が、暫し出遇へる瞬間にて、一たびこれを失はゞ、萬世再會の期なきものなり。追へども及ばざる「今」の、我が前を過ぎ行くとき、名譽の挨拶をなし、盡きぬ名殘を惜まざるべからず。その法他なし、今の時を善用するにあり。今が積りて、一生となるにて、浪費してよき今なるものは、一度にてもあることなし。衣食住に法外の費をなす者を贅澤なりといふ、然れども何が贅澤なりとて、時間を浪費する以上の贅澤あるべきや。生活を織る機の梭は、一瞬も止まらず。無益有害に過したる時間は臍く不揃

ひなる糸となりて織り込まれ、人前に出せぬ一生の織物が出來上るべし。目に見へる着物は、錦の模樣美しく、立派なるものを着けながら、日々心の織れるものが、粗末千萬とありては、この上の恥はなかるべし。眼の衣裳で恥はかくとも、心の衣裳比べに恥かゝぬこそ、眞に美裝せるものとはいふべけれ、西諺にも、結果と將來とは、神のものなり、たゞ義務と今日とは、我がものなりとあり。現在の義務に忠實にして、今日を我がものとして、有益に使はゞ、將來は心配するに及ばず、安んじて、來るの結果を待つべしとの意ならん。或は今日を一生と思へ、一生の部分と思ふなといへる者もあり。味ある言葉ならずや。余は時間を浪費せり、而して今は時間が余を浪費すとは、うか〳〵と暮らせるものゝ晩年の述懐なり。時間の浪費者は惡魔の親友なり、よく時間を使ふものは、その大敵なり。すべて慾張りは、いかぬことなれども、時間だけは慾張るがよし。蜜柑の皮や紙屑を拾ふて置くの心掛けあらば、五分十分の時の屑は、大切に拾ふて使用すべし。一秒一秒は、時の金粉なり、勿體なしとも勿體なし。世界の富を以てするも、一瞬も時は後にかへす能はず。時間の難有味の分らぬ中は、まだ人間としては、下等のものなり。英國の史家ギッボン曰く、王侯の時間は、人民の財產なりと。これ豈に獨り王侯のみならんや。

威嚴ある女性となれ

渡邊千冬

世間に語り傳へ言ひ傳へるに足る婦人といふにもおのづから二通りあります。その內近來多く世に語り傳へられ持囃されてゐるのは、重に何々會の會頭とか幹事とか委員とか、さもなければ何々の事業を女ながらに經

營してゐる婦人とかいふ側のもの、これが今の世には多く持囃され奬勵されてゐますが、私は、

然ういふ婦人は大嫌ひ

である。西洋の婦人は固より社會に出る。然しそれは社交界、即ち交際場裡に活動するので、これならば未だしもであるが、右申す如き日本で喋々されてる婦人は、これは一種の事業をやるので、言はゞ女實業家です、さういふ或事業を經營するといふ様な事はどうしても男子に及ぶ譯のものでありません。女性の天職は其處處にあるのではない。何々會とか何々の事業とか、さういふ事に奔走し廻つてゐるものを、頻りに賞讃して羨ましがるやうな社會一般の形勢を觀るごとに私は大變間違つた事だと思ふ。眞に傳ふべき婦人は却つて隱れたる家庭の婦人にあります。どうしても家庭が婦人の天職を盡すべき持場であります。家庭を投げやりにしたならば、もう婦人の本分は立ちません。又社會へ出るにしても、それは女性に相應しき女らしい方面、即ち交際といふ様な事で働くべきもの、即ち家庭を中心として其の他到る處の社交場裡に光彩を放つ女皇となるは宜しい。女の仕事師は大嫌ひである。どうしても婦人は、

男と關係しなくては

眞正の活動は出來ないものです。即ち男の領分を犯すやうな事業家などになるよりは、女は女の長所を以て、男子を補ひ男子を助け、女の優しい芳しい性情を以て男子の性情をも馨しからしむるやうにして、相俟つて社會を榮えさせてゆくのが眞正です。然るに今は兎角女仕事師が世に揚々として羽振がよく、それが奬勵されるやうです。勿論學校に居る間から、會を組織する方法とか事業を經營する方法とかを敎へられこそ致しますま

いが、兎角に何々會長とかいふ樣なのが偉いものゝやうに思はれてゐるやうです。然しこんな事は考へて見れば何でもない事。職業や事務は少し練習すれば直ぐ出來る。譯もない事です。されば女仕事師になるよりも先づ女になる方が大切でこれが根底であります。男とてもその通り、精神の確乎した男子を造りさへすれば、職業は習ふだけの話。ですから女事業家の社會に驅け廻つてゐるのを羨むよりは、まづ立派な女になる事が大切でありませう。さらば、

立派な芳しい女性とは何

かと申すに、私の第一に日本婦人に必要と思ふ事は女子の威嚴といふ事です。どうも淑やかで、內助の務もよく盡される、感心な婦人などに逢つてさへも、猶女子の威嚴の足らぬことを感ぜられてなりません。どうも對等の話をしようとしても出來ない。何か話しかけても、「いゝえもう私なぞは……」なぞと、無暗に謙遜されて了ふので、薩張手應へある對話が出來ません。實に物足らぬことです。私の知合の西洋人で三十五六歲になる紳士がありますが、まだ獨身なので、「日本へ來て見て全然日本の婦人が氣に入つて了ひました。日本の娘さんをどうか貰ひたいと思ひます」と言つた人がありますが、それは日本婦人の淑やかに優しい處をひどく喜んだもので、この點では隨分西洋の人で西洋の婦人の活潑過ぎるのに閉口してゐるらしいので、其處は日本婦人の長所ですが、その代り一長一短で、威嚴の點に至つては、到底西洋の婦人に及ばぬこと遠いと思ひます。さすがに西洋の淑女は芳しい人格を備へて居る。即ち隨分お世辭も言ひ愛想もよく戲談も言ひますが、時により事によれば、一歩退いて凛乎と容を正して己れを守る處がある。又さういふ風でなくば、親も夫も氣を許して娘や妻を自由に社交場裡へ如彼いふ風に出してやれるものでありません。そこへゆくと、

威嚴の無い女は危ない

ものです。然もこのおのづからなる威嚴といふものが、どうして付いて來るかと申せば、それには深い仔細のあることです。言ひ換へれば威嚴といふは、つまり自ら尊む心に外ならぬので、自ら己れを淸らかなる玉の如くに大切にして、それを聊かも傷けぬやうにすること――卽ち自ら尊むのですが、その自ら尊む心の養はるるに深い由來があるのです。私が亞米利加に參つて居つた時に、親しく交際した某氏の令孃の十一歲になるのへ、その父なる某氏が「ピアノを稽古せよ」と勸めましたのに令孃は厭だといふのです。もし日本の家庭ならば、直ぐに「其麼我儘な事を……お前は子供で分りません。お父樣の言ふ通りにしなければなりません」といふやうに、親の力で壓し付けて了ふのが普通ですが、それを亞米利加の人は致しません。で、三日でも四日でも、少しも叱らず又壓し付けずに、諄々とピアノを稽古することが令孃の爲になる旨を說き聽かせるのです。無論機會を見合せ〳〵して說くのです。で、遂には令孃が十分に會得して、それが自分に適してゐること、稽古すれば身の爲めになること、又それに上達してゆけば實に興味饒かなことなどを、眞底から感じて、もう進んで自分からやりたくて堪らぬ樣にするのです、つまり說き聽かせるのはそれについての利害是非などで、決心といふものは當人自らにさせるのであります何事も自分で決して自分で責任を負ふといふやうに幼さい時から養成するので、親の威光で叱付け壓し付けて了ふことを決して致しません。卽ち壓制せずに、自由を與へて自ら事を決せしめ、その代り自ら責任を負はしめるのです。恁樣にしますと、

自ら尊み自ら立つ

といふ心はおのづと湧いて來て、成人の後とても身を誤まるやうな事が少なくなります。實にこの自尊自立の心は西洋――殊に亞米利加の婦人の特色と申してもよいでせう。それについて恁ういふ實話があります私が紐育に居つた時、會話の教師を得たいと思つて新聞に廣告すると、忽ち應募の申込の手紙が百餘通參りました。處が婦人の申込が多いのです。それは例の自立自活の氣風の盛んな米國の事ではあり、又婦人には隙な人が多いからでありましたらう。そこで一々にそれを讀んで見まして、申込條件の不便宜なものは勿論、その他筆蹟のよくないものや、文章の正しくないもの、或は妙に氣取つた文章のものなどを棄てゝ、殘れる三十通ばかりの人を、暇潰しではありましたが一々訪問して面會して見ました。處がその內の一婦人の許を音づれて見ると立派な家です。應接室なども裝飾美はしいもので、暫時待つてゐると其の婦人の母親が出て來ました。立派な夫人です。で其の夫人のいふには「娘も（The American）亞米利加婦人になり過ぎました」といふのです。といふのは此家の主人はもと獨逸人で、今紐育の某銀行の頭取で、大金滿家だといふのです。それ故娘にも無論相當の小遣ひをやるのですが、娘は例の亞米利加流で、何でも自ら働いて取つた金でなくてはいけない、肩身が狹くて自由に快く使はれぬといふので、父の銀行のタイプライターを扱ふ書記になつてゐるのださうで、「猶それでは收入不足と思つたのでせう。貴方の廣告に應じて申込をしたのです」といふ話でありました。日本などでは這麼金滿家の令孃は這麼事をするなどゝいふは思ひも寄らぬ事ですが、亞米利加婦人は自由自立といふ考から這麼事をするので、何事も皆この精神からするのです此樣な自主自立といふ精神が、即ち威嚴の源泉、言ひ換へれば凛として侵し難い、

白梅の如き品格

の源であります。日本とても封建時代の武家の婦人には、然ういふ芳しい人格が現はれて居りました。西洋で所謂紳士淑女の品格ある人々は、やはり此樣に實に芳しい人格を備へて居るのであります。これでこそ社交場裡も美しく樂しくゆくので、この子供の時からしての、自立自主、威嚴品格の養ひがなくては到底立派な社交の成立つ筈がありませぬ。日本の婦人は此の、立派な女になる、立派な人格を養ふといふ根本を疎そかにして居るからいけませぬ。たゞ學校で少しばかり得た學問や識見位ではどうしておのづからの威嚴の出て來るものではありません。どうか此樣な威嚴あり品格ある芳しい婦人となつて、立派に對等に男子と手應へのある話をしてくれる婦人が日本にも追々出て欲しいのであります。で、

もう一つの實話

を申して、米國人がすべていかに自由獨立を尊ぶかの一例と致しませう。やはり紐育の事で、米國の新聞に出てゐた事ですが、私はそれを切拔いて今も持つて居りますが、一方から見れば憐れな話。と申すはブルックリンといふ――紐育の一區域の――處の或家の子供、一人は十一歳、一人は十二歳、共に男の子でありましたが、朝早く家を出たきり夜になつても歸つて來ませんので、親達は大層心配して、いろ〳〵搜索の手續きを致しましたがなか〳〵分りません。その夜も明けて了ひ、翌日になつてもやはり分らず、その翌日も又分らず、又その翌日も空しく心配の内に暮れて了つて、つまり見えなくなつた日から四日目の晩に、或る街の某家の戸口に、夜更けてから悄然と二人抱き合つて居るのを或人が見出して、初めて親許へ送り歸されたので、親達も漸う安堵の思ひに愁眉を開いたといふことでありましたが、その見出された時には、もう二人は餓死するばかりになつてゐたといふ事です。然るにそれは何がためにか家出をしたものかといふに、單に自活せねば意氣

地がないといふやうな考から出たことに過ぎぬのです。斯ういふ間違の起つたのも畢竟社會全體の氣風の然らしむる所で、亞米利加の空氣は實に斯うしたものです。その空氣中に人となる婦人ですから、自主、從つて品格、威嚴といふ方に長所を有つ様になるのであります。そこは日本婦人の見倣つていゝ處と思ひます。そして斯かる氣風を養ふには、前申す通り子供の内から自由を與へて、自尊させて、己れの問題をば自ら決するやうに育て上ねばなりませんから、これは又子供の有る御婦人方に考へて戴きたいところと思ひます。眞に芳しき女性といふは、勿論女仕事師でなく、又單に優しいといふばかりでなく、底に凛とした處のある立派な婦人を指すものであらうと思ふ。

元日の心

朝日に二つなく山川に變りなきを、乾坤皆新なるを覺え、日ごろ惰まる端さへ、初日とて、もて囃さるゝは元旦なり。されば常には寢ぎたなき身も、此の朝ばかりは、人に後れじと、早く臥床を出づ。口嗽がんとて縁側に出れば、星斗欄干として東方いまだ白まざるに、何れの家にも燈影戸外に溢れ、水汲む音をちこちに聞ゆ。かくて家に入れば、神棚にはあたりまばゆきまでに、みあかしを點しつられ、先づ之を拜して一家の幸福を祈り、親子はらから相見て新春を祝する言葉の、今日のみは、いと眞面目なるも、いひ得ぬ情味あり。さて一家團欒して、祝ひの膳に向ひ、屠蘇を酌み雜煮の箸とる時の心地は何に譬へんものなし。やがて東の空やうやう白みて、茜さす日のさし上れば、野も山も去年のけしきに似ず。まだ春ならねども、何となう霞こめたる心地ぞする。門毎に出でゝ眺むれば何れの家にも松飾りして注連ひきわたしたるさま、げに神代の事も思はる。とかうする中に年賀の客は彼方こなたに往きかひ、顏に時ならぬ紅葉を散らして千鳥足なるもあり。娘子供等は、けふを晴れと着飾りて、突羽子、紙鳶揚げに餘念なく、笑聲は街に滿つ、老いも若きも、胸に一點の曇りなきは、今日ばかりぞかし。人は常に此の日の心もて日を送らば、いかなる樂か成らざらん。



デーリーメード 永田美知子の生活

芙蓉生

單にデーリーメードといふは固より穩當ではない。美知子夫人は言ふまでもなく永田家、この一町有餘四方の地を占めて、その内に牛舍あり放牧地あり住居あり草原あり木立あるといふ此の永田家の主婦であらるるのだから。然し又英和女學校の卒業生として、立派な學問あり教育ある婦人で、そして手づから牛乳を搾つて勞作せらるゝといふ點は、恰も歐米に於けるデーリーメードに當るので、假に此の名稱を用ひたのである。デーリーメードの生活!、その中に苦もあらう樂もあらう。殊に教育ある淑女が自ら牛小舍に入つて勞作せらるゝといふこと、それのみで既に業に尋常平凡の事ではないと、記者は一日、時雨のはら／＼と降る午過に、夫人を牛込の片辺なる其のお宅に訪問しました。立木の間を入る徑を一つ折れて突當ると、硝子戸の西洋扉があつて、開けて入ると、土間は四坪ばかりの煉瓦敷で、中央に圓卓子が据えてある、入口から正面の奥が座敷で、そこに夫人と舅御らしい老人とが居られる。挨拶をすると夫人が先づお懸け下さいと言ふ。折から牛の世話の相間と見えて、夫人は子供衆の被服らしい桃色のフランネルに、頻に針を運んで居られた。年齡は三十前後、細面の、眼の涼しいお方で、黑縮紗で筒袖の勞作服を上に被て居られる、笑を含んで記者の問に明透したそして物靜かな調子で答へられる。庭――むしろ草原から微雨の中を驅けて來た五歳計りの、色の白い丸顔な愛くるしい男の子が、西洋扉

を開けて入つて來た。見れば洋服に靴である。で、活潑に土間の卓子の周りを驅け廻つて大聲を揚げて騒ぐ。夫人が「外でお遊び」といつたので又ばた／＼と驅け出した。夫人とのお話しを續けながら、見ると座敷には金庫、電話、そして長火鉢は瓦斯を使ふ裝置、すべて西洋風が八分である。

學校を出た當座は書物にも親みましたが、其後は既うとんと遠ざかつて居ります。卒業の頃にお友達と希望を話し合ひなどしました中には、いろ／＼のお望みも伺ひました。軍人へお嫁きになるのが御希望もあれば、外交官お望みもあり、色々でございましたが、私は、

卒業頃からの希望

が、何でも實業の方で手堅くやる人と共々に致して見たい考でございました。永田の家へ參つてから、半年程北海道の方に夫と一緒に遊んで居りましたが、その折夫も牛の事を見聞しまして、一つこれを試みたいと申して、札幌農學校より牛を拂下げて歸り、それが基に此處へ開業しましたのが、左樣ですね、明治三十四年の、八月十五日でございました。早いもので既う足かけ七年になります。その初めは宅は此處ではございません。數町離れて居りましたので、此處は桑畑であつたのを開きまして、ほんの牛小舍だけ建てましたのです。牛も僅つた三四頭に過ぎません。夫婦とも何にも牛の事を知らないので、北海道から一人職人を連れて來て、それを相手に働きましたのです、然しどうしてもこれは、

人を頼みにしてはだめ

と存じましたので、私はその初めから搾り習ひまして、まあ漸々と慣れて、何うやら差支なく搾つて今日まで續けて參りました。何せよ二人とも牛の事は知らず、何でもよく働くより外はないと思つて、一心に出精致したのでございます。が、その初めの事を顧みますと隨分困難致しました。一體朝が早いので――これ

は今日までもずつと同じ事に致してをりますが――毎日夜の十二時半に起きまして、乳を搾つて、それを瓶に詰めて、配達に出して了ふと、もう曉近く三時になります。當今ですか、當今は牛は四十頭程でございます。その代り職人を二人使つて、私共々三人で搾りますからやはり其位の時間で出來ますのです、其通り起きるのが早く、又時間が定まつてゐて後れてはなりませんので、

夜も安静寝られなかつた

のでございます。當今とても同樣です。ですから成るたけ早く臥せるやうに致しますが、來客や避け難い用事で不意後くなつて、どうかすると其儘起き續けて了ふこともございます。この深夜の勞作は暖い時分はまだ宜しうございますが、冬は隨分こたへるのでございます。それに生物を相手の事ですから、三百六十五日一日も休暇はございません。賣れる賣れないに拘はらず搾取る事だけは是非致さなくてはなりません。殊に開業のその初めは、離れて居つた舊宅の方から、眞夜中に通つて來るので、股引に草履や鞋で、冬の寒い夜半などによく一緒に通ひました。困りましたのは雨風や雪や霜解の折で、もと／＼桑畑ですから路が惡くて／＼ほんに困難致しました。それに開業して直きに夫に病まれまして、



それでも、諸事順序立ちました今日は、さまでゝもありませんが、半年許一人で齷齪致したのでございます。日課ですか。

忙しい日課

でございませう。曉の三時頃出かける者を出してやりまして、一眠致しますと、ぼつ／＼男共が歸つて參ります。それに食事など致させて暫く休ませます。十時から又仕事に就いて、牛の飼料をやります。そして十一時半頃から又晝の乳を搾るので、それが夕景配達するのになるのでございます。搾る前に飼料を遣すので、夜も同じ事でございます。その外午後に、青草のある頃は青草、それの無い頃は藁を與へます。それ等の仕事の間々には瓶を洗ふとか牛舍の掃除をしますとか、なか／＼隙はございません。午後にも一眠するのが宜しいのですけれど、やはり然ういふ都合に參りません。ですがもう習慣で別に睡眠不足も感じません。

暴ばれる牛

も往々ございます。が此方が面倒を見て氣を緩らして扱つてやれば、大抵皆穩かになつて了ひます。職人などは直ぐに大聲に叱り付けたり打つたり致しますから益々暴ばれるので、人に物を言ふやうに靜かに言ひ聽かせながら近づいて參るとか、首などを優しく撫でてやるとかいふ樣に致して、漸々と懷柔ければおのづと溫和しくなつて參ります。けれど搾り習ふ初めには隨分怖うございました。勿論角で人を衝く事は出來ないやうに縛へてございますが、搾られるのを煩さがつて足で蹶りますのです。どうせ獸に近づく事ゆゑ、此方も十分用心は致して居りますが、それでも危險は免れません。一度などは蹶り飛ばされた事がございます、幸に格別の負傷も致しません、でしたが、然し七年間多くの牛を手掛けましたが、恁麼事は一度だけ、又どうしても溫和しくならない牛は唯一頭ありましたゞけでございます。

動物の感情

とでも申しませうが。かういふお話がございます、先年の博覽會に宅でも種牛を一頭出陳致しました。他からも無論出陳なさいましたので、それがずうつと並んで居ります。私も觀に參りますと、絡繹々々と其前を夥しい人數がお通りになりますが、牛は皆の通り伸氣さうに寐そべつてをるのでございます。その多勢に雜つて私も「あゝあの中に宅から出したのも居るのだな」と思ひながら參りますと、ひよいと突然に立上つた牛が一頭ございます。驚いて見ますと其れが宅の牛ではございませんか。私も思はず嬉しくて微笑んだのでございます。多分私が分つたものでございませう。



記者は恁麼面白いお話しに時を忘れて居ると、冬の日の雨に早くも暮近くなつたので、もう御暇しようと思つたのですが、試みに牛舍の方の拜見を請うた處、「汚なうございますが……」と微笑まれながら、直ぐに立つて案内して下されました。例の硝子戸の西洋扉から出ると、先きの愛くるしい男の子が直きに驅けて來て手を曳かれながら、活潑な調子

で頻にお母樣に話しかける。牛乳を漉したり瓶に詰めたりする處がある。馬小舍もあつて二頭程入れてある。牛の飼料を造る建物があつて、其處に一人の職人が頻りに立働いてゐる。見れば煉瓦で築いた大きな竈に恐ろしい大きな釜が懸つてゐる。霧雨の降る中を十四五歲の小僧が驅け廻つて立働いてゐる。牛舍は長い鍵の手になつた建物で、四十餘頭の牛はずらりと其中に居る。折から藁を與へてあるので、皆ませ棒から首を差し出して食べてゐる。實に平和な樂しさうな光景であります。中には生後一ケ月程とかいふ子牛も見えます。活潑な男の子さんはお母樣の手を離れては、折々俯いて藁を食べてゐる牛の頭をちよいと叩いたりする。

「一々牛に名前をお付けになりましたのですね。」

「さやうです、名前のあつた方がよいと思ひまして。」と微笑まれる。一匹飼に一頭づゝ入れてあるので、朝日とか美咲とか八雲とかいふ樣な風雅な名が木札に記して一々に柱に打付けてあります。

「けふは雨ですから出しませんが、毎時は午後にこの放牛場で遊ばせておきます、小舍へ入らせる頃になると、唯追込みさへすれば、もう自分の家をちやんと知つてゐまして、各自入つて了ひます。」

といふお話。面白いものだと思ひながら、更に牛舍の清潔なことに感心しながら出かゝると、又別な男が何か夫人に用の事を聽きに來た。電話でも懸つて來たのであらうか。で記者はお暇して出た。簫々と傘を打つ雨の音を聽きながら、この萬事いかにもよく整頓してゐる、西洋風の——然も質素な奥床しい廣い屋邸の其の初めが、桑畑を拓いて小さやかなる牛舍を一つ立てたのに初まつたものだといふを考へつゝ、汲々と勞作の尊いことを感じ、夫人の淑やかで然も甲斐々々しき姿を思ひ浮べながら、記者は辿る足元も後れがちであつた。

井上侯爵の家庭

夢蝶



▲頑健なる老侯の生活

井上侯爵といふと、明治維新の幕が開くと共に、時代の進潮に翼を張つて、政治界に實業界に、特種の光彩を放てる巨人であるとは、何人も知らぬ者は有るまい。明治政府の元老、實業界の大頭目、公人としての井上侯は、四十年間の明治歴史に金文字を以て、その實蹟を記るされてゐる。……侯爵は、昨年十一月二十八日に、第七十三回誕生の園遊會が有つたから、明て今春は七十四歳の老齢である。女學世界讀者の爲に、家庭に於ける井上侯の人物を紹介しやう。

▲家族は極めて少數

井上侯爵のお屋敷は、麻布の内田山であるとは世人は大抵知つてゐるであらう。庭園は目白の椿山荘(山縣邸)早稻田の大隈邸など〻共に、閑雅豪壯を競ふてゐるが、邸宅の廣大な割合に、案外御家族は尠い方。

侯爵の家族といへば、過般獨逸から歸られた勝之助氏夫婦も別居だから、内田山のお屋敷では、侯爵夫婦に、千代子樣と仰しやる明けて八歳のお孃樣一人、即ちたつた三人の少家族である。最も新田家(夫人の里家)から、何時も息女がお出で〻あるから、その息女を加へても四人。寔にちよんぼりとした家族である。

けれど、お屋敷に住まつてゐる人數は、尠くない、先づ女中の方よりいへば、女中頭一人に、小間使四人それに飯焚二人、女の奉公人は七人である。男子の方

は、大名華族のやうに、家扶とか家從とかいふ名義の役人は居ないが、末廣といふ執事が一人、之は會計を兼ねて。常に侯爵に隨行してゐる本多といふ人が、屋敷家に家屋を構へてゐる。之は外務大臣の當時に、護衛警部であつたが、引き續き井上家に勤めてゐるので侯爵の外出毎に、後に跟いてゐるのは、此の本多氏、である。外に道具掛が二人。書生が四人、これは國許の舊緣から、侯爵の世話になつてゐる書生達である。最もお屋敷の附近に、時習舍といふのがあつて、侯爵の監督を受けてゐますが、正月興津へ伴はれる外、平日は餘り屋敷に出入されない。そしてこの時習舍には、三井家の子息も、毛利家の子息も、益田、園田、筑前の貝島等、侯爵に關係ある貴族や富豪の令息は、皆な遣つて來られてゐる。北白川若宮も、西園寺家の養子と爲つた毛利五郎氏も、此の時習舍に寄宿して、侯爵の世話監督を受けられたものである。時習舍の舍則は隨分嚴格なものですが、これは暫らく後に廻し、侯爵の屋敷に居る書生は、前述の如く目下四人。で、井上家の家風として、如何なる嚴冬といへども、書生は羽布團を用ゆることができないこととなつてゐます。

右の外侯爵家に居るのは、女中五人、飯炊二人、夫に料理番二人都合十七人であるが、此の人數の外に、千代子樣の家庭教師一人と、裁縫教師一人が居る事になつてゐます。

なほ植木職人や庭掃除の類を入れると、侯爵の邸內に住つてゐる人數と言つたら、彼是二十幾人にも爲るでせう。

△一家親類のお顏觸

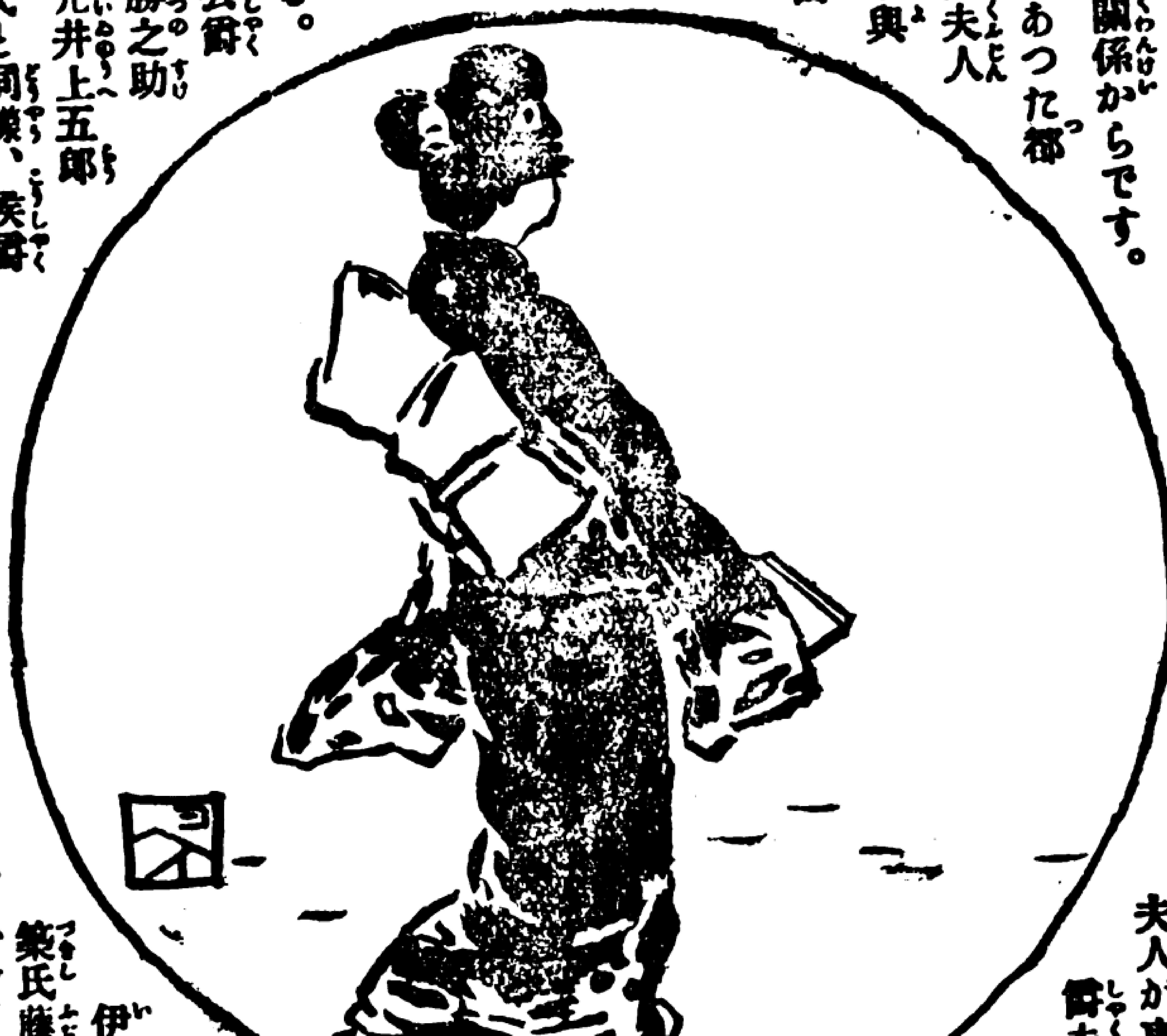
序に、づらりと親戚の顏振を擧げて見ませう。

侯爵世嗣の勝之助氏は芝の三田綱町に住つて居らるるが、同氏の家族は、夫人に令孃(養女)一人。同夫人は侯爵夫婦が丹精された方丈けあつて、當世仕込の若奧樣で、外國語の如き、獨、佛、英の三國に通じて居られます。

親戚の中で最も親近であるのは、言ふ迄もなく、奧

様のお里、新田家である。桂侯爵家や、都築家と姻戚であるのも、皆新田家の關係からです。因に、平和會議の大使であつた都築馨六氏の夫人は、侯爵夫人の令妹で、桂侯爵の嗣子與一氏の夫人も、矢張新田家より嫁いで居らるゝ譯であるのみならず、桂家の令夫人は井上侯爵の養女として嫁せられた方であります。

次に擧ぐべきは、伊藤公爵家との關係である。世人の知れるが如く、公爵の世嗣伊藤博邦氏は、勝之助氏の實弟で、侯爵の實兄井上五郎三郎氏の令息で勝之助氏と同様、侯爵の甥に當る方であります、ですから若主公の方から言



へば、井上家と伊藤家とは兄弟筋の家柄である。公爵夫人が東京に出らるゝ時は、何時も侯爵夫人を尋ねて寒暄を聞ひ、侯爵夫人が大磯に赴かるゝ場合には公爵夫人が女中を伴ふて停車場に迎へらるゝのも斯うした親戚の間柄であるからである。又藤田四郎氏の夫人も侯爵の養女であるから同じく親戚の間柄です。國許には、井上家の舊縁は多いが、東京の親戚は、ざつと右の如きものである。伊藤家、桂家は言ふ迄もなく、都築氏藤田氏等は皆世に時めける名望家で、侯爵自身の家族こそ尠いが、親類姻戚の根は、貴

顯勢力家の間へ擴がつてゐます。

それに毛利家、三井家、住友家、鴻池家、藤田家、古川家、貝島家等とは特別の關係があるから、平素親戚同樣に附合はれて居られる。

△七十四歳老翁の氷水浴

日本政府財政の黑幕として、國家經濟の幾分を脊負つて、立つて居らるゝ井上侯の日常生活は、如何であるか。

侯爵の朝起といつたら有名なものであります、午前五時には、ちやんと寢床を離れ、例令前夜どの位遲かつても其樣なことは井上侯の朝起に更に關係はない五時の時計がチン、チンと鳴ると、侯爵の姿は、既う寢室の外に現はれてゐる。そして直樣庭園に飛び出して、運動である。――別段侯爵特有の運動法といつてはないが、寢衣の儘、スタ〳〵早足に散步されるのであるが、その後姿を見てゐると、散步振の活潑なのは若者も及ばぬ程で、そしてむしろ亂暴なことと言つたら所詮七十四歳の老齡とは見受けられない。丘陵のある庭園を登つたり、降つたり、隅から隅まで散步して、時に胸部を張つて、壯者の如き音響を爲せて、空氣を吸つて居らるゝこともあり雨降の日などは、如何かすると、尻引つからげて、高足駄で、散步して居られるとも珍らしく無い。

運動が終ると、水浴です。侯爵の水浴は、頭から水を浴るといふ普通の方法でなく、眞裸體で水風呂に入つて龜の甲のやうに身體を横たへて、水中に頭を潛らせるといふ亂暴な方式である。大變な水浴ですな、ト驚くと、だから今の若い奴等は駄目だと、身體を眞赤にしながら、例の氣焔が出る。

斯んな風に運動が激しいから體內は熱するものと見え、薄着は言ふ迄もなく、三月頃より十月頃迄は、氷を離されない。ザク〳〵硝子のコップに入れて、口に含んで居らッしやる。如何かすると、氷を茶漬の中へぶち込んで、旨さうにコリ〳〵音を立てゝ居ることもある。そして蜜柑が大の好物であるそうな。

▲お菜は河豚とスッポン

水浴が濟むと、朝食といふ順序に爲る。朝食は洋食と極つてゐる。牛乳に麵包、半熟の鷄卵二個、それにコンビーフ。時に燒肉が附くこともある。晝食と、晩食とは、日本料理と西洋料理と半々で、刺身の傍にフライが附き、鯛と燒鳥と相接してゐる。飯は麥飯で、年中變らない。食後には果物が慣例である。酒は青年時代には斗酒尙辭せざる豪傑の風は免かれなかつたが、明治二十年頃からは、禁酒の體で、偶偶酒を呼ばるゝことがあつても、小さいコップに、水を割つて葡萄酒、一杯。日本酒を口にせらるゝことは殆ど無い。

要するに侯爵は大の料理自慢であるにも拘らず、日常の食物は極めて質素で、中等社會と撰ぶ所が無い。食事時間は朝は八時、晩は七時と、秩然と極まつてゐる。食堂は十人位列ばる位で、餘り廣くない。言い殘したが、侯爵は魚肉では、鯛、泥鼈、獸肉では猪肉が大の好物である。夫人には目立つた好嫌は無いそうです。

▲殿樣の料理自慢

侯爵の料理自慢は有名なものであるこれは大隈伯の園藝自慢と好一對であらう。

一體侯爵は多藝多能の人であるが、亦た大主我的で、園藝でも。農作でも、一切合切、自分流儀の方式で、遣り通し如何なる庭作も、老農も、侯爵の前には頭が擧らないそうである。例令ばあの廣大なる庭園でも左樣だ、一木一石といへども、皆侯爵の指圖で出來上つたので、老熟の名ある園藝家も、唯々諾々と、侯爵の指圖に從つて、器械と爲つて、働いたに過ぎない。園藝ばかりでない。農作物でも其樣である、不思議に大根でも、蕪でも、胡蘿蔔でも牛蒡でも、有ゆる農作物に就ての一かどの見識が有つて、未だ曾て農業家の言に耳を假されたことが無い。庭園に續いてゐる畑でも、

興津の別莊のでも、皆それで、例の我流で作られたものである。

啻に農作物ばかりでない、果物の植樹でも、例の我流で押し徹はされるから恐れ入る。興津の別莊に鈴形に生つてゐる蜜柑や林檎の植付も、矢張侯爵獨特の植樹法で仕上つたもので、我流も我流だが、多藝多能も亦た驚くべきではないか。

併しながら、最も御自慢であるのが、料理である。

侯爵の料理法は、砂糖を用ゐないといふのが特色で、甘味はすべて自製の野菜類より取つて居らるゝのであるから、井上家の臺所には、大根、蕪、唐黍等の汁類は、罎詰に爲つて、順を作つて列んでゐる。で、平日は左樣でもないが、宮樣とか、或は外國の珍客等ある場合には、料理人の差し出す獻立書を受取り、一々夫を取つて、訂正した上に、氣が澄まないと、バタ／＼臺所に出掛けて、口八ヶ間敷指圖してゐらつしやるとが多い。

であるから、其處等の料理は口に入らないと口癖の樣に言つて居らるゝのも無理はない。之は明治初年に京都第一の料理人を招いて研究された結果で、料理丈けは法に合つてゐる、ト左る料理人は賛嘆してゐたが料理丈けは、我流を超脱して、玄妙に入つたものと見ゆる。因に、醬油でも、味噌でも、皆な侯爵特有の製法があつて井上家では、市中の食品を取られたとが無いといふ事である。

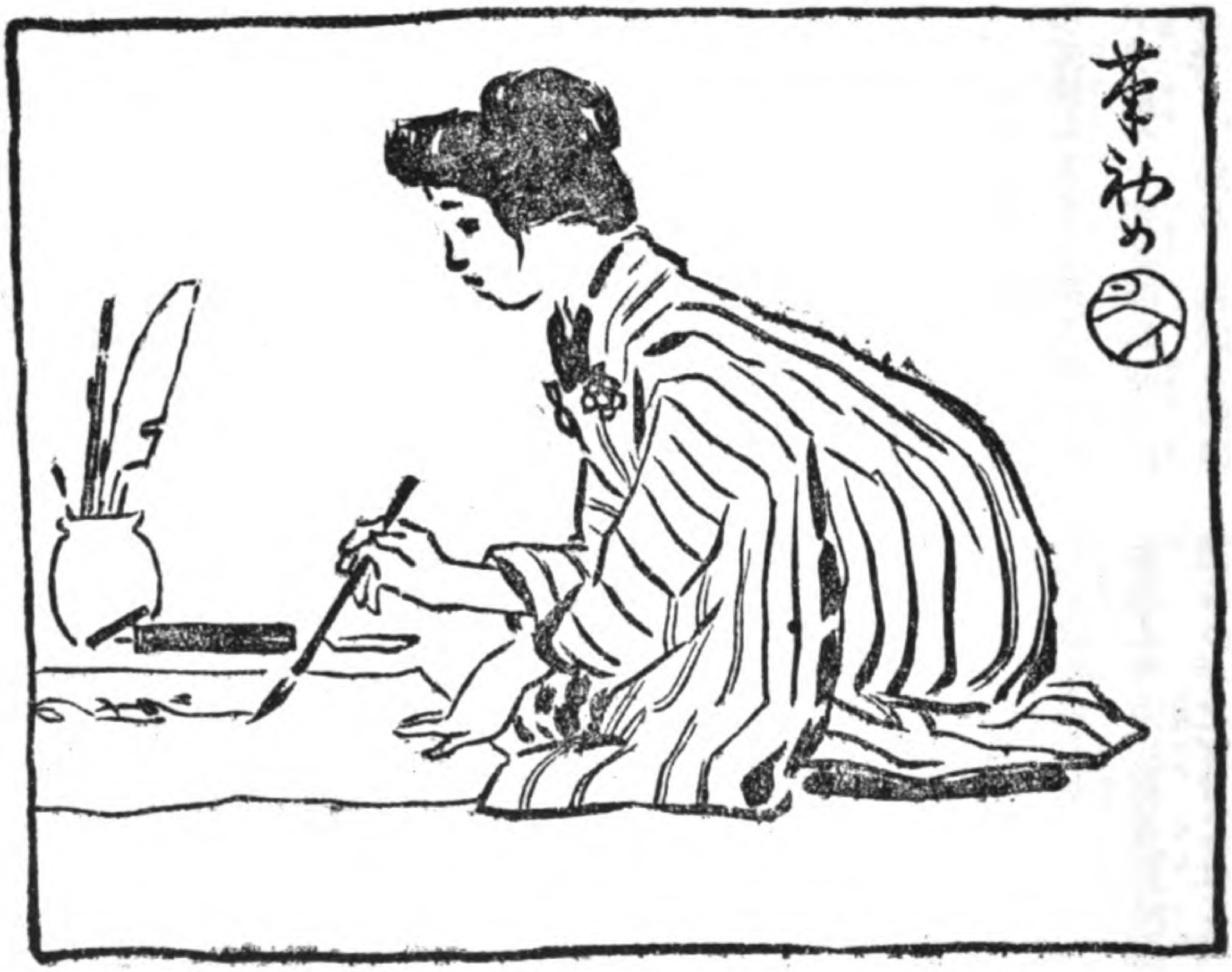
▲服裝は粗末な木綿もの

斯んな風に、臺所の事まで世話を燒かるゝにも似合はず、一向に無頓着なのは、その服裝である。

一體井上侯といふは、維新當年の新智識で、明治二十年頃迄といふものは、即ち外務大臣時代に盛んに歐化主義を唱へて鹿鳴館の假裝會など催ふし政府部内の新潮流は、此の侯爵を中心として發露したやうに見受けられたにも拘らす、家庭内の侯爵は、ハイカラは大の嫌ひ、殊に服裝と來ては、幕末當時の浪人風で、縞目の見えない木綿服を着て、平氣である。嚴冬でも足袋

は禁物だ。啻に屋敷ばかりでなく、興津或は箱根などへ出掛けられても、木綿の綿入に、兵兒帶ぐる〳〵捲いて、飄然と、郊外に散歩さるゝことは珍らしくない。

七十幾歳の老齡に爲つても、青年時代の剛情我慢は失せず、殊更にどろどろした泥濘の場所を撰んで、散歩爲さるのが習癖だから、何時も足駄や着物が、泥まぶれになつてゐる。それでも侯爵は少しも介意なく、その儘すうと自室に通つて、反古の散らがつてゐる中に坐つて、昨日千金を投じて買ひ取つた書畫の話説に夢中である。



だから園遊會位の外は滅多に洋裝の侯爵を見受けたことはない。何時も木綿服の、着流し。——若し洋服を召さるゝことがあつても、二三十年前に調へたらしいもので、如何なる嚴寒でも頓と外套を着けられたのを見たことがないその生活的から言へば、侯爵は蠻殻の骨頂である。

▲屋敷は日本風

邸宅なども矢張り日本風で、西洋趣味は尠い。全然日

本風の建築である。侯爵の居間は、普通の室と、椅子に掛る室と、二た通りあるが、日常坐さるゝのは胡坐の出來る普通の日本座敷で、西洋風の居間には、餘り見へない。應接間でも、日本風のと、洋風と二タ通り出來てゐるが、外人を案内する應接間でも、疊が敷いてある。

室の名稱は、すべて書畫の備付で命名されてある、例へば光琳の畫が飾つてある室は、光琳の間、周文の物が列んでゐる室は、周文の間と、風雅な名稱がついてゐる。室の取方や、飾付は例の氣性が發揮されて、なか〳〵凝つたものである。――夫人の室は、侯爵の居間と三四間隔つてゐるが、侯爵家には平素來客がのべつ幕なしだから、家族の團欒は、朝夕の食事時位のものであらう。侯爵家の來客といへば、實業界の勢力家が最も多く新事業が起ると、直樣相談に參る。次は政府の役人、續いて書畫骨董を持ちあるく道具屋である。

▲殿樣の道具ずき

井上侯の道具好といへば、料理自慢と等しく侯爵家の特色で、毎日或は隔日に、お屋敷に道具屋の姿を見ないとは無い。從つて骨董品の買上も多く、道具の取扱のみに、二人の雇人が掛り切りでゐる。

侯爵の屋敷へ潜る書畫骨董は、一品一軸で數萬圓に價する高價の珍品も珍しくないが、侯爵位の骨董道樂に爲ると、高價の物ばかりが面白くなく、むしろ世間に知られない珍品を掘り出して同好者を驚かすのを得意として居らるゝ。だから、案外の廉價の品を手に入れて、天下を取つたやうに、笑壺に入つて居らるゝとが多いのである。之は骨董好の癖ではあるが、豪華王公に比しき侯爵が時に十圓乃至二十圓の直段のさし引で、一時間以上も談判を試みらるゝともあるから滑稽といへば滑稽だが、侯爵の顏色を見ると、眞顏である「其樣な品に三百圓出せるか、二百圓に仕て置け、ナニ、まからない、ちや歸れ、歸れ。ナニ、五十圓だけ奮發しやう、往生際の惡い奴だ。ちや、投票で買つて遣らう。之だけに仕て置けオレも奮んだのちや」トば

いと紙切を抛て、火鉢を引寄せて、故意と素知らぬ顔に、空嘯いて居らるゝ。紙片を開いて道具屋は頭を掻きながら、「殿様、之では酷ふ御座います」といふのを、ぢろりと見ながら、「馬鹿言へ、オレは大奮發で、十五圓奮んだのぢや」

▲總理大臣の手紙は紙屑の中

右にてあら〳〵侯爵の日常を紹介した。更に侯爵の居間の模様を書いて見やう。

侯爵の居間は、庭園に沿つて、南向の、十疊位の間で、床の傍に黒檀の机、その上に硯箱と手文庫が上つてゐる。けれど、机の近傍は、蒟蒻版刷の書類やら、手紙の反古やら、散らかつてゐる、如何かすると。內閣總理大臣自筆の手紙が、そこらの紙屑と一緒に打ち棄てゝあることもある。

床に密畫の幅が掛つてゐることもあるが、時々侯爵の氣と共に變つて、清人の書が掛ることもあり。侯爵の居間と言つても。唯、是れ丈けである。極めて索然としてゐるが、侯爵は火鉢の傍に泰然と坐つて居らるゝのである。火鉢の火は何時も消へかゝつてゐる。

來客は應接間に引かるゝのが普通であるが、山尾子爵だの、野村子爵だの、或は井上子爵(勝)などいふ維新時代の舊友が尋ねられると、居間に呼んで、四十年前の青年時代に復つて、內田山の大邸宅一杯の笑聲が外に洩れる。特に井上勝子は、高言放談の雄であるさうな。

けれど、舊友相會して、笑聲の涌く事は稀少である平日は應接間に來客が絶へない。大隈伯などは、壯士でも書生でも大抵會はれるが、侯爵は約束の來客でないと面會されない。で、手許に來客の手帳が出來てゐて、キチン〳〵と約束時間に會つて居られる、規帳面な性質であるから、約束の時間を守らるゝこともなかなか嚴重だ。若し約束時間に背いて尋ねる者があると傍杖を食ふのは、取次の書生で、青天に時ならぬ雷霆が落ちる。

稍して閑暇さへあると、道具掛を相手に、骨董類を

取り出し、或は庭園に出て植木を弄つて居られる、若し時習舍の生徒等が居ると、植物或は昆蟲類の研究やら、自修自活の談議やらが始まる。

書物は餘り坐右に置かれない。けれど、夜分に爲ると、靜かに高僧傳を繙いて、冬季の夜長を忘れられることもある。井上侯と高僧傳、面白い讀書の趣味であるが、世外の別號も、家庭の侯爵を見ると、成程と首肯かれる。

▲百雷千雷一時に落つ

總じて家庭に於ける井上侯は、一本調子で、思つたとは矢でも鐵砲でも押し徹すといふ風。であるから、一と度思ひ立つと、其の事に熱中して傍目も振られない。實に一心不亂である、特に精力の強いといつたら、天下無比で、二夕晩でも三晩でも徹夜だ。

一本調子であるから、怒りッぽいことも、亦天下無比で、御機嫌に觸れると、百雷、千雷、一時に落ちて、内田山の邸内を震動する。執事の末廣氏でも、附添の本多氏でも、道具掛でも、書生でも、女中でも、一ケ月に一度位は乾度霹靂に打たれる。けれど、雷鳴後は青天一碧、からりと仕たものである。だから、屋敷内では秘密にカミナリといふ言葉が行はれてゐる。磊々光風霽月のごとしといふ言葉があるが、侯爵の如き人を謂つたのであらう。

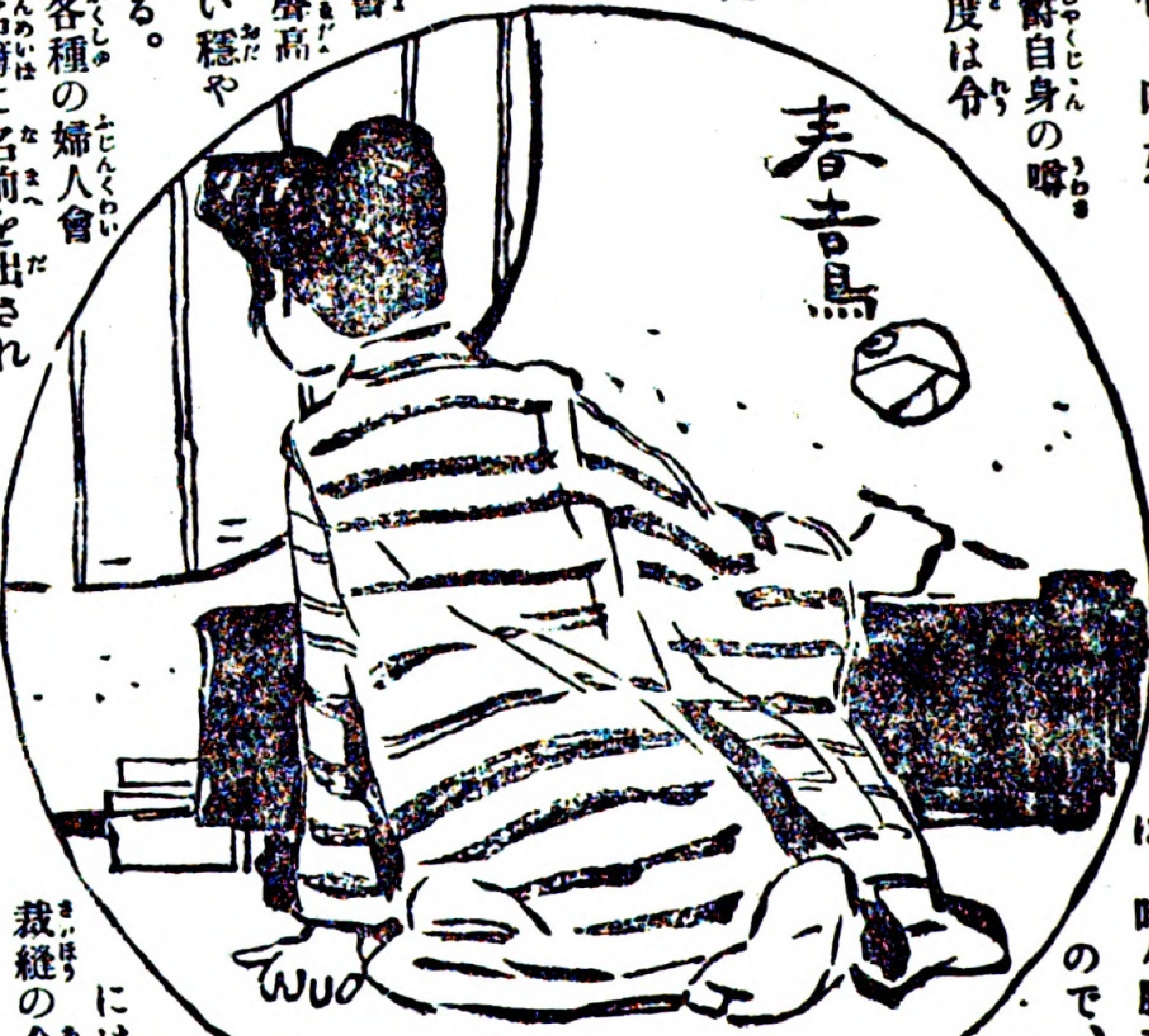
それに愚圖〳〵してゐることは大の嫌である。新聞記者に機敏が生命であるやうに、井上侯が最も喜ばれるものも矢張此の機敏である。物事が敏捷に辨ずると、禮儀も作法も關係なし、書生や女中が立ちながら、御用を承はつても、其樣なことは侯爵のお眼に留らない。御用があれば、トン〳〵飛んでゆけば、御機嫌が良い。——家庭に於ける侯爵は、斯んな風に、直情徑行で、一本調子で、用向は敏捷を喜ばれるのであるが、その代り表面に體裁を飾つて、陰で惡口仰しやるやうな、其樣な女々しい行爲は、假にも無い日月如き浩然、淡然して御出で爲さる。

▲夫人の性格と嗜好

井上侯爵の家庭は、侯爵自身の噂で持ち切つて來たが、今度は令夫人の話説に移らう。

侯爵は前述の如くがむしやうの方であるが、夫人は侯爵とあべこべ、居間には塵一本も見へない、掃除の行き届いた、潔癖のお方で、侯爵には固より、女中や書生に對しても、ついぞ聲高に仰しやつた實例のない穏やかな、静かな御方である。

近頃貴婦人社會に、各種の婦人會が起つて來たが、會員名簿に名前を出されても、表面立つて、集會に出席されたとは無い。



皇后陛下或は皇太子妃殿下の御機嫌伺に伺候される外には、時々勝之助氏の邸宅を訪はるゝ位のもので、殆んど外出なさることが無い。

一意專心に、妾腹の千代子様の養育に精神を籠めて居らるるので。

で、餘暇が有ると、居間に引き籠つて、裁縫に一心―居間といへば、侯爵の居間と三四間隔つてゐるが、夫人の居間は、化粧室と、寢室と、普通の居間と、恁う三間で、机の傍には、をりをりの花が生けられてある。鐵瓶には何時も松風の音が聞へてゐる。

裁縫の合間には、新聞雜誌の類に、お眼を通さるゝこともある、新聞紙は、報知新聞と國民新聞

で、雜誌は女學世界、女鑑、愛國婦人の類である。斯う書いて來ると、侯爵夫人は隨分餘暇があるやうだが、殿樣に來客が絕へないと同じく、夫人にも來客が多い。親戚の訪問もあれば、侯爵に關係ある紳商富豪の令室も、夫人を尋ねてくる。だから、夫人の身邊は、暇のやうで、なか〳〵お忙しい。

▲模範的賢婦人

侯爵は、前述の如く多藝多能で、有らゆることに趣味を持つて居らるゝが、夫人には取り立てゝ著しい嗜好は無い。お若い時は琴をお好であつたやうだが、此頃は琴を手許に寄せらるゝことも見受けない。お忙しい故であらう。

お若い時と變らないのは、裁縫と、お孃樣の養育で、何時も家庭教師を居間に寄んで、かにかくと相談されます、自身にお腹を痛められたお子樣は無いが、勝之助氏の夫人でも、都築氏の夫人でも、桂與一氏の夫人でも、皆此の夫人の丹精で人と爲られたのである。

要するに侯爵夫人は、侯爵のやうに、異彩もなく、特色もないが、日本婦人の最も圓滿に發達したお方で、侯爵が縱橫自在に政治社會に手腕を振はれたのも、此の穩やかな夫人が、蔭に隱れて、内助の功を擧げられたからで、之を思ふと、何等の特色もない所に、此の夫人の長所美所隨つて偉大な力が潜んで、尋常ならざる賢婦人であることが想察せられるのである。

以上、概略であるが、井上侯爵の人物と、家庭の模樣を書いて見た。終りに、侯爵の健康法を附記して、この記事を結ばう。

▲生涯醫者の手にかゝらぬ人

維新の元勳中、侯爵ほど健全な方は尠い。百二十五歲迄長命すると揚言せる大隈伯の邸内には、藥局の設がある。醫師も日々詰め切つてゐる。けれど、井上家には、藥局の設もなければ、抱置の醫師も無い。之は侯爵の無病である故でもあるが、醫師の手に掛るのが七面倒だ、といふ例の氣性も加はゝつて居らう。爾し

て取扱は粗末であるにも拘らず、不思議と、身體は健全だ。最も時々腫物で顔を顰められるとはあるが、皆な手療治で直される。

　侯爵は如何にして、此の健康を得て居らるゝ乎。自分は、その精神狀態を以て、第一の原因に置きたい。侯爵は性急だ、一本調子だ、怒りッぽい。けれ共、一ツの事にくよ／＼と屈托しないのが、侯爵の最も著しい性格で、カッと怒つて後は、夕立が止んだそれのやう。磊々落々である。松方侯爵はアキラメが良いと聞いてゐる、井上侯は松方侯爵以上である。

▲汽車は二等冬も坐布團なし

　次は身體の養生法で、朝起、運動、水浴等も、侯爵の健康に關係が多いのは云ふ迄もない。然かも侯爵の健康法は極めて蠻殼で、亂暴で、時習舍の貴公子達に對しても、矢張此の筆法で、嚴戒を與へてをられる。嚴冬でも、坐布團禁止、汽車は二等以下、人力車に乘るのも嚴禁である。で、日常口にして居らるゝ訓戒は、自修自活の四字。――侯爵は自製の人である。艱難の兒である。その剛情も、主義も、艱難多き七十年の經歷より得來つた活學問で、侯爵は之に依つて健康を求め、是に依つて顯榮に達し、之に依つて子弟を敎育せんとせらるゝのである。

　然かも此の自製の人、主義の人、本能の人に、言葉振の婉やかな、客待遇の巧妙な、お頭の低い夫人が配して居らるゝのを見て、記者は井上侯の家庭に於て、無限の興味と敎訓とを喫する者である。

▲エヂソンの働き振

有名な發明家エヂソンの考によると世間一般の人は餘り食ひ過ぎ眠り過ぎて十分に働かないさうだ、彼は近頃二ヶ月間一日三度の食事に三十匁以上の食物を取らないで濟ましたが其結果精神は一時敏活となり體量活力少しも減ずることなかつたさうだ、彼は近頃更らに語つて云ふには「余は食事の工合を變化せんとして居る余は以後食事には豌豆一さじ烘物麪麭類少許、極些少のサンドウイッチ、ハムの少片に瑞西乾酪と黑麪包を以て余の常食とせんとして居る」と而して彼は斯く少量の食事をして居るが身體强健で當年六十三歲で能く働く日には朝の五時から夜半まで打續けに仕事をなし食事に時を費やすこと五分時以上なことは滅多に無いと云ふ事である。

九十九媼　長命實驗談

糸左近

▲九十九媼と逢つた因縁

私が今住んでる家の隣の主人は中山磯次郎と云ひ、年は七十二歳、其の妻君は三つ上で七十五歳、共に壯健な者で、長男夫婦が心配なく家計を立てゝ吳れるにも拘らず、老人夫婦も其れ相當の仕事をして、一日も徒に過さぬやうにしてゐらる、殊に七十五歳なるお婆さんは、夏は日陰に、冬は日當り宜い處に緣臺を移し北の臺上で針仕事をなすが常である、言はゞ年中日光浴をしてるのだ。余は之を見て、成程健康の源は茲に存るのですと感歎の辭を洩した所が、お婆さん曰く、「妾の懇意な家に九十九歳で妾よりも元氣なお婆さんが居ますせ。」と聞いて余は飛び立つやうに嬉しく、早速紹介して貰つて、實地の衛生を研究したのである、それが即ち今回のお話、何と目出度いではありませぬか。

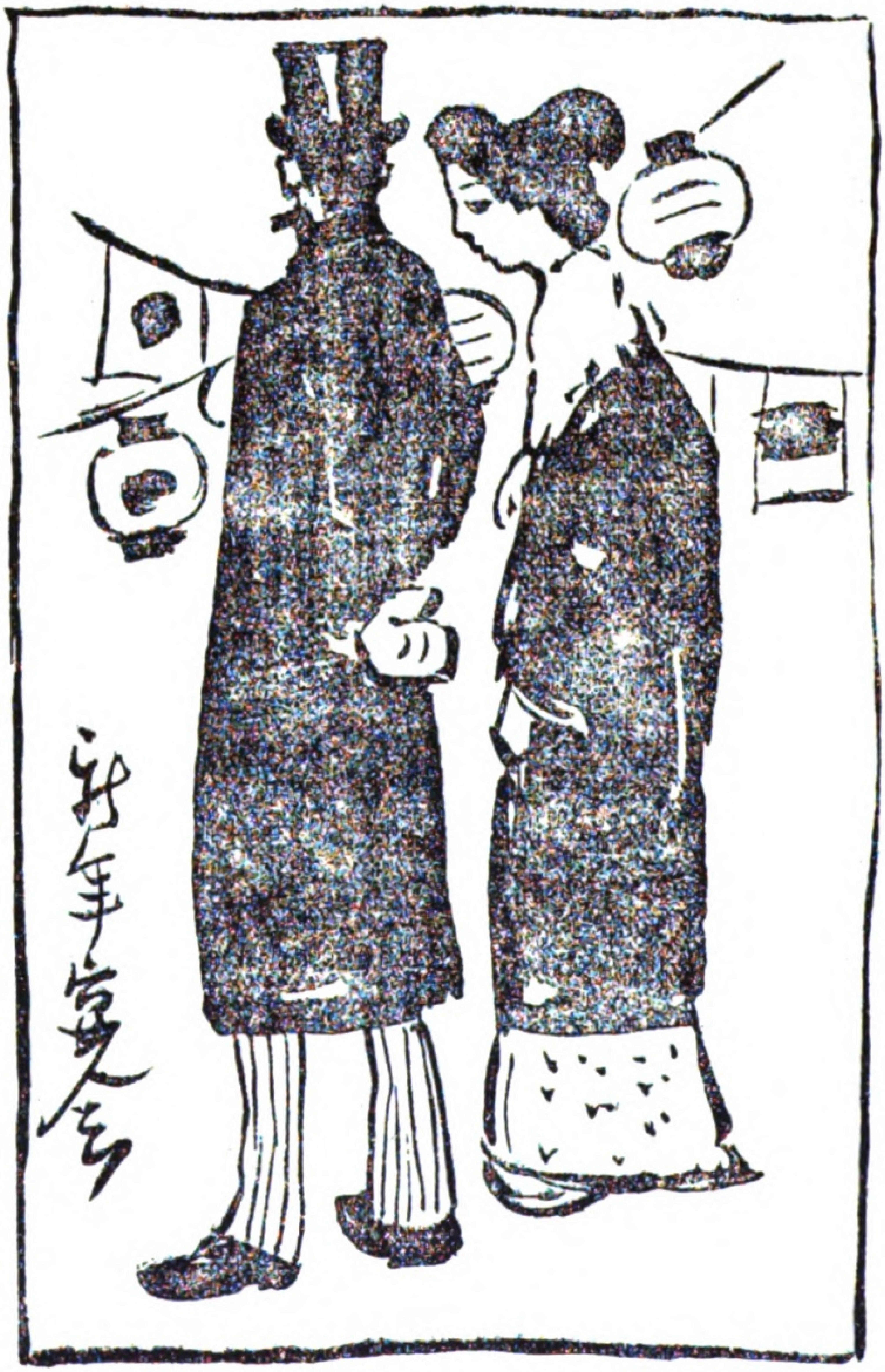
▲九十九媼の家

九十九媼は名を袖子と云ひ、東京を隔つること六哩なる赤羽在、稻付村の伊藤庄右衞門といふ人の祖母だ余の逢ひに行つたは昨四十年十一月の新嘗祭の日で、降り降らずみ村時雨といふ程でもないが、時々ショボ雨が降つた、上野から汽車に乘つて赤羽で下り、東京の方へ戻ること約十町、其處が即ち稻付村で、村端れに南無妙法蓮華經の石碑の立つてる處を右に折れ、行くこと四五軒、豫て斯う聞いてゐたから、容易にそれと了つた。家は四五町の田を隔てゝ小高い山に向ひ、宅地と田との境には、もう萎れかゝつた黄菊白菊が籬をなし、緣側には大根の洗つたのが七八本横はり、四十歳許の男の人が、土間に蓆を敷いて、里芋の毛を挘つてゐる、で其人に、「此方は伊藤庄右衞門樣ですか。」と問へば、「ハイ。」「私は糸左近と申す者ですが、豫て中山さんを以て御願ひ申した通り、お婆さんにお逢ひ申したいのですが、如何でせうか。」「マア御入りなさい。」これより愈々本文に入るのだ。

▲主人と余との問答

家に入ると手拭を冠つた三十四五歳なる女の人が、木の根を刳つた煙草盆と、天鵞絨の座蒲團とを持つて出て丁寧に挨拶し、即て里芋の毛を挘つてた人も入り來り「私が當主人の庄右衛門で御座います、婆さんを診察せうと被仰るのですか。」

『イヤ診察といふ譯ではありませぬが、色々長生されたに就いてのお話を承り、其の上お婆さんにお目にかゝりたいので。』



斯う言つたけれども、主人は何だか余の本意を解し兼ねるといふ風が見える、で又余は言葉を續け、

『私は人が何うしたら長生出來るかといふことを書物の上で學問してるものですが、今お婆さんのお話を承り、書物と實際が齟齬はぬかを照し合せて見たいのです。』

『婆さんは學問も何もありません、私達とても……』

余は其の言葉を遮つて、

『何しろ私の尋ねる事を答へて貰へばそれで可いので

す。……乃でその御家族は？」

「私は孫で巳年生れ三十九、これが家內、茲に居る子供は皆私の子で、祖母さんの彦です、父は六十三歳彼處に菰を編んでゐます、母は今より三十四年前に亡くなりまして、私は顔を覺えてゐません、父親は祖母さんの末子で、其兄は三人もありましたが、皆東京へ出て世帶を有ち、色々辛苦した故か、左程に長生しませぬ、祖母さんの兄弟も有りましたれど、七十歳から八十四五歳で亡くなり、今は一人も居りませぬ、祖母さんの夫に當る私の祖父さんは、六十四歳で亡くなりました、斯ういふやうに、長生は出來ぬものですが、それでも祖母さんの姑の姑に當る人は、九十六歳まで生きて居たとの事で、祖母さんも其年まで生き長らへて、此家の身代を作らにやおかんと今より十年前までは、隨分働いたものです。」

「お婆さんの平生は何んなですか。」

「私達は午前四時半に起きて出て、野良へ出る者は出る、家に居る者は夫々の仕事をするのですが、祖母さんは六時まで床にゐます、夜は皆九時に臥りますれど祖母さんはそれより一時間も早いでせう、晝は別にこれといふ仕事もありませんから、鷄の餌を蒔いて遣つたり、寢轉んだり、起きたり、又はお隣へお茶を頂きに參つたりしてゐます。四五年前までは皆と同じ食物を食べてゐましたれど、今は駄々を揑ねて、麥飯は厭だ、副食物も豆腐だの魚だの干物だのと、別な物でなくては承知しませぬ、併し氣に合つた物なら、却々頂きまして、過日も大きな牡丹餠三つまで食べました煙草は吸ひませんが、酒は好で、好といつても毎晩頂く譯ではなけれど、頂けば二合位飮んでも平氣です、二合も飮むと、上機嫌になつて、戯言も申しますれば歌の一つも唄ふといふやうな元氣。昨年までは御寺參をしましたれど、今年からは大儀だと見え、家にゐて御題目を唱へて居ます、併し路は十町位なら歩けませう、昨日も梯子を掛けて、塒へ卵取りに上るといふ始末、危くて見て居られませぬから、お止なさいと申しますれど、却々強情で肯き入れません。ハイ此の卵は

食べもしますれど、大概は賣つて祖母さんの小使錢にするのですから、身に代へて鷄の世話を致します。物覺えですか、若い時の事なら、何でも大抵は記憶して居りますれど、現在の事は直に忘れて了ひ、皆の留守中に、村總代から布令が來てもそれを忘れて了つて、私に告げません、來たさうだがと言へば、『さう〳〵來たよ。』と申す位なもの、言はゞ小兒に返つたやうなものです、兎に角昨年と今年は大違で、昨年は眼も大分明るかつたれど、今年はずつと薄くなり耳も昨年よりは餘程遠くなりました。


近県旅行中年末年始の礼を欠く

此時丁度妻君は、黑塗の盆に、大きな急須と茶碗を載せて持ち運ぶ、余は汽車から下りて以來、咽が乾いてならぬ時であつたから、藥臭いやうな粗茶なれど、二三杯續け樣に啜り、啜り終つて、

「現在の事は悉皆了りましたが、お若い時の話を貴君は御存知でせうか。」

「よくは存じませんが、何しろ善く働いた人ださうです、耳は遠う御座んすけれど、兎に角本人よりお聴き下さりませ。」

折しも奥の方で聲高らかに、

「彼處に來てる者は誰だい――ナニ東京から、東京の誰だい――何しに來たのだ。」

手に取る如く聞ゆるは、問はずも了る九十九媼の袖子だ。やがて妻君に伴はれ、弓腰の老婆は徐々と余が側に座を占める。

▲袖子の雄辯

齒は五六本、皺は頗る多く、眼は薄く、耳は殊の外遠いが、髪は白いながらもまだ丸髷の俤を殘してゐて、而も筋骨の逞ましいには成程これだからと感心した。簡單なる默禮も濟んで、

「御丈夫で結構ですな。」

と言へば、主人はそれを又一段聲高く取次ぐ。

「昨年まではまだ斯んなでもなかつたですが、何分眼が薄くなりまして、漸と貴殿の顔が見える位です。」

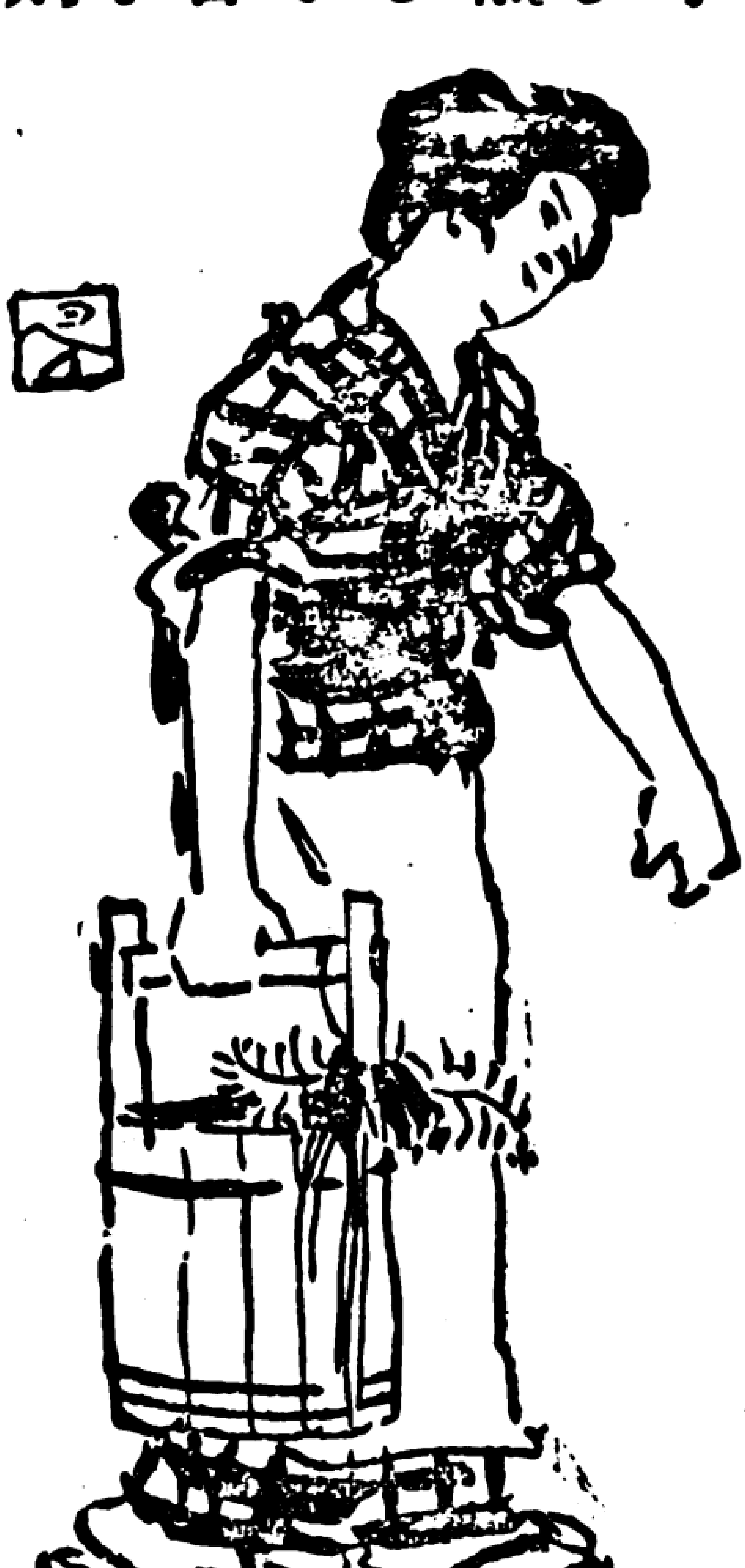
主人は又取次して、

「お祖母さんのねイ若い時の事聴きたいッて、此の旦那が。」

何うせ不得要領な事を言ひなさるだらうと思ひの外、順序を立てゝ言語爽かに來方の長い履歴談、その根氣のよいこと、血氣盛んな若者とても、彼の樣には續いて語られぬ。今其の大要を摘めば、

「何を隱しませう、妾は十九の年、此家へ嫁入したのですが、姑は妾の叔母で、夫とは從兄妹添、若しこの姑が赤の他人ならば、齒に絹着せて物も言はうけれど、遠慮會釋の無い所へ持つて來て、九十六歳まで生きてゐた姑に使はれ、况して、嚴しい性質の人だもんだから、少しの猶豫なく、御飯戴いて食休をしようとするを見ても、「なんだ野呂間が、若い者の癖にッ。」斯う頭ごなしに叱られるので、泣々ながらも野良ばかりへ出て、牛馬同樣に働きました、時には斯んな家に艱難

しようよりも、故家へ逃げて行かうかと、幾度も〳〵思案致しましたれど、何分夫が心優しく、陰になり陽になりして、「辛からう、辛からうけれど、働けば皆將來に我等二人の爲になるのだ。」この樣に申して與れるもんですから、我と我が氣を引立て、當時は色々と不幸な事の續いた揚句ですから、貧乏もしてゐましたれど、稼ぐに追付く貧乏なしで、妾が五十歲になつた頃は、小金も出來て、幾分の田地も求め、親類の人も力を添へ、貴女の樣に働いた人は無い、實に感心なものだと、幾分宛か寄附もして與れ、まア立派といふ譯ではないが、此家を建て、息子にも嫁を取り、ヤレ嬉しや、働き甲斐有つてと喜んだは夢の間、其嫁は肺病に罹り、長い間の苦み、搗てゝ加へて又々色々な不幸に出逢ひ、又々元通りの貧乏、即て其嫁は二十幾歲を一期として亡くなり、嗚呼生甲斐もなく、嗚呼、働甲斐もなく〳〵、愚痴もこぼして見ましたが、ナーニ姑の姑は九十六歲迄丈夫であつた、それから見れば我はまだ若いものだ、我とても其の年まで生きれば、又挽回出來ぬものでもない、弓矢八幡それまで生きて、今一度倅と共に働き一旗擧げんものと、此の孫主人を指してを育てながらの苦勞、それでも苦勞の甲斐あつて、イヤ正直に働くものには神佛の御惠みが忝けない、南無妙法蓮華經〳〵、それでまア何うか斯うか妾が六十七八の頃、又田地も取返し、今日までこれといふ心配もなく暮してゐます。」



下手な小說家の書いた長い會話や、余の如き拙い文

の衛生談は、實に倦の來るものなれど、この老婆が息も切らずに滔々と約三十分時間に亘つての長物語は、一言一句成程々々と、余は一種の感涙に咽んだのである。

▲袖子の嗜好物

余は又更に一碗の茶を啜る、老婆も亦啜る。

『お若い時から今まで何樣な事がお嗜でしたか、如何樣な事が樂しみでしたか。』

『前にも申しました通り、若い中は苦勞ながらも優しい夫の言葉を便りに日を送り、五六十歳の頃は、東京に親類がありましたから、時偶には出て、芝居を見るのが何よりの樂しみでした、けれども斯う長生してる者は、妾ばかりで、段々親類も少くなり、行く處が御座いませんから、お寺詣と、今は旨しい物でも食べるが此上ない樂みでオホヽヽヽ。』

これより余は主人から色々な衛生質問を受け、知れる限りを答へて居たが、時は既に正午を過ぎたから、これにて暇を告げ、再び赤羽より汽車に乘り、歸つて時遲れの御飯を食べた旨しさは今に忘れられぬ。

▲余の管見

家に歸つてから熟々と袖子老婆の長壽の源を考へて見るに、豈偶然ならんや豈偶然ならんやの感が頻りに起るのである。今其の感を列記して見ると、

(一)野外の運動は長壽を生むの母。

(二)目的あるの艱難は高壽の源なりと西洋の諺にもあるが、實に其の通りである。

(三)四時半に起きて九時に寢る、即ち早起早寢でなくては健康を保たれぬ。

(四)嚴格なる姑に勵まされ、優しい夫に慰められ、規律ある家庭を作つてゐたのが無病の種。

(五)人間は精神の使用がないと早く老衰れる。

(六)袖子は九十六歳の人を見本にしたから長生が出來たのだ、されば何人も長生出來るものと思ふて居らねばならぬ。

(七)失望の時に落膽するやうでは生地なしで、萬事成功せぬのみならず、短命の基である。

(八)幾歳になつても、氣が若やかで、歌の一つも唄ふ心が無くては駄目だ。

(九)正直で心に疚しい所のない人は、身體も亦丈夫である。

(十)袖子は日蓮宗の堅屋だ、人は何宗に限らず、又は無宗教であらうとも、兎も角安心立命が無くてはならぬ。

袖子が長壽の源はまア雑と斯ういふやうなものだ、返す返すも九十九歳の身を以て鶏を世話し、其卵を賣るの精神は健氣で、余の感服する所である、けれども惜いかな舊幕時代に人と爲り、小學教育さへ受けぬ身であるから、百五十二歳までも老耄れずに長命した人の有ることも知らず、九十九歳位で、得々と長生したるやうに思つてゐるのと、今一つの厭なるのは、この十年前から冬になると、火燵を行は、入れて寢るの一事だ。嗚呼敎育ある人ならまだ〳〵老耄れずに心身を使用し、火燵の代りに湯タンポを入れんものを、それは兎もあれ今春は丁度百歳、定めし例の快活なる音聲で「めでたく〳〵の若松樣よ」でも歌つてゐなさるか、それとも田舎の事だから一月後れの正月か。(完)



家政

女子をして家庭の實務に熟練せしむる方法

羽仁もと子

△熟練と不熟練の差

誰でもいふ通り、女子たるものは矢張どうしても家庭の實務に習熟することが大切であります。下婢を幾人使つても、家内の體裁の常に亂れ勝ちにして、樂しげに整頓してゐるといふことの出來ない家、收入も相應にあり、別に之といふ贅澤もしないのに、一家の經濟の常に窮乏を告げて餘裕のない家等は、多くその家の主婦たる婦人の、家内の實務に習熟して居らぬからで御座います。

何故といふのに、新しい下婢といふものは、御飯を炊くことも、お汁を煮ることも、働く術も知らないのが普通です。任せてさせて置きますと、御飯も炊きお汁も煮、洗濯も致しますけれど、その御飯は或時は硬く、或時は柔かに、お汁の味も分量も朝々に違ひ、足袋やハンケチの洗濯も鼠色でなければ、皺だらけに出來上ります。自身家務に習熟して居らない主婦は、唯今日の御飯は硬いから、モー少く軟かにとか、また硬くとか注文することは出來ますけれど、水を多くしたと云つても、必ずしも御飯が味よく軟かに出來る譯でもなし、水を少し控へたからと云つてそれのみで、しつぼりと出來る譯でもありません。もつと白くと注文しても、洗濯物は石鹸を多く用ゐて、無暗にもむだけではよく出來ません。自分自身にこれらに就て充分な心得と經驗とを以つて居りますと、御飯のたき方もこれ／＼と豫め細かに云ひつけ、洗濯の仕方も物によつてよく敎へ、尙ほその結果を見た上で、今日の御飯のこれ／＼に出來たのは、むらし樣が足らないのだとか、火が弱かつたのだらうとか、それ／＼の場合に當つて、敎ゆることが出來ますゆゑ、下婢も追々に日常

の仕事に熟練して、家の事はすべて思ふやうに氣持よくゆくのみならず、主婦がこの樣にすべての仕事に經驗を以てゐて、教へられた通りを守らず、少しでも手をぬくと直きにその欠點を見出す代りに、忠實に骨折つて仕上げると、また明かにその苦心を認めてくれるといふ風でありますと、下婢はいつでも油斷せず、且つ勵みて以て仕事をするやうになりますが、主婦自身家の仕事になれてゐませんと、モー少し朝のかたづけは早く出來ないかといふやうに、女中の方に注文しても、奥さんは何も御存知ないから、鳥渡の間に雜作もなく出來るやうに思つておゐでだけれど、なかなかそんな者ではないなどゝいふ氣になつて、一向利目のないもので御座います殊に仕事にくりまわし順序などは、單に料理を稽古したとか裁縫は知つてゐるとかいふ一つ〳〵の智識だけでは充分にゆくものでありませぬゆゑ、自分で實際臺所をも働いて見、家の中の裁縫を



も引受けて出來るだけ仕事の全體に就ての經驗をも得て置くことが大切であります。

△熟練は幼少の仕込にあり

女子たるものゝ家内の實務に練習して居らねばならぬといふ譯は以上の通りで御座います。さうしてこの練習をするのには、どういふ時期にどのやうな方法によつてする方がよいかといふことを簡單に申しますと一體この家庭の實務といふものは、別に大した考へのいることでも何でもないのでありますから、十一二歳の頃より母親の注意によつて、まづ部屋を丁寧に片附けて掃く術を覺させるとか、次にはまた雜巾がけに意を用ゐて熟練させるといふ風にし　日々必ず朝のお膳だてと、夕方のおかずの中一種づゝを拵へるとかいふやうにして、女學校などで料理の稽古をするまでには已に一通りの料理の經驗と下地とが出來てゐるやうに裁縫にしても前と同じ年頃より、初めには衣類の袖などを縫はせ、幾枚も袖を縫つて、裏表ともに獨りで完全に出來るやうになつた所で、今度は表身幅丈けを度度縫はせ、出來た所で裏身幅を縫はせ、次に表裏を合はせると、綿を入れると、くけることゝいふやうに部分的に熟練させて行くやうに致しますと、時間の少い子供に一枚の着物をあづけて、幾日も〳〵同じ物を置いたり取つたりして、倦き〳〵するばかりでなく、出來上る頃には、初めの方を忘れて仕舞つて居りますから二枚目を縫ふ時には、また新しく稽古を初めるのと同じことになるといふやうな愚に陷らば、よく和服裁縫の普通の仕方を年若き少女にも覺えさせることが出來ます。そして母親の仕事の一部分づゝをこのやうに手傳はせることは、多くの中流の家庭に於て少しも困難を感せぬばかりか、大に助かりになることで御座います。家庭に於てこれ丈けの素養が出來て居りますと今日の女學校の料理も裁縫も幾分か身になりませう。客のある時は子供をしてその一部分の經營を手傳はせ例へば初めに椀、茶碗類を洗つて拭いて、人數前揃へることをさせたならば、次の三四回も矢張その事をさ

せ、次にはまた部屋の掃除かたづけ、裝飾等を手傳はせ、また數回その役目をさせるといふやうに、矢張部分的にさせてゆく方が爲めになります。段々役に立つやうになつたならば、親戚や親しき友人の家に於て、賓少しの人を呼ぶといふやうな時にも手傳ひに使つて貰ふやうにし、それらの立ち働きや周旋になれると共に他家のふり合をも見せるやうに致します。まづ幼き時より自分の手で出來る限りのことはするといふ、まめまめしき習慣を與へ置き、少女時代には以上のやうにして家事を手傳はせ、立ち働きを苦にせぬ習慣と、家庭實務をザット一通り心得させて置き、もし少し年をとつたならば、母親に代つて家事監督の一部づゝを追追にさせるやうに致しますと、他日家を持つた時に當座の家事には少しも差支へなく、女中を使ふにしても一通りのいひつけやまた教へることも出來ますことゆゑ、珍らしい料理や、裁縫に一層熟練するとか、ミシンの縫物の初歩までは、家を持つてからでも必ず出來ることです。唯まめ〳〵しく働く習慣のついてゐない婦人や以上のやうな一通りの家庭實務の素養のない婦人には、家を以てから新に一切の實務を巧みにするまでの練修をするといふのは非常に困難なることであります。

△世話女房に甘じてはならぬ

以上の修養が出來ますと、世話女房の役目丈けは必ず勉まります。さうして世間の名ある教育者などの中にも、家庭に於ける婦人の務めは、以上の世話女房の役だけに止るかのやうにいひ、世話女房だけのことが出來れば、それで理想であるやうに思つて居らるゝ方もあるやうに聞きますけれど、私共は婦人の大切な務めの中で、世話女房の役目は最も手近なもので、誰にでも幼い時から少し母親が氣をつけてやりますと殆ど必ず出來る務のことだと思ひますけれど、妻たるの務めは決してかく限りある家庭の實務になれてゐるといふやうな簡易な才能では務まりません。更に母たり得るの資格に至りては、妻たり得るの資格よりも一層た

深遠なる多くのものを要します。世の青年女子たる方方並に既に母たる私共も、如何にしたならば、その資格を少しでも多く充たすことが出來るやうになり得るでありませうか。他の機會に於て、わが不備なる考を記して、皆樣の御同情をも得、御意見をも承りたいと思ひます。

着實なる婦德の涵養

横倉秀子

普佛戰爭の時の事でした、病理學の大家として今の刀圭界に英名を轟はれで居る故ウヰルヒヨー博士が、獨國の傷病兵を收容したる病院の院長を務めて居られましたが、或る日の事篤志看護婦の一人なる某教授の夫人が病氣に、兵卒等の看護に從ふ事が出來ませんでしたので、折柄其夫人の處に賓客として寄寓して居りました英國の一貴女が、其代理を務めると云ふ事になりました、そこで未だ年若き貴女の事で御座いましたが、夜會にでも行く樣な心持で、大層美しく着飾つて病院に參りまして、院長に其の次第を申しますと、院長は花の樣に美しく星の如く輝いた其有樣を、つくづくながめまして「傷病兵の看護とやそれより獨逸語の文典を研究し給へ」と申しましたので、其貴女は熱心に看護いたしたき旨を述べて賴みますと、院長は貴女はそれ程迄に熱心に看護のわざに從事いたし度と申されるか然らば余と共に庖厨に來りて芋の皮むきを手傳へ給へ」と呆然とたゝずむ貴女の手を把つて庖厨に行き、手づからお芋を取つて皮をむきながら、貴女に向ひ、さて貴女よ御身若し余が示す如く常に行ひ給はゞ御身が未來の良人は幸福なるべし、いざ歸りて衣服を改め、再び歸り來つて庖厨の働き手を貸し給へ」と戒しめられました、之れはウヰルヒヨー博士の女子教育觀で、女子は交際場裡に濶歩するよりも靜かに家にありて其本分を全ふせよと云ふ事なので、私共も此物語より尠からず教訓を受けるので御座います。

四十年以前の女子と今日の女子とを比較いたしまする

と、凡ての方面に於て著るしい相違が御座います、深窓に閉ぢこもつて五六疊の室を其世界とし詩管絃の道に餘念なく、辿り行くを唯一の樂しみといたして居りました婦人は、文明の恵を受けて今は社會の一員と認められ、廣い〳〵天地に活動するの自由を與られるやうになりまして、從つて因循姑息の弊風もだん〳〵薄いで、快活の空氣が湧き出る樣になりましたのは實に嬉しい事で御座います、然るに凡てに權衡を保すと申す事は、實に出來難い事で御座いまして、一方に高丘があれば他方に幽谷のあるのは免がれぬもので、昔の弊風が少しく匡正されたかと思ふと同時に固有の美點までも失ふと云ふ樣な次第で世の識者が慨嘆されるのも無理では御座いません、誠に文明の教育を受け、また薫陶されつゝある私共女子學生の氣風は如何で御座いませうか、其天性たる柔順、温和、優美、靜淑なる婦德は發揮されずして、却て傲慢、虚榮の念が盛になつて參りまして徒らに理論に走り空想に駈られ勞働を厭ひて實際に遠ざかり行く樣な傾が御座います、

多くの女子學生は一國の君主なる女王ビクトリヤを賞賛いたしまして、其家庭に於ける女王でありし事を忘れて居ります、交際場裡の花たるジヨセフキン后を欽慕して愛情細やかに淑德稀なるボナパート家の王なるジヨセツキンを知らないので御座います、試に數人の學生が集まりまして其先輩の評をいたし居ります事に耳を傾けますならば必ず思ひ半に過ぐる者が御座いませう彼等が所謂成功の人とは如何なる人で御座いませうか、富豪の家に嫁ぎ美衣美食を專らにし、或は權門の主婦となつて交際界に星よ花よとうたはれる人或は教育界の重鎭として社會の名譽を双肩に荷ふ人、或は藝術界に錚々の名を博する人々でありまして、人知れず世の不遇者の慰籍となり伴侶となつて、平和の小天地を作る人或は名もなき家に其天職をいそしみ、眞に人性の美を味ふ人々は失敗者として口にも出しません、私共は人生の勝利者は果して何れにあるか存じませんが兎も角も今日の學生の多くは滿々たる虚榮心に翻弄されて居ります事は慥かで御座います、高等の

學問も美術も之れ唯だ其虛榮心を喜ばせる道具であつて之によつて常識を養ひ品位を高め趣味を養ふと云ふ樣な事に餘り頓着されない事は寒心いたすべき次第であらうと思ひます。

私共婦人の使命は何であるか、茲に喋々する必要も御座いません、私共は内より其働を始めて外に及ぼすので御座います、近頃婦人間に活動〳〵と云ふ聲が盛にとなへらるゝ樣で御座いますが、活動の意義を誤まらない樣にいたさなければなりません、勿論教育界に社會事業に實業界に一身を捧げて居らるゝ婦人方の活動はまことに美々しいもので御座いますが、靜かに其子女の養育に心を碎き家庭の平和を計らん爲めに誠意誠實を以て働く人も慥かに活ける仕事をして居らるる婦人であると思ひます、花々しき仕事のみか活動では御座いません、曾つてある學生が其友の粗大な手を見て炊事のいやしきわざなるを嘲笑いたしまして校長なる人より非常に教戒を與られました事が御座いましたが、今日の女子學生の中には其手指を美はしく保たんが爲めに炊事洗濯等をいたす事を厭ひ、且つまたいやしき者のなすわざの樣に心得て居りますが、之れは大なる心得違へで斯樣なる事が女子教育上の妨の一つとなるので御座いますから、先生のお芋の皮とりは實に肝要な教訓で實に一家を能く整理し得る人は慥かに社會に立つて活動し得らるゝ人で御座います、私共は私共を斯かる弊風に陷らしむる虛僞、虛榮、虛飾、斯樣なる輕浮なる念を捨てゝ着實なる眞面白なる婦德の涵養につとめなければなりません、公園に咲き亂れて衆人に愛でらるゝ紅の薔薇のみは花では御座いません、人跡もなき深山に笑める一輪の白百合も同じ自然の懷にいだかれて匂ふ花で却々床しい面影を人の心に殘します。

○婦人は風俗を作り、風俗は國民を作る、國民の良否は實に婦人の良否に因るなり。

○女子は猶ほ田圃の如し、田圃沃土ならんか、之れに產せる菜穀の品質優等なるや言を俟たず。

新春三題

杉浦翠子

門松

オーロラの車とゞろと明けゆく空を、縫ふて飛び交ふ鴉は金色の征矢を浴びて、天使のやう、明を告ぐる其の一聲に、世は燦々とオレンヂの帳啓けて、四十一年の嬰兒は生れ出でぬ。

千代田の城の初日影、御稜輝く帝都千五百の衢は門松に日の御旗に綠門に幔幕に、所狹きまで飾られて、風や光るかとばかりの大路小路は、九重に拜賀の武官文官の大禮服の燦たる金裝と、ともに轆轢たる車馬の軋や、駿馬の嘶き、金鞍の閃めきて、實に明治の御代の街のさまとぞ思ひ見るを、おかしくも萬歳の烏帽子冠ぎて直垂姿のゆう〳〵とねりゆくもありて、其の對照の奇も新年ならでは見られぬ樣とぞ思はれぬ。

一歩を爭ふ文明の世は、年と共にまた新まりて、何事も古きを棄つる進歩なるに、門松の飾り、屠蘇の祝ひ羽子の遊びの流行もなく、進化もなくて今も猶昔のまゝなるも尊く、あはれいつの世より定められたる習慣や、齡久しき門松は產聲あげて、兒のやうなるこの年の生立ちをことほぎてか、綠つやゝかなるも嬉し。いくそかみより生れ出でゝ、何いつまで生き延ぶるか終焉しらざる門松見れば、元祿の昔、天平の昔。はた、遠き神代の、新春のさま忍ばれて、その翠黛に、遷り變る、歷史聞かまほしくも思はれぬ。

門々の松や流石に昔ぶり　餘力

歌留多遊び

床には花鳥の二幅對、探幽が筆の跡は蓬萊の圖、丹青の妙を凝したるが掛りて、眞中には五葉の松に寒菊の根じめ、古流の活けぶり見事なるが据えられたり。

白木の三寶に恭々しき鏡餅に添へたる橙の黃、裏白がくれになつかしく、ゆづり葉、ほんだわらの色も靑々と春や目出度き床飾りかな。

今しもこの十疊の廣間は眩ゆき電燈を圍みて歌留多

遊びに集ひたる人二十人、讀み役の母上は上座の方にひとり火鉢を擁して聲高く讀み給へば、ハイ〳〵と敏捷なる掛聲の細き聲と太き聲とゝもに、白魚にダイヤモンドの御指や骨ぶし逞ましき腕が入り亂れて勝たるよ、負けじと競ふ心の外何の餘念もなし。

　達雄の君はいつの間にか、袴脱ぎて腕まくりの陣構へ、鎧の糸ならねど袖口の綻びも知らぬ顔なるを、春子の君が、たゞ笑みしが、氣付きたるやう己が鬢のほつれ搔ぎ上げぬ、雪白のかいなにハラハラと紅の袖口急がはしきまで働ある一騎當千の君は



またしてもその振袖もて傍の歌留多札、並べあるを亂して、姉樣厭よと妹の君に呟やかれぬ、茶菓の仕度にと母上立ちたまひし其間に代りて讀みたまふ父上の「こひすてふ我名はまだき立ちにけり人こそ知らねかはくひまなし」、など僞よみ給ふが五十路の君の愛嬌かや、其折ごとに哄と笑ひどよめきぬ父上も今宵はほろ醉ひ機嫌なるべし白髮交りの御髯の長きも目出度く、御頬もつや〳〵し。

　華燈の灯かげに、春の神ひそみて、寵兒の興ずる樣見ておはすか、春や今宵、やなぎ櫻をこきませて、殿

方も姫君もけじめなく、打解けたる樂しさ、ブローチの君、チキタイの君、銀燭のもとに輝きて、リボンの蝶やひら／＼と、火鉢のあたり陽炎もえて、頬や額の火照やう、春の氣はこの廣間に滿ち渡りぬ。

さても樂しき、歌留多遊びよ、實に今宵は一刻千金の價あるべし、若き人々の笑まひ顏、丹花の唇に洩れて花の綻ぶやうに美しきかな。

蓬萊の一間あかるし歌がるた　子規

梅

山も眠り水も涸れて、色もなく香もなくて、萬象死したる如く、世は嚴冬の寒さに封せられて、人は寂寞に飽くこと久し。

大寒の關も越えて、暦を見れば節分も間近く、ひたすらに春立つ空、待たるゝ折しも、今朝北窓の隙より吹き入る風の光ならぬ香するに、何とはなしに長く閉されたる板戸引き明くれば、嬉しきかも、軒に高き老梅の南枝に綻び初めたる二三輪、黄金の蕊を擁したる白銀の花瓣や、一つ二つと數へて見れば十を越す花の數の、あはれ萬花に魁て春告げ顏なる裝の、いみじくともなつかしくも思はれて、今幾日たゝば春や來つるとうら枯れの庭、とこう見れば、こはそもいかにかなたの若木にも枝にあまたなる花の蕾、未だ花瓣開きて香を放たずとも、ふくよかなる蕾の幽なる色含めるがこよなく愛らしくて、あはれこの蕾笑まば、香や如何にと稚子の生ひ立ち見るやうに、そゞろ東風の誘ひ音づるゝを待たしむ。

鶯も何時か來啼かん、冬枯れの色なき庭も、この二本に彩どられて嬉しくも、春めきにけるかな。

二本の梅に遲速を愛すかな　蕪村

歌留多に勝つ法

× × ×

「常磐なる松の翠も春來れば今一しほの、色まさりけり」。門松の翠も實に一しほに、注連飾り淸らけく、旭旗の紅千戸萬戸の春風に飜つて、今日は太陽が鶴も遊べや龜も踊れやと千萬の數を盡して出て軒毎に懸つて

ゐるやう、その晴々しさ賑かさ嬉しさに安坐としては居られぬ凧揚げ鞠つき追羽子遣羽子、さてはお屠蘇にお雜煮に双六に福引にのさゞめき賑ひ。これを見てどうして私一人默つて引込んでをられませうぞと、罷り出でたる歌留多必勝法。そも此の歌留多と申すものは昔小倉の山莊の襖に藤原定家の卿が張らしめ給ひし百首の歌を……などゝ百人一首の講釋は樂しき春の時間塞げ、いづれ春の日永に讓りましてと、直ちに本文に取懸りますが、何と言つても春の娛樂の第一は歌留多遊び、無邪氣で優雅で陽氣で團欒的で、これほど初春に相應しい面白い遊びはございません。論より證據よ双六福引、さては鞠つき家族合せでは、夜明したといふ例は、神武以來聞きませんが、こちの百人一首では面白くて〳〵夢中で夜明しすることも往々ある程ですエヘン〳〵と咳二つ致してさて申す事は、

歌の覺え方

何事も稽古が肝腎。歌をよく記憶る事が何よりも先までございます。處が其記憶方法といつぱ。

（イ）下の句を見て直ぐに上の句を思ひ出す樣に

（ロ）上の句の初め二三文字か五文字を聞けば直ぐに下の句を思ひ出す樣に

まづこれが必要で、（イ）の方は自分の歌留多を並べる時に役に立ちます。即ち「秋の田のかりほの庵」、「足曳の山鳥の尾」などと、アで始まるものは皆一處に並べるのがよいのですが、その時下の句を一寸見れば直ぐに上の句を思ひ出してアの部へ並べられる樣にならねばいけません。かういふ風に並べておけば傍見をしてゐても手が直ぐに其處へ行きます。ですからあつといふ間に直き取つて了へるのです。却々人に取られる樣な事はありません。（ロ）の方は愈々取るといふ場合に必要で、上の句を讀み初めるとすぐ取つて了ふにはこれが必要。それには猶、

（ハ）アで始まる歌が十六、イが三つ、オが七つといふ樣に

これを覺えておくのが秘訣です。さうすれば「今來ん」「いにしへの」は既う出たと知つてゐれば、後は一枚

明治四十一年

お伽界の大發展

（小波山人の大活動）

明治文壇空前の大作と傳へられたる、我が小波山人の世界お伽噺は、創刊以來茲に十個年を閲みして、滿天下の喝采聲裡に、全部一百卷を完成するに至れり、而も編者が精力と材料とは、決して之が爲に盡きたりとせず、否、更に筆硯を新にして、進んで第二期の大發展を試みんとす、聞けその新計畫を！一を『世界お伽噺』の後身としてより面白く、より奥深き、

●世界お伽文庫

毎月一回發行 菊判頗美本 紙數百餘頁 挿畫木版二十個入

正價一册 金拾三錢

とし、他を『幼年書報』の弟分として、よりあどけなく、より美しき

●お伽畫帖

毎月二回發行 四六判頗美本 極彩色石版十六頁

正價一册 金六錢

なりとす、蓋し前者は、世界お伽噺に比して、體裁更に美に、紙數更に多く、價は僅に之が倍額に過ぎざるも、興味は之に幾倍するを知らず、後者は又之に反して、形と價は幼年書報に半ばすと雖、其實質に至ては、毫も差あるを認め難し、而して共に小波山人が、例の獨特の快腕を揮つて、趣味と實益とを等分に調劑せるもの、新日本の少年少女が、坐右に缺くべからざるの良籍、此の二書を措いて他にあらんや、且又本館は、此度世界お伽噺完成を祝して、特に之が紀念の爲に、製本に意匠を凝らせる

●合本世界お伽噺

クロース製美本全部十卷

を發行せんとす、思ふに是れ、家庭書庫の好裝飾、將た賞品進物の好材料として、優美に又有益なるもの他に比あるを見ざらんとす、尚發行方法に付ては他日を期して更に細説せん。

販賣用電話 本局二六二〇　發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館　振替貯金口座 第二百四十番

女（其の二）

博文館雑誌 大福引 景品付 注文券發行

一 本館發行雜誌中一種若くは數種を併せ一圓以上前金拂込み御注文の向へは以下の規定に從ひ抽籤に依り左記（第七項）の景品を贈呈すべし

二 本館雜誌前金表は第九項に掲載の通りとす、尙本誌に添付せる新年號割引券を添ふる時は其規定の割引を爲すべし

三 御注文は下記の切取箋へ指定の記入を爲し代金を添へ直接本館へ申込まるゝも又は各地本館圖書雜誌販賣店へ申込まるゝも隨意たること

但し販賣店に御申込み分に對しては雜誌送達等の事は其販賣店にて責を負ひ申すべき事

四 販賣店は前項の拂込みを受けたる時は其店名を署し直ちに本館へ送付すべきこと

五 本館は注文券受領の順序に依り直接御申込と販賣店經由とを問はず左の割合に依り抽籤番號を直接に御本

（切取線）

▲大福引注文券▼

雜誌名及拂込前金額	
一（雜誌名）	冊分 此前金 圓 錢 厘
一（雜誌名）	冊分 此前金 圓 錢 厘
	計金 圓 錢 厘
申込者 住所	國 郡 町村
氏名	（御氏名）
取次店名	

女（上の三）

人へ御通知申上ぐべし

一金壹圓以上の拂込みの方へ　抽籤番號數　一個

一金參圓以上の拂込みの方に　同　上　二個

一金五圓以上の拂込みの方に　同　上　三個

右番號通知書は追て次項の當籤番號發表まで御保存置き相成りたき事

六　三月上旬本館に於て嚴正なる抽籤を執行し第一の抽籤に當籤したるものを一等とし以下此順序に依り當籤者を定め第七項の景品を贈呈すべし

但し抽籤の結果は三月十五日以後の各雜誌に於て發表し同時に當籤者に景品を發送すべし

七　景品の金額、等級は左の如し

總金額貳千五百圓……壹千五百本

但し申込數五萬として定む仍て申込の多少により比例を以て增減すべし

▲一等　金五拾圓（本館圖書切符）十本…五百圓

▲二等　金貳拾圓（同）二十本…四百圓

▲三等　金拾圓（同）三十本…三百圓

▲四等　金五圓（同）四十本…二百圓

▲五等　金二圓（本館圖書切符）百本…貳百圓

▲六等　金一圓（同）五百本…五百圓

▲七等　金五拾錢（同）八百本…四百圓

（注意）當籤書引れば全國共通とし各地の販賣店にて圖書引換に應じ申し候

（切　取　線）

注意

◎本福引は本館發行雜誌注文に限るものにして圖書には適用せず

◎〆切は二月末日限りとして其後の御申込は斷然御斷り申べくに付御注意ありたし

博文館

東京日本橋區本町三丁目

振替貯金口座第二百四十番

八　申込みの〆切は……………來る二月末日とす

九　各雜誌前金表は左の如し（但し振替にて送金なさる向は必ず注文冊數に相當する郵税合算御送金の事 但し東京市内は太陽一册に付一錢五厘其外凡て一錢の遞送賃合算の事）

	（半ヶ年分）	（一ヶ年分）	
●太陽	八冊前金二圓二十錢	十六冊前金四圓廿錢	▲郵税一册金三錢
●商工世界太平洋	十二冊前金一圓卅五錢	廿四冊前金二圓六十錢	▲同金一錢五厘
●文藝倶樂部	八冊前金一圓八十錢	十六冊前金三圓五十錢	▲同金二錢五厘
●中學世界	八冊前金一圓四十五錢	十六冊前金二圓八十錢	▲同金二錢
●女學世界	八冊前金一圓四十五錢	十六冊前金二圓八十錢	▲同金二錢
●文章世界	八冊前金一圓四十五錢	十六冊前金二圓八十錢	▲同金二錢
●少年世界	八冊前金七十五錢	十六冊前金一圓四十錢	▲同金一錢五厘
●少女世界	八冊前金七十五錢	十六冊前金一圓四十錢	▲同金一錢
●實業少年	八冊前金七十五錢	十六冊前金一圓四十錢	▲同金一錢五厘
●幼年畫報	八冊前金七十五錢	十六冊前金一圓四十錢	▲同金五厘
●英語世界	六冊前金五十六錢	十二冊前金一圓十錢	▲同金一錢
●數學世界	六冊前金八十五錢	十二冊前金一圓六十五錢	▲同金一錢五厘
●農業世界	八冊前金一圓四十五錢	十六冊前金二圓八十錢	▲同金二錢
●冒險世界	六冊前金八十五錢	十二冊前金一圓六十五錢	▲同金一錢五厘
●[illegible]旅行案内	六冊前金五十錢	十二冊前金九十八錢	▲同金一錢五厘

（女六よの五）

醫學士　石原喜久太郎君著

新編家庭衛生

近日發行

全一册

洋裝菊判美本
紙數五百五十頁

石原醫學士は醫科大學衛生學教室に在りて斯學の研究に從事すること玆に多年、傍ら或は演壇に或は諸雜誌に、衛生思想の鼓吹普及に努力せらるゝは人の知る所、近者掲題の一書を完成して之を本館に授く、著者本書の目的として記する所を見るに『一國の衛生を進めんと欲せば先づ一家の衛生を進むべし、一家の衛生を進めんには、家事の實行者たる主婦に衛生思想を鼓吹普及するに如くはなし』と、是れ本書の生れたる所以なるべし。

本書の前篇『諸論之部』は衛生に關する汎論にして、後篇『各論之部』は○住居之衛生○衣服と飲食物○季候と衛生○旅行と轉地○小兒○姙娠と產蓐○病氣の七章よりなり、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して細大漏さず、殊に行文は平易通俗、論者は實地應用を主とし、叙事明晰、說明懇到、高尚なる學理をも雜澁なく說示する底の面目は、確かに多年の薀蓄深きを窺るに足る、之を家庭に備ふれば一家衛生の良指針たり加ふるに又、醫師、醫學生の良友、諸學校衛生教科の參考書たるに適すべし

販賣用電話本局
二千六百廿番

發兌元　東京本町　博文館

女(よの六)

大日本製糖株式會社
第廿四回決算報告

貸借對照表

負債

株金	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
法定積立金	七八六、九〇〇・〇〇〇
別途積立金	八一三、一〇〇・〇〇〇
社債	三、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
未拂配當金	七四〇・五七〇
仕拂手形	九、〇九八、六六四・二七〇
未拂勘定	二三七、七六四・一七〇
諸預り金勘定	三、二九四、〇七五・〇三一
未納税金	五・一〇一、四六七・五四〇
社員及職工積金	二四、八四五・二一〇
前期繰越金	二〇、三八三・五五三
當半期利益金	七九三、五〇二・六六二
合計	三五、一七一、四四三・〇八六

資產

未拂込株金	四、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
大里工場	六、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
地所	五〇九、八四〇・四八〇
建物	一、一三七、二七三・六二〇
機械	二、四一一、八四三・八三〇
什器	一四、八四二・二一〇
船舶	三五、〇〇〇・〇〇〇
原料糖在高	一、二四八、九四三・二六〇
賣約済及賣約未済商品在高	六、一六八、一七〇・七〇〇
工場仕掛品	一四八、九四三・〇二〇
工場用品在高	四五八、四一九・五四〇
原料關税假納金	六四一、八八四・三〇〇
工場増築假拂勘定	四二一、五〇一・七五〇
臺灣工場起業費	一、二三五、七〇六・五六〇
假拂勘定	一三〇、一三九・四四〇
債權	七七、八二二・九七〇
所有及借入有價證券	三、八六五、九七六・一〇〇
受取手形	二五四五、六五七・四八〇
預金勘定	三、〇九七、七八九・三〇〇
現金	二一、六八七・五二六
合計	三五、一七一、四四三・〇八六

財產目錄は前記貸借對照表資產の部と同一に付略す

前記利益金を處分すること左の如し

一金七拾九萬參千五百貳圓六拾六錢貳厘　當半期利益金

內

一金五萬五千五百四拾五圓　役員及社員賞與

差引

一金七拾參萬七千九百五拾七圓六拾六錢貳厘　當半期純益金

一貳萬參百八拾參圓五拾五錢參厘　前期繰越金

合計金七拾五萬八千參百四拾壹圓貳拾壹錢五厘

內

金五萬圓　法定積立金

金五萬圓　別途積立金

金五拾六萬貳千五百圓(年一割五分)　配當金

金九萬參千七百五拾圓(年二分五厘)　特別配當金

金貳千九十壹圓貳拾壹錢五厘　後期繰越金

右は明治四十年五月一日より明治四十年十月三十一日に至る實際報告前書之通に御座候也

明治四十年十月

大日本製糖株式會社

相談役　男爵　澁澤榮一
取締役社長　農學博士　酒勾常明
專務取締役　磯村音介
常務取締役　秋山一裕
常務取締役　高津久右衛門
取締役　中村清藏
同　伊藤茂七
同　馬越恭平
同　渡邊福三郎
同　前田龜之助

右監査を遂げ其正確なるを保證候也

監査役　福川忠平
同　恒川新助
同　藤本清兵衛

監査役任期滿了に付之が選擧を行ひしに福川忠平恒川新助藤本清兵衛の三氏再選就任せられたり

女(よの七)

きりだから「今はたゞ」の時にはイといふ聲を聞けば直ぐ取れる、愉快ぢやありませんか、但し「あさぼらけ」などは二枚あるから注意せねばなりません。

札の並べ方

これが又大切です、前に鳥渡申した通りアの部イの部ウの部といふ樣に、

(イ)アイウエオの順で並べるのが一番です。つまり自分に直ぐ分るやうに、分類して一定の順序に並べるのですけれど、いろは順や又下の句の「人」「戀」「花」といふ字などで並べるのより一番アイウエオ順がよい、即ち上の句のアで始まるものイで始まるものを其の順序に並べるのです、然しながら



(ロ)一枚物即ち「ほとゝぎす」「めぐりあひて」などは、五十音順に拘はらず別に隅の方へでもおく。又特にお得意の札と特に取り惡い札も別にしたりするは適宜です。又、

(ハ)時々變へることが必要。敵に知られて了つては困りますから、右から

のを左からにしたりなどして變へるのです。そして並べるについて、

（ニ）縦と幅

も考へ物、然しこれは其の人々の適宜で直ぐ極められます。さて愈、

札の取り方

まづ一人二十枚前後がいゝ處です。札を各自並べて了ふ。いざとなる。讀手が歌を一首——百人一首中のでも其他の歌でも——を一度卒讀をする。歌一首を一度だけ讀むのです。相撲の行司が團扇を二人の間へ入れて「見合つて〳〵」といふ樣なものです。いはゞ氣合を懸けるやうなもの。讀み了る——即ち團扇をさつと揚げる。皆一生懸命です。上手な連中になると、上の句を五文字讀むか讀まぬに、有りましたの懸聲ーそれは面白いとも愉快とも譬へやうがありません。さて取り方に於て注意すべきは、

（イ）旣に出た札を覺えておくこと

さうすれば前に申す樣に、カは旣う一枚きりと知つてゐる、そこへ「かくとだに」が出るカと聞けば、電光石火！すぐに取つて了ふ。その愉快さはありません。さうして、

（ロ）お手附の送り方

があります。外でもない、自分のごくお得意の札を送るのです。（無論この頃は一枚送るのですが）さうしておくと今度出た時に對手のを取つてやることが出來る。こゝに、

（ハ）秘訣

は、取り初めに注意して、對手のを二三枚取つてやることです。互角の勝負をするいゝ相手の時は、かうするが良策で、すると對手が怖ぢけて來て大層此方か優勢になります。ずつと上手や下手に向つては用ふべき手段でありませんが……。ですが、

（ニ）練習が最後の秘訣

です。方法だけ呑込んでも、手が敏活に働かねばだめなる事勿論です。面白いのは上り際二三枚といふ處、皆指に——人指指と中指の二本ですが——調子を付け

て恁う絶えずせゝるやうに手を動かしながら、もう夢中になつてゐます。殆ど神經的に手が働く位なものです、源平の時の終ひ際などは、敵味方の手が七八本も一時に閃くやうな事があります。もう然ういふ刹那には天地間何物もありません。全精神が火のやうに歌留多の上に燃えてゐるのです。這麼面白味は恐らく外には無からうと思はれます。さてかるたは何なのを用ひてよいか、それはいろ／＼お好みもありませうが、一番手入らずは本誌の附錄です、これは附錄の裏へ同じ版の厚紙を二枚位重ねて糊で裏打をした上、乾いた頃、定木を當てゝ鋭利なる庖刀（疊庖丁の類）で截ち切るのです、その截り方は、まづ縦に十五に切り、それを又横に七つに切るのでムいます。



おやりなさい、盛んにおやりなさい、這麼無邪氣な面白い遊びが外にあるものですか。春ですよ、春ですよ、世は新玉の春ですよ。一つ盛んに歌留多を取つて新年の元氣を揮はうではありませんか。

庖厨

正月料理

（鴨五種の調理法）

龜井まき子

毎年何處のお家でも、年暮から年首へかけると、鴨の到來ものが多い事ですから、從つて其調理法にお困りなさる方もないとは、限りませんから、今回は、鴨の調理法を申上ませう、これは、年首の來客に出せるやうな、調理ですから、簡短な製法が多う御座い升から、是丈が鴨料理かと思しめさないやうに願升。

一吸物　鴨切身　海苔
　土佐醤油　口柚
一鴨ガランデー
一甘煮　鴨團子　うど　あげぐわゐ
一酢の物　鴨おろしあひ
一燒肴　鴨鎌倉燒　揃小松菜けしかけ　筆生姜

吸物　此吸物の種の、鴨の切身といふのは、鴨を拵へて、薄くきり、醤油につけて置のです、其醤油はやうやう被る位でなければいけませぬ。鴨の肉が泳ぐやうに、醤油澤山では味が抜ます、さうして今申したやうに、醤油を少しでつけて置、時々上と下へかへすのです、かやうにして置升と、四五日おいても、さほど味はかはりません、夫から此切身を椀へ入れ、土佐醤油を、一滴ほどかけて、沸湯を注ぎ升と、自然とよいお吸物が出來升、其上へ海苔をよくやいて、揉みてかけ柚をあらつて、一寸そいで入れて、椀の蓋をして、出すのです。

土佐醤油の製法は、鰹節を削り、猪口に一杯、けづつた鰹節があるとすれば、醤油も矢張、同じ猪口に一杯丈の分量で、よく煮て、新らしい布巾で、この煮汁を搾るのです、そこで、鰹節と醤油を煮たのですから、

出しもきいて、醬油もきいてゐますから、ほんの一滴でも、大層味が出るのです、此土佐醬油を、年末にこしらへておいて、前申したやうに、鴨の切身を入れますと、即席によいお吸物が出來升、此土佐醬油は暖ひ日でも十日位はもち升。

鴨ガランテー これは鴨をこしらへ升のに、まづ毛をひき、毛やきをして、兩翼と兩足をきり、頸から背へ庖刀を入れて、皮のついたまゝの肉を、骨よりはがして、頸をきり、胃袋をぬき、兩肩へ庖刀を入れて肩から腹へかけた肉をはがし、兩腿の骨の番ひをきつて、腿の肉をはがして、全く頸から胴へかけての骨と、肉のついた皮との、緣をたち、夫から肩の骨と、足の骨をぬいて、此肉の上へ、鹽胡椒をふつて置のです、夫から牛肉と、豚肉を、三十匁づゝ、よくたゝき擂鉢に入れて、よくあたり、鹽胡椒と、ジャガ芋一個を、鹽ゆでとして、うらごしゝたのを入れて、よくませ合せて、皮つきの肉の中へ入れ、皮と皮とを糸で縫ひつけて、天火かストーブをお持ちの家では、天皿へ、ぬい合せた所を、下にして上にバタをのせ、又ヘットをものせて燒くのです、天火は上火をつよく下火を弱くして燒くのです、又天火等のないお家では、此ぬひ合せた丸い肉を布巾でよくつゝみて、兩端をしばつて、鍋へ湯を入れて、茹でるのです、燒くのは、凡一時間位、又茹でるのも、一時間位でよろしう御座い升さめてから切るのです、又皿へつけたら、ウスタソースを掛るのです、これは拵へておいて、二三日たつても、さしつかへはありません。

甘煮 鴨の肉をよく、たゝきまして、煮切と醬油を、極少々入れて、丸め、又鍋に味醂一杯、醬油一杯(即同分量の事です)を煮立て、此中へ前の丸めた肉を入れて、煮るので御座い升。

うど、は沸湯の中へ、水洗ひして、半分位に切つたのを入れ、皮をむき、一寸位にきり、味淋と醬油と、同割にして入れてある鍋を、火にかけ、煮立ちましたらうどを入れ、ざつと煮て、笊にあげ、汁をよく〳〵煮つめて、又前のうどをころがして、出すのです。

慈姑は、皮をむいておろし、鹽を少々入れて、小さく丸め鍋に胡麻油を煮立て、これを入れ、あげて笊に入れ、沸湯を上よりかけ、別に煮出しと、砂糖と、醤油を、煮立てたる汁に入れ、一時間もたちてから盛のです、分量は慈姑五合を卸ろして、あげたものを、つける、汁は煮出し二合に、砂糖十五匁、醤油五勺位でよろしう御座いませう。

酢の物 鴨を薄く、細かにきり、鹽をふつて、一時間もおき、沸湯にてざつと茹でゝ置くのです、又大根の皮をむき、おろして、水氣をかたく搾り、酢につけて一時間もおき、又酢氣をしぼりまして、鴨とまぜ合せ上に味淋一合を、五勺に煮つめ、酢を二勺と、醤油少し入れて、まぜたるを、鴨と大根おろしとまぜ合して皿へもつた上にかけるのです。

燒汁 鴨の肉を、薄くきり、醤油と、味淋と、同量をよく煮つめて、さました汁の中へ、つけて置き、お客が見へた時に、これを出して、金網でやき、上に胡椒を、一寸ふつて、皿へもるのです、此附け合せに、小松菜をゆで、葉と莖とを、互ひ違ひにそろへ、丸く束ねて、長さ五分位にきり、醤油をかけ、罌粟をあらひて、炒たのを切り口につけて盛るのです、これは小松菜は、ゆでゝおいても、水さへ代へれば、三四日は、もつものですから、至急の間に合ふやうに、こんなものを、附け合せにしたのです、又鴨はつけておきますと、四五日はもちますから、これも年首の、調理として、申したので御座い升、筆生姜はもやし生姜の根を筆の先のやうに、拵らへて、根を沸湯で、一寸茹でゝ鹽酢につけるのです、これも四五日置いても、差支は御座いません。

◎酢蛸の拵へ方

蛸を目笊に入れしまゝ水の中へ入れ目笊を揺り動かして能く洗ひ、水を切りおきて沸騰湯の中へ投じ、ザツト湯煮し(中熟加減にして目笊にあげ水を切り、鹽酢にて洗ひ皿に盛り、食するときに二杯酢を掛け、おろし生姜を添へて食すべし、鹽酢は生酢に少しく生醤油を加へしもの又二杯酢一合に生醤油を凡そ一勺程を合せしものなり。

新年の膳部

◎食摘の古式

食摘といふこと古來の仕來りなるがこれは蓬萊かざりともいひ、新年の床飾にて時に來客にもすゝむるものなり、むかしより貴賤を問はず新年の始めとして一家打寄りて行ひたる儀式なり、さて其飾附は國々によりて多少の相違はあれど、まづ三寶に奉書紙を敷きて其上に白米を山盛にして上に橙、海老、周圍には、乾栗、榧の實、干柿、神馬藻、昆布など種々の物を盛りて備へたるものなり、そも〳〵此の種々なる物の中には滋養あるもの又は藥種に用ふべきものを含むが故にこれを取ませて食せば一家の者の壽長からんとの延壽なり。

◎雜煮のこしらへ方

さて拵へ方は國々の風習によりて多少の相違はあれども、一般に餅は一家の和合を形造りて祝ふものなれば、丸形をよしとす、又汁は甘味噌汁、鰹魚煮汁、昆布煮汁にするものあり、總じて雜煮にするは、生餅にても燒餅にてもあまり、大ならぬをよしとす、餅を大皿又は大鉢の片わきに盛り、一方にあしらひ物を盛り臺にのせ、汁を入れたる鍋を火地輪の上におき、いづれも客の前に持出し、拵へながら椀に盛りてすゝむ、そのあしらひ物は土地によりていろ〳〵風習、好みもあれどまづ大要左のごときものなるべし。

(一)鳥類、ちくわ、糸蒟蒻、蕪、にんじん、鹽松茸、芋、みつ葉、

(二)燒肉の類、又は一と鹽の魚肉、菜、牛蒡、大根、昆布、つと豆腐、

(三)かまぼこ、貝の柱、(又は貝類、)椎茸、くわゐ、芹、燒豆腐、

(四)するめ、昆布、菜、蕪、芋、干海老、白干魚、乾苔、其他何品にてもあしらひにしてよし。

◎雜煮あしらひ物の拵へ方

野菜類は大方湯がくべし、鳥及び肉類は燒、又は一寸湯がくか、又は生のまゝにてもよし、するめは前日

灰水に浸し、柔かになりたるものを短册切にし、魚類は長四角に切り、燒くべきは燒き、一と鹽のものは一寸湯がくべし、竹輪、蒲鉾、又は貝類は別に湯がくには及ばず又干海老、白魚干は、暫時水に浸し柔かにすべし、されどあまり長く水に浸さば味を失ふべし。

◎早雜煮の拵へ方

これは切餅を細かく二ッ三ッに切り、常の如く燒きて椀の中へ入れ、其上に花かつを（鰹魚を細かく切りたるもの）白魚干、おぼろ昆布、三ッ葉又は海苔をあぶりて入れ更に醤油を適宜に入れ沸湯を入れて蓋をなし暫時にして食ふべし。

◎口直しの即席雜煮

正月の來客は或は門並にてそれ〳〵式の御馳走を受け、滿腹の者も多かるべければ、是等の客に吸物の代用として出すべき雜煮は、まづ餅を二分か三分四方の賽の目切にして、金網にて焦げぬやうに燒き、椀の中へ五つばかり入れ、あしらひには梅干を包みたる紫蘇を細かに切りて、一摘みほど椀の中へ入れ少しの醤油をさし、その上に沸湯を注ぐべし。

◎正月用の菱餅

通常の白餅を薄く、四寸四方に切り其中へ、味噌餡を入れ、菱形に折り、これを西洋竈にて蒸燒すべし、或は略して金網にて燒くもよし、味噌餡の拵へ方は、白隱元を柔かに煮て裏ごしにかけ、白味噌をよくすりてこれも裏ごしにかけ、味噌一斤に豆一合位の割合によく摺りませ白砂糖を入れて甘くすべし。

◎餅を當分柔かに貯ふる法

これには壺又は飯櫃に入れ布巾を水にてよく搾り上にかぶせて蓋をなし置くべし婦人などは松の内より後れて年首の禮に來るものなれば其時はこの菱餅を一ッ奉書紙を折りたる上にのせ、膳にすへ、箸をつけて、外に重詰の肴を添へて出すべし。

◎正月吸物の拵へ樣

何にても時節の物にて差支なけれど正月は何處にても年のはしめを祝ひて人々御馳走に慣れたる時なればなるべく淡泊にして上品なるものを撰ぶに如かず、今

一月の吸物の二三をあぐれば、

△鴨の肉を薄く切り、骨はよくたゝきて丸め、両方共にざつと薄味をつけ、略しては生のまゝ汁の中に入れて煮てもよし、鹽松茸を縦に薄く切りて鹽出しをなし三つ葉又は芹を一寸位に切り、常の清汁にして吸口には柚子を用ふ、又餅を小く、長四角にきり、一寸焼きて、二つ三つを入るれば雑煮の兼帶ともなるべし。

△貝の柱を洗ひて水をきり、大匙一杯位椀に入れ、すましの煮立ちたるを、かくるなりあしらひにはみつばか、海苔、但し生にて三寸位に切るべし。

△長芋を生にて皮をむき、わさびおろしにて卸し、擂鉢にてよく擂り、清汁の煮立ちたる中へ、杓子にてすくひ入れ、吹きあがりたる時椀に盛り青海苔又は乾山椒の類をかけて出す。

△蛤を貝のまゝ一夜水に浸して砂を吐かせ、鍋に湯を沸立て入れて蓋をなし、殻の開きたるを度とす若し鹽淡くば少々鹽又は醤油をさして加減すべし吸口には款冬のとうをよしとす、胡椒、山椒を用ふ。

◎正月用の貯へ肴いろ〳〵

一月の用意に貯へて置く材料は、年内より貯へ置くあり或は多く調へて備へ置くあり、今其重なるものを擧ぐれば、

△薄板牛蒡の油揚、 これは太き牛蒡を六七寸に切りさつと茹で、薄き竹箆を内肉と眞との間にさしこみて暫時湯の中に入れ置き後下の方より眞を押せば其まゝ逆に抜けて牛蒡は管となり、其管の破れぬ様に味をつけて下煮をし、其中へ魚の擂身を詰こみ、ころもをかけて揚物とし斜目に小口切にするなり、擂身にする魚は何魚にてもよし魚を片身におろし骨を去り、皮を剝き、少し鹽を加へて擂鉢にてよくするなり。

△數の子の粕漬 上等の數子を清水につけ鹽出してよく洗ひ、粕につけ置くべし、四五日にて漬かるなり、客に出す時はあまり多く供すべからず小き皿に四つか五つ位入れて出すべし。

△芥子の巻漬 これは大根又は蕪を極めて薄く輪切にし三四日間干し、芥子を固くねり、前の大根、蕪を引

のばして其中に入れ小指位の太さに卷き昆布にて結び器に入れて三杯酢に浸し置きて取合せとして出すべし三杯酢の按排は大根の吸ひ取る丈にすべし。

△絹卷蕪菁　これは蕪を丸のまゝにて皮を去り、薄く切り、三杯酢につけあげて、中へおろし山葵を入れ小口より卷て刻み昆布を水に浸して帯とす。

△田作の膾　まづ田作の頭を切捨て、ほうろくにてよく炒り、兩手にてよく揉まば二つ割となるこれを湯の中に投じ暫時置きて柔かにして、取出し、別に大根と人參とを膾つきにておろし鹽にてもみてよくしぼり膾の田作を入れ、二杯酢にて交ぜ合すなり。

△鹽鰤の酒づけ　これは鹽鰤の鹽出せざるまゝを水にて洗ひ三枚におろし、皮共に常の刺身よりも少し厚く切り、口の大なるガラス罎又は壺に上酒を一升にザラメ白砂糖半斤ほどの割に入れよくかきまわし置き右の身を金あみにのせ黒こげにならぬやうに燒き、其暖き內順次罎の中に投じ凡そ酒のひた〳〵になるまで一杯に入れ箸にてよく押つけ器の蓋をして目貼をなし置き三片位小皿に盛りて出す。

小兒の感冒と入浴

昨今寒氣俄に加はり、從て小兒の感冒に罹るもの多く、病勢猛烈往々惡性に變じ遂に氣管支炎より、肺炎に變じ易く、一度肺炎となるや十中八九迄快癒は期し難きが故に、世の父母は好く氣を附けて小兒が感冒に罹りたる際は、決して等閑に看過せず、充分なる手當をなさゞれば、取返しの附かぬ不幸に陷ることある可し、一體日本人は頻りに入浴を爲すの風あり、從つて小兒入浴の度數も多く甚だしきは朝夕兩度入浴せしむるものさへあり、元來皮膚軟弱なる小兒の身體を强度の溫熱にて刺戟するは寧ろ有害にして、利益なき次第なれば、成るべく一週二回位に止め、且入浴時は就眠前を以て最も宜しと爲せども、日中ならば冬期は午前十時より十一時までの間、午後一時より二時までを適當とし、入浴の時間は五分乃至十分以上ならざる様注意す可し、東京の婦人が一時間以上も浴槽に身體を曝しつゝあるが如きは、世界に類なき處にして、從て小兒が是等の御附合を爲さしめらるゝは頗る迷惑のことなり、云々とは小兒科專門某科醫學士の談なり。

寒中心得艸

◎寒時に於ける父母の注意

漸々寒氣に向ふに際し子供の凍瘡に就きて世の親々の注意ともなるべきものを錄せん小學校の兒童中には過半中耳の腫れるもの手の腫れるもの足の腫れるもの等の凍瘡患者多きよしなればこゝにその療法一般を記さん。

(一)寒氣甚しきときは、かならず足袋、又は靴下をはかしめ、外に出づるときは、手袋を用ゐしむべし。

(二)濕氣あるもの、又は汚れたるものは、凍瘡を發す原因なれば、決して濕潤りたる足袋、靴下、手袋などを用ゐしむべからず、殊に靴の底に濕潤りたるものを、長くはかさぬやう注意すべし。

(三)外より歸りたるとき、手足が冷たしとて、直に強き火にて、手や足を焙らしむべからず。

(四)毎夜就寢前に良き石鹸と温湯とを以て手足を洗ひ、然る後樟腦五分を「ワセリン」又は單軟膏十匁に混和したるものを、皸、あかぎれ、逆剝などの處へ指にて塗りこみ(衣服を汚さぬ位)て就寢すべし。

(五)やゝ輕度き凍瘡となりたるときは、就寢前に、氷又は雪にて其の局部を、十分間位摩擦りて後、濕氣をよく拭ひ取り、前の油膏藥を薄く塗りて就寢すべし、しかするときは痒みを覺ゆることも、亦少し

(六)凍瘡の潰れたるときは、温湯にて洗ひ、前の油藥を塗れば、治癒ることあれども成るべく醫師の治療を乞ふべし。

◎ひゞあかぎれの豫防

寒風の時に素顔で外出したり、湯水を使つて手を碌に拭かずに振ひ落した限りにして置くやうな不精者ではどんな名藥あつても何にもならぬ、手水を使つた時でも臺所した時でも必らず、よく乾いた手拭を用意して置て其れですつかりと拭き取るが肝要である。女中達などは始終乾燥した手拭を腰から離さぬやうに心掛けて置が好い。

◎晝用と夜用

リスリンも無論好いが、あれはにた〳〵するから晝用ゐると仕事に工合が悪るい、晝はベルツ水か之に似よつた水藥がよろしい、豚脂も好いが、これは腐ることがあるから安息香酸三プロセントかサルチル酸一、〇を入れて置くとそれが防げる、又鷄の脂も大分好いさうである。牛脂も無論善いに違ひない、何でも手易く出來る物を用ゐるが便利である、ウヰルソン氏の軟膏(亞鉛化六、〇安息香酸一、〇豚脂四〇、〇)ワセリンなども効驗がある、以上の諸藥はまだ出來ない内の豫防にもなれば、一旦出來た上の治療ともなる、たゞ水藥は晝、膏藥は夜として置く方が取扱に便利である。

◎あかぎれの藥

わかぎれとなつたらテール一〇、〇に對しアルコール一〇〇、〇の割にしたのを用ひ、それが効かぬ程ひどくなつたらテールを多くアルコールを少く調合したのを用ひ、いよ／＼激甚なつたらテール計りのを用ゆべし、其れからピツク氏の硬膏、眞金膏などもよいであらう。

◎凍瘡の豫防

凍瘡は寒氣の爲め血管に變化が出來て其所に鬱血を起すのです。つまり貧血者や營養の悪るい者、又た坐食睡眠と云て、何にもせずにごろ／＼し、眠いはうだいに眠て居るやうな者には凍瘡は犯し易いとしてある、であるから凍瘡に罹り易い人々は平素よく注意して勉めて手足を動かし、坐つて居る時でも成る可く手を上げ下げしたり揉んだりして血液の循環を善くして置くが好い、豫防なり治療なりの藥としては沃度丁幾を薄く溶かしてそれを塗附て置き、代りにルゴール氏液（沃度一、〇沃度加里二、〇水三〇〇、〇）並に十プロセントのイヒチオールアルコールやカンフル丁幾を用ひても好い。

◎齒の養生

彼の庖丁が使はずに置けば錆を生ずると同じく、齒を使へば使ふ程精潔にして堅固となる、殊に固き物を嚙むに從つて益々淸潔になるので、人は大抵右か左の一方で嚙む癖のあるものだが、嚙まぬ齒が嚙む齒に比べて不潔であるのを見ても、此理屈が分る、如何なる美人でも笑ふ時に八重齒や齲齒が出るのは餘り立派なものでない、然らば如何にすれば良いかと云ふと勉めて口中を淸潔にすることが必要である、齲齒の原因は種々あるが多くは不潔から來るものである、毎朝丁寧に含嗽すべきは云ふ迄もなく、食後は必ず一回口を嗽ぎ、殊に酸味の物や砂糖類を食した後は注意して齒を掃除し置かねばならぬ、重病患者、或は熱病の患者は口中の不潔には注意せざるもの多き故、特に看護者の注意を要する。

齲齒を根治するには齒を拔くか、穴を塡めるかの二つであるが齒を拔くは可成見合すべきことで穴の大ならざる時に先ち塡めるのが良い。

新春遊戯 女の掌

竹貫直人

初春のお慰みとして、手相判斷の秘傳を御傳授いたしませう。根が遊戯のことですから、やれ手の筋が何樣の彼樣の、やれ節の間が長いから何樣の、短かいから彼樣のと、そんな細かい處まで調べて判斷するのではなく、たゞ一寸覗つて見て、そして直ぐと判斷して遊ぶのです。

ですが此判斷の方法は、なか／＼能く當りますので、決して馬鹿には出來ません、これを知つて居りますと、如何に利益になるか知れません。何故と仰有い、將來諸孃が世の中へお出になつて、多くの人に交際をなさる時、此方法でもつて判斷しますと、其人の大凡の性質が分りますから、他に詐されるやうな心配がなく、如何に心丈夫でありませう。

効能書は此位にして置きまして、直樣傳授に取掛ります。

柔かい掌の女

女の掌は男の掌と違つて、先づ大概は柔かいものですが、一體柔かい掌のものは、神經質だとしてあります、左樣でせう女は男よりは神經が鋭敏ですから。

その中でも柔かい掌の女は、想像力に富んで居て、何事にも感じ易くつて、詩人のやうに同情の心が深いとしてあります。

ですから女としては申分ありません、學生なれば一校の模範となり、嫁しては善良なる夫人となり、子を設けては慈愛厚き母たるべき女でせう。

非常に柔かい掌

これは又た餘りに柔か過ぎて劍呑です、神經質も程良ければ、女らしくつて好いものでありますが、非常に柔かい掌のものは、餘り神經質過ぎてヒステリー症に近い女だとしてあります。

自分勝手で、利己主義で、我儘で、怒りつぽくつて、怠けものだらうです。これだけならまだ我慢も出來ますが、始中終悪いことばかり考へて居て、嘘吐で、それが嵩じては泥坊も仕兼ねまじき女だとしてあります、まさかねえ、貴孃！

硬い掌の女

女の掌は先づヤア柔かいものとしてありますのに、硬い掌の人があるでせうか、ありますとも貴孃、水を汲んだり御飯を炊いたりすれば、掌の皮が厚くなつて硬くなるではありませんか。だもんだから皆孃は厭がつて、成るたけお臺所のことなぞは爲ないやうにして居らつしやるぢやありませんか。

けれども手相から云ふと、硬い掌の方が好いのですよ。硬いと云つても程があります、餘り硬いのは女らしくなくつて不可ません、働いて硬くなつたのと、生來硬いのとは際つて見れば分りますから、御心配には及びません。お臺所のことを嫌がつて爲さらんやうなお方の掌は、生來は好い手相のものでも、終には、非常に柔かい掌の女になつて、ヒステリーにでもなるのが落でせう。

判斷が飛んだ横道へ入つて失禮しました。硬い掌の女は、想像力は充分にはありませんけれども、其代り正直なことは請合です。程好い硬さのものは、爲ることが活潑で、少し位辛い仕事でも平氣でやる女だとしてあります。

それから又た、愛情に溺れると云ふやうなことなく、心に確個した處がありますので、自分が可いと信じたことでなければ、情實に動かされて、道理に外れたことを爲るやうな弱い女ではない、眞直なことが好きな女だとしてあります。男でも女でも、斯樣いふ性質のものは一番幸福です。

非常に硬い掌

けれども、何程硬い掌の女の性質は好いと云ひましても、非常に硬い掌の女となつては、これは又た二、三舍

を避けざるを得ません、物事が分らなくつて、同情心が無くつて、随分辛い仕事も平氣でやりますが、其代り人も自分と同じやうに辛棒が出來るかと思つてこき使つて何とも思はない、斯様いふ御主人を持つたらそれこそ災難です。

小さい掌の女

小さくつて、そして皮ばかりで肉の無い、狭い掌の女は、心が至つて狭くつて、臆病で、少し何處か足りない處があるとしてあります。斯様いふ女に能く馬鹿があるものです、馬鹿



で無いまでも、何一つ働きの無い、爲ることに勇氣の無い、不活潑極まる女が多いものです。

厚い掌の女

掌が一體に厚くつて、しかもぶくぶくと柔かい掌の女は、爲ることが總て粗略で、欲張りで、男好きで、箸にも棒にもかゝらない、什様の無い女だとしてあります。

掌は厚いけれども併し一體に縮つて居る女は、これ

は中等社會以下の女に多くある手で、不器用な、誠に働きの無い、何時まで經つても進歩しない相だとしてあります。けれども前の柔かいのより増でせう。

凹んだ掌の女

掌の形が物を貰ふに都合の好いやうに凹んで居るから、そこで手相學者が定めた譯でもありますまいが、斯様いふ掌の女は、無暗に物を貰ひたがるさうです。しかもそれが何時も〳〵成功しない相だとしてあります。何たる因果なことでせう。

それにまた〳〵困ることには、斯様いふ掌の女は、定まつて家内に紛擾を惹起すとしてあります。世の若い殿方に申す、お嫁さんを貰ふには、先づ掌が凹んで居るか居ないかを能く調べてからになさいましと。

初春早々、惡い手相のことばかり云つて、縁喜でもないやうですけれども、實は斯様いふ掌は、餘り澤山無いとのことですから、御安心遊ばしまし。

此他の掌の女は皆な極く好い性質のお方ださうです、これで完了！と申したなら、何故これが新春の遊戯かと、お疑ひなさる方もありませうから、ざつと此遊戯の方法を申上げます。西洋では之を新年會の餘興としてやりますので、一寸握手して、一二三で振り放して、貴孃の手相はこれ〳〵でせうと、一人が云ひ終ります、他の一人が、貴孃の手相はこれ〳〵です、などと云つて遊ぶので、つまり物を判斷する稽古と、人の前で思つたことを判然と云ふ稽古をするのです。お氣に召したら一つ試して御覧なさいませ。

●跡見女學校の擴張

數多女學校の中に著き歴史をもてる跡見女學校は、今回同校出身の有力なる夫人令孃等相謀りて財團法人と爲し、資金十五萬圓を募らんとて舊臘相會して相談會を開きたり、さて當日は千家男を議長とし、島田三郎氏委員を代表して議案の說明を爲し、茲に滿場一致を以て決議したる事項は、委員等の計畫通り資金十五萬圓を募り內八萬圓を建設費として七萬圓を維持費とすることとし、更に一口を百圓となし其の拂込期限は本年より四十五年十二月迄即ち五年間に分納することと爲せり、尤も此の中二萬圓丈は跡見家にて醵する筈にて、之れが募集方法等は追て世上に發表し一般有志者の寄附をも請ふべしと。

美人は何故に多く美男子に嫁せざるか

泊子

常には餘りちよい〳〵顔出しもせぬ男の、此の頃ひよいと風の樣に行つて來た。自體客好きの自分の事とて、直ちに座に請じて早速來意を質問ねると、いや、少々貴女樣に伺ひ度い事があつたんでと、開き直つて堅くなる。ハツ、けどね。此の近邊には之れならば貴君方の御意にも召しませうかつて樣な氣の利いた美しい、

奥樣の候補者

は、から見當りませんですがと笑へば、されはさな、更めて承る迄には及びますまいつさと、つい來年の今頃は學士にもならうと云ふ人の、頬も紅めず俯きもせず、聊かお行儀の能く無い口髯きゆつと捻り上げながら、例の口輕し、扨てはと切り出す。

要は……今日御自分等クラス會席上でもつて、富豪の令嬢と權門の姫君と容色の人並勝れて綺麗な女子と、學術技藝衆に卓越して居る婦人、若しくは德操圓滿にして品行貞正なる女性と、其の中で何れが一番貰て人が多からうかとの問題が不圖持ち上つた處で、例へば、園遊會の垣間見、骨牌會席上、霞の中に仄にも抔と、わざ〳〵先方樣から御出でなすつたのなら、其れや人間は慾の皮のつゝ張つてるものだもの、道理と談しの次第に依つちやあ隨分權門富豪の婿にもなつてやらないものでも無いさ、所謂駙馬の君ともなつて、大臣は愚か公使は愚か、ならば一代の榮華に生味噌の味も覺えて見樣つてつた奴さね、けれど併し、此奴あ眞實く例外でもあり、よし又あり得るとしてからが、婿の振り賣りなんて餘り景氣のいゝ話しじや無からね、我が輩心大に快しとは出來なからうじや無いか、畢竟唯我が輩目指す處は一に、

美人あるのみ

で、何と云つても學藝德行の如き、寧しろ婦人にあつては、甚だ多し賣れ口には影響を與へまいと云ふに、即座滿場一致を以て議決したと云ふのであつた、で果して我れ〱男子既に然りとしたら、抑も女子は如何なる男子を理想の良人として撰擇するであらうか、此れ軈て我が輩最も近き將來に於て、必ず遭遇しなければならぬ人生の大問題なんだから、參考の爲め枉げて御教示に預り度くて其れで突然罷り及んだ次第であると迄御丁寧にも云ひ足された。

此れには流石の自分も、聊か面喰はざるを得ぬ。遠き慮り無ければ近き禍ひありとでも言ふよい合點か知らぬど、逢うた時にこそ笠をも脫げ挨拶もすれお世辭も云へ、餘りに馬鹿らしいやら下らないやら可笑しいやら笑止なやら、無論眞面目になつて答へる程の必要も無いと考へたんで、もう澤山なのよ、でなくつてさへ僕逆上性ですのに、上つちやいますは、まあ〱其れでも餘程甘く阿母樣の臍繰りが引き出せたと見えますねと、相手の顏つく〲見詰めて詮方無さに自分は苦笑した。

其れや成程、

六尺豐の大男

が、氣樂に脊延びもならぬ四疊半の部屋の中で、小鰯の目貫しに舌皷打つてらつしやる樣なしがない唯今の御身分柄じやあ、蒲燒きは甘いでせうさ、天麩羅は美味しいでせうさ、穗紫蘇の香氣高う薄鹽小鯛の酸の物に至つては、猶更以て乙で御座いませうさ、神樂坂邊の頰つぺたの眠れた見ず轉藝者を御覽遊ばしても、人知れず食指大に動かうと云ふ世間見ずのお坊つちやま方で居らつしやるんですもの、神田麴町本郷は大通り小石川は高臺、すんなりした若い女學生さんでも御覽じましたら、ほら終不覺のお涎も滯れ樣つて寸法じやありませんか、何もねえ此れが貴君、僕だからまあ能い樣なもの〻柄にも無い美人呼ばゝりは些と聞き辛う

御座んすわね、貴君も一個の御男子じやありませんか、權門富豪の婿となるのが快くないの好くの好かぬのつて、御自分の利益名譽の爲めには、苟も大丈夫十年糟糠の妻をも敝履の如く敢て捨てるに躊躇はせぬと、何故やせ我慢にも負け惜しみにも仰しやつては下さいませんですの、怎うせ美人なんて人生の花だつて申すんですから、花は下劣しい、

本能の慾

に媚びる哀れな犠牲に過ぎないんで御座いませう、だから物は經驗吝な事仰しやらずと此處で百金奮發して御覽なさいましな、



色の白いの眉の美しいの、下脹れの愛ぐるしい眼元の可愛いの、犠牲の花は喜んで貴君のキッスも待つて居樣と云ふものじやありますまいか、其れほどの度胸が居らつしやらんじやあ男一疋貴君餘り情無う御座んすよ。

其處へ行くと女子の方は餘つ程度胸がいゝですわね、或る意味に於て男方よりはもつと露骨で正直で常識に富むで居て、時代の潮流に應じて行ける丈の勇氣があるから感心よ、女子同士の女子の誇りを恥かしい男方の前で洗い浚い申すじやありませんけれど、其の日〳〵の活計に追はれて幾層の辛酸に悲しい世路の味

を嘗め盡くした女子は更にも云はず、よしや世に時めく程の際に生ひ立ち給ひし令孃であらうと姫君で居らつしやいませうとも、公爵の夫人たらんよりは、寧ろ日本一の大富豪に嫁するを以て、より大なる、

婦人の名譽

と心得てる位ですからね、失禮ながら貴君様なんか、先づ以て當分の處は女子共に好かれ相も居らつしやいませんねと、我れながら能くも饒舌られたものだ。言句も繼かせず、御氣の毒なほどさん〴〵な目にお逢はせ申した事があつた。

或る人は言ふ、兎角夫婦と云ふ者は性質でも體格でも全然反對な方が却つて圓滿に和合すると。されば細君甚だしく別嬪ならねば、旦那存外お顔の造作揃ひ給ひ、亭主瘠せぎすの働人なれば、妻は滅法肥滿家の無精者と來、女房爪の上に火を燈せば、良人宵越しの金は遣はずと云ふ具合に、世間頗る此の例に乏しからぬは、畢竟天の配剤の至妙なる處とも云はゞ云へ、如何にも自分は不思議の念に堪へぬ。所詮神は公平なりと、千古不磨の金言か杯の樣に打つて出る程ならば、割れ鍋に閉ぢ蓋、馬は馬同士、牛は牛連れ、痴漢は驢馬に才子は佳人に、菫に泣く女星に憬れる男、甲斐なき戀に泣かせんは要なし、出雲の神樣も餘り飛んでも無い物好きな眞似は止しにして下すつても宜かり相なものを自分の知つてる人の中でも、風采甚だ悲慘なる男の憎い程美しい奥樣を持つて居らつしやるのが隨分あるのでも、愈々以て美人何故に多く美男子に嫁せざるかとの嘆を深うするのである。

友の一人此れに解釋を附して曰く、何に早い談しがさ、我れ〳〵の斯うして曉に起き腰辨をぶら下げ夜半に寐ねて、口惜しい思ひで五斗米の爲めに腰を屈したり、大きな聲では云はれぬが、時にはお役徳にもありつかうつて苦心したりするのは、畢竟何が爲めだと思ひ給ふ、詮ずる處妻の前に金指輪を捧げて、

妻の歡心

を買はうつてのに過ぎないんじや無からうか、其れ位自體女なんて金の大好きな動物なんだのに、昔から色男金の無いのが玉に瑕とかつて、古今一代の色男梅川の忠兵衛でも紙屋の治兵衛でも、其りや隨分お金には苦勞したつて云ふだらうでは無いか其處へ以て來て、我れ我れ男子一期の本懐は美人の膝枕に盡き樣つて譯なんだもの、要するに男子既に然り色男既に然り、婦人又既に然りさ、醜男子美人を得、美人醜男子を以て滿足する敢て怪しむに足らずじや無いかと。如何にも皮肉な云ひ分ではあるが、自分が此れに向つて斷じて否とは云ひ得ぬ程、何等か私共婦人の弱點が道破されてある樣な氣がして口惜しくてならぬ。



此れは終此の頃の出來事であつた。

何やら自分に止む無き用があつたんで、兩國行きの電車を厩橋で降りて、路を本所の方面に取つたのであつた。すると自分よりは一間ばかり先きを、髪は例の束髪に水色リボン淡う、粋な小作りに共ぶきの茶微塵しつくりと似合ひて、素足に雪駄穿きと云ふ、至極妙變ちきりんな風をした若い女の、十月の日盛り洋傘も翳さず、悄然と心細げに

歩行て行くのを認めた。不圖其處に客待ちをして居た俥夫が、御都合迄如何ですと不意に女に向つて言ふ。聞こえてか聞こえでか女は默つて通り過ぎ樣とすると突然立つて後から追ひ縋る。途端振り返る女の芙蓉の顏、細面のきりつと眉の其の清さ。勿體無い程女の顏つく／＼のぞき込むで、秘したつて駄目さ、おい姐さん松倉町でがせう、お前さんの事なら唯だつていゝやなと、憎く／＼し氣に何やら口を利きながら、其れでもすいと行き過ぎる。甞つて友が博昌館の裏通り、蘭燈影淡き處、我が國貴婦人社會にも去る女ありと迄歌はれし某子爵令夫人の、眉纖き怪しの青年と喃々私語せるを、まさかに見極めしと云へるさへ思ひ出で、自分は何とも云へぬ嫌な／＼氣持ちになつた。で、此の妙な對象を心に浮べながら、暫時寂しい女の後姿を見送つて、わざと其の横町から道を外らしたのであつた。

噫自分の云はんとする處は此れに盡きて居る。何も私は殊更に奇言を弄して、婦人を呪ひ男子を呪ひ而して我れ／＼人類の弱點を呪ふ意でも何でも無いのだから、ともすれば飽き／＼し相な人生の趣味に、斯くして光彩あらしめ色氣あらしめ變化あらしめんとする運命の神の粹な御處置に、唯わざと此處では感謝する事に止めて置かう。而して徐ろに顧みて、自分の鼻の小なる丈其れ丈、自分の口の大なる丈其れ丈、甚麽にも美しい御亭主にありつかれる樣にと、甚だ以ておはもじの至りながら、序に謹しんで御頼み申して置く。

○過は必ず氣質の偏より起る、剛なる人は心づよきより過起り、柔なる人は心よはきより過起る、宜しく氣質の偏に勝ちて過なからん事を求むべし。

○交際は外面丈なるべからず、交際は眞に偉大なる品性の奥底より流れ出でたるものならざるべからず、然らざれば交際は單に虛僞の交換たるに過ぎざるべし、若しそれ春風駘蕩和氣洋々たるの交を欲せばよろしく一に婦人の眞情に待ざるべからず。

流行の婦人装飾品

◉ブローチ‖近頃婦人の外形著しく進歩して社交界次第に花やかになりしにつれ婦人装飾品も段々高價なる物流行するに至りしが就中ブローチの如きは襟止ショール止として最も人の目に付く所とて流行を競ひ形は佛國式に模して折衷したるものにて唐草模様にルビー、眞珠、エメラルド（青緑色等を嵌め込み最上等はダイヤモンドを用ゆれど百圓以上の直段なれば普通に行はれざるは勿論なりサフハイヤ、オツパールの類は流行後れとなれり、普通品は十圓以上五十圓位、型は小型となり從來の簪派用は廢れブローチと簪は全然別物になり來れり。

◉金鎖の女紐‖婦人の羽織紐に金鎖を用ゆるは最近の流行物なり、小豆鎖、〆縄にて中心飾りは小判型、ハート型、眞珠、ルビーを嵌めたるが流行にて直段は十三四圓より二十圓位なり。

◉鼈甲三枚櫛‖護謨櫛は中以下に行はれ夜會、觀劇などの交際場裏に出入する婦人には何れも鼈甲三枚櫛に限られ最新流行は無地無模様の鼈甲なり、尤も令嬢は派手なる金蒔繪、芝山などピカ〳〵ものを用ゐ、三十歳以上の流好きには黒甲蓋にすかし彫刻を施こせる江戸式あり、直段は十圓より二十圓位、これは數年前迄は外國製に模する能はざりしが昨年より非常の進歩にて其精巧なる敢て外國に讓らず、護謨櫛は中流以下に需用の最も多きものなり、金蒔繪、彫刻など素人見には鼈甲と差別なき程に巧みに製せられ、護謨原料も外國より仰ぎしに今日にては本邦製にて立派に應用せらるゝに至れり。

◉女持時計鎖‖これも次第に變化し昔時は手に取らされば分らぬ位なジミを尊みしが今日は遠目にもそれと分る程の派手なを尊むは矢張り呉服物がパッと目に立つ大模様の流行するが如し、最近の流行は眞珠繋ぎにて十八金の玉繋ぎの間一寸おき位に眞珠を入れたるものなり、男物の鎖は追々細くなり女持の鎖は次第に太くなる傾きあり、殊に首掛は大流行なりと。

女性の最も美なる點

曾水生

△愛他心

婦人の有する物の中、最も美しきものは何であらうか。詩經の初めに、窈窕たる淑女は君子の好逑といふ定義が下してあるが、此の淑女といふ語の中には、婦人のあらゆる、美德を含んで居ることを記憶せねばならぬ當今の紳士は婦人を評する毎に、美にして賢といふ言を多く用ゆるも、此美といひ賢といふは、クレオパトラやヘレンの如き美貌家や、政子や淀君の如き牝鷄の晨する權略家を必ずしも意味するものでないことを悟らねばならぬ。花の顏柳の腰、其の榮華を誇るは一時にして、時過ぐれば忽ち凋む浮世の習を考へ來れば、美貌の賴むに足らぬことは明らかである。此の如く婦人の風姿既に賴むに足らずとすれば、其の特色はなきかといふに否有る、尤も大なるものがある。男性の有せざるものがある。何ぞや、婦人の愛他心である。

△兩親に對する愛

昔日一貴婦人の長き旅路に就かんとするや、三人の令孃は、はなむけせんとて母の許に集まり、甲孃は母の名前を彫り附けたる大理石を贈り、乙孃は香氣馥郁たる美麗の花籠を贈りしに、丙孃は何物も持ち來らず母に向つて、『私は何も持ち參りませなんだが、私の心情を御母さんに差上げます、此心情の中には長しへに御母さんの名が刻んであります、而して此心情は御母さんの御出でになる處へ附いて行きます、』と言つた話があるが、親を愛慕する程、恐らく大なる愛他心は他になからう。ソレから如何に兩親を愛すべきかは、以上の談話に依りて明白なり。即ち己れの心情を以て兩親に捧げたる令孃を模範とすべきである。親は娘から黃金の指輪や、澤山の小使錢を貰うことを望まないけれども、娘の愛情を非常に喜ぶのである。英國の哲學者にして眞理の爲に死刑に處せられたるサー、トーマス、モーアは、其の波荒き一生を、娘のマーガレット

ローパーといふに助けられて、種々の苦痛を忘れた程であるが、其死後娘は父の冠つて居つた帽子を生涯離さず、死ぬる時遺言して其の帽子を己の遺骸の上に載せて葬らしめたとのことである。何と愛情の濃なる話ではない乎。

△彼女と結婚した所因

両親を愛する娘はやがて夫を愛する妻となるべし。而して夫を愛する極點は、常に家に在り、一家を能く整理することである。夫は終日外にありて働らき、己の任務を盡したのであるから、夕刻歸宅以後の休憩と安息とは其の權利である。然るに世には此の權利を尊重せぬ貴夫人細君のあるは、嘆ずべき至りである。然れども賢明なる妻は、疲れたる夫を更らに疲れしむるが如き言語を吐かず、出來得る限り夫を樂しましめんと努むるから、夫も亦家に歸りて妻の顔を見るを無上の快樂とするのである。



印度の太守ジヨンローレンス一日其妹や娘と共に、書齋に於て讀書して居つたが暫時すると娘を顧みて「お母さんは何處へ行つたか」と尋ねる、娘は、「御へ用達しに……」と應ふれば、「うんツーか」といつて讀書する。然し十分も經つと、又しも顔を擧げて、「お母さんは……」と尋ねる、娘は少しくむつとして、

「用達しによ」と返答する。「ア、そうだつた」といつて再び書冊に眼を注ぐ、而かも二十分も過ぎぬのに、更に「お母さんは……」と尋ねる、娘は口尖らして「嫌なお父さんよ……」とスネる、傍にありし妹は此時口を出した、「兄さんは、義姉さんがなくては、五分間も居れぬチー」と揶揄すれば、ローレンスは平氣にて、「左様、其れでこそオレが彼女と結婚した所因さ」と應へたといふことである。ローレンス元來一代の英傑細君の尻の下に敷かれる様な人でないとは云ふまでもないが、ツマリ夫人の感化力偉大にして、彼を心服せしめたのである。

△動物園の親獅子

英國の著作家ハーデー氏が、嘗て愛蘭ダブリンの動物園を訪ふた、其處には一匹の牝獅子が居つて、生れて二箇月計りの子獅子を三匹鞠育しつゝあつたが、園丁の馬肉を投げ與ふるや、親獅子は如何に餓へて居ても、食はずして之を子に與へる、ソコで園丁はハーデー氏に向ひ「若し愛蘭に此の牝獅子の如き母親ばかりあるならば幸福である」と、語つたさうだが、實際子の爲に己れの利益を犧牲とせぬ母親のあるは愛蘭ばかりでない。己れの產みし兒を殺したり棄てたりする母親は隨分世の中にあるが、此等の人間は獸類より劣れりと言はねばならぬ。而かも斯る杜鵑の様な母ばかりではない、慈愛に富み、子の爲には己れの生命も棄つる母は澤山ある。如何に利己的の少女であつても、子を持ては優しくなるのが普通女性の人情で、殊に子を愛する情は燃ゆるばかり盛んになる。西洋の詩にも、

男子の仕事は日出から日沒まで
女子の仕事は晝夜絶ゆるなし

といふ句あるが、實に母の子に對する心配は一方ならぬのである。リヒテルと呼ぶ學者は、「國家の爲に一人の英傑若くは詩人を作るべく、殆んど毎夜眠らざる母の功勞を賞せざるは不可なり」と言ふて居るが、母は或る意味に於て父よりも勝つて居る、而して母の子に對する愛は純潔無垢、女性の極美を發揮したるもので

ある。

△下界の天使

清楚なる淑女が、病める貧人を看護する程、人生の美を現はしたものはなしと大醫ゼームスパゲツトは語つたが、華族のお孃さんが献身的に看護婦となり、患者の體温を測つたり、脉搏を數ふるは、恰かも神聖なる天使を見るが如く、一種言ふに言はれぬ崇敬の心を生ずるのである。然れども天使の中には惡魔も交つて居る、某病院の一室に於ける左の談話は戸外に洩れぬ



花「雪子さん、本日入院したる美少年は學生でしやうか華族の若樣でせうか」

雪「花子さんツウでせうよ、私は病院附の看護婦が大好きよ」

花「私もさ、お互に看護婦であれば、金錢が取れる上美男子の手も握ることが出來ますから……」

此くの如く墮落看護婦は論外とするも、總じて此の職業は、女性の愛情を示めす最良の機會に接するものなり。千八百五十四年オツクスフオードに於て、虎列拉病及天然痘の流行するや、フエリシア、スケーンなる一婦人あり、寢食を忘れて病者を介抱し其の赫々たる功績は、今日尙記錄と口碑とに殘つて居るが、若し眞正に女性の美を發揮せんとする

婦人は、宜しく一身を挺して斯業に從事すべきである。

△一家の心配引受所

獨逸の皇后陛下が、皇帝に向はされ『陛下は獨逸國にして、妾は子傅所の皇后なり』と宣いたるは名高き話なるが、名士の夫人と稱するものを觀察するに、何れも子女の教育、臺所の經營に其の全力を注ぎたる迹が歷々として見へる。エドモンド、ボルクは毎日口癖のやうに、家へ歸れば一切の心配を忘れると云つたが、彼の夫人は善く一家の諸事萬端を始末し、彼をして少しも後顧の憂なからしめたのである。又ジョン、ブライーの夫人は、其の結婚したる時、彼に向ひ、『君は公共の事に盡し給へ、妾は一家の總ての心配を引き受けて、君を煩はしませぬ』と挨拶したとのことである。又鐵血宰相ビスマルクは、『余をして今日の位地に上らしめたるものは余の妻なり』と語り、非常に夫人內助の功を感謝したが、夫人も亦偏に夫の身を案じ、長座の客ある時などは、下婢をして夫を客室より喚び出さしめたることも往々あつた。此の如く琴瑟和合して初めて圓滿の家庭を望むべきである。

流行の履物

▲擦れ草履＝以前はお邸の奥女中たちの專用であつたものなれど足當りがいゝので近頃では女學生より、一般の婦人男子に迄流行を及ぼして、其實高も大したものなりと云ふ、表は南部の一枚撚り、三枚から五枚で、鼻緒は駒下駄其他に比し幾分か派手なものを用ゆる、近來裏の麻繩の換りに象皮を使ふ向もあるが、どうしても表と離れ易いので未だ一般の流行を來さない。

▲千代田草履＝山の手下町を通じて一番賣れ行きの宜いのが此の千代田草履で、隨分贅澤なのもある表は鐵御納戶などの織物、厚織を蛇籠に編んだもの、又は紋琥珀其他の品に時節柄の模樣を織り出したり、染め出したりしたもので、鼻緒は其れに配合の宜い色を撰んで、繻珍博多の細い模樣物を附ける、又無地の表では天鵞絨が多いやうで、色は極く若向の外は一體に錆びた葡萄色や鼠にかへしたようなのが流行るので、鼻緒は以前のと變りがない、裏は何れも刻み附きのゴムであるが、中には氣取つて象皮の一枚皮を附けるものもある此外表用としてパナマ又は臺灣パナマを用ひる向もあるが、あまり涼しすぎるので、時節柄其の需要は減じて來た。



樂天の趣味

（笑といふ事のいろ〳〵の研究）

吉野臥城

▲悲喜の兩面

「悲」は「涙」を生み、「喜」は「笑」を生みました。此の姉妹がある爲に、感情の世界は趣味の多いものとなりました。若し此の姉妹がなかつたならば、人生は實に落寞乾燥なもので、失望も慰籍して吳れるものがなく、得意も亦同情して吳れるものが無かつたでありませう。

「去國魂既遠、懷人涙空垂。」とは遊子の情で、涙を垂れるに因つて慰籍を得るのです。遠く國を去つて居る女性などが、或は寄宿舍の燈下に在つて、或は工場の隱に凭つて、一滴の涙を落すことがありませう。此の一滴の涙が無限の慰籍なのであります。「至尊含笑催賜金」とは、如何に温情の籠つて居る詩句でせう。笑を含んでなかつたならば駄目です。御覽なさい。世の健鬪に疲れて歸つた男性が、門に立つて待つて居る「笑に」逢つた時に、甚麽に其の心が躍るでせう。實にや互に交す微笑と微笑との間に、充分な慰籍が籠つて居るのであります。

孤獨の慰籍は涙で、家庭の慰籍は笑であります。けれども孤獨の者にも「拈華微笑」するの境地があるやうに、家庭の人にも涙の餘裕がなければなりませぬ。同情の涙、嬉し涙、これ花唇を濕す春雨ほどの涙ではありませんか。

▲笑の種類

笑は、樂しい感情の表現であります。小兒が菓子を貰つて莞爾と笑ふのは、何て無邪氣でせう。既に出來上つた苦心の繪畫の前に立つて、微笑する藝術家の顏

は何て美しい耀きを現すでせう。然う心底からの愉悦に因つて、溢るゝ笑は眞個の笑であります。けれども笑は唯之のみには限りません。てれかくしの笑もあります。腹が立つ時も、口惜しい時も笑ひます。蔑む時も、嘲る時も笑ひます。何となく可笑しくて堪らない時も笑ひます。呆れても、魂消ても笑を漏します。舞姫が舞を舞ふ時にも、一座に流眄を溶せて嫣焉と笑ひます。這麼風に强ひても、作つても笑ふことが出來ます。

で、その名稱も種々あります。ゑみ、ゑらぎ、ほゝゑみ、たかわらひ、北叟笑なぞと云ふのもあれば、嘲笑、冷笑、苦笑、目笑、失笑、放笑、微笑なぞと漢語づくめなのもあります。媚びて笑ふのもあれば、諂つて笑ふのもあります。僞りの笑もあれば、御世辭の笑もあります。物凄い狂人の笑もあれば、恐るべき傾國の笑もあります。之に形容詞を附けて文章に書かれ、詩歌に詠まれ、小説に、戯曲に用ゐられまして、悲哀趣味の「涙」と相對して、滑稽趣味の「笑」、樂天趣味の「笑」を產出するに至りました。

▲笑の趣味

滑稽趣味の「笑」は輕くて、不眞面目で亂暴であります。所謂腹をよらせ、顎をはづさせる笑であります。此の卑俗な上に一歩を出して、温雅で、眞面目で、潤ひのある、平和な笑を、樂天趣味の「笑」と云ひたいのです。即ち道化笑に對する愉悦の笑で、陋巷の笑に對する家庭の笑です。

▲笑の韻

犬に旅を被せて、その藻掻く態の可笑しいのに、思はず「はゝゝ」と笑つたのが、笑の字の起原ださうですその無邪氣な「笑」も年を經るに從つて、大分性質の悪い子孫までも生んだものと見えます。嗤、哂、咲なぞは口八釜しくなつてからと見えて、皆口扁に作られて居ります。

夫れは什麼でも可いとして、我が國の笑を表す假名

は五十音の波行であります。普通の「はゝゝ」と云ふ笑
一段と勢をつけて「はつはつは」と云ふ高笑、姫君の零るゝやうに笑ひ給、ふ「ほゝゝ」、更に下つては卑しげな、「へゝゝ」「ひゝゝ」、忍び聲の「ふゝゝ」、何れも然りでせう。併し、其の他に雛穉兒の「あはゝゝ」「おほゝ」「えへゝ」「えひゝ」「うふゝ」があります。昔に溯っては、武者笑の「かんらからゝ」と云ふのがありますが、これは我が國に於ける「笑」の繼兒でせう。

心底から出て來る「はゝゝ」が快活で、愼ましげな「ほゝゝ」が優美であります。「へゝゝ」は幇間的で、「えへゝ」は薄のろ的であります。ですから、此の笑を以て



其の人を觀ることが出來ます。

▲笑の快感

總じて笑は、無心であれば無心である程快感を與へます。大人の笑よりも小兒の笑が美しくあります。分けても其の美しいのは、微笑です。微笑は平和の表現です。

花の咲くのを「笑む」と云ひ、又「笑ふ」と云ひます。花の笑は無心です。春に媚びるのではありませぬ。屹度春の光に言ふべからざ

る愉悦を感じて、心底から笑ふのでせう。春の温情に觸れては、山も笑ひます。前山も後山も悉く笑ひます。俳人は之を採つて句の材料と致しました。

有情の者も、非情の物も、笑ふに因つて無限の快感を與ふる事實は、誰しも能く知つて居る所でせう。併し、或人は花や山やと云ふ非情のものが笑ふ筈がないと云ひませう。夫れは理屈です。笑つて居ると見るのが趣味の存する所です。

▲笑と衛生

快感は精神の餌で、精神の餌は軈て肉體の營養にもなりませう。悲哀に沈んで居ると、精神を害ひ、肉體を傷りますが、愉悦に居ては決して然らずであります笑の人にヒステリーも宿らねば、メランコリーも訪れて來ませぬ。剩へ、笑は消化を助けるとさへ稱されて居ります。食後の沈鬱は鉛なら、食後の談笑は黄金でせう。

幾許泣いても笑が湧きませんが、大に笑ふと涙が零れます。此の涙も千金の價値がある涙で、眼を濕し、眼球を自由に回轉させると云つたやうな譯で、泣いた涙よりは慥かに勝つて居ります。睡くなつた時に、盛んに笑つて涙を零すと、睡氣が去つて心地よくなります。

嘲笑や、苦笑や、冷笑やは不可せんが、高笑や、快活な笑やは極めて可いのです。ですから、衛生に注意する人は、一日に少くも三度は笑ふ事を忘れてはならんと、笑ひ乍ら一言して置きませう。

▲笑と罪

とんでもない時に笑ふと、笑に因つて奇禍を招くことがあります。史上の例は扨置き、卑近の例を擧げて見ませう。某學校の授業時間の事でした、一學生が教師の素振が可笑しいので、思はず「ふゝつ」と失笑すると、さあ大變です。教師は非常に立腹して學生を拉し到頭室外に追放して了ひました。學生が三拜九拜したが許されませぬ。可哀相に女學生は泣きました。之は

失笑の罪です。

物の本に書いてあるのでも、『菅原傳授手習鑑』の「こちへおはいり遊ばせと、云ふも淑やかあい〱と愛に愛持つ女同士、來た女房は猶笑顔」は、誰も不快な感は微塵も起しますまいが、『生寫朝顔日記』の笑藥を飲んだ祐仙が無性に「あはゝゝ、はゝゝ」と笑ひましたのは、何となく癪に障ります。不快を感じさせます。若し之が味方の岩代の前でなく、主君の前でゞも演じたものなら、打首になつたかも知れませぬ。

愼むべきは笑です。微笑にあらぬ馬鹿笑です。

▲笑ふ癖



特に女性には、泣く癖と笑ふ癖があります。泣くのは、男性よりも感情に脆く、男性よりも涙腺が大きい爲でせうが、笑ふのは一寸分り難い。が、「妙齢の女性は糠の崩れるにも笑ふ」と云ふ俗諺より推すると、感情が花のやうに綻び、愉悦の抑ふべからざるものが有るからでせう。

笑ふ癖は怒る癖よりは可いが、餘り褒たものでもありますまい。一言いへば笑ひ、二言いへば笑ふ。訊けば笑ひ、問へば笑ひ。云ふにも笑ひ、語るにも笑ふ。笑が連續すると對手を可厭がらするばかりでなく一向要領を得ないで了ることが往々です。短氣な人に

でも逢ふものなら「何をげす〳〵笑つて居やがる」と、一喝を浴せられます。

愛嬌と笑ふ癖とは似て非なるものです。

▲家庭に於ける笑の價値

天照太神の心を和げたのは、天安河原に於ける神神の咲ぎです。春風面を撲つて芬芳衣袂に染む底の平和は、笑に因つて始めて得ることが出來ます。憤々して居る男性を和げるのは、女性の微笑です。父母の愁の眉を開くのは、小兒の無邪氣な笑です。

「むつとして戻れば門の柳かな」――俳句としては價値の無いものですが、よく穿つて居る點に於て教訓としては上乘です。――不快に胸を壓迫されて戻つても、門の柳が無心に垂れて居る、煙るが如き笑ひの姿を見ては心が融けて了ふのです。門の柳は家庭でせう。社會に出て冷酷な手にさいなまれて戻つても、家庭の溫氣に觸れると百年長生の思がありませう。

交際界の女性は花のやうに笑み、蝶のやうに振舞ふものですが、家庭の女性は之に反して、全然違つた女性のやうに匂もなければ艶もなく、始終くよ〳〵して居るものです。良人が外出勝だと云つては嫉妬を起したり、小兒が障子に孔を一つ啓けたと云つては叱つたり、嫂に何か云はれたと云つては泣いたりすることは我が國の家庭には能くあり勝な事です。斯う云ふ家庭に限つて笑が少く、怒と悲とが多いのです。怒と悲との黑い影に潜むるものは『不和』です。『不和』と云ふ小魔は、美しい家庭の花を蝕んで、色も香もないものとして了ひます。

ですから、大人のみの家庭には淋しい秋が佇んで居ますが、小兒のある家庭には春風が微笑して居ります。笑ほど家庭を調和するものはありませぬ。家庭の平和は富でもなければ、爵位でもなければ、名譽でもなく唯一つの笑に因つて維持されます。

あゝ樂天の趣味――愉悦の微笑――美しい感情の表現、之が家庭をとこしへの春に導くものであります。


ぶきぞめ



筆のパノラマ

高北貞子

粧はれたる古戰場

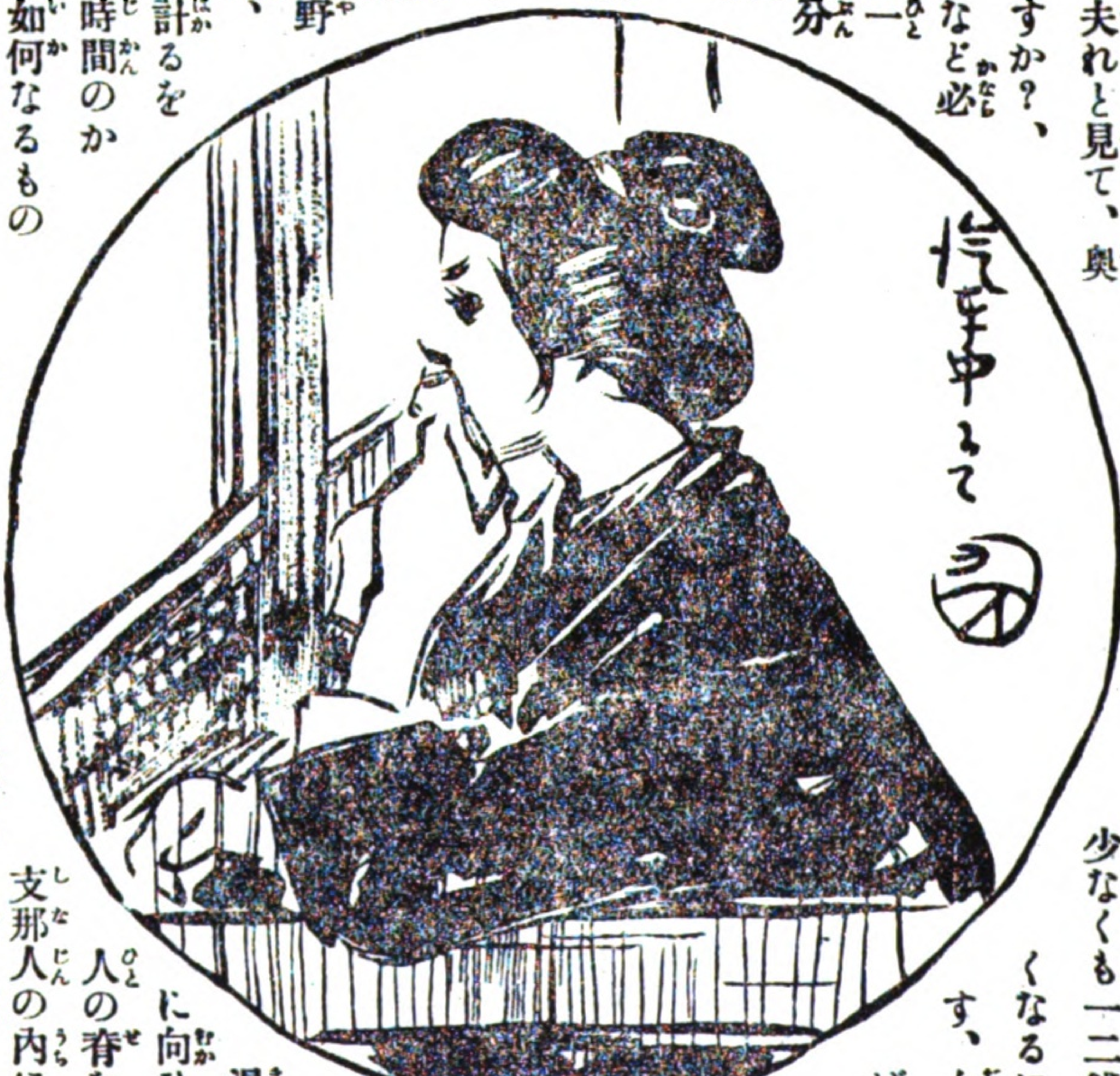
黃金山麓の池の氷溶け初めて、骨を削る風の勢漸くに去れば四方の山野、何時ともなく綠の色をまして來る、内地の樣に梅も櫻も容易に見る事は出來ないがあんず、すもゝの花、海棠に似たるものなど壞れし支那家屋の垣より匂ひこぼれたる流石に春らしき心地がして來る。

今迄赤はげの山とのみ思ひしが恰も餅に靑かびの生へたる如く處々草が生へて日を經、雨の降る每に其面積が廣がり終に滿山靑き衣を以て包まれてしまう。

四月の半頃になれば鯛が獲れ出す、市場は之れから次第に賑かになつて來る、來る日も、來る日も鯛ぜめに逢はされながら何がさて今迄豚や、牛肉にばかりで攻られた身は朝から夕迄食べても一向飽きもしない、而して今迄食ひ飽きた白菜は此頃から無くなつて他の野菜が之れに代る、蟇がのこ〳〵と這ひ出す樣に今迄の意久地なしが身體の皺を延ばして久しぶりにて市場へと出かける、市場は忠海町と云ふ處にある、旅順市民の日常の需用品は大抵此處にある、酒類、味噌醤油、鑵詰もの、野菜、魚肉、煙草、菓子等、日本人と、支那人と丁度半々位に店を出して居る、奥行半町程もある大なる藏の形をした家の入口を入ると兩側に店が並んで居る何れを見ても皆同じ樣に芋、大根を初めとして水菓子類を日本の八百屋の如く外に行く程低くしたる臺の上を幾つにもしきつて別々に美しく積み上げてある奥さんあなた何買ひますか?、芋上等、梨子上等女中さん之買つてく宜しいまけるありますなど彼方にも此方にも聞ゆ絕へず買ひに行けば顏なじみ出來て高

く賣り付けず、饗應などせんとて材料など紙にかき付けて買ひに行けば早くも夫れと見て、奥さん今日お客さん有りますか？、何人ある？、忙しいな、など必ず云ふ買物の多き時には一人夫れにかゝり切りて自分の店になきものは他の店よりあつめ呉るゝなり、永くなれば木の腰掛に新聞紙敷きて掛けよと云。

支那人の習慣として凡て百目一斤を元として數ふるを以て、芋大根等の野菜ものより、穀物は勿論、魚類に至る迄一々目方を計るを以て少しの品を買ふにも時間のかかる事非常なり、其上を如何なるものにても一度新聞紙にて包み麻繩にてくゝるを常とす、



然れ共出入の商人より買ふのと比ぶれば一品に付きて少なくも一二錢の差は有を以て時候の暖くなるに従つて市場は次第に繁昌す、女中をつれたる奥さんのかげ終日絶へず年若き下女、馬丁、など支那人にからかいながら少しにても負けさせんとひしめける誠に賑かなり。

苦力(人夫)は冬の繿褸をぬぎすてゝ身輕となり、淺黄や黒色の衣の内にちらほらと白衣の混じる様になれば次第に夏に向ひて四面の草は盛に茂りて人の脊を沒するばかり。

支那人の内にても少し上等なるものは手に必ず扇を持ち道を歩みつゝも之れを使ふ、日本の

普通のものとは其造り上品にして大きく舞扇に似たり模様は多く花鳥の極彩色か黒色なり、チヤンコロと一口に下品の様に賤めども體格は日本人より立派なり、顔も亦醜からぬもの多く、艶々としたる黒髪を美しく三組にあみて端に太き黒色の絹糸を編み込みて三四寸の房二ツさげ、同じ色の大きなる模様織り出したる緞子などの丈長き筒袖の衣着流して悠々と歩める様は又一種の趣あり日中は洋傘をさせるも多くあり、帽も此頃は日本人の如く山高帽子、鳥打帽子をかぶれるも少なからず。

黄金山の東部一帶の濱は遠淺の砂地なるを以て夏に至れば此處に海水浴場設けらる、見上ぐれば峨々たる岩根立ち重なりたる上に砲臺あり彼の日露戰役に幾多忠勇なる我軍人の生命を奪いたるもの、今は果なく我手に歸して永遠に旅順港灣を擁して黄海の水面を睨む姿の雄々しさよ。

矢叫の、音鎮まりて我　天皇の御稜威斯る外國迄も吹き靡けば波穏かに浴客の袖を翻を見るも嬉し、空敷怨を呑みて此海の藻屑と消えにし勇士に今も猶靈あらば其今昔の感や如何に。

涼風そよげる小高き丘に立ちて四方をながむれば前には限りなき海あり黄海と字には書けども恰も疊を敷けるが如し、左手には高き丘幾重にも重なりて有名なる東鷄冠山を初めとして吾人の耳に今も殘れる山々長く北に續きて旅順東北の鎮たり、此山々に麓より頂に達する道路幾つとなく有り。

ステツセルが此處に籠城の折一戰の終る毎に馬車にて各砲臺を巡視せりと聞けるも道理なり、露人が多くの財と勞力とを費して永久的に經營したるものなれば麓より螺旋狀に山を廻りて二間半の一等道路なれば五百尺の山を登るも殆ど平地を行くが如し、滿山松柏等の若木を以て覆はる、彼が如何に永久的の考を以て此處に幾多の事業を經營せんとしたる跡あり〳〵と斯る處にも表はるゝを見よ、而も僅々十年を出でずして東洋の一小國たる我手に歸せるを見ば其無念や如何ばかりなりけむ。

九十度の暑さ去つて涼風袂を飜せば世は秋風の立ち初めて斯る外國の野邊にも千草のさま〴〵に咲き亂れたるぞあはれなる、名も知らぬ女郎花に似たる白きあり、藤紫の匂ひゆかしき鐘草に似たるあり、ゆかりの色濃き桔梗や、河原なでしこの淡もゝ色に可憐なる、野菊の華奢なる枝を四方にのばして咲けるなど龍田姫が織なせる秋の錦に燃ゆる紅葉こそなけれ、一面に美しき毛氈を敷けるが如し、支那家屋の壁の壞れかゝりたるが彼方、此方に見ゆるも時にとりて實にあかぬ眺かな。



うね〳〵とうねりたる坂道を、あかざの如き草かりて負へる支那人の過ぎ行くを見る、是は此あたり森林と云ふもの絶へて無ければ木をたく事を得ず、冬の燃料に今より乾して貯へ置くなりとぞ。

磯傳ひに三四丁東に行けば模珠礁の濱と云ふに出づ、白砂靑松の影こそ無けれ、磯邊に岩の散在したる、右手に黃金山を隔てゝ老鐵山の霞みて見ゆるなど又捨て難き眺なり。

靑、赤、紫の色おぼろに剝げたる支那船二三隻濱につなげり、是はチーフーより此處に通ふものにして、玉子、魚其他の野菜を運び來たる、船の着きたる日には苦力が、籠に白菜を積みて天秤もてになへるもの、玉子を石油かんの空箱に入れてになへるなど、汗水流して三々五々支那町に急ぎ行くを見る、實に世渡りは樣々なり、此處の玉子の石油臭きも之れが爲めなり此濱も亦遠淺にして汐の引きたる時には遙沖迄石の表はるゝを見る美しき貝殼など無けれど糸を垂るれば、あいなめ、黑鯛、めばるなどの小さきものかゝるとて釣をするもの少なからず、石の間には、なまこ、かきなどあり一日を玆に遊ぶも亦一興なり。

支那人の漁業進步せず沖を見渡すも漁船らしき影數ふる程もなく又地引網を曳くにも僅に海岸に接近したる處にて七八人の小人數にてするを見ても其收獲は知らるゝなり、斯かる程なれば此邊の魚族は比較的人を恐れず、人馬の通行頻しき海岸にも小鯛などの寄り來て釣人を喜ばす事多しとかや。

支那婦人の濱に立ちて籠を小脇に頻りに何かあされるあり、行きて見れば靑海苔の如き海草なり、例の足は斯る賤の女も小さきを貴べりと覺しく淺黃の布もて幾重にも卷きて小さき先きの尖りたる靴をはけり、其步む樣兩手を以てかぢを取りつゝ恰も幼き子供のよちよちとせるに似たり。

衣服は概ね淺黃にて足には股引に似たるものをはき上着は七八寸の廣袖にして左前に合はせて左の脇にてボタン樣のものにて三所四所とめたり、常に家の內にのみとぢ籠り居れば手工の業は比較的巧みにしてミシンの如く細かく、衣服の所々に唐草の如き繡をなせるもあり、髮は一樣ならざれど日本のおばこに似たるものにして巾一寸長さ六七寸の金屬製のうすき笄の如きものにて止めたり、未婚の女子は男子と同じく辮髮にて先きに赤き切か、糸を編み込みたれば一見にして區別する事を得。

其二

遠く驢馬の嘶聲聞ゆ、四面の靜けさを破りて長く細くあとに引きたる恰も國の衰ふるをなげくが如く聲悲し是は之れ客待の馬車につけたるものならん、嘗て露人が此處に全盛の時代には下士に至る迄美しき馬車持ちたりと覺しく開城の曉我陸軍が捕獲して支那人に拂ひ下げたるもの丶みにても六百輛の多さに登れりとぞ。

多くは黒塗の母衣馬車にして二頭立のあり、一頭立のあり、今は内地の人力車や、電車と同じ樣に到る處に客を待つ、内地に有りて黒塗の馬車と云へば貴顯紳士の專有物の如くに考ふれど此處に來れば電車程にも思はず、宵暗を龍の眼にも似たる角燈の光いかめしく來るを見て如何なる貴人や乘るとおもへば案外にも間拔顔したる支那人や、賤しき醜業婦の悠然と構へたるあり、實に一文のねうちも無し、市中至る處に之れ等悠長なる支那人と、驢馬(中には支那馬、日本馬を用ふるものあれど多くは驢馬なり)とによりてあやつられたる馬車の通らざるなく、馬車〳〵と高く一聲二聲呼べば何處よりともなく聲に應じてから〳〵と馳せ來るは誠に便利なり、其他に人力車あり夜に入りても十八九世紀時代の無格好なる提灯は持たずかぢ棒の附根の處左右に角燈をつけたり之れのみは日本のよりも遙に見宜し、然れども之れに乘るものは極めて稀なり。

夕日は老鐵山の彼方に落ちて暮色野邊を覆へば虫の音盛に起る、大方は鈴虫、こほろぎなり、外國の野邊も秋は同じ、花さへ、虫さへ、哀れ知りがほに遊子の膓をしぼらしむ。

虫と云へば此處には人の最も嫌ふげじ〳〵多し夜に入れば何處よりか幾匹となく疊の上を這ひ廻るさへ氣味惡きに壁にかけたる衣服の間などに一ッや二ッ居らぬ事なし晝は蠅群をなして食物を襲ふ上に晝寢の人の顔にたかりて終に安眠する事を得ず、恐ろしきは蝎と云ふ虫なり旅順市には居らざれども少し西に隔りたる鳩灣と云ふ處に至れば石の下、岩の間などのうすぐらき濕地には多く居るとかや、此虫に一度さゝるれば命なしとて支那人は殊に恐る、其形恰も蝦にとんぼの

尾を付けたるものにして、赤、白、黒色の三種類あり白きものに最毒ありとぞ、ぬぎすてたる衣服の間になどはさまり居てさゝるゝものあり常に危險なるを以て此虫に對する應急手當法の其筋より發布せられたる程なり。

黄金山の麓に廣き池ありは、蘆、藺などの水草生ひしげり、種々の水鳥住めども終に螢の飛べるは見ざりき、とかげ、蛙などの爬虫類非常に多く草原に入れば足を避けて行かざる可らず。

其三

氣清く馬肥ゆるの秋人も亦活氣を帶ぶると共に鯛の脂肪亦非常に多くなりて殆ど內地の夫れと異ならず、而も朝と、夕と、時には二時頃と三度も魚市開かれて集まるものは鯛のみ、然れば價も非常に安く百目六錢に下る事あり、目の下二尺に餘るもの五十錢を出でず野菜を買ふよりも遙に經濟向なり、此頃の總菜の相場は菜一錢(何れも一斤)大根一錢、玉葱三錢、芋二錢、牛蒡八錢、砂糖七錢、豆腐一丁(東京の二丁分位)五錢、米一升上等にて二十一錢、牛鳥肉四十錢より四十五錢等なり、一度風吹き出づれば魚の相場は忽ち狂ひて昨日の六錢は今日三十錢に登る事あり、之れ他地方より輸送し來るとあらざるを以て海荒るれば市に一尾の魚影すら見られざるを以てなり。

うづら、しぎ、ひばり、などの小鳥また市場に表はる一羽一錢五厘位にて買ひ得らる。

市場の有る處を忠海町と云ふ、此處に來りし初めには面白き町の名よと思ひ居たるに實に書けるを見れば此處の町名は皆戰爭の紀念によりて附けられたるものなり、乃木町、鮫島町など云へるあり、鯖江町と云へる、鯖江聯隊が旅順攻擊に參與せしによるなるべし、熊本町と云ふあり、勇敢なる九州男子の居たる處ならんか、今は淫賣の巢窟となりて不夜城の燈影怪しくなまめかしき聲を、しだらなき賣婦の姿とはあたら神聖なる熊本町の名を辱め居るぞ是非なき。

秋の夕ぐれ支那町に行く、市の東北の隅にあり、稍低

き家両側に密接してまづ悠々として煙草の烟を吐くもの目につく此處を支那市場と云ふ、八百屋、魚屋、小間もの屋飲食店等不規則に並べり、道路凸凹定なく一方の高き處あり、中央の凹みたる處あり、石其間に散在して只歩むにのみ氣を取らる不規則に曲りたれば只一筋の町なれども先まで見通す事を得ず、我思ひし程不潔には有らざれ共濕氣多し



所々に五六尺の煙突を立て盛に湯をわかす之れ支那人の飲料なり。

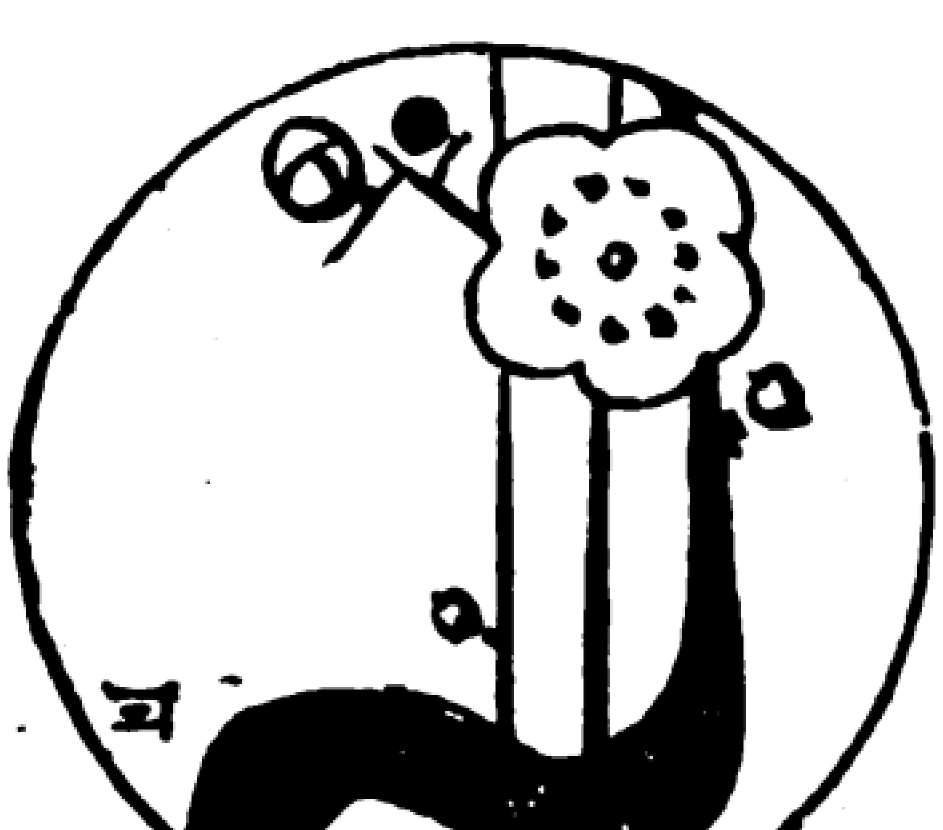
大なる茶碗に何か滋養ある食物の如くに熱きを吹きながら多く呑む、飲食店の前に至れば豚や油の異樣なる臭氣鼻をつく、大なる皿、丼などに葱、肉を盛りて煤けたるテーブルの上に幾干となく並べたり、うどんを打つもの、饅頭を蒸すものなど店頭に釜を据へて混雜し合へり、奥にはよき座敷ありと聞けどむさくろしくて這入る氣にならず、此町を通り越せば支那人の遊廓あり、三尺の入口より中を窺へば前髪を切り下げて三組に編みたる小女、油、鬢付こて／＼と塗り固めて襟首の處におばこの如き髪に結ひたるもの、皆剝れる程に白粉を塗りて頰紅さしたる恰も造人形の樣なり足は競ふて小さく見せかけん爲に二寸程の靴をはき、細き股引をはきたれば正面に向ひて腰掛けたる處は何處迄も人形的にして滑稽なり、此處らも日本の淫賣婦交り居て、海軍の水兵、職工などを相手に往來に迄あさましき醜態を表はして得意然たるは誠に慨しき事なりける。

其四

旅順市の中央に關東州日本赤十字病院あり廣き地面をしきりて石もて積み上げたる塀を造り中に三階造りの大建物あり、露西亞時代の遺物を其儘に今は日本人の手に仁術を施す處となりて朝の九時過ぎより診察を乞ふ男女引きも切らず、露人が金にあかして建てたれば病室は勿論浴室に至る迄設備完全に整ひたり、最繁昌するは婦人科にして其患者の半以上は醜業婦なるを以て見ても如何に之れ等婦人のはびこり居れるかを知るに足るべし、只々診察を請ふのみならず料理屋の女將自ら此處へ出馬して醫者仲間を迄己が濁流に引摺込まんとの意氣込なりと聞ては只呆るゝの外ぞなき。

次ぎには齒科にして時間を要するものなれば、繁昌すると共に此頃は診察札を出してより五日位を經て漸く己が治療の順番廻り來るなりとぞ、今は赤十字の名勢支那人の間に迄廣がりて出嫌ひ、男嫌ひの支那婦人

にして此處に入院するものさへあるに至れるは亦嬉しき事なり、支那人は醫者を信ずる事非常なれば神經の作用に依りても其治癒甚だ速なるを以て、醫業の支那地方に及ぼす結果は前途益々有望なるべし、日露戰爭の有りける時或軍人の許に來りて頻りに腹痛を訴ふる支那人あり、大人（敬語）の力を以て是非治し與れよと、其軍人は醫官に有らざれば一時は大に困却したるも彼の神經作用を利用せんとて己が携へたる行李よりライオシ齒磨の粉を取り出し勿體らしく紙に包みて云ふ樣、之れは日本にても有名なる靈藥なれば服藥忽にして其痛去るべしとまことしやかに述べたれば彼支那人は大に悅び押し戴きて歸り去れり、暫時して再び來り先の樣には似もやらずいと元氣よく、大人のお蔭を以て病氣已に治せりとて大に其德を稱したりとぞ、支那人は凡て斯の如し、今一つ面白き話あり、旅順市の一官吏公用有りて金州に出張したるに折から其地方旱魃甚だしかりしを以て日本大官雨乞の祈禱の爲めに此處に來るとの風說何時とはなしに民間に廣がりて悅ぶ事一方ならず、官吏は世にも迷惑なる事に思ひ居たるに僥倖にも其來れる翌日非常の降雨ありければ愚なる彼等は其靈驗の著しきに驚き怖れ之れより日本人を敬ひ信ずる事いよ〳〵深くなり、我治政の上に大なる利益を與へし事有りしとぞ。



令嬢日記

姉、峰子

十一月十一日　月曜日　晴天

今日は母樣のお精月命日に相當るので何か拵らへるやうにと下女に命令て置いて、私と妹と弟との三人は巣鴨の停車場から池袋迄汽車に乘る、車中には私達の他に五人連れの意氣な女が居るだけで、何れも婀娜として何處となく垢拔のした際立つて襟足の奇麗な者ばかり、一同々じやうな容子をして、兩袖口を丁度羽

縮の紐位な處で重ねて、少し前屈みに腰を掛けて車の揺れる度に自分も一緒になつてゆらり〳〵揺れて居る、女學生ばかり見付けて居る私の目には何だか大層なよ〳〵して居て、お隣とお隣と鉢合せでもしなければ好いがと遂い餘計な心配もするやうになる、皆もう好い年で中でまア若いと思ふのでも廿五六、老けたのは四十位にも成るだらう、只だ目鼻立が普通だと云ふ位な者で、此處ぞと取り立てゝ云ふ程の美人は一人も居ないけれど、裝がいかにも佳いのと、羽織でも着物でも何となくどつしりと持重りのしそうな物ばかしで氣持が好い、見る人が見たら珊瑚珠の根掛の色が好いの、帶止めの金具が如何のと細く云ふだらうけれども私には其麼事は分らない、只だ奇麗だと思ふばかり一口に垢拔のした女と云ふのは斯樣云のだらうと思ふ。

　何者とは云はずと知れて居るけれども何處いら邊のだらうと心に思ひながら氣を付けて居ると、よく喋舌る事、よく喋舌る事、日頃お喋舌だと云はれて居る私も内々舌を卷いて仕舞つた、巣鴨では「えゝ病院へ御用のおあんなさる方は」と大きな聲を出す、「おついでに監獄も近く御座いますから」と隅の方から黄色い聲で云ふと「いづれ其内に又」と答へる、此樣やうな愚にも付かない事を云つてはキヤツ〳〵と若々しい聲で笑つて居る、やれお前さんのあれやいゝが、私のは厭だの、と云てる、一人が銀杏返しに插して居た鼈甲の髮櫛を脫て隣のへ見せると受取つて透して見るやら、此ばらふが眞個に佳いねえ、私も欲しいわと又一しきり賑かい。

　池袋で一緒に降車て私達はずん〳〵畑道の方へ行きながら振り返つて見ると後からしやなりくなりとついて來る、各自に疊んだ懷紙を前髮の上に翳して太陽を除けながら、華美な長襦袢がちらり〳〵と見える、道を知らないから私達の後をついて來るのかも知れない豈夫お墓參りに行くのでも有るまいから、鬼子母神樣へでも行くんなら途が違ふのにと云ふと又餘計な心配を始めると云つて笑はれる。

　秋晴れで富士山が眞白に判然とよく見える、老けた尾花が一本刈り殘されて風にゆらめいて居る。

墓守にお米や鹽を渡して私達は母樣のお墓の前に行く、何とも云へず唯だ寂しい。石碑をほつてゐる石屋が絶えずカン〳〵と云ふ音をさせてゐる、大きな銀杏樹が黄色になつて既うそろ〳〵落葉をはじめた、私は茫然と立つて居た、誰れだつたかの句に『君が墓に參りし者や我一人』と云ふのと『詣りたる墓傾きて芒かな』といふ俳句を思ひ出して染々佳い句だと思つた。

歸りがけに鬼子母神樣へ廻ると先刻の女がまだお宮



の處をぶら〳〵喋舌りながら歩いてゐるのに逢つた、途中で早稻田の帽子を被つた人が逍遙してゐるのに幾人も逢つた、中には自然にあこがれてる方々も有らうと心に思ひながらすれ違つた。

家へ歸つたら一時過ぎお腹が空いた、夫れ程好きでも無いちらしが何日になくお美味しくつておかはりまでした。

叔母樣が母樣のお室に遊びに來ていらして御苦勞樣よく行つてらした子と相變らずお世辭がいゝ。

お羽織が出來上りましたと云つて下女が持つて來る次の裁縫を積つて渡す、彼れ是れして居るとお風呂の

お加減が宜しう御座いますと居つて來る、お夕飯は何を拵へませうと聞きに來る。

犬が庭木戸をパリ〱爪で引掻きながら外へ出たがつてないて居る、誰れか啓けてお遣になつてと云ふと先刻御不在にお客様が來して大變ほえたので最う外へ出すなとお母様が仰在いましたからと云ふ、困つたもの、やかましくつて耐らない。

晩は皆でトランプをして遊び餘り大勢だつたので全然のぼせて仕舞ふ。

十一月十三日　水曜日　晴れ

小春日和の氣持の好いお天氣、お湯殿で顏を洗つて直ぐに髪を結ふ、何だか最う指先が冷めたい、お湯の熱いのを持つて來させて癖を直して丸髷に結つて鏡を見ても又出來損なつた、如何して皆様は彼麼にお上手にふつくらと出來るのか知らと獨言を云ふと、背後に立つて見て被居した母様が夫れはお前の毛が惡いからだよと仰有る情無い事。

朝の内のやかましさ、馴れた身にも耳ががん〱する、廊下をばた〱と馳け出すやら、お嬢様お友達がお誘ひに被來いました。坊ちやん辨當をお忘れ遊ばしては不可ませんよ。あらお包みが落ちそうで御座います等といふ聲々がして軈て行つてらつしやいましと玄關へ送り出す迄は全く火事場宜しくで、後は火の消えたやうに靜かになつて仕舞ふ、と犬までが淋しがつて縁先に來てクウ〱鼻を鳴す。

新聞を讀み終つて机の前に坐つて讀み掛けの書を讀んで居ると、鳥や魚や三枝等の御用聞きが換る〲來る、其度毎に一々障子を啓けては如何で御座いますと聞きに來る、あゝ又かと五月蝿いから遂い振り向きもしないで、何が有るの、要るならとつてお置きよと好い加減に返辭をして其儘ずん〱先を讀んで行く、と今度は御本が參りましたの、古梅園が參りましたのと云ふ、御本や古梅園なんかなら待つてる位だから勢いよく早く見せてお呉れと答へてやる。

午前は染々讀書も出來ないから既う本も伏せて仕舞つて縁側に出ると、丁度日向に干して在つた坐蒲團の

の綿がふく／＼して暖かそうなので、一番ふくらんで居るの〻上に坐つて凝として居る處はまア自分ながらどら猫位なものだと思つた、既うすつかり冬になつて仕舞つた柿紅葉が奇麗だ。

　餘り好いお天氣で家に居るのも惜しいと云ふので午後から直ぐの妹の治さんと末の豐ちやんと弟と從弟の國夫さんの五人で瀧の川の紅葉見に行く。

　田端の方から遠廻りして徘徊歩く、草履で田舍道をホク／＼歩くので塵埃で足袋が茶色になつて氣味が惡い、おまけに裾廻しの色が降りるので耐らない、私は豐ちやんの手を引きながら草臥れやしないのと聞くと否えと頭を振りながら平常よりは温順しい、先刻出がけに三ツ打ちにあんだ髪が既うずりこけて仕舞つたので、リボンでぎゆうと結び直してやる。

　花の時と違つて秋だけに紅葉見る人は皆眞面目だ、偶々掛茶屋でお酒なんか飲んでる人も有るけれどもおとなしく談して居る位で至つて靜かなもの、畫家が二人夕映の紅葉を寫生して居た、歌や發句が短冊に書付けて小枝に下つてゐたから手に取つて讀んで見たら皆つまらぬものばかり、中でも川柳見たいな俳句が澤山有つた、同じ紅葉の句でも『笛鼓能も亂れや夕紅葉』とか『へし折れば雲に聲あり夕紅葉』たしか兩方とも彩雲とか云ふ人のだと記憶して居る、斯ふいふ佳い句が出來たら甚麼に好いだらうと作つた人が羨ましい。

　羨ましい等とうつかり口に出て云はうもんなら、夫れこそ女だつて出來ない事は有りやしないつて言はれそうだけれども扨自分が作つて見ると第一難しいのに驚いて仕舞ふ、それを思ふと星布女やその女は豪い、『山口や落葉に鳩の歩みよる』だの『館の灯のあり／＼と冬の木立哉』などは分けても私は大好き何とも云へず只だよくつて耐らない。

　歸つて來たのは灯點し頃でぐだ／＼になつて仕舞つた、直ぐにお風呂に入つて好い氣持になつた、何だか草臥れた故か眠くなる、ご飯を喰べてお茶を呑みながら、くだらぬ話をして今日の日記を付つて床に入る丁度十時。

十一月十八日　月曜日　雨降る日

垣根の菊の葉が既う末枯れてがさ〳〵風に鳴りながら、黄色に白はとり〴〵の花が果敢なく咲き殘つて居る、小雨が又ばら〳〵と降つて來た。

縫ひかけの綿入を縫ひ上げて仕舞つて指拔を針函の中にカチリと入れるといつでも中指が氣になる、指拔をはめて有つた跡が顯々と淺猿しい程異脊についてゐる、既う金は止そう眞綿で一個拵らへやうと思ひながらまだ其儘になつて居る。

机の前に坐つて本を讀んだり手紙を認めたりする、相變らず字引を引く字が多いので首が痛くなつて仕舞ふ、語學のよく出來る方は羨ましい。

夜になつて今夜こそは、澤山俳句を作らうと思つて一生懸命になつて考へ込む、俳句と云へば此間美術倶樂部の展覽會に行つた時蕪村の三十六俳選と云ふのを見た、立派な函に入れて有つて、錦の表紙がついて居た、開けて見ると畫と句が書いて有る俳畫で美事に書いてある、夫れが欲しくつて耐らなかつたからお父樣に願はうかと思つたら何時の間にかもう何處かへ行つてお仕舞いなすつて被居つしやらなかつたから止して仕舞つたが惜しい事をした等と遂い考へが横道へそれる。

書生部屋で誰れだか尺八を吹き始めた、雨戸が閉つてるので遠くの方で微かに聞える、何だか好い氣持ち耳を澄して聞いて居る、よく明け易すきなんていふ畫に尺八を吹奏て居るのが有るそれを見ると全く短夜といふ感がひし〳〵と身に迫つて來るやうに思ふけれど私は倘且秋がよくはないかと思ふ、これや初夏に笛の音を聞くのも嬉しいけれども秋の夜は又格別、兎に角私は日本の樂器中で笛が一番趣味深いやうに感じる。

雨がはら〳〵と庇を打つ、何だか靜かな寂しい晩、物思ひに耽けるのも斯いふ時だらうと思ふ雁が鳴く、私は熱い紅茶を入れて貰ふ。

犬がないたから郵便函を見せにやつたら思つてた通りお手紙が來て居た。

十一月廿一日　木曜日　晴天

まぶしいやうな佳いお天氣、暖かだつたから羽織も脱いで仕舞ふ、次の間で誰れかくさみをする。牛込のが二人連れで相談に來る流石は凝つたもの頭の上から足の先まで奇麗だ、わけて肩掛はつく／＼氣に入つて仕舞つた、やれ着物なんど欲しく無いの何のつて云ふのは全く夫れは自分の痩我慢に過ぎない尚且美しい物は誰れにだつて美しいのだもの人が欲しいければ私だつて好い着物は着度い、美しい物は欲しい。



衣服で思ひ出したがさる交際上手と云ふ評判の有る夫人が『私なんぞは間拔に見えるんですから、せめては身の廻りの物だけでも流行に遅れまいと思ひますよ』と云つて笑つた事が有つた、其時は私は心の内で妙な人だと可笑しかつたけれど今思ふと成程然ういふ物かしらと思ふ。

午後になつて牛込のが歸ると入れ違ひに久しく會はなかつた友達が遊びに來た、相變らずの華美造りでお化粧がお上手に出來て居るので平常よりも二つ三つ若やいで見える。

お話は例によつて三越と天賞堂と關口とで持切り、今度新調へる晴着の模樣を何にしやうかと苦心慘憺よ、とか先年叔父樣にスヰッツルのお土產に下すつた時計ね彼れ既う飽きて仕舞つたから今度は眞珠入りの

首掛をお父様に買つて頂かうと思つて目下策戰計畫中よとかルビーのピンを落して仕舞つて私眞個に煩悶したわだけども彼んな物格別惜しくもないワ又ついでに天賞堂へでも行つて來ませう、と云ふのが始まりで紅寶石が欲しいの夜光珠が佳いの何のつて欲しい物だらけて何でも自分の思ふやうに買へないのが口惜しい、見れば欲しいのが人情だわと飛んだ處へ理屈を付けてじれ出す。寒さにあたつて此兩三日母樣の御病氣がよくないのでお醫者が來る、夕かた體温器で量つたら八度九分有つた。

寫眞が出來て來た、皆妙な寫り方可笑しくなつて笑つてる處へ弟が入つて來て、やア素敵なスタイルだね等と云つて美代ちやんを調戲つてる妹も始めの内は一緒になつて笑ひ崩れて居たのが弟の調戲ひ方が餘り烈しいので今にも泣き出しそうになる、夫れと見て、やア夕立に來らちやア、耐らないと云つて弟は急いで逃げて行つて仕舞ふ。

晩は珈琲を飲みながら靜かに話をする。

私は日記を付ける治さんは鉛筆を削りながら眞が折れると云つては疳癪を起す。

十一月廿四日　日曜日　晴れ

北海道から林檎を送つて來る、香が厭だと皆は云ふけれども私は此香が大好きだと云ふと治さんは笑ひながら、何ならお机の上に置き度いでせう香をかぎながらと云ふ人が惡い事、何もイプセンの眞似が仕度い譯ぢやア無いけれど佳い香だからと私は辯解する。

治さんの髮を唐人髷に結ふ髮や前髮は自分でも下手ぢやアないと思つたからさア天晴れ水の滴るやうに結ひ揚げて皆を吃驚させやうと云ふ野心から、少し寒いけれども羽織も脱いで仕舞つて、神に入つて出來上つて見たら惜しいかな根が右に曲つて居たのを氣が付かなかつた、根につれて髷も右へ傾しいで居る、私はもう際は惡くなつて仕舞つて幾度も結ひ直そうの、お氣の毒だのと繰り返す、其處へ下女が換る換る入つて來ては後から見て『まア大層お奇麗に結がりましたこと』と云つては前へ廻つて『オヤ少し根が』と後は氣の毒

そうに私の顔を見る、私も既う耐らなくなつて成るたけ妹の髪は見ないやうにする、でも治さんが氣が付かなでいる時はちよい〳〵と見上げては失敗つたと心に思ふ、治さんは平氣なもので其頭でお客樣の前でも何でも出るには私も内々閉口して仕舞つた。

お座敷で各自の室に菊の花を挿す、いけるのは面倒だから無論投げ挿し、でも口では自然の方が趣味が有りませうと云ひ譯をして置く。

私と治子と藤枝（親類の者）と三人で火鉢をかこんで種々な話の末義太夫や新内の事になる私は新内は聞いた事が無いから駄目だけれども紫朝の新内が聞き度いと治さんが云ふ、私も聞き度い、彼いふものも一ト通りは知り度いと思ふ無理にせめたてゝ藤枝に米山甚句を低聲で唄つて貰ふ。



少さい妹や弟の衣服をほどくのやら積るのやら一一撰り分けて下女に渡す、ついでに炬燵の事も命令つけた。

私は長襦袢を縫ひながら妹のお習字や本等を見てやる今日は母樣が大層快くつて一度もお床にお就きなさらない、此樣な事ばかしなら眞個に好いと嬉しくおもふ。

夜は文法を少しばかり見て、讀みかけの本を開く、雁が鳴いて過ぎたので一寸耳を澄す。

手洗の雨戸を啓けると遠くの方でピアノの優しい音が聞える、遂い近頃引越して來た年若のピアニストの手慰みだらうと何となく懐しい。

十一月二十六日　火曜日　晴れ

一時奇麗だつた庭の木も全然落葉して淋しく成つた又一つ年を經るのかと思ふと厭になる、何だか今年が一番月日の經つのが早かつたやうに思ふ、母様などは一年一年段々早くなるよと仰有る全く然うかも知れない、最う直きに此年も過ぎるのかと思ふと何となく情無いやうな氣がして譯けもなく悲しい、一年の間に何が出來たらうかと凝と考へて見ると是れぞと云つて一つも出來たものは無い、全く何に暮した月日だらうか。

今日から北の方は全然閉めさせて仕舞つて母様のお部屋には大きい角火鉢と丸火鉢とに炭がくすぼらないやうに澤山つがせて屏風を立廻して暖かにして置く、母様の仰在るには襖や障子の隙間の風も冷度くつて寒いけれども、疊の目から來る風がそれは何とも云へず寒いよとの事私なんかは些少とも氣が付かなかつた事だと思ふ。

治さんは朝から大層なふさぎ方如何したのと聞いて見たの大の仲好しのお友達へ昨日手紙を出したのまだお返辭が來ないからだと云ふ、何の事だらうと可笑しくなる、治さん眞面目に成つて、でも一昨日學校で音樂會が有るから是非被來しやいつて席迄とつといて下すつたのに行かれなかつたから夫れで憤つて被居るんだらうと思ふのよ、えゝ乾度然よう、然うに違ひ無いわ、何しろ一昨日行かれなかつたのが何と云つても私が悪いのよ、私だつて彼の方見たいにヴアイオリンでも上手なら好いけれどもあゝ不滿ないわお菓子でも食べませうかと云つてる處へ細い封筒を持つて下女が只今郵便がと云ふ、治さんが受取つて封を切る、何にも憤つてらつしやりや仕なかつたわ、只だ隨分だつてああよかつた、よかつた、と是れで全然機嫌が直つて、治さんと私は庭下駄を穿いて少しお庭でも歩かうと云ふので茶室の方へゆく。

隣からヴアイオリンがよく聞える餘り上手でも無いと

見えて同じ處を幾度も〳〵繰り返して居る、袖垣の山茶花が佳い色に咲いて居るいつ見ても薄い色の此の花は時雨といふ時候に合つてるやうに思はれる。

伯母樣が被來つたと云ふから私も治子も家へ入る、藤枝が二年振りで伯母樣に逢つたと云ふので話は却々につきず夫れから夫れへと種々な方にはづんで賑かだ、藤枝の云ふのにアイヌの追分は全く何とも云へず好くつて聞いてると氣が遠くなつて仕舞ふやうだ如何かして覺えて東京へ歸つたらお土產に聞かして驚かして上げやうと思つて一生懸命になつて二年かゝつたけれども駄目ですねえと云ふ。

美音と云ふのは全く好いものだと云ふ事から苗賣なんか彼れで昔は聲自慢か何かでやつたものだとねえと伯母樣が云ふ、春雨の降つてる時なんか遠くの方て苗賣の聲でも聞えるといかにも春らしくつて好いものだと私は思ひながら聞いて居ると藤枝は苗賣で思ひ出しましたが納豆賣には夫れは夫れは佳い聲の人が居てそれが餘り聲が好かつたものだから三人も結婚を申し込んだ者が有つたんだつて、夫れも皆良家のお孃さんだつてと藤枝は眼を丸くして云ふ、幾程聲が佳くつたつて納豆賣ぢやア仕方が無い、美音で御座いますとも云へやしないもの彼れや歌でも何でも有りやしないと伯母樣はませ返す。

聲でも何でも好い私は何んでも一つ人に勝れた事が出來れば甚麼人だつて好いと思ふ、何も學問ばかりが豪いのぢやア無い、よく藝人なんて云ふと一口に賤しい者のやうに眉を寄せたり何かなさるけれども、其麼事を遊ばす皆樣のお氣が知れない、と何時でも私は然う思つて居る、少し藝を褒めでもしやうもんなら旣う墮落でもしたやうに思はれるし、溫順しくして居るのが一番好いと年を經つた母樣や伯母樣が仰在るけれども夫れぢやア又不滿らない、何にしても女に生れたのが損なのだから仕方がないと諦らめられないけれどまア諦らめて置く。

藝と云ふ事で思ひ出したから忘れ無いやうに書いて置く、例の親類中第一のハイカラと人も思ひ自分でも

思つて居る久夫さんが結婚した新夫人が家風にも合はないやうな夫れは〳〵意氣な人だとかで、親類中で非難をされてごた〳〵がまだ納まらない、が尤も盛んだつた時丁度用事が有つて私と治さんが行つたら其新夫人もお座敷へ出て來たので、叔母樣が切角遠いのにみいさんや治さんが來て與れたのだから何か聞かして上げたらと云ふので始めの内は出來ませんからと斷つて居るのを三味線まで持つて來られたので否應なしに大薩摩や何かを聞かして與れた、夫れは佳い聲で三味線もよし私は其時何とも云はれない心持がして來る、治さんはそつと眼を拭いて居るから、泣いたりしちやア惡くつてよと低聲で云ふ。

まア是れだけの藝が出來るやうに成る迄にはどれ程苦心をしたのだらう、何の苦しみも知らずにすら〳〵と育つた者が、只だ自分の身分や親の威光を着て、やれ賤しいと云つては面を素向けたり、三味線等はと云つては眼でさげすんだりするのは眞個に如何いふ心なんだらうと其處に居並んで聞いて居た方達が濟まないけれども憎らしいやうな氣がして、反つてよくないと云はれて居る新夫人の方が尊いやうに思はれた、最も私なんかは批評さへ出來る身でないと情けなかつた。

品子さんが來らしたと云ふから私と治さんはお座敷へ行つてトランプをして遊んだ、お風呂に入つて日記を付ける、今しがた十時を打つたやうだ、何んだかいやに夜が更けたやうな氣がする、廊下の灯を消しに行く。

編者曰、「令孃日記」は當世才媛の聞へ高き某令孃姊妹の彩筆になつたもので、上下二篇に別ちました、姉なる峰子孃の表情に富めるゆかしい筆の跡は即ちこれでございますが、引つゞき次號の誌上に活潑なる妹治子孃のを揭ぐるつもりでございますから、十五日の發行の增刊誌上にてゆる〳〵と御覽下さる樣願ひます。

春興小品

齋藤弔花

一　濱邊の初日の出

海樓の除夜を送りて、美しき朝日影を迎へしは今より六とせ前、客遊して須磨にありける頃なりし。須磨を初めて見しは、わが幼なき頃なりしが、折柄、春の日長閑にして、須磨寺の櫻雲、雪と散布く青苔の上に、緋毛氈など人の打擴げ、折重擴げて、中には、太鼓打ち、戯れ踊るもありき。後西鶴が五人女の寛濶なる華奢風流の遊伎を讀みし時、この光景錦繪の如くわが心を動かしたりき。美しきは幻想なり。朧なる記憶の柔惋なる謎は、詩を讀み行く時の心の時めけるにも似て、これより須磨は、わか爲めにこよなき自然の戀人となりぬ。

　京に住みける折も、この海岸の溫かに、穩やかなる春の穹空を忘れ得で、幾度も此地を訪たり。秋は鰯網曳く濱の夕ぐれ、夏は蜻蛉飛び交ふ町はづれ、四時の光景一つ〳〵わが爲めに懷かしきの情を注入るゝものに非るはなかりし。程經て、神戸に招かれ俗務にたづさはる事となりしかば、圖らずも西須磨に住て、飽まで山村水廓の趣味に觸れたり。

　われは西須磨の增田といへるが離れの西洋室を借りて住みき。この家は村の豪族にて、家族の外に數多く召仕ありいづれもわれに馴染みて、潮湯立ちぬ。まづ浴たまへ。魚漁ぬ。新らしきを。などゝ待遇し他人の如くならざりしかば、正月は共に廣間に雜炊を祝ふことゝ定めつ。除夜の鐘聞くも睡らじ。必ず徹夜だ。とて、一家は喜び歡びて大晦日の宵に入りぬ。村に唯一の遊樂場は、停車場附近にて、小さき寄席あり。夏より冬にかけて、壯士芝居淨瑠璃などを演く。大晦日には神戸の某俳優一座、小栗判官を演ずといふ。村の衆は言ふも更なり。別莊、奥樣、令孃方、村の人は土間に、毛布など抱えゆきて陣取り、中には、火鉢など携へ往もあり。顏馴染多きふれの宿の子供を伴て覗き

見るに、手麾して此處に來たまへ。此處になど散髮屋の若い者、漁師の息子。中に交りて阿呆重の禿頭もあり。狹き小屋ながら二百人を入るべし。道化じみたるへ下手芝居ながら、手を拍もの、口笛吹きて囃しそやすもの、いづれも村落の長閑さは見えたり。幕間々々には、醉れる同志が、明日は年一つ取るぞなどいふ。外には小路を風の音、洪濤の聲。砲の響のやうに通ひ來る。芝居終て、夜更けの霜を踏みて歸り、宿の小女等と箸紙に各自の名前を書などす。

明れば新春第一日。床の梅花も早や二三輪蕾を破れるあり。されば雜煮の箸措くや駈け出でゝ濱に出づ。十三の春迎へし宿の少年を伴ひたり。この少年の頰の美しさ。林檎に似て、血の色ゆたかに、行末の賴もしき。宛ながら、曉の明星落ちて、ほの／＼と、和田岬薫り、明石目さめて、一天潮紅、瑠璃盤上を染め行くにさも似たり。君の頰に似て、美しき朝ならずや。少年はわが意を解せず、眸を凝らして、凝膏の如き海の夢見心地に恍惚たる樣なり。

昨宵の風は何處に遁れて、姿を隱せる。そよ／＼と彼方の松の梢動げるのみ。四邊いと靜かに、濱にはわれ等の外に人の影なし。今日は、沖に帆影も稀に、小さき海神祠の邊り、朝風に飄がへる旗幟、數流、その影は細く、眞白の砂濱に横はれり。

「靜かなる朝や。」とわれは獨語つゝ飽す須磨の海、遠く、靄の冠、花嫁の面羞げに、刻々に脫ゆく淡路の島を望みたり。

「日出づ。日出づ。見給へ。」瞳々として炬の如きを。」少年は、手を擧げ、面を染めて叫べり。

淡路の翠巒に心奪はれたるわれふりかへれば、日輪の光火よりも赭く、その光芒四射、旋轉して、茅停の浦曲見る／＼紫紅の光を被りぬ。やがて、魚盤を提げたる一老漁夫濱に出で次で四五の若者、いづれも幟の下に坐して、蹲きて旭日を拜し。口／＼に何事をか唱へて、一齊に手を拍ぬ。今歲も生計に幸多かれ。見よ、稜々たる骨立逞ましき濱の住人は、昔、天の榮光を顯さん爲めに、ガリラヤの湖に網を編みし使徒の如くに

輝ける面に希望滿ちたり。一少女あり。白き腕露はに、双手を高く、海の彼方に向つて「あゝわが海に浮べる父上。兄上の幸をこそ。」その聲澄みたり。頭には寒菊の花を挿せり。美しき繪の如き濱の正月。われは少年に心付けられて、われに返り、踵を旋して、旭旗風を交叉せる停車場の方に向ひぬ。

二　山里の新春

濱に春を迎へし翌年は、われ家を畳みて、故里の小庵に歸りぬ。わが家は、天王山の麓、淀川の滸、里山陰の孤村なり。自然の景、勝たりとにはあらねど、山村の靜寂はひたゝき(鳥)の羽うちに、藪鶯の巣立の夢破られぬべき境なり。後方に小山ありて、通ふ細徑には、殘んの野菊が蝗の骸を止めて僅かに大蓼の花の香の潤り小川に滿ち、萬取繕ろはぬ姿を愛して、われは幾たびもこゝに春を迎へぬ。秋、黄珠を綴りし東籬の柚の實、かち落す童が竿を洩れて、なほ二三を止め、羽膨まして、雌目白の、哀れに冬を謡ふなり。風



かう〳〵と、すべて朽葉を落し盡したれば、木の間の星の數も增りぬ。

侘しき鄙の住居ながら、こゝはわが母上の五十幾年の恙なき住家なり。今、爐の火はいきりて、三寶荒神、天照皇太神宮、奥の淸正公、さては、藥根を嘗舐て、諸病を醫せし神農氏、御燈に供物。注繩はりたる神棚、佛壇、何となく心改まりたる心地す。大晦日の宵に、わが姪の產氣つきて、年移るといふ朝の正零時、生みしは玉の如き男の兒なるに、一家俄かに一人を增せし喜ばしさなどを語り合ふ。伯父上は、歌一つ出來たり。六十一の本封過ぎてなほふか生の鞠よりも圓かに、環にして何時盡きんとも知らず。との意味を含ませありなど語る。酒は盃二つと重ねさせ給はぬに、あまりに目出度ければ迚、早や正月取越しに、大晦日の夜半、わが奥の座敷には酒宴の盃、巴の如く舞ふなりけり。雨戸の隙、漸く白くなる頃、村の甲乙、家族打連れて、何事をかさゝめき合ひ、わが家の向ふ小徑を朝の露踏みて、我一にと、早きを競ひて、森の鎭守に詣ず。人の心改たまりて、神々しき森の火影に拍手の音、神代の昔偲れて床かし。軒の雀、囀づる頃、生々しき稚兒の乳呼ぶ聲。此の寂を破りて、籠の金翅雀も勇みて囀づりそめぬ。厨の女は、赤き襷外して、小瀟洒したる衣換を急ぎ、庭の守、斑犬も、新らしき首輪を祝はれぬ。小姪十一。彼女が最愛の友なる玉には何をか驕れる。庭に風下り立ちて羽子突くを、彼は緣の敷物に圓の眼打見張て、眺め入るなり。かくて山里の春は靜かに〳〵花鉏の戸を出づるが如く、小山簗の優しき光を、谿間々々に投げて、岩陰の小蟹の夢一つ一つ覺しつゝ、里に訪づれ來れば、野山頰白頻りに啼きて、四十雀、落葉の庭に群飛びぬ。里の子は、唱歌謠ひて、君が代の聲は村に溢れつ。

四　利根の川船

旅して利根川を溯る。十二月晦。船の新年を迎へんとなり。漕は老ひたる船頭にて、その孫なる吉と呼べるは十四なり。翁は昔、鍛へたる筋力強き腕に櫓を

繰り、得意の美音もて、潮來節を謡ひ、怜悧げなる、額廣き少年は舳に坐して、梶を握れり。彼の眼、あらぬ方に向ひ、涯しなき川霧の彼方、雲低う垂る邊に迷へり。老翁は漕手を止め、さう〳〵と岸の蘆の根に船を繋ぎつ。

「月出たり見たまへ。水に映りてその色の美くしく溶んとするを。利根の秋行いて、月影寒むし。雁鳴き渡る頃過ぎて、今宵の如く、長閑に、暖く、月も醉るに似て、まことに、花にかゝる春月もかくや。かゝる良夜は稀なり。」といふ。



新月の眉に似て細き頃より、如何にこの月の夜待ち侘びし、利根の夕霧に月を愛で、枯蘆の風を夢につゝみて、明旦の朝日影を望み見んには、わが半生の望これにて酬ひらるべし。など語る。

江上の春秋、去來何の關心するところなしといふ。卿等の上のいかに羨ましきかな。とわれは泌々と老翁の顏を打見戍りていふ。健かなる彼の腕の力その元氣よき顏の色、平和らしき眼の輝き、げに都にては見られぬ優しさと剛さとをこの老翁は具へけるなり。翁は、艫邊に休らひの腰を下し、頑丈なる手つきにて、眞鍮の太き雁首に、煙草をつめ込み、息勁くこれを吸居りしが、パと白き烟を吐きて、烟の中より聲を靜かに、

「この川に帆を張りて小さき通運の荷運びは疊の上を漕に似て、いと安らかなる世渡りなり。われも今は、江上の家を今日は彼方の村に移し、明日は此方の岸に繋ぎ、岸の上なる激しき世狀には遠ざかりつれど、若き血潮の躍りし頃は、この生活に厭き果てゝ、大海の船夫と成りて、鯨の背に銛打つことのみ想ひ慕ひ、村の若者、三人と語らひ、妻子を捨てゝ、運命をこの船板一枚に載せ、源といへるが帆を張り信といへるが艫を漕ぎ、われは、船出の歌勇ましく自慢の聲振り立てゝ、漕出でしが、恰かも大晦日の、今宵の如く月霽れて一天の碧、紫の帳を張れるやうなりし。行手の物語に心を勵まし、漕ぎ〳〵て遂に川下に流れ、大海の波の音を聞きし時、思はず起ち上りて、手を拍て祝ひぬ。かくて荒浪の荒き世渡りの春老ひ秋去りて、つく〴〵と孤村の月の宵、帆を上げし門出の事思ひ出で、懷かしさに堪やらず、瓢然として、友にも告げず、獨り急行して里に歸れば、半白なりしは鶴の白羽に、稚兒なりしは、銀杏髷似合ひ、わが打捨て置にし小兒こそ、見たまへ。この尩なる少年の父とはなりける。人の顏老いたれど、いづれも一たび失せたるわれの歸來に喜びて、酒樽ぬきて、醉ひ祝ひ源の事、信の事、その家族に責問はれ、二人が上の事など打語らひ便して、二人を呼び戻し、地につける古き生計を營みて、皆村の衆となりぬ。」など物語りて、遮莫、家出して、天晴の功名をなど空想の影を慕ひし時の旺なる思ひ出今また何處にかわが心の隅に求むべき、安息なる夢に任せんは、荒き世の面白味知らぬものにこそなし得べけれ、一とたび荒濤の鬪ひに苦患の中なる壯快さを味ひたるわれは、骨枯れ、肉落ちたる今もなほ折々は若かりし世の戀しうて。」と次ぎぬ。

月は苫の屋根より青き光を投げ、蘆の葉は露を結びて、閃々と玉と光れり。用意の毛布を敷き、縕袍を被り、うと〳〵する間もなく、童、目敏く「爺さん、お日樣出たぞ。」われは跳ね起きて、筑波のかげよりさし上る、曠原十里の朝日を拜みき。空にはなほ星の爛々として、ふるへば落ちんばかりなる。早や茜して、明治〇〇年の春の初日は美しき水の面に流れ翁が靜かなる其船をめぐりぬ。

春遊び寶引合語

△谷間の鶯……（印紙）＝春（張る）をまつ、
△現今の世渡法……（火箸）＝金でなければいかぬ、
△悋氣深い夫婦……（焼豆腐）＝両方からやく、
△婦人の十八番……（焼餅）＝やきもち、
△新聞の辻占……（海苔）＝あぶりだし、
△一間の中で君を抱く……（玉子）＝黄味を抱く、
△不老不死の薬……（梨）＝なし、
△良人の留守居……（妻楊枝）＝妻用事、
△暗夜の美人……（炭團）＝眞ッ黒、
△浮氣の病氣……（鯉一尾）＝戀、
△オールドミス……（豌豆）＝縁遠し、
△新婚旅行……（男足袋、女足袋）＝男女の旅、
△天の岩戸……（紙入）＝神入ります、
△秋の夕暮……（インキ）＝陰氣、
△當世紳士……（香水）＝こすい、
△吉野の春霞……（眼鏡）＝花（鼻）にかゝる、
△津々浦々の眺め……（懐中日記）＝海中に月、
△法螺先生……（大風呂敷）＝大風呂敷をひろげる、
△松の内……（帯）＝しめ（注連）て飾る、
△待人來らず……（マッチ十個）＝待ち違う、
△舞踏の始まり……（前かけ）＝舞ひかけ、
△秋の紅葉……（齒磨粉）＝葉が美しくなる、
△電話の呼聲……（孟子）＝モシ／＼、
△出雲の大社……（紙屑籠）＝諸の神集る、
△汐干狩……（蛤のがら／＼）＝獲物は貝、
△谷間の櫻……（をかめの面）＝花が低い、
△春の曙……（空氣枕）＝寢心地がよい、
△差向ひの夫婦……（旅）＝水入らず、
△媒妁人……（糊）＝はなれ／＼を固くする、
△曾我の五郎、十郎……（鏡臺）＝兄弟、
△伊勢の濱荻……（達磨）＝直（足）がない、
△若者の放蕩……（筆）＝先で苦勞する、
△相合傘……（硝子徳利）＝中よく見える、
△處女の初戀……（封筒）＝情（状）をこめる、
△亂暴な子供……（洗い粉）＝荒い子、
△洋行……（靴下）＝西洋の旅（足袋）、
△富士山……（白扇）＝倒にかけて、
△正月の神棚……（簪）＝神（髮）かざり、
△下手な銃獵家……（鳥に下駄）＝とりにげた、
△疊二枚敷……（壺一個）＝一坪、
△ヒステリーの原因……（錐）＝氣を揉むため、
△玉手箱……（洋服襟）＝カラ、

△一ト山百文……(やすり)＝安賣り、
△西洋館の夕立……(ぬれがらす)＝濡れ硝子、
△互角の角力……(水　入)＝水を入れる、
△內氣の人……(日記帳)＝萬事をひかへる、
△懸想文……(鉛　筆)＝艶筆、
△菅公の配所……(財　布)＝宰府、
△放蕩息子への意見……(糠に釘)＝きゝめがない、
△三疊又は四疊半許り……(獨　樂)＝小間、
△齋藤別當實盛……(黒　油)＝白髮染、
△雨後の筍……(　笛　)＝殖え、
△女房天下の亭主……(座布團)＝尻にしく、
△長くて這らぬもの……(切手箱)＝切て入れ、
△戀病……(てがら三色)＝みそめてから、
△命の取り遣り……(毛　布)＝決鬪、
△親類同士……(團　扇)＝內輪、
△困難なる問題……(もつれ糸)＝解けにくひ、
△玄關の呼鈴……(磁　石)＝人の來た(北)を知らす、
△應仁の亂……(罫紙三帖)＝京師慘狀、
△仁王門……(灰　篩)＝金網を張る、
△貯金玉……(石鹸箱)＝節倹を入れる、
△元の鞘……(修身書)＝身を納める、
△大忠臣……(杓　子)＝御前をすくふ、
△御寺の臺所……(　栗　)＝庫裏、
△御所の櫻……(鬱金木綿)＝右近、
△關所……(繪葉書)＝切手なければ通行出來ない、

△悋氣深き奥樣……(　薪　)＝焼付くれば燃え上る、
△盲目の芝居行……(楠公の唱歌)＝見ずに聞く(水に菊)、
△あんよが出來た……(炬燵やぐら)＝子立つ、
△破れ靴……(白　米)＝履くまい、
△淺間山……(火吹竹)＝火燄を吹く、
△男女の痴情……(寒暖計)＝熱くなる程上りつめる、
△加藤清正……(蛇の目傘)＝紋所、
△文士の戰爭……(筆　洗)＝筆戰、
△金満家……(懷　爐)＝懷が暖い、
△富の元……(石　鹸)＝節倹、
△朝顔の花……(郵便受函)＝毎朝開く、
△大相撲……(炬燵櫓)＝四本柱、
△將軍の名譽……(線香、杓)＝戰功に爵を賜ふ、
△お世辭もの……(上等銚子)＝ちようしがよい、
△早取寫眞……(　鏡　)＝直ぐうつる、
△金魚の餌……(筆、墨)＝麩ですみ、
△睦じき夫婦……(コップ一個)＝すいて見える、
△日記帳……(リスリン一瓶)＝ひゞにつける、
△不孝者へ與へたきもの……(大　根)＝孝行(香物)の種、
△向ふの寺に貸屋札がある(カステラ)＝貸す寺、
△波風……(葉　蘭)＝波瀾、
△相思の同志……(青　松)＝逢う〳〵として待つ、
△僧侶……(剪　刀)＝かみそる、
△七日の月……(五十錢銀貨)＝中圓、
△役人の出勤……(鑵　詰)＝官につめる、

女ゝたのしし

恭賀新年

追て本年一月より本誌始め各雜誌廣告料値上げ仕候にも拘はらず前年初刷に相增候廣告相受け候は弊館の至極光榮とする處に御座候茲に厚く御禮申上候尙不相變御眷顧の程併せて希上候

博文館廣告係

女（たの三）

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十册

每月一回發行

和裝頗美本 ◉紙數各二百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數個

▲定價 一册金四拾五錢――郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長
三輪田眞佐子女史著

◉緒論●女訓今昔の感●少女時代●女性問題●處女時代●女學の要旨●結婚の意義●家庭の中和●家庭の趣味●家庭と道德●婦人の模範●人生と幸福●家庭と食卓●文明の婦人●家庭と快樂●人生と生々の理●犧牲の精神●婦人の生涯●眞面目●婦人の天職●紅蘭女史の態度●理想と空想●母の責任●家庭教育の標準●教育と家庭分子●習慣の勢力●才德の優劣●教育と遺傳●美的趣味●子供なき家庭●生活の改良●廣義の經濟●婦人と交際●古今の女傑●家庭と老人●老人の短所及長所●婢僕と人道●軍國の婦人●對外的婦人●婦人と慈善●修養の工夫●人生觀●模範的家庭●家庭と物品の二元●安心境●師傅と人物●家庭上の智識●家庭の健全●信仰と詩趣●婦人と高等教育●女德の養成●結論

▶販賣用電話 本局二六二〇◀ ▶發兌元 東京日本橋區

女(たの四)

謹賀新年



●婦人科
●小兒科
專門

午前宅診　午後往診

東京市麹町區飯田町四丁目九番地

女醫　鷲山彌生



美術
漆器
蒔繪

御婚禮道具　ぜんわん　家具　其他　ちやぶく　正杯　製造

ぬりもの陳列場設置
有之候間御隨意に
御縦覽多少ニ不拘
御用向被仰付度偏ニ
奉希上候敬白

東京市日本橋區
室町貳丁目

木屋本店
林九兵衛

電話本局（九百九十五番　千七百十番）
電信略名（キ　九）

衛生評釋　百人一首

はしがき

糸左近

無風流な我には、何故春に、百人一首の歌留多が流行するか、其の由來は知らねども、兎に角、都も鄙も押なべて、春の夜の夢ばかりなる暇にも、なほ恨めしき朝ぼらけかなと、徹夜までして遊ばるゝは事實である。されど〱、中には歌の意味が一向了らね方も有るらしい、イヤ斯く申す我も甚だおぼろげなれど、聊か註釋本を調べて見るに、イヤハヤ大方は戀に非ずんば、悲觀煩悶、即ち歌私的里や神經衰弱的の面々が、九十%を占めてゐる。所が朱に交はれば赤くなるの道理この意味を知つて之を弄べば何時か我身も神經的の人になつて、戀に朽ちなん名こそ惜しけれと、いふやうになるかも知れぬ。されば、今回この新春を利用し、例のおぼろげなる解釋と共に我田引水的の愚見を添へたのである。

我田引水的の評釋であるから、必ず牽強附會の傾ある所もあらう、が併し、その衛生の事柄だけは、眞心を籠めて書いたのであるから、歌留多を弄りつゝ、百首の歌を詠まるゝと共に、百法の衛生も知らるゝといふことになり、「白きを見れば夜ぞ更けにける」、さア夜更けて歌留多は宜しくありませぬ、又明晩致しませうねと、規律ある遊びをなさるゝ便ともならば、此上もない余の本望である。

＊　＊　＊　＊

▲天智天皇　秋の田の、かりほのいほの、苫をあらみ、我衣手は露にぬれつゝ。(1)

〔語釋〕かりほのいほ＝＝「かりほ」とは假りに作つた庵、即ち田の稲を鳥獸どもに荒されぬやうにと守つてゐる番小屋。「ほのいほ」と重ねていふは、恰もつくば嶺の峰といふ類でかゝる言葉の例は幾らもある。苫をあらみ＝＝苫は菅などを編んだ屋根の材料である、即ち屋根を葺ける苫が荒いからの意。衣手＝＝袖のこと。ぬれつゝ＝＝ぬれてはぬれる。

〔大意〕秋の田を番する爲の假小屋は苫が荒いから夜中

は露が漏れ來て、我が袖は濡れては濡れると、天皇が民の辛苦を思ひ遣り、民の心になりて詠ませ給うたのである。

〔衛生觀〕屋根のみに限らず、四方の戸障子乃至は床板に至るまでも濕氣を吸收せぬ質の物を以て家を作らねばならぬ、濕氣を身體に受けると感冒や僂麻質斯などに罹り易きのみならず、家には屋葺と云へる黴菌が生え、それが又自然と飲食物中に入り、胃腸加答兒などを惹起し、一方ならぬ害を爲すものである、故に屋根は可成瓦葺にして壁床板なども外部はペンキでも塗つて雨露の浸入を防ぎ、床下も石或は「たゝき」にするか、左もなくば石灰を濃く撒いて、濕氣を受けぬやうに家の構造を注意せねばならぬ。聖明なる天皇の御製は衛生上から評釋しても大なる眞理が籠つてゐる。

▲持統天皇　春過ぎて、夏來にけらし、白妙の、衣干すてふ、天の香山。（2）

〔語釋〕夏來にけらし＝＝夏が來たらしい。白妙＝＝衣の枕詞である。枕詞は後の歌にも澤山あるから、一應辯明しておかう。乃ち或る言葉を言ひ出す爲に、音なり又意味なりに於て、其の言葉に緣ある他語を添へ、以て句を裝飾し、或は調を整へるのである。故に其の下の語に緣があるけれども、他の部分には何の關係も無い、而して唯昔からの慣例にのみ依る規則で、妄りに用ひ或は新に造ることを許さぬものだ。干すてふ＝＝言葉通り解釋すれば「ほすといふ」になれども、これはただ輕く添へたので「ほす」を延ばした言葉と見て差支ない。天の香山＝＝大和の國にある、當時の都は此の近邊にあつたのだ。

〔大意〕春過ぎて夏は來たらしい、何となれば春の間、着た衣や又仕舞つてあつた夏衣を取り出し、天の香山に干してあるからだ。

〔衛生觀〕これ亦古今東西に通じて、暗誦せねばならぬ御製である。春過ぎて夏に向ふ頃は所謂梅雨期で、雨はシク／＼と降り、暖氣は日に催ほし、黴菌の發生最も甚しいものだ、併し斯る時にも天氣清朗なる日は有るから、此の日に急いで、今まで着慣れた衣服を洗つて干したり、或はこれより着んとする夏衣を簞笥から取出し、而も小高い日當りの宜い所で干すとは、實に行屆いた衛生と謂はねばならぬ、日光に曝せば濕氣の除れるばかりでなく、結核菌でも虎列剌菌でも皆撲滅して了ふものである。然るに文明の今日でも、中には着古しの衣服を押入の隅につくねて置いたり、長く仕

纏つてあつた黴臭い着物を平氣で用ふる無精者も無いではない、歌留多遊の一座の中に、其樣な人が交つてゐたら、「衣ほすてふ」の一句を、殊更に聲高く讀み上げ、大いに辱しめてお遣り遊ばせ。

▲柿本人丸　足曳の、山鳥の尾の、しだり尾の、長々し夜を、一人かも寢ん。(3)

〔語釋〕足曳の山鳥の尾のしだり尾の＝＝「足曳の」は山の枕詞。さてこの上の句は下の長の序詞。序詞とは枕詞と性質を同じくすれども、枕詞は大抵五字と字數が限られて居れど、序詞は字數に關係がない、そして枕詞には不可解の詞が多いが序詞は多く意味が分る、これが兩者の差違である。

〔大意〕長々しい寒い夜、思ふ人とは寢ずに我のみ獨り寢ることか、さても悲しいことだ。

〔衛生觀〕實に墮落極つた歌で、講釋書くにも筆の汚れになる位だ。されば大いに此の墮落の源を糺しておかねばならぬ、支那の古人は小人閑居シテ爲ニス不善ヲと言つてゐるが、これは實に千歳不磨の名言だ。即ち閑居とは日光にも觸れず運動もせず、愚圖々々と家の中にばかり引籠つてることで、心身は懦弱になり、迚も善い思想は浮ばないで不善な事ばかり思ひ出す、不善な事を思ひ出せば從つて不善を爲すやうになるは理の當然斯ういふ人は夜もよく寢られないで、種々雜多な劣情を心の中に描くものである、人丸は豈夫此の劣情を起したのでなからうが、大方當時の懦弱者の心を詠んだのであらう。然るに善く勉めて善く遊び善く食べて善く寢るの法則に從ひ、日中は已が職とする所の學問なり技藝なりを善く勵み、晩餐が終つてから二時間も運動し、日曜等の休日には山水の勝でも尋ねて、天然の美に接し、寢際に入湯をして床に入れば、一日の疲れで、何の思ふことも無く熟睡することが出來て、「一人かも寢ん」の愚痴を滾す暇は無い、何人もさうだが、殊に將來有望の男女青年は、一室の中に骨牌ばかりせずして、暇あらば廣々とした原野に散歩を試み、十分なる日光に觸れ、塵埃に染つた頭腦を洗濯して貰ひたいものである。

▲山邊赤人　田子の浦に、うち出でゝ見れば、白妙の、富士の高嶺に、雪は降りつゝ。(4)

〔語釋〕うち＝＝これは接頭辭で「うち聞く」「うちしたふ」の如く別に意味は無い。　白妙＝＝實は白き

織物を言つたのだが、後には唯白き意に用ふるやうになつた。こゝは枕詞に使つたのではない。

〔大意〕田子の浦の濱邊に出て見渡せば常にも白い富士の高嶺に雪は降りつ降りつして面白い景色である。

〔衞生觀〕古より淑德圓滿な人と尊ばれたり、或は高壽を保つた人は皆自然の美に接して精神を爽快にしてゐる、又同じ自然美の中でも高山大川に觸るゝことは一入精神を崇高にするものだ。此の歌の如きは雪の降りつゝあるにも拘らず寒を冒して濱邊に散步し、巍々として聳ゆる八面玲瓏の富岳を眺め、自然と浮んだる優美の思想を現したのであるから、幾度讀み返しても飽が來ぬ。前章でも述べた通り、家政を取らるゝ奧樣達から物學びしてゐらるゝ令孃方に至るまで、深窓の下ばかりに閉ぢ籠らないで、時々は草鞋穿になり、高山大川へも訪づれて頂きたいものだ、これ欲私的里や血の道を退治する所の妙藥である、嗚呼妙藥である。

▲猿丸太夫　奧山に、紅葉踏み分け、鳴く鹿の、聲聞く時ぞ、秋は悲しき。（5）

〔大意〕奧山に紅葉を踏み分けつゝ鳴く鹿の聲を聞けば殊更に秋は悲しく感ぜらるゝことよ。

〔衞生觀〕蟲の啼く音や獸の叫ぶ聲は、聞きやう取りやうに依つて、何うにでも聞ゆるものだ、其を東洋の人は兎角悲觀的に詠ずるは忌はしい習慣がある。大方猿丸太夫も神經衰弱的の人であつたらう、若し余をして詠ましむれば「奧山に紅葉踏み分け鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は嬉しき」と言はんものを、それは兎もあれ、何人でも常に愉快活潑なる精神を持して愉快なる歌を詠まれたいものだ、これ衞生の大道、又文學の根本であらう。

▲中納言家持　鵲の、渡せる橋に、置く霜の、白きを見れば、夜ぞ更けにける。（6）

〔語釋〕鵲の渡せる橋――七月七日ノ夜烏鵲塡レ河ニ成シレ橋ヲ以テ渡ス二織女ヲ一といふより起つたことで、後には七月七日の夜に限らず天のことを言ふに用ふるやうになつた。

〔大意〕天にさへ白く霜の滿てるを見れば、夜が更けたのであらう、實に更けたのである。

〔衞生觀〕夜の就寢時は冬は十時、夏は八時、春秋は九時頃が衞生に適つてゐる。夫れ太陽の地平線上に昇る

時は、平均冬は六時、夏は四時春秋は五時であるから其時に起き出づべきが眞理である、而して人は平均八時間を寝るべきものなれば、右の如く就寝時を定め、夜更、寝不足、又は朝寝の習慣を附けぬやう、何人も注意せねばならぬ。然るに冗話をしたり、長夜の飲に耽つたり、或は徹夜的の勉強をして、霜が天に滿つるを眺め、オヽ夜が更けた、さア寝ませうでは、不衞生の極端、刄を以て身を削るも同樣だ「早寝早起は健康の本又富の本なり」といふ語を忘れてはなりませぬ。

▲安倍仲麿　天の原、ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に、出でし月かも。(7)

〔語釋〕天の原＝大空をいふ。ふりさけ＝振放、振離、又振仰とも書く仰ぐの意。かも＝「か」は疑ひ、「も」は感歎の辭。

〔大意〕大空を仰いで見れば本國に居た時、春日なる三笠の山より出づる月をいつも見てゐたが、今眺むる月も、矢張その月であらう、嗚呼。と支那に居て慕郷の念を洩したのである。

〔衞生觀〕余は此の歌を打ち誦ずる毎に、仲麿は當時非凡の豪傑であつたことを感歎するのである、何となれば今とは違ひ交通不便な時で、內國に在つて、僅か五十里や百里の旅行をするにも餞別の宴を開き、泣きの淚で別れたものなるに漸く十六歲の身を以て、不完全なる船に乘り、千里を隔つる異郷に行き、勤勉努力留まること三十八年、即ち五十四歲の時に、歸郷の途に上り、海上暴風に出逢ひ、其の意を果さず、已むを得ず立戻つて又唐帝に仕ふること十六年、七十歲を以て遂々異郷の露と消えた、若し普通凡々の人なりせば、五年か六年留學して居れば、歸りたくて〱堪らず、爲に小成の學問を鼻に懸けて歸國し、有ること無いこと法螺を吹くべき筈である、故に斯る意志の薄弱なる輩は身體も薄弱で五六十歲になれば老耄れて了ふ、況んや昔は衞生の道が進歩して居らぬから、上流の人で長生する者甚だ少く、人生七十古來稀なりなど言つてゐた時に於てをやだ。然るに仲麿　矍鑠として七十歲まで執務の傍外學に餘念なかつたとは、實に健全なる心身と謂はねばならぬ、若し當時醫術衞生が盛んで

あつたら、尙々生き長らへて少くも百二三十歳までもゐたものを、惜しいことである。之につけても讀者諸姉は健全なる精神は健全なる身體を作るものたることを知り、成功を急がず、小成に安んせず、若し海外に遊學するが如きことあらば、資金の續く限り何十年でも學んで偉大の人物となり、百五六十歳までも長壽を保たれたいものだと切に乞ふ所である。

▲喜撰法師　我が庵は、都のたつみ、しかぞ住む、世をうぢ山と、人は言ふなり。(8)

〔語釋〕たつみ‖巽と書き東南の方角である。しかぞ住む‖然ぞ住むなり。うぢ山‖宇治山の「う」と「憂き」の意とを掛けたるもの。

〔大意〕我が庵は都より巽の方角なる宇治山で、其處に斯く住んでるが、閑靜な處で、又餘り寂しくも無い、誠に適當な地だ、さるを世の人は憂き處などゝ言ふはさて〱聞えぬ譯ぢや。と己が住所の處を得たるを喜んだのである。

〔衛生觀〕知足の理を悟つて心を齷齪せず、悠々寛々百年の計を立つべしとは倫理學者の言ふ所ですが、こは所謂樂天主義の事で衛生上にも亦應用すべき眞理である。所が小人は朝から晩まで區々たる事に齷齪し、東奔西走或は權門に媚び、或は勢家に諂ひ、胸中更に閑日月が無い、斯ういふ人は精神を過勞せしむる所から遂に神經衰弱や依卜昆垤爾を招き、短命此世を去るものである、之に反して胸中に閑日月のある人は得意の場合にも左程に喜ばず、失意の時にも左程に落膽せず一歩々々に我が身を處置するものである、これが長命の秘訣で、健康の源である、流石に法師は此理を悟れるが故に我庵の事に託言けて世人を警戒したのであらう。併し知足の理と小成に安んずる事とを混同したり、無爲徒食と胸中閑日月とを誤解してはなりませぬ。

▲小野小町　花の色は、うつりにけりな、いたづらに、我が身世にふる、ながめせし間に。(9)

〔語釋〕うつり‖變ること。な‖歎きの辭「かな」と言ふやうな言葉。いたづらに‖無益に。ふる‖「經る」にて「降る」にかけてある。ながめ‖「詠め」で長雨にかけてある。

〔大意〕花の色は變つたわい、我が身が無益に此の世を

過して、容色も衰へたると同じく、僅かの長雨の降つてる間に……、さても總ての事は無常なものよ。

〔衛生觀〕宗教の方で言ふ無常觀は哲學的より來るもので、よく此の理を悟れば、却て樂天主義になり、長壽を保つ所の源となるものだ、故に統計學者が我が國古來の歷史中に顯はれたる人物の壽命を表に作つて見ると、僧侶が最も長生してるとのことである。けれど俗人の無常觀は大抵之を誤解し、事毎に悲觀に流れわけて十七八歲から二十四五歲までの男女青年は變な無情觀をなし、遂に此の世を果敢なきものに思ひ、華嚴の瀧や淺間の噴火に身を投ずるやうになる。されど規律ある生活をなし、衛生を實行して心身を健全にしてる者は、決して此の弊に陷らぬ、小野小町は其の傳記詳ならねども、察する所歇私的里的の人で、不幸短命に此の世を終つたらしい。爾來我が國の婦人は屁放文學者の小說など讀んで、いゝとんだ無情觀を起す風がある、警戒せざるべけんやだ。

▲蟬丸　これやこの、行くも返るも、別れては、知るも知らぬも、あふ坂の關。(10)

〔語釋〕あふ坂の關――近江の國滋賀郡に在つて都より東海東山北陸等の諸國へ行くには、必らず此の關所を越えたのである。人の「逢ふ」と、あふ坂のあふとを懸けてある。

〔大意〕都より田舍へ行く人も、田舍より都へ歸る人も、此處で分れつゝ、元より知る人も、未だ知らぬ人も、亦此處で相逢ふ所より、あふ坂の關と名づけたのは、これやこの故と、了解したのである。

〔衛生觀〕西洋の詩人が詠んだものを見ると、人の死んだ事や或は我が身の不幸に陷つた如き場合には、頗る悲哀な文字を並べてあれど、月雪花の美を歌ふに至つては、何處までも無邪氣に書いてある、これが文學の本領で、文學を嗜めば精神を美にし、邪惡の念を去る所以である。然るに東洋の詩人は事毎に悲觀或は無常の感想を述べるを以て主意としてゐる、中には斯る觀念起らずとも、古人は秋を悲しいものと言つたから、我もさう言ずばなるまい、などゝ心にもない哀れな文字を書く人さへもある、それかあらぬか、文士といへば身體の薄弱な長生の出來ぬ者と相場が定まつてゐる

慨かはしい事だ、所が此の歌は如何にも子供らしい無邪氣な口吻で書いてある、余は斯ういふ風な歌が大好だ。

▲參議篁　わたの原、八十島かけて、漕ぎ出ぬと、人には告げよ、海人の釣舟。(11)

〔語釋〕わたの原――（波の色が綿のやうに見ゆる所から、海上を「わたの原」といふ。）八十島かけて――（多くの島をめざして。）出ぬ――（出たと同じ。）人には告げよ――（京なる家人に言つて呉れ。）海人の釣舟――（漁人が魚を釣る爲の舟。）

〔大意〕海上はる〲多くの島々をかけて、いよ〲我は漕ぎ出たと、京なる家人に告げて呉れ、海人の釣舟よ、の意である、これは篁が或る事情の爲に、罪を得て隱岐の國へ配流せられる時、無心の舟にあつらへて己が悲哀を洩したのである。

〔衛生觀〕余は悲哀な文字を嫌ふけれど、此歌などは御尤も賛成する、凡て悲哀な出來事に接した場合に、非凡の英雄豪傑ならばいざ知らず、普通の凡人は泣くが當然である、其の泣く爲に却つて我が憂欝の氣を晴し、衛生の爲にも宜いのだ。故に他人が最愛の子を失うたやうな折に、「貴女まだお若いから、幾らもお出來になりますわ」の慰藉は却て先方を怒らせるのみならず、益々悲哀に沈むけれど「御尤です〲胸一ぱいお泣き遊ばせ」と相手を十分に泣かせて、十分に同情を表すれば、悲哀の除れるものである。されば悲哀な折には、其の胸中を詩に歌に發して、せめてもの思遣にするは、亦從て心身の衛生にならんかと、余は思ふのである。

▲僧正遍昭　天つ風、雲の通ひ路、吹き閉ぢよ、少女の姿暫し留めん。(12)

〔語釋〕天つ風――（天の風。）雲の通ひ路――（天へ通ふ雲間の路。）

〔大意〕公卿の姫達が舞ひたる姿を天女に擬へて詠んだので、天の風よ今令孃達が歸り上らんとする雲間の路を吹き閉ぢて、歸られぬやうにしてくれ、我は今暫し其姿を此處に留めたい。

〔衛生觀〕人工美を天然美に化して面白く優に物したるは、實に感心で、文學も斯ういふやうに言ひ表はせば我が衛生の道と相容るゝのである。

▲陽成院　筑波根の、峯より落つる、美那能川、戀ぞ積りて、淵となりぬる。(13)

〔大意〕筑波山の峯より落ちて來る美那能川の末は、遂に淵となる如く、我戀も積り／＼て深くなつた。

〔衛生觀〕戀と悲觀とは相伴ひ易く、而して悲觀は亦心神の衰弱より來るものである、殊に神經質の人は意志薄弱になり、爲に感情に鋭く馳せ、戀愛は神聖だなどと途方途徹もない議論を持ち出し、星よ菫よと騒ぐものだ、余は思ふに、夫婦相愛するが如きを戀愛とは名づくべからずと、故に戀愛といへば、必ず夫婦外の男女相愛するもので、神聖所か、一種の神經的病と看做すのである、斯る次第であるから規律ある生活をなし衛生を實行して心身を强固にし、天然美を愛する者は決して戀だの、ラヴだのといふ思想は起らぬものである。恐れ多い事ながら、陽成帝は藤原氏專横時代に即位し給ひ、萬事御意の如くならず、御心常に快々として樂しみ給はざる所より、攝政藤原基經は、臣下の分際として一天萬乘の君を精神病なりなどゝ廢し奉つた、されば帝の御心は益々快欝として、斯る戀歌など詠ませ給うた所以であらう。嗚呼戀は病的より來るもの、讀者諸姉にして戀の心起らば冷水摩擦を實行して大氣に觸れ、運動をなし給はゞ其心は自然に消滅せんこと受合である。

▲河原左大臣　みちのくの、しのぶもぢずり、誰ゆゑに、亂れそめにし、我ならなくに。(14)

〔語釋〕みちのくのしのぶもぢずり――陸奥の信夫郡で出來るもぢずり、もぢずりとはもどりすりで草花を布の下に置き、上より擦りて染めたものである。此二句は下の「みだれ」へかゝる序詞。誰ゆゑに――此處では「他の人故にの」意で。ならなくに――ではないのに。

〔大意〕信夫もぢ摺の亂雜に染めてある樣に思ひ亂れしは、他人故ではない、君故である。下句の文意は「君の外の誰彼故に亂れそめた我ではない」即ち「君ゆゑにみだれそめた我だ」といふことになる。

〔衛生觀〕戀は斯の如く精神の亂雜になるもので精神の亂雜は即て身體の薄弱を招く基だ。斯の如く心の亂れてる人には、上來屢々述べた衛生を實行せしめ、鎭痙劑として左の如き服藥を勸めたい。

顆草浸(四、〇)一〇〇、〇臭剝三、〇
苦丁　二、〇　單舍八、〇　右一日三回分服

▲光孝天皇　君が爲春の野に出でゝ若菜摘む、我が衣手に、雪は降りつゝ。(15)

〔大意〕君に贈らん爲、春の野に出て若菜を摘んでゐたれば、春まだ淺くして、我が袖には雪が降りかゝりました。

〔衞生觀〕春淺くして、雪のまだ降る頃に摘む若菜ならば、大方芹薺の類であらう、芹薺の類にしても、まだ芽の出立であるから、軟くて之を食へば旨しくして、而も甚だ消化が宜い、半可通の衞生家は斯る菜の類を纖維性の物で、消化が惡いなどゝ排斥すれど、肉食と共に菜類を食はねば、彼の恐るべき壞血病を惹き起さざるまでも、便秘の種となるものだ、鴨や雁と取り交せて羹たまへ、一入の味がある。天皇はまだ皇子にまし〳〵ける時御親ら摘んで、人に賜ひたる御歌なりと古今集に書いてある。嗚呼竹の園生の御身を以て、寒い折にも拘らず、野に出でゝ若菜を摘みたまふ。讀者諸姉よ、爐邊ばかりに煖を取らずして、時には雪をも侵し、春の七草でも摘み取るやうな運動をなし給へかし。

▲中納言行平　立ち別れ、いなばの山の、峰に生ふる、まつとし聞かば、今歸り來ん。(16)

〔語釋〕いなば――「行かば」の意で因幡にかけてある。まつ――松と待とをかけたり。いなばの山の峯に生ふる――松の序詞。

〔大意〕立ち別れて行くが、待つてるから、早く歸れと仰有れば、直ぐに歸つて來ませう。「生ふる」は松といふ詞を生み出さん爲であるから、別に意味は無い。

〔衞生觀〕この歌には別にこれといふ衞生觀も無いが、唯離別といふ連想からして、「鄕思病の窒扶斯」といふことを說明しておかう、鄕思病の窒扶斯とは鄕里を去つて獨り異鄕の客となり「今頃は親は何うして居らるるだらう」とか「嗚呼我子は艱難してるだらう」とかと、身は玆に在れども、心は遠く鄕里に馳せ、歸りたくて〳〵堪らぬが、事情の爲に歸る譯にも行かず、煩悶日を經、遂に熱發して窒扶斯を惹き起すのだ、實に

心身の關係は妙なものである。之から考へても、肺病などに罹り、轉地が良いからとて、病者が親しき家族と別れ、逗子や鎌倉へ行つて、一人旅宿の二階に萬感交々胸中を衝いてゐるとは、實に不得策の療法である序なれば一言玆に辯じておく。

▲在原業平朝臣　千早振る、神代も聞かず、立田川、韓紅に、水くゝるとは。（17）

〔語釋〕千早振る＝「神」の枕詞。韓紅＝世にも稀なる紅色の意。くゝる＝くゝり染にする義でくゝり染は今の「しぼりぞめである」。

〔大意〕色々不思議な事の多かつた神代でも聞かないことだ、立田川に於て水を眞紅な「くゝり染」にするとは……。立田川に紅葉の流るゝ繪を見て詠んだのである、よく味へば眞の川の景色でないことが何となく分る。

〔衛生觀〕同じ詩想を洩すにも、客觀的と主觀的とあるが、我が國人は兎角主觀的にのみ述べる弊がある、されど此歌の如きは客觀的で、別に悲しいの樂しいのと我が心の中を述べぬ所が面白い、それでこそ月雪花を眺めて目を喜ばせ心を樂します種になれ一々嗚呼々々と言つた日には神經ばかり刺戟するであらう。

▲藤原敏行朝臣　住の江の、岸に寄る波、よるさへや、夢の通ひ路、人目よぐらん。（18）

〔語釋〕住の江の岸による浪＝次は「よる」へかゝる序詞。よるさへ＝夜でさへ。波の緣の「寄る」を「夜」へかけたり。夢の通ひ路＝夢の中に通ひ行く道。人目よぐ＝人に見られぬやうに避ける。

〔大意〕晝間逢ひに行くのは人目を避けねばならぬけれど、夜夢に通ふのでさへ、人目をよけて行くのを見るとは、偖々辛いことだ、せめて夢だけでも憚らずに行きたいがなア。

〔衛生觀〕戀の病などに罹ると、夢は言ふに及ばず、甚しきは晝でもおぼろに見えて、精神は朦朧となる、之を醫道では幻覺と云ふ。所謂狐憑病なども之が嵩じたのである、斯る人を療治するには、第一に意思轉換法とて、色々の仕事をさせたり、遊山見物など日々處を換へて爲さしめたり、或は音樂に導き、或は活花を嗜ませなどして、此心を彼に移さしめるが肝要である。

其他冷浴以て神經を興奮させ、溫浴以て血液の循環を盛んならしむると同時に、精神を爽快にし、或は按摩を行うて、過敏なる神經を鎭め、高僧大德の談話を聽かしめて、心を氣高くなさしむる等の處置をせねばならぬ。

▲伊勢　難波潟、短き蘆の、節の間も、逢はで此の世を過してよとや。(19)

〔大意〕難波潟にある、短い蘆の節と節との間ほどの短い間も、逢はずに此世を過せといふのですか。少しばかりは逢はせて下だされても宜からうにの意、此世の「世」は「節」にかけてある。

〔衞生觀〕例の墮落な戀歌で、上來度々愚見を述べたれば重ねて言はず。

▲元良親王　侘びぬれば、今將た同じ、難波なる、みをつくしても、逢はんとぞ思ふ。(20)

〔語釋〕わびぬれば——困り果てたから。はた——さしあたりて事の意外なるを歎く意の副詞。なには——難波にある。みをつくし——「澪標」と「身を盡し」とかけてある。身を盡しては命を失うてもの意。澪標とは木材を水中に建てゝ水流の深淺方向を示すもの、水脈の串の義。

〔大意〕これは親王がさる人を戀はれたが、其事の顯はれて後詠まれた歌。人の爲に妨げられ、今は此世も厭だと侘び果てたから、どうせ死ぬなら同じこと、自ら身を亡ぼしても、もう一度逢ひたいものだ。

〔衞生觀〕衞生上大に意見を述べたいけれど親王樣の事故、已むを得ず口を噤む。

▲素性法師　今來んと、言ひしばかりに、長月の、有明の月を、待ち出つる哉。(21)

〔語釋〕長月——舊暦九月。有明の月——夜明けがたの月。待ち出つる——出るまで待つた。

〔大意〕直きに參りませうと、人が言つたばかりに、もう來るか〳〵と待ち侘びてる中に、九月の長夜も更けて、有明の月が出たわい。

〔衞生觀〕古今集の戀の部に在れば、矢張戀人を待ちたる墮落の歌である、墮落の爲に長き夜を明して、待ち惚けたとは、イヤハヤ御苦勞千萬、何れ程命を縮めてるか知れぬ、察するに法師がまだ俗人の頃作つたものであらう。

▲文屋康秀　吹くからに、秋の草木の、萎るれば、
むべ山風を、あらしと言ふらん。(22)

〔語釋〕吹くからに――吹く故に。むべ――尤もだといふ意に用ひらる。あらし――嵐と荒しとかけたり。

〔大意〕強く吹かるゝ爲に、秋の草木が萎れるのだから山風をあらしといふだらうが、實に尤もの事である。山風の二字を着けて嵐とした文字上の洒落もある。

〔衛生觀〕草木の萎れる頃は冷氣頓に催ほし、感冒や氣管支加答兒に罹り易きのみならず、次第に龜裂皸裂などの兆すものである、小兒や老人は、日中ならいざ知らず、朝夕は室外に出ないで、身を溫包して居らねばならぬ、寒さの初めは身體の抵抗力が少いから、嚴寒の頃よりも比較的注意せねばならぬ、水で手足を洗つた場合には、乾いた手拭で、よく／＼拭き取り、暫時手で摩擦したる後、火にて炙るとか、外出するとかせぬと、例の龜裂に襲はれ、即ては凍瘡にもなるものだ然るに此頃から注意して居れば、嚴冬になつても、何事なく暮される「盜人見て繩を綯ふな」とは衛生上にも當て嵌まる。

▲大江千里　月見れば、千々に物こそ、悲しけれ、
我が身一つの、秋にはあらねど。(23)

〔語釋〕千々に――いろ／＼に。我が身一つ――我一人。

〔大意〕秋の哀れは、我が身一人に集まつて居るのではないのに、月を見ればいろ／＼と、すべて物悲しくなつて來る。

〔衛生觀〕上來屢々述べた通り、心を優美に樂しますべき月を眺めながら、悲しむは神經質の人に限るので、文學も斯ういふやうに發達させては、益々優柔の人を作るやうになる。讀者諸姉よ、作つた本人は、左程悲しんだのでないのも多くあるのに、之を眞に受けて、悲しいものゝやうに作らねばならぬと思ふは、僻事なることを、衛生外なれど、一言辯じておく、現に此歌も、漢詩を飜譯したものであると、釋契沖の本に書いてある、然り我が國の男子ならば、月や花を眺めて愚痴を滋す譯は無い筈ぢや。恐れ多いことながら東宮殿下の御作に、

夜駕シテ艨艟ニ過グ遠州ヲ滿天ノ明月思悠々
何ノ日カ遂ニ吾平生ノ志ヲ一躍雄飛セン五大洲ニ

と洩れ承る、下萬民たる者も、斯る御詩想の眞似をせずや。

▲菅家　此度は、幣も取りあへず、手向山、紅葉の錦神のまに〳〵。(24)

〔語釋〕此度——度と旅とかけてある。幣——神に捧げるもので、昔は木綿麻などを木に結び付けたものだ。手向山——大和にある。取りあへず——「あへず」は「堪へぬ」の意。

〔大意〕この紅葉の美しき時に見すぼらしい幣を捧げるに堪へませぬ、その代り、この手向山の見事な紅葉をば神様の御心任せに御受納下され。

〔衛生觀〕此の歌を繰返し〳〵讀むと、「嗚呼美しい」の主觀的文字がなけれど、滿山紅葉の錦を以て飾れる自然美が、歴然と眼の前に現はれて來る。これは菅公が優美の精神と自然美と相觸れて、自然に詩となつたからである。人眞似でなく、眞に自然美に接して洩れる感想は、縦ひ學問の足らぬ者が詠んでも面白う聞かるるものだ、これでこそ詩の本領又衛生の道にも適ふなれ、故に余は常々歌私的里や神經衰弱になつたら、草鞋穿の旅行療法を爲されよと勸めるのである、諸姉以て如何と爲す。

▲三條右大臣　名にし負はゞ、逢坂山の、さねかづら、人に知られで、くるよしもかな。(25)

〔語釋〕名にし負はゞ——名を受けてるならば、即ち下の逢坂山とて逢ふといふ名を有つてるからにはの意。さねかづら——されは接頭語にて意味なし、「さなかづら」とも云ふ。「かづら」は蔓草である。人に知られで——人に知られないで。「で」を「なつて」と讀んでは不可ぬ。くる——かつらを「繰る」と人が「來る」とをかけてある。がな——願望するの感動詞。

〔大意〕我が思ふ人が、人に知られぬやうに來る手段があれば良いがなア。この歌の上句は序詞で、主意は下句のみにある、只逢坂山で「逢ふ」といふことを仄見せさねかづらで「くる」を引き出したのが此歌の細工である。

〔衛生觀〕これも例の戀歌で、度々意見を述べたれば略す。

▲貞信公　小倉山、峰の紅葉、心あらば、今一度の、御幸待たなん。(26)

〔語釋〕待たなん――待てよと望む意。かく未然形へ「なん」がつくと願望の意をあらはす。「外山の霞立たずもあらなん」もさうである。

〔大意〕小倉山の紅葉よ、我が歸りて美しいと奏聞すれば陛下も御出でにならうから、若し心あらば此儘散り果てずに、今一度の御幸あるを待つて貰ひたい。

〔衛生觀〕これも菅家の歌と同じく、自然美に接し、無心の物に我が有心をあつらへたる無邪氣のさま、實に優美である。されど菅家の歌よりは何となく一段下つてるやうに、余は思ふ、衞生外なれど讀者以て如何お思召さるか。

▲中納言兼輔

みかの原、湧きて流るゝ、泉河、いつみきとてか、戀しかるらん。(27)

〔語釋〕みかの原、泉河――共に大和國に在り、「いつみきとてか」をいはん爲の序詞。

〔大意〕見ぬ人を戀うて詠んだ歌。一度見た人ならば心にしみて戀ひ慕ふもさる事ながら我はまだ見もせぬのにかく戀しいとは何時か相見たから、とて、かく戀しく思ふだらうか、實にあやしき事である。

〔衛生觀〕これも例の戀歌、臭氣紛々として鼻を撲つ。

▲源宗于朝臣

山里は冬ぞ淋しさ、まさりける、人目も草も、かれぬと思へば。(28)

〔語釋〕人目も草もかれぬ――人目も枯れ、草も枯れた。

〔大意〕山里の冬は實に寂しさがまさるわい。人も尋ね來ず、草も枯れ果てたと思へば。

〔衛生觀〕これは唯單に淋しい山里の樣を無邪氣に述べたものなれど、人は進取の氣象があつて、一生に成さんとする事柄を、一歩々々に進んで行けば、四季に拘らず、人の來ると來らざるとに關せず、心は常に淋しさを感せぬものだ、淋しさを感ずるやうでは、迚も長命は出來ぬ。嘗ても述べた通り精神を過勞せしむるは宜しくないけれど、さりとて何等の使用も爲ずに、所謂無爲徒食すれば、例の肥胖病や痛風などを惹き起し短命に此世を終る、斯る輩の常として人が遊びに來ぬと、淋しく感ずるのである、佛國のフイノオと云ふ人曰く、精神の使用を何時も斷たざれば高壽を保たるゝもので、何時までも心は若やかに、且つ爽快である」と、宜なる戯言や。

▲凡河内躬恒　心あてに、折らばや折らん、初霜の置き惑はせる、白菊の花。(29)

〔語釋〕心あてに＝＝心覺えに。折らばや折らん＝＝折りたい折らう。

〔大意〕初霜が置いて、白菊と惑はすが、何れが眞の菊と、豫め心覺えによりて、折り取らう。

〔衞生觀〕初霜の降る頃は、午前五時半頃に起き出で、冷水摩擦も濟み、日がほの〴〵と出る頃は、身體もホク〴〵温まつて來る、乃で戸を開いて東籬の菊を眺めドレ一枝折つて活けようかといふ美想、これでこそ菊も長壽の線となるのだ、余は此歌を何となく衞生を勸めた作のやうに思はれてならぬ、これも歌留多遊の節、聲高に讀まれたい。

▲壬生忠岑　有明の情なく見えし、別れより、曉ばかり、憂き物は無し。(30)

〔大意〕有明月の出てる頃女と別れた時、此方の辛らさも知らず顔なる月をば、つれなしと思ふてより、曉ほど物憂きものはないと思ふ。

〔衞生觀〕月を見て唯悲觀するさへ面憎きに、況して、墮落の爲に月を怨むに至つては、言語道斷である。

▲坂上是則　朝ぼらけ、有明の月と、見るまでに吉野の里に、降れる白雪。(31)

〔語釋〕朝ぼらけ＝＝朝開きの轉音。

〔大意〕明方に吉野の里を見れば、雪が降つた爲に殊に明るくて、尙有明の月が照つてるかと思はるゝ程である。

〔衞生觀〕百人一首に限らず、博く古今の詩歌を見ると、徹夜してゐて、明方の景色を書いたのは悲觀的なれど、さうでなく、早く起きて明方の様を詠んだのは、爽快の感を洩してある、これも矢張然うだ、嗚呼早起する者に非ずんば到底健康長壽を得られぬ。

▲春道列樹　山川に、風のかけたる柵は、流れもあへぬ、紅葉なりけり。(32)

〔語釋〕柵＝＝川水の强き所を防がんとて杭を打ち、横に竹木などをからみつけたるを云ふ。

〔大意〕山川の水が流るゝことも出來ぬ程に、紅葉が散りてるのは、人の作つた柵ではなくて、風のかけた柵である。

〔衛生觀〕これ亦美しい目前の景を歌うて、而も何等の厭味が無い。如何なる人も、天然の景を眺めて、自然に發する聲は決して悲しみなど起らぬものだ、これこそ山水は頭腦を洗ふ妙藥となるのである。

▲紀友則　久方の、光のどけき、春の日に、靜心なく、花の散るらん。(33)

〔語釋〕久方――「天」の枕詞なれど、爰では單に空と見てよし。しづ心――靜かなる心。

〔大意〕天の光の長閑なる春の日に、何せあわたゞしげに花は散つてゐるのであらう。

〔衛生觀〕春の景色を眺めて、眞に心も長閑になつてる樣が言外に溢れてゐる。斯ういふ心になつて樂しめば、壽命の延びること受合である。

▲藤原興風　誰をかも、知る人にせん、高砂の、松も昔の、友ならなくに。(34)

〔語釋〕ならなくに――ぬに。知る人――知己の人、友達。

〔大意〕我一人年老いて舊知なし、嗚呼誰をかまア友としようか、高砂の松は古いといふが、それさへ昔よりの友ではない、さて〱淋しいことだ。

〔衛生觀〕頻繁の都なる東京市の長壽者を調べて見ると百歲以上の人が現に、七十八人もある、況んや空氣の清い田舍に於ては尙更多いに相違ない、又近世に於ても、百五十歲以上の人が確にある、されば同じ人間と生れ、我一人短命なるの理由はない、衛生を實行すれば百五十歲までも長らへらるゝものであるから、七十や八十になつて、淋しいなどゝ心細がつては宜しくない、舊知己が無かつたら、新知己を求めて語るべしだ、老耄さへせねば、如何に若い人でも喜んで交つてくれる、百二十五歲までと、氣焔を吐いて居らるゝ大隈伯は、今は七十歲なれど、少しも老人らしい所がなくて、精神常に爽快でゐらるゝは何よりの手本である。

▲紀貫之　人はいさ、心も知らず、故鄕は、花ぞ昔の、香に匂ひける。(35)

〔語釋〕いさ――知らずといふこと、多く「知らず」の上につける、「いざ」と濁れば誘ふの意になる誤讀し給ふな。

〔大意〕これは大和泊瀨に住める知人の許へ貫之が、しばらく無沙汰して後、行かれた、すると主人は『私は昔の通り相變らず待ちまうけて居りますのに』と詰る、

乃で貫之は「さア人の心は何うも分らないで、只花のみが昔のまゝ相變らず故郷に咲き匂つてゐる。」

〔衞生觀〕別にこれといふ衞生觀も無いが、歌は實に優しい情を洩してある。

▲清原深養父　夏の夜は、まだ宵ながら、明けぬるを、雲のいづこに、月宿るらん。（36）

〔大意〕短かき夏の夜の、まだ宵だと思つてる間に、已に明けてしまつた。宵のまゝに明けたのだから、月は中空にあるべき筈だが、さて見えぬは何處の雲間へ宿り隱れたのであらうか。

〔衞生觀〕夏はいふまでもなく、日が永いから、四時に起きて、六時に朝食、正午に中食、午後五時乃至六時に晩餐、八時には蚊張の中に入り、九時頃は一家寂として聞ゆるものは鼾息のみといふ工合でなくては、宵に睡眠の不足するのみならず、夜の濕氣を受け、即ち感冒の種となる、然るに月を眺めて、夜の明方までも蚊に喰はれながら起きて居れば、自然に朝寢をする、よし朝寢をせざるまでも、晝寢は免れぬ、されば如何に風流とはいへ、九時過まで起きてることの不衞生は言ふまでもない。

▲文屋朝康　白露に、風の吹きしく、秋の野は、貫き留めぬ、玉ぞ散りける。（37）

〔大意〕秋の野に露が結んでるのを、風が吹きしきると、さながら珠が散るやうだ。換言すれば露が點々草木に宿つてるのは、丁度珠を貫き留めてる如くなれど、風の爲にこぼれるから、貫き留められぬ珠と言つたのである。

〔衞生觀〕秋は悲しきものゝやうに言はねばならぬかの如くなつてるにも拘らず、淡泊と罪のない景色を述べたのは面白い、何人も常に斯の如き心になつて居れば、それが即ち衞生である。

▲右近　忘らるゝ、身をば思はず、誓ひてし、人の命の、惜しくもある哉。（38）

〔大意〕忘れられる我身とも思はずに誓つたのは口惜しけれど、その誓つた人の命が縮まると思へば惜しくもあり、又御氣の毒にもある。誓ひを破ると神明の罰を

受け命を取らるゝといふ信仰上より詠んだのである。

〔衛生觀〕英國のトーマス、パーといふ人が百五十二歳まで生き長らへ、國王は謁見を賜うて長命の理由を問はれたれば、パー答へて曰く、『我妻を娶る時に神明に誓つて終生相愛すると言ひしに拘らず、情婦を有ち、良心の呵責を受けましたが、斷然その非を改め、再び神明に懺悔しましたれば精神快活になり、斯くは長命致しました』と、之に依て考ふれば誓を破れば、神敢て罰せざるまでも、良心の呵責は精神を煩悶せしめ即て短命の原になるのであらう。墮落の歌にも善い訓戒は籠つてゐる。

▲參議等　淺茅生の、小野の篠原、忍ぶれど、餘りてなどか、人の戀しき。(39)

〔語釋〕淺茅生の小野の篠原――しのぶと言はん爲の序詞。

〔大意〕忍びこらへて抑へようとすれど、忍ぶ心の餘り餘りて何せ斯う彼の人が戀しいのであらうか。

〔衛生觀〕等君よ、感情銳くして意志が弱いから忍ばれぬのです。意志を強くせんと思はゞ婦人との交際を避け、武術を稽古し、聖賢の書英雄の傳を讀まれよ。

▲平兼盛　忍ぶれど、色に出にけり、我が戀は、物や思ふと、人の問ふまで。(40)

〔大意〕忍び〳〵て抑へて居れど、何を物思ふかと人が問ふ程に戀に惱む心が顏色に出てしまつた。

〔衛生觀〕斯くの如く人に疑問せらるゝ程顏色に表はれた揚句は顏のみならず全身の血色が蒼白くなり食慾進まず便は秘結し夜は寢られず、晝は何等の仕事も出來ず、遂に筋肉瘦せ衰へて、其の極端は死の轉歸を取るやうになる、愼しむべきは戀である。

▲壬生忠見　戀すてふ、我が名はまだき、立ちにけり、人知れずこそ、思ひそめしか。(41)

〔語釋〕まだき――早く。そめしか――そめきといふに同じ、上に「こそ」がある故「しか」と結んだのである「しが」と濁るは誤。

〔大意〕戀をしてるといふ、我が名は早くも人の評判に立つた、自分は人に知られじと思ひそめたのであるけれど。

〔衛生觀〕前者と同じく三文の價値もない歌だ。戯にも

斯んな作を眞似てはなりませぬ。狂人の眞似をすれば卽て眞の狂人になるものだとは眞理である。

▲清原元輔　契りきな、かたみに袖を、絞りつゝ、末の松山、浪越さじとは。(42)

〔語釋〕契りきな——「な」は感動詞、契つたはれイの意。かたみに——互に。末の松山云々——末の松山といふことに就ては色々說もあるが、兎に角「末の松山を浪が越える」といふとは千萬年經つても無いといふ所より「變らぬ」意に用ひられてある。

〔大意〕末の松山を浪が越さば變るかも知らねど、さうでない以上は我戀も變らないと互に契つたのだねイ。裏面に心の變つたは何ういふ譯ですと痛く責めたのである。

〔衞生觀〕歇私的里病になると、意志が弱くなつて、忽ちに契約するけれど、又忽ちに機嫌換な行動を取るものである、元輔の相手も大方病的であつたらうと思はる。

▲權中納言敦忠　逢ひ見ての、後の心に、比ぶれば、昔は物を、思はざりけり。(43)

〔大意〕逢ひ見てからの苦しさを逢はぬ中の物思ひに比ぶれば、逢はぬ中の物思ひは如何ばかりでも無い。

〔衞生觀〕己病的なることを氣づかずに、その治療をせぬとすれば、日を經るに從ひ、益々物思に沈むは病理の然らしめる所である。

▲中納言朝忠　逢ふことの、絕てしなくば、なか〳〵に、人をも身をも、恨みざらまし。(44)

〔語釋〕なか〳〵に——却つて。恨みざらまし——恨まないだらうものを「まじ」と濁るは不可。

〔大意〕逢ふといふことが絕て此世に無いならば、却つて人をも己をも恨むまいものを、なまじ逢ふといふことがあるのに己は逢はれぬから、實に恨めしい。

〔衞生觀〕前者と同じ戀痴であるから、斯る人が余に相談するならば、(1)早起(2)雨浴(3)轉意(4)自然美(5)仕事(6)運動(7)日光浴(8)入湯(9)滋養食物(10)按摩(11)早寢(12)强壯劑(13)鎭痙劑といふ順序で悉皆物思の苦惱を除いて遣らうかなア。

▲謙德公　哀れとも、言ふべき人は、思ほえで、身のいたづらに、なりぬべき哉。(45)

〔語釋〕思ほえで——思はれないで。「で」を「て」と詠むは誤。　いたづら——俗にいふ死。

〔大意〕氣の毒だと言つて與れるべき人にも何とも思はれず、哀れはかなく身は消え失せることか。

〔衛生觀〕作者は文學に長じたる人であつたれど、常に身體虛弱遂に四十九歲を以て此世を去つた、假にも戀などを彼此言ふ人に長生の出來よう筈はない。

▲曾根好忠　由良の戸を、渡る舟人舵を絶え、行方も知らぬ、戀の道かな。(46)

〔語釋〕由良の戸——丹後の由良の瀨戸。

〔大意〕由良の海を渡る舟人が、舵なくしては、行方を何處と定めて行かれぬ如く、行末定められぬものは戀の道であるワイ。上句は下句の序詞に過ぎず。

〔衛生觀〕讀者の厭きらるゝ程戀の駁擊をしたれば今更言はず。

▲惠慶法師　八重葎繁れる宿の、淋しきに、人こそ見えね、秋は來にけり。(47)

〔語釋〕八重葎——葎の幾重にも生じたるにて即ち草葉の繁れるをいふ。

〔大意〕草葉繁れる宿の淋しい所へ人は訪ねても來ないが秋は既に來たわい。

〔衛生觀〕これも悲觀、悲觀は身命を削るの刄、我が母は女ながらも、

何ヲ恨ンヤ人ノ無ヲレ訪　開ケバレ窓ヲ山月來

と詠まれた、然るに男として斯く淋しい意味を洩すとは偖々意久地の無い坊主だ。

▲源重之　風をいたみ、岩打つ波の、己のみ、碎けて物を、思ふ頃かな。(48)

〔大意〕風が荒くて岩を打つ波の碎ける如く、己一人思ひを碎く時は實に苦しいものである。

〔衛生觀〕これ亦戀の煩悶を歌うたものなれば重ねて言はず。

▲大中臣能宣朝臣　御垣守、衛士の焚く火の、夜は炎えて、晝は消えつゝ、物をこそ思へ。(49)

〔語釋〕御垣守——禁裏を守る人。　衛士——御垣守と同樣、重言したのだ。

〔大意〕衛士の焚く篝火の夜は炎え、晝は消ゆる如く、夜の間は思ひ焦れ晝間は又悲しさ消え入りさうに日夜

思ひつゞけてゐる。
〔衛生觀〕この揚句は幻覺錯覺があるやうになるものだ。

▲藤原義孝　君が爲、惜しからざりし、命さへ、長くもがなと、思ひけるがな。(50)

〔語釋〕がな――……したいと願ふ辭「かな」と濟んで言ってはならぬ。
〔大意〕君に逢ふことが出來れば、命も惜しくないと思つたが、さて相逢うて見ると、いつまでも長らへ、飽くまでも相見たいと思ふ心になつた。
〔衛生觀〕戀の爲に「長くもがな」と願つても到底不可能な事である。

▲藤原實方朝臣　斯くとだに、得やはいふきの、さしも草、さしも知らじな、炎ゆる思ひを。(51)

〔語釋〕いふき――「言ふ」と「膽吹山」とをかけてある。さしも草――次の「さしも」を呼び出す辭、而して膽吹山の「も草」を受けてゐる。炎ゆる思ひ――思ひの「ひ」は火をかけてある。
〔大意〕これほど思うてるとも、自ら得言はれないが併し彼方の人は、さまア知るまい、我がゝく炎ゆるが如く思つてるのを。
〔衛生觀〕矢張一山百文の戀歌、されば言はず。

▲藤原道信朝臣　明けぬれば、暮るゝものとは、知りながら、猶恨めしき、朝ぼらけ哉。(52)

〔大意〕夜が明けたれば、又日が暮れて逢はるゝのだけれどそれにしても猶恨めしいは曉方の別であるわい。
〔衛生觀〕戀ならざる夫婦の愛ならば、共に起きて曉方の景色を見る心地は得も言へぬ爽快なものである。余をして歌はしむれば、

暮れぬれば、明くるものとは、知りながら、なほもうれしき、朝ぼらけかな。

▲右大將道綱母　歎きつゝ、獨りぬる夜の、明くる間は、いかに久しき、ものとかは知る。(53)

〔語釋〕ぬる――寢る。
〔大意〕待つ人が來ぬのを歎きつゝ一人淋しく寢ればよくも寢られず、夜の明けるのがまア何の位長く思はれると御知りなさるか。
〔衛生觀〕斯くて夜が明けても精神朦朧として仕事をなすことも出來ず、うすら眠く一日を暮すであらう、さ

れば戀に限らず寢られぬ時があつたら起き出でゝドンドン運動を爲すが宜い必ず睡眠を催すのである。

▲儀同三司母　忘れじな、行末までは、難ければ、今日を限りの、命ともがな。(54)

〔大意〕いつまでも忘れまいと誓はれたが行末まで變らぬといふことは迚も六かしいことであれば、忘れられて悲しい目を見るよりも、いつそ變らぬ今の中に喜んで死にたい。

〔衛生觀〕この心が遂に情死の原因をなすのだ、危い哉戀や。

▲大納言公任　瀧の音は、絶えて久しく、なりぬれど、名こそ流れて、猶ほ聞えけれ。(55)

〔大意〕瀧の水無くなりて音も久しく聞えぬけれど名高かつた名は今に流れて傳はつてゐる。

〔衛生觀〕平凡なる歌、唯「音」と「聞え」とを照應させた位の手際で、これでは左程の快感も悲感も無いから、從つて余の嘴を容るゝ價値もない。

▲和泉式部　有らざらん、此の世の外の、思ひ出に、今一度の、逢ふこともがな。(56)

〔語釋〕有らざらん此世の外――死んで行く先の世。思ひ出――思ひ出して心慰みにする。

〔大意〕冥土へ行きての後の、せめてもの思出に、もう一度逢ひたい。

〔衛生觀〕此の婦人は非常に淫奔な性質で、生長せなかつたとのことだ、宜なる哉死際になつて斯る醜いことを言つてゐる。嗚呼健康長命は情操の正しい者で無くては叶はぬものである。

▲紫式部　廻り逢ひて、見しやそれとも、分かぬ間に、雲隱れにし、夜半の月哉。(57)

〔大意〕ふと逢つて見たのは月だつたかと、判然とも分らぬうちに、雲に隱れてしまつた。これは式部が友に久々で逢ひ、語る間もなく別れたのを、折しも雲隱れ行く月によそへて詠んだのである。

〔衛生觀〕式部は意志強固、品行方正の婦人であつたから、友に逢つて別るゝことに婉曲な文字を使つて而も愚痴がない、彼女の身體健康而も長壽を保つたらしい

のは豈偶然ならんやである。

▲大貳三位　有馬山、猪名の笹原、風吹けば、いでそよ人を忘れやはする。(58)

〔語釋〕有馬山……風吹けば＝「そよ」をいふ爲の序詞。いで＝己が決意を言ふ時に用ふ。

〔大意〕どうして、一寸でも忘れようか、忘れはしないといふ意のみ。「忘れやは、する」を「忘れや、わする」と讀んではならぬ。

〔衛生觀〕大貳三位は紫式部の子なれども、何せ斯る愚痴を溢したのであらうか。

▲赤染衛門　やすらはで、寢なましものを、小夜更けて、傾ぶくまでの、月を見し哉。(59)

〔語釋〕やすらはで＝ためらはで。寢なまし＝寢よう。「し」を「じ」と言ふてはならぬ。小夜＝小は接頭語意味なし。

〔大意〕ためらはずに、さつさと寢るだつたものを、もう少しくと夜を更かして月が這入るのまで見た。

〔衛生觀〕例の臭氣紛々たる歌である。

▲小式部内侍　大江山、幾野の道の、遠ければ、まだふみも見ず、天の橋立。(60)

〔大意〕大江山の方へ行く幾野の道は遠い故まだ其方面へ歩み行きて、天の橋立をも見ませぬ。内侍は和泉式部の娘、其歌皆母の作り與ふる所と人に言はれてゐた、折しも内侍は歌合に出ることになり居り、母は丹波に居つた故、或人が「歌は何うなさる、丹波からお便りありしか」と戯れた、乃で直に此歌を即詠して世人の惡口を塞いだと云ふ。此歌の裏には「まだ母よりの文は見ませぬ」の意を含めてある。

〔衛生觀〕衛生上より別に論ずることは無いが、大、幾、天などの豪壯なる文字を竝べ、それで婉曲に述べた手腕は十四歳の小娘とは思はれぬ、實に立派な思想である、然るに當時は淫猥の世の中にて遂に彼女も墮落し、定頼卿と淺からぬ契を結び、矢張短命に世を終へたとは、偖々惜むべしだ。

▲伊勢大輔　古の、奈良の都の、八重櫻、今日九重に、匂ひぬるかな。(61)

〔語釋〕古の奈良の都＝奈良の舊都。九重＝宮城。

〔大意〕奈良の舊都の、八重櫻が、今日この九重に匂つてる。この歌は一條院の御時奈良の櫻を御前に奉つたのを題にして詠んだもの。

〔衛生觀〕八重九重と句をあやなして詠んだ所が取柄で、其の想に於ては別にこれと感ずべき美はない、從つて衛生上より論ずることも亦殆んど無い。

▲清少納言　夜をこめて、鳥の空音は、はかるとも、よに逢坂の、關は許さじ。(62)

〔語釋〕夜をこめて――夜を日にこめてといふことで、まだ夜明けぬにの意に用ひらる。鳥の空音云々――支那の孟嘗君が逃げて函谷關を通る時まだ夜は明けなかつたが臣下に鷄鳴の眞似を巧にする者があり、爲に關守を欺いて無事に通るを得たといふ故事に依て詠んだのだ。よに――「よもや」の意。

〔大意〕これは行成卿が「鳥の聲に謀られ云々」と言ひ遣はしたるを、そんな噓を言ふても、支那の函谷關ならいざ知らず、貴殿と妾との逢ふ關には許しませぬ。

〔衛生觀〕名にし負ふ淫婦、此言あるは怪むに足らず幾歳まで生きてゐたか詳ならねど、その末路は憐れな生活をしたとのことである。

▲左京大夫道雅　今は只、思ひ絶えなん、とばかりを人傳ならで、言ふよしもがな。(63)

〔大意〕今は只「思ひ切りませう」といふことばかりを人に言傳でなく、自ら親しく逢うて言ひたいが、それさへ叶はぬ悲しさよ。

〔衛生觀〕墮落の果は皆斯の如し、健康長壽の人では無い。

▲權中納言定頼　朝ぼらけ、宇治の川霧絶え〴〵に、あらはれ渡る、瀬々の網代木。(64)

〔語釋〕網代木――木を編んで川に立て魚を寄せて取る物。

〔大意〕明方に宇治の川を見れば霧の絶え間〴〵に瀬々に立てゝある網代があらはれて見える、さても面白い景色だ。

〔衛生觀〕朝早く起きて詠んだ歌は得も言へぬ活氣がある。

▲相模　恨み佗び、干さぬ袖だに、あるものを、戀に朽ちなん、名こそ惜しけれ。(65)

〔大意〕恨み悲みて袖は涙に乾かぬさへあるに、其上に己が名までも戀をしたと笑はれて朽ち果てさするは口

惜しい。

〔衛生觀〕大方拒食狂となつて朽ち果てるだらう。

▲前大僧正行尊　もろともに、憐れと思へ、山櫻、花より外に、知る人も無し。(66)

〔大意〕これは人の見離さぬ山奥の櫻に對して詠んだので、我が汝をあはれと思ふ如く、山櫻よ、お互に、汝も亦我をあはれと思ふて呉れ、花より外に我を知る人はないのだから。

〔衛生觀〕まづ無邪氣な感想と言つて宜からう。

▲周防内侍　春の夜の、夢ばかりなる、手枕に、かひなく立たん、名こそ惜しけれ。(67)

〔大意〕内侍等が二條院に夜を深して語つた時内侍が、「枕があらばよい」といふを、大納言なる人が聞き、「これを枕に」と腕を出す、そこで此歌を詠んだ。春の夜の夢のはかない如く、つまらぬ戯れの爲に厭な名を立てらるゝに至るは殘念ですと。かひなくに腕をかけたり。

〔衛生觀〕座興を添へたるまでの歌但し假寢しながら夜更しすることの不衛生なるは言ふまでも無い。

▲三條院　心にもあらで、浮世に、長らへば、戀しかるべき、夜半の月かな。(68)

〔大意〕三條院が御位を去らんとし給ふ時、月明を見て詠まれたのである。この後心にもなく浮世に長らへば此禁中の月をば戀しく思ふであらう。

〔衛生觀〕藤原道長が政權を專にし、御心は何時も御無念なる所より御病氣になり給ひ、御位を讓りたまふ時に、嗚呼と悲觀し、詠ませ給うた御製、其後間もなく御年四十一歳にて崩じ給ふ、悲觀は實に身を削る刄である。

▲能因法師　嵐吹く、御室の山の、もみぢ葉は、立田の川の、錦なりけり。(69)

〔大意〕解かずとも明ならむ、但し此歌は地理に適はぬと言はれてゐる。

〔衛生觀〕實景を見ずして詠んだ歌だから、何等の美想が表はれてゐぬ、詰らぬ歌ぢや。

▲良暹法師　寂しさに、宿を立ち出で、眺むれば、

何處も同じ、秋の夕暮。(70)

〔衞生觀〕秋を悲觀する歌良暹も我黨の人でない。

▲大納言經信　夕されば、門田の稻葉、訪づれて、蘆の丸屋に、秋風ぞ吹く。(71)

〔語釋〕夕されば――夕べになれば。門田――家の前の田。丸屋――飾もなく拵へたる家。

〔大意〕夕べになると秋風が家の前なる田の稻を戰がせつゝ、蘆で葺いた伏屋を吹く。

〔衞生觀〕寂しい景を歌うてある。もつと壯快な感が起らぬものか。

▲祐子内親王家紀伊　音に聞く、高師の濱の、仇浪は、かけじや袖の、濡れもこそすれ。(72)

〔大意〕名高い和泉の高師濱のあだ浪をばかけまい、袖が濡れるから。裏の意は、仇々しい名のある人とは關係すまい、若し關係をつくれば捨てられなどして泣かねばならぬ故。

〔衞生觀〕斯ういふやうに前以て注意し正々堂々の人と結婚すれば、心身長へに安靜である。

▲權中納言匡房　高砂の、をのへの櫻、咲きにけり、外山の霞、立たずもあらなん。(73)

〔語釋〕をのへ――峯の上。外山――遠い山に對して近い山をいふ。

〔大意〕高砂の峯の櫻は咲いたわい、外山の霞よ立ち出て邪魔をして呉れるな。

〔衞生觀〕斯ういふ樣に罪なく歌へば歌も亦衞生の爲となる。

▲源俊賴朝臣　憂かりける、人を初瀨の、山颪、烈しかれとは、祈らぬものを。(74)

〔語釋〕憂かりける人――我につらかつた人。初瀨の山颪――はげしの序詞。

〔大意〕我につらき人をばかく山颪の如く烈しく情ないやうにと、初瀨の觀音には祈らなかつたものを。

〔衞生觀〕例によつて例の如し。

▲藤原基俊　契りおきし、させもが露を、命にて、あはれ今年の、秋も去ぬめり。(75)

〔語釋〕さしも草の事で即ち艾である。抑々此歌は基俊の子の僧侶になつてゐる人が或る立身の會へ屢々出られぬ所より、藤氏の長者たる人に、何うか出られるやう、御取計を願ひますと賴んだれば、觀世音の御詠と傳へられる「なほ賴め、しめぢが原の、さしも草、われ世の中にあらん限りは」といふこともある、來年は出して遣る云々、然るに其年も亦其會に漏れたるより、基俊は我が子の爲に愚痴を述べたのだ。

〔大意〕兼て お約束申した、彼のさしも草の御言葉を、命と頼みたるに、この秋も亦 徒に暮れ果てたらしい、何うしたらよからう。

〔衞生觀〕平等無差別の境に立ち、平々淡々たる心を養ふが僧侶の道だ、其心あればこそ長命も出來るなれ、然るに此の愚痴は何たる淺墓な心ぞや。

▲法性寺入道前關白太政大臣　わたの原、漕ぎ出て見れば、久方の、雲井にまがふ、沖つ白浪。(76)

〔大意〕海原へ漕ぎ出て遠く見やれば、水の天と連なりて沖の白浪が空の雲と見紛ふやうだ。

〔衞生觀〕此の入道は藤原忠通であるが、己人臣の極に居て、思ふこと何でも叶ひ、胸中更に悲哀が無いから、歌も亦壯大な感を洩してゐる、宜なり彼は七十歳以上の長壽を保つたとは。

▲崇德院　瀨を速み、岩に堰かるゝ、瀧川の、われても末に、合はんとぞ思ふ。(77)

〔大意〕瀧川の早き流れが、岩に堰かれて、一時は水が割れ離れるけれど、末には再び合ふ、それと同じく、男女の中が、暫くは割かれても、後には再び相合ふに至ると思ふ。

〔衞生觀〕陛下も亦藤氏や淸盛等の權臣に束縛を受け給ひ、御心常に怏鬱として樂み給はざる所より、斯の如き戀歌めきたるを詠ませ給うたのである。

▲源兼昌　淡路島、通ふ千鳥の、鳴く聲に、幾夜寢醒めぬ、須磨の關守。(78)

〔大意〕淡路の島へ通ふ千鳥の鳴く聲を聞いて彼の須磨の關守は幾夜も〳〵眠らないことであらう。一夜でさへも佗しきに毎晩では如何あらんと思ひ遣つて詠んだ歌。

〔衞生觀〕よく運動して眠れば、鳥の聲位に覺むるものでは無い、鳥の聲位に眠られぬやうでは身體薄弱なる徵だ。

▲左京大夫顯輔　秋風に、たなびく雲の、絶え間より、漏れ出る月の、影のさやけさ。(79)

〔衞生觀〕一讀爽快の感を覺ゆ、況や作者に於てをや。

▲待賢門院堀川　長からぬ、心も知らず、黒髪

の、亂れて今朝は、物をこそ思へ。(80)

〔大意〕人の心の長からぬ間に變るとも知らなかつた故黒髪の亂るゝ如く亂れ〳〵て今朝は物思をする。

〔衛生觀〕一讀不快の感を覺ゆ。

▲後徳大寺左大臣　郭公、啼きつる方を、眺むれば、只有明の、月ぞ殘れる。(81)

〔大意〕オヤ郭公が啼いたと、其の聲する方を見れば影もなく只有明の月のみが殘つて居る。

〔衛生觀〕此頃に起き出たとすれば少し早過ぎるの嫌があるし、徹夜してゐたとすれば不衛生の極端、兎に角人は太陽の地平線上に昇るを標準として起き出でねばならぬ。

▲道因法師　思ひ佗び、さても命は、あるものを、憂きに堪へぬは、涙なりけり。(82)

〔大意〕思ひ佗びながらも忍んで命は長らへらるゝが、涙は憂きに得堪へず、止むることも出來ずに流るゝ。

〔衛生觀〕思ひ佗びする人は命があつた所で、何等の活動は出來ませぬ。

▲皇太后宮大夫俊成　世の中よ、道こそ無けれ、思ひ入る、山の奥にも、鹿ぞ鳴くなる。(83)

〔大意〕憂き世といふ塵の世の中には、何處とて憂きを避ける道はない、併し山の奥へ入らば、憂きも慰めらるべしと思ひ込んで行けば、こゝも亦憂世なりけり、鹿の鳴く音悲しくして少しも慰められぬ。今は將た何處に行くべきか。

〔衛生觀〕斯うまで厭世に陷つては華嚴の瀧より外に道は無い。

▲藤原清輔朝臣　長らへば、又此頃や、偲ばれん、憂しと見し世ぞ、今は戀しき。(84)

〔語釋〕又――「また」と讀むべからず。

〔大意〕尚ほ長らく生きてゐたらば又今日此頃が慕はれるであらう、憂い辛いと思つた昔が今斯く戀しいやうに。

〔衛生觀〕作者は保元平治の亂を見て詠んだのだから無理も無いが、人は天命に安んじて何時も樂しい〳〵と思ふて暮さねばならぬ。

▲俊惠法師　夜もすがら、物思ふ頃は、明けやらで閨の隙さへ、つれなかりけり。(85)

〔大意〕終夜物思ひに堪へ兼ね、何うも眠れぬから、早く夜が明ければよいと思へど、却々明けぬ、せめて閨の戸の隙だけでもと思ふが、それさへつれなくも容易に白まない。

〔衛生觀〕物思ふから眠られぬ、眠られぬから思ふ、佐藤一齋の語に有レ待一年何ゾ其久也　不レ待一年何ゾ其速ナル也、久速在レ我ニ不レ在レ年ニと實に其の通りだ。

▲西行法師　歎けとて、月やは物を、思はする、かこち顔なる、我が涙かな。(86)

〔大意〕歎けよとて月は物思をさせるのではないのに、どういふものか、月を見ると嘆ち顏になつて涙が出る。

〔衛生觀〕法師も俗人の頃はまだ洒脱の人でなかつたと見ゆる。悟道してからの歌は皆自然を歌うてあるけれど。

▲寂蓮法師　村雨の、露もまだひぬ、槇の葉に、霧立ちのぼる、秋の夕暮。(87)

〔語釋〕槇の葉——こゝでは深山といふ意に用ひられてある、槇は多く深山にあればなりといふ。

〔大意〕村雨が降つて露もまだ乾かぬ山に霧の立ちのぼる秋の夕暮の景色はいとしめやかに淋しいものである。

〔衛生觀〕これは寂としたる自然の景を寫したので、厭味が無い。

▲皇嘉門院別當　難波江の、蘆のかりねの、一よゆゑ、みをつくしてや、戀ひ渡るべき。(88)

〔語釋〕難波江の——枕詞。かりね——刈根と假寢とかけたり。一よ——一節と一夜とかけ。みをつくし——澪標と身を盡してをかけたり。

〔大意〕一夜仇なる契をした縁によりて命がけで戀ひ思ふことか。

〔衛生觀〕例の如し。

▲式子内親王　玉の緒よ、絶えなば絶えね、長らへば、忍ぶることの、弱りもぞする。(89)

〔語釋〕玉の緒——生命。

〔大意〕死ぬならば死んだがよい、いつまでも長らへて居れば忍ぶとが弱りて忍ばれぬ樣になるかも知れぬ。

〔衛生觀〕これは內親王が忍戀といふ題に依て詠まれたので、畢竟戀する人の愚を笑はれたのである。

▲殷富門院大輔　見せばやな、雄島の海人の、袖だにも、濡れにぞ濡れし、色は變らじ。(90)

〔大意〕見せたやなア、血の涙に色變れる我が袖を、彼の陸奥なる雄島の浦に住む海人の袖でさへ濡れは濡れても色までは變らない。

〔衛生觀〕前者に同じ。

▲後京極攝政前太政大臣　蟋蟀、鳴くや霜夜のさむしろに、衣かたしき、一人かも寢ん。(91)

〔語釋〕さむしろ――筵なり、さは接頭語。衣かたしき――着てゐる衣の片袖を敷く即ち丸寢の事。

〔大意〕蟋蟀は鳴くわい、此淋しい霜夜に、只一人筵を敷いて丸寢することかまア。

〔衛生觀〕矢張墮落を免れず。

▲二條院讃岐　我が袖は、潮干に見えぬ、沖の石の、人こそ知らね、乾く間もなし。(92)

〔大意〕潮干にも顯はれて見えない沖の石が、人の知らない處で、水に濡れてる如く、我袖は人は知らねど涙に濡れて乾く間も無い。

〔衛生觀〕例の戀、二束三文の歌。

▲鎌倉右大臣　世の中は、常にもがもな、渚漕ぐ、海人の小船の、綱手かなしも。(93)

〔語釋〕常にもがもな――「がも」は願望の感動詞上の「も」下の「な」も感動詞、常久にありたいものだの意。綱手――綱の綱を曳くこと。かなしも――かなしは愛するの意（御子なかなしうし給いてなど平安時代の文によくある）「も」は感動詞。

〔大意〕渚を漕いでる船人網曳にするを見れば實に面白い。とその面白い所を見た咄嗟に、あゝ世の中はいつまでも斯くて變らずにありたいものだと詠んだのである。

〔衛生觀〕飽かぬ景色に無常を觀じたる歌。聞くならく鎌倉右大臣實朝は頗る爽快な人であつたさうだが、公曉の爲に早く殺されたは惜しいことである。

▲參議雅經　み吉野の、山の秋風、小夜更けて、故鄕寒く、衣擣つなり。(94)

〔語釋〕み吉野――「み」は接頭語。小夜――「さ」は接頭語。故鄕――吉野の里。

〔大意〕吉野の山風が吹く、夜は更けた吉野の里では寒さうに砧を擣つてゐる。

〔衛生觀〕眞に衣を擣つを聞いて詠んだのではなくて、唯漢詩の眞似をしたのだから、何となく眞景が寫て居らぬ。從つてこれに對する衛生觀も起らぬ。

▲前大僧正慈圓　　大けなく、うき世の民に、被ふかな、我が立つ杣に、墨染の袖。(95)

〔語釋〕大けなく――憚もなく、大膽にもなどの意。「負ふ氣なく」の義だといふ。　わが立つ杣――わが切り開いた山と解く。　墨染の袖――僧衣をいひ、墨に住をかけたり。

〔大意〕負ふ氣なくも、我が切り開いた山に居を占めて、墨染の袖を世の萬民の上に被はんかなといふ義で、即ち「大膽にも衆生を導く」の意。

〔衛生觀〕謙遜にして意志の強い所が表はれてゐる、流石に悟道の人である。

▲入道前太政大臣　　花誘ふ、嵐の庭の、雪ならで、ふり行くものは、我身なりけり。(96)

〔語釋〕花誘ふ嵐の庭の雪――嵐が庭の花を吹く爲に散つて雪のやうに見えることを言つたもの。　ふり行く――降り行くと古り行くとかけた。

〔大意〕花を誘ふ嵐の吹く庭の雪でもないに、ふり行く(老い行く)ものは我身であるわい。

〔衛生觀〕兎角我が國人は五十歳位になると、心細がつて、弱音を吹く、それ故到底長生が出來ぬのだ、百五十二歳まで生き長らへながら嗚呼我は若死するかと嘆息したるトーマス、パーの意氣を何人も有たねばならぬ。

▲權中納言定家　　來ぬ人を、松帆の浦の、夕凪に、燒くや藻潮の、身も焦れつゝ。(97)

〔語釋〕松帆――「待つ」とかけたり。

〔大意〕松帆浦で、夕凪の頃に、燒く藻や潮の如く思ひに、身を焦しつゝ來ない人を待つはかなさよ。

〔衛生觀〕戀歌を以て大半を埋めたる撰者の作なれば玆に贅せず。

▲從二位家隆　　風そよぐ、ならの小川の、夕暮は、御禊ぞ夏の、印なりける。(98)

〔語釋〕ならの小川――何處か明かならず「なら」は楢をかけてある。　御禊――神に參拜する前に河原などで水を浴びて身を淸めること。

〔大意〕風が楢葉を吹き戰がせてる、なら川の夕暮は夏とは覺えぬ程涼しいが、御禊をしてるので夏だと知られる。

〔衛生觀〕我が國人は昔より身を清潔にする良い習慣があつて、朝な／＼水を被らねば神前に出なかつたものである。かの祝詞に拂ひ給へ清め給へとあるを見ても了る。されば此の良習を何處までも保存して毎朝の冷水摩擦などを怠り給ふ勿れ。けれど此歌にある如く夕暮の河水浴は餘り感心しませぬ。

▲後鳥羽院　人もをし、人も恨めし、あぢきなく、世を思ふ故に、物思ふ身は。(99)

〔語釋〕人もをし――世の民がいとをしい。あぢきなく――つまらなく。

〔大意〕あぢきなく世を思ふからして、物思ひの多くなつた我は、世の中の人がいとしくもあり、又恨めしくもある。彼の承久の頃の御心を詠ませ給うたのであらう。

〔衛生觀〕承久三年に彼の惡むべき陪臣義時の爲に、隱岐へ流され給ふたることとなれば、憂鬱の御心が、即て歌となつたのである。御年も僅か六十にて崩じ給ふ、嗚呼爽快なる精神が無くては到底長壽を保たれぬことが、何人にも了解せられるであらう。

▲順德院　百敷や、古き軒端の、しのぶにも、なほ餘りある、昔なりけり。(100)

〔語釋〕百敷や――もと大宮の枕詞であるがこゝでは大宮(宮城)の意。しのぶ――「忍ぶ」と草の意へかけたり。

〔大意〕大宮の荒れ果てた軒端に生えてる忍草を眺めつゝ榮えし昔を偲ぶれば萬感溢るゝが如し。これも時世を歎いて詠み給ふたのであらう。

〔衛生觀〕父帝の隱岐へ流され給ふと同時に、佐渡へ遷され給ふとは、御宿世の拙きことゝ千歳の下誰しも卷を掩うて泣くであらう。御年四十六といふ水若き時に崩じ給へり、之を見ても長生せんと思はゞ、若い時から善く働き、年を經るに從ひ、憂の次第に減じつゝ行くやう、工夫するが衛生の大道である。(終)



表情を基礎とする美容法

マスターオブアート　尾關數夫

歐米漫遊の途次、予彼地の婦人間に行はるゝ最新式の美容法と表情術とを見聞し、之に衞生上の智識と精神作用とを加味して脂粉以外更に健全なる美粧法を說かんと欲す。

△紅や白粉はそも〳〵末

婦人の美は獨り本人の幸福のみでなく、男子も亦その美感を頒つことが出來るので、廣い意味でいふと社會全體の榮譽である。されば紅や白粉で美しく見せやうとする所謂左官式の化粧法は最早過去に屬するものとなつて、西洋では近來專ら衞生と體育と表情と係う三つのものを土臺として、人體を根本から美化する新式の方法が行はれて來たのである。之は單に顏料を塗附けるばかりの假化粧とは違つて、寧ろ內部の精神作用に基く一種の美的修養である。

佛蘭西で有名なエレン、テリーと云ふ女優は、人の身體を樂器に喩へて、妙音を發せしむると否とは一に音樂師の技倆にありと言ひ、更に又「錦の褥に包まるゝ王公の姫君も、荒菰の上に產るゝ乞食の兒も、人の此世に携へ來る資本は唯だ赤裸一貫、生鑛のまゝ也、之を美化するとせざるとは各自の心懸け一つに由る。」と化粧道の神髓を敎へて居る。ところがヨク世間では、「どうせ天が此樣に生みつけて呉れたんだもの、彼人のやうに美しくはなれない。」と我容を悲觀して、磨けば光るべき生鑛を其儘朽ちさせて了ふやうな女性もある。

△姿をよくする簡便法

成程天稟の容姿を根本的に改造せよといふのなら、到底出來ない相談であるが、併し精神の持やうと習慣とそれに表情法とによつて或程度までは、何人も美人となり得るのだから、所謂醜婦とても決して失望するには及ばない。其第一義は容貌と體育との關係で、いかに化粧や衣服にばかり憂身を窶したとて、軀姿がこ

れと釣合はなければ完全な美人とは申されぬ。尤も姿勢の惡いのは日本人一般の缺點で、之を矯正する方法は種々あるけれど就中簡便な行方は、約一升位の豆を緩く袋に入れてそれを頭の上に載せ、胸を正し兩手を眞直に下げて最初家の中を歩行し次に二階の梯子段を數回(豆袋を落さぬやうに)上下するので、之を一日に三回づゝ二月ほども續ければ、大抵な不格構は矯される。西洋では之れを矯正運動と稱して、身に故障のない者でも整姿兼運動の爲に行つて居る。第一に此姿勢を正すと共に、次には體育上に注意して皮膚の血色を良くせねばならぬ。

△雪の肌は時代後れ

現今では大分美人の標準が變つて、在來の如く、細面の色の生白い撫肩の萬事細そりとした肺病患者然たる女は、最早美人たるの資格はないもの〻様に思はれて來たが、それでも未だ〱色の白きを以て婦人が唯一の誇としてある。而し雪の肌といふのはたゞ小說の形容詞で最早二十世紀の肉體の色の標準ではない勿論何人でも黒いのより白いのを好くのは當然のことであるが、然し我々日本人は先天的に純白色人種ではなくて黄色人種である事を忘れてはならぬ。と申した許りでは解るまいから念の爲に詳しく說明すると、凡て皮膚の組織は眞皮と表皮とで構成せられて、其表皮の外面は乾いて半透明であるが、内部の下層にはそれ〲異つた色素を含んで居る、即ち印度人や亞非利加人種は黒色素、歐米人は白色素、東洋人は黄色素といふ工合に、畢竟我々同胞は天から黄色の肌を與へられたのである。だから純白色は殆んど諦めねばならぬ。

試に非常に色白な東洋婦人と普通の西洋女と比較して見ると、吾々が白いと思つたのは其實黄色であつた事が一見して知れるのである。されば嚴正なる差別上、日本人の白いといふのは一種の黄白美で、玉の如しとは白玉でなくて黄玉の部類に屬するのだ。去り乍ら白と黄とは孰れが優るかとは疑問であつて、御同様の黄色美は決して爾う廉價いものではない、寧ろ此色を强

換へざるを以て獨特の國自慢となし、女子は更にこの美を發揮して全世界を謳歌せしむる程の意氣がなければならぬ。

△澁皮の剝ける位を度とせよ

徒に西洋婦人を羨んで親譲りの面皮を張替たいと思つたり、又は怪しげの白色藥を用ゐたりするのは、飛んでもない料簡違ひで、學理上から皮膚の色素を改造するの工夫と、數千年來の人種的遺傳を移す方法と、この二つの發見があるまでは、到底白皙人に緣なきものとして、自己固有の美點を發揮せしめるの外はない。然らば其黃色美を增進する方法は如何といふに、これとて眞黑の鍋の尻を陶器のやうに綺麗にする事は出來ぬので、ツマリ在來の表皮より有ゆる惡き分子を除き去り、常に清潔に保ち、皮膚の細胞組織に營養分を與へて其血行を良くすると共に、汗や脂肪の發散作用を旺ならしめ、而して俗に謂ふ澁皮の剝ける位のところで我慢するより仕方がないのだ、けれども澁皮の剝けるとは、



既に美人の領分に近よつたので、更にそれ以上美を増すとすれば生來の標緻好は、いよ〳〵佳くなる譯で、醜なる者も亦た大に心を强ふするに足るのである。そこで何人にも出來る美顏法を左に述べて見やう。

△姿を整へるには按摩が必要

毎日朝晝夕の三回、熱したる三十倍の硼酸水に手拭を浸して顏面を蒸し、直ちに冷い牛乳で數回洗面し、然る後乾いたタオールを以て充分濕氣を拭ふのであるそれと同時に毎食事前に一合平均の牛乳（一日三合）を飲用して、激しい日光や暴風雨に顏を曝さぬやうに氣をつけ、且つ就眠時間は最も嚴正にして七時間乃至八時間の快眠をとらねばならぬ、此の方法は最も効があるけれど、若し餘り手數がかゝると思つたら次の如き極めて簡單な法もある。

毎日數回冷水を以て顏を洗つた後に十倍の硼酸水を擦込み（硼酸水は沈澱し易いから使用の際は火に溫むる事）これと共に毎朝洗面後直ちに林檎、梨子、葡萄の如き果物を食し、朝餐は成べく牛乳とパンの方が宜しい、以上は直接の顏面美增進法であるが、更に間接には、運動と冷水摩擦と皮膚摩揉術とを怠つてはならぬ。殊に摩揉術は美容上の一大要件で、近來市内の各所に美顏術とか美容法とか稱する、營業者の爲るところを見ると、大體は此の顏面マッサーヂに外ならぬので、之は素人でも出來るのだ、先づ熱く湯で蒸した手拭で全面を掩ふて脂肪分を吸收せしめ、次にクリームを塗つて皮膚を滑かならしめた後、更に蒸したタオールを以て顏を拭ひ、さて徐に前額から顳顬部、口許の邊を萬遍なく指頭で揉み下げるのである。此法は第一に血色を良くするのみならず、二ケ月ほど續けて行ると少し位の面皰や、ソバカスは清淨に除るとの事である。

△血の通ふ人形となるな

美顏法の大眼目は心の作用に基く表情美であつて、紅や白粉の如きは之に比べると、大將軍に對する雜兵のやうなものである。ところが日本人は一般にこれ

を顚倒して、大將軍よりも雜兵を大切がつてる傾がある。嘗て外來の西洋人が京都の女を見て、『血の通ふ人形』だと評したさうだが、全く爾う言はれても今分では腹の立てやうもないので、現に寫眞や繪畫に就て見ても唯だ人物が妙に取澄してゐるばかりで、少しも內部の精神狀態、即ち魂や情の現はれたものはない歐米の小說などでは人物を描くに、單に色が白いとか背が高いとかいふ事よりも、眼付がドウで何那ことを考へて居て何ういふ癖がある、と申すやうな精神狀態を實に詳しく書現



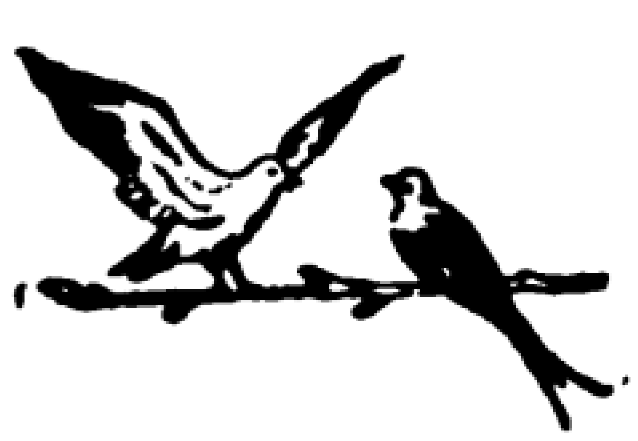
はしてあるが、我邦では未だ是等の書物すら稀である殊に日常の會話でもそれと同じで、誰某は甚麼人ですかといへば。さうですな。まア鼻が高いとか低いとか、口が大きいとか小いとか、ホンの具體的の評に止まつて表情の點は少しも話さない、いや話さぬのではなく

て氣が着かないのである。之は喜怒哀樂の情を外に現はさぬといふ一個の褒むべき趣意から割出された習慣であらうけれど、然りとて表情的の立場から見たなら、日本婦人の如きは、まア『活きた面影のない人』の部に屬するのであらうとは申すもの丶矢鱈に怒つたり悲んだり或は俳優の眞似をせよと奬めるのではない、要は平生氣を愉快に持つて、其情を今少し巧に表はせといふに歸するのである。

△まづ精神を美にせよ

人の心は直接眼には見えぬけれど間接に之を視ることが出來る、それは顔面の表情によつて見るのである。尤も眼や鼻や口の大體の形は天性だから何うともならぬが、然し或程度までは筋肉の働かせ方一つで、美しくも醜くもなるのである、動物の如きは唯だ飲食する爲に筋肉が動くばかりで、其他の作用は全くないけれど、人間の顔面にある筋肉は非常に表情的に發達して居つて殊に文明人ほどそれが自在である。だから常に美相を保たんとするには先づその情緒を現はすところの精神を美しくせねばならぬ、この心さへ清く爽かであれば顔は自から優しく圓滿に見えるけれど、若し内心に不平が絶えなかつたり惡い事を考へてゐたりすると、其色は必ず外貌に露はれて來る。

そこで此表情美を養成するには、子供の時から母親なり保姆なりが具さに注意して赤ン眼をしたりイ、ーキーと唇を反らしたり、物を言ふ時口元を歪めたり或は眼を剝いたりする樣な事があつたなら、速に之を矯正して成べく顔面の働きを平等に發達せしめねばならぬ。でないと皮膚が不平均に伸縮してそれが皆な皺となるのである。



婦人美と服色

バチロル、オブ、アーツ
西洋美術協會々長　田添幸枝

「一」當世の一大缺點

世の批評家などは、今日の人々を指してよく趣味が下劣だとか或は没趣味だとか申しますが、私しも往々其様な考へを起すもので、殊に今日の人々が、おしなべて『色の配合』の智識の無いのを見ては、更に其感を深くせざるを得ないのです。然り、『色の配合』の智識がありませんので、どの位ひ見醜き不調和不體裁な色彩の配合が、室内の装飾や、其他一般の事物になされつゝあるかは、少しく心得のある人は直ぐに判明ることで、就中、衣服の色の配合に至つては、不調和不體裁の域を通り越して、殆んど滑稽に見へるものが普通であります。これ實に當世の一大缺點で、社會の高尚なる趣味を啓發するためには、私しは是非とも『色の配合』を一般の人々に了解せしむることが必要であるかとおもひます。ソコで私しは先づ衣服に關する色の配合から説明したいのです。

「二」衣服と衣服との色の配合

衣服の色の配合と申せば、先づ衣服と衣服との色の配合から御話しなければなりません。

抑色の配合に就て大體の智識を得ようと思へば、先づ色の系統種類より來る配合の具合を知るに優るものはありません。故に私しは最初に色の系統の第一種と稱すべき『黒と赤』に就て、是から少々御話しなければなりません。

『黒と赤』は、何人の眼にも、漸と色の差別を知り得た赤兒の眼にも、直ちに區別の出來る正反對な色で、この二つを原色といつて、色の配合上には最も大切なる色なのであります。而して色の性質上、自然に『黒』も『赤』も、ソレ自身の色の系統をこしらへるものであります。

即ち『黒』は『黒……濃鼠……薄鼠……白』といふ

やうな系統になりますし、赤は「赤……桃色……薄桃色……雪の下……白」といふ順序になり、双方とも次第〳〵に薄らぎゆきて、遂に白色に歸する事になるのです。故に黒と赤の兩色は、双方相待ちて白色を以て結び付くる一つの輪或は圓形を拵へるやうなものであります。

右の系統順序がありますので、若し玆に「黒」と「赤」の色を用ゐんとおもふ人あらば、其人は是非とも其系統順序よりして、其配合調和を見出さねばなりません。サレば大體に於ては、單に「黒」のみ或は「赤」のみの系統の色を用ゐようとおもへば、濃き色より次第に薄色を配合せば、必らず見事な調和が取れるのです。而して若し「黒」の系統に屬する色と、「赤」の系統に屬する色と用ゐようとおもへば、双方少くとも一ツ以上の色を飛び越したる薄色を配合せば、間違なく調和が取れるのです。ソコで若し濃き色と濃き色、或は同じ度合の色を同時に用ゆる時は、自然色の配合の調和を失ひ、一見人をして噴飯せしむるやうなことゝなるのです。

譬令ば、「赤と鼠」、「鼠と白」、「白と黒」、「黒と鼠」、「赤と桃色」、「赤と雪の下」、「桃色と雪の下或は白」、「桃色と薄鼠」の如きは、最も配合のよろしきものといはねばなりません。併しながら「赤と黒」、「桃色と濃鼠」、「雪の下と薄鼠」、「白と白」などの如きは、全然色の配合の調和を失ひ居るは勿論ですが、見るものをして必らず一種醜惡の惡感を起さしむるものでありますから、殊に注意しなければなりません。

色の系統の第二種は「雌黄と藍」で、これも丁度先きの「黒と赤」のやうに、色の性質上自然に、ソレ自身の色の系統を拵へるもので、「雌黄」は「雌黄……黄……薄黄……白」といふやうな系統になりますし、「藍」は「藍……淺黄或は水色……薄淺黄……白」といふ順序になり、双方共次第〳〵に薄らぎゆきて、遂に白色に歸するのです。

右の系統順序がありますので、若し單に「雌黄」のみ或は「藍」のみの系統の色を用ゐやうと思へば、濃色

より次第に薄色と配合せば、必らず調和が取れるのです。而して若し両者を併用せんとおもはゞ、双方共に同じ度合の色を配合せば、甘く調和が取れるのです、然らずんば折角の骨折りも金銭も、反つて其人の品格を損ふやうな事になるのです。

譬令ば『雌黄と藍』、『黄と淺黄』、『薄黄と薄淺黄』等の如きは、最も配合能く取れるものです。併し『白と白』とを同時に併用するは、先きにも云し如く宜しくありませんから



此系統にては『薄黄と白』或は『薄淺黄と白』といふやうにせば、最も適當ならんかと思ひます。

若しも第一種の系統と第二種の系統とを併用しようと思へば『黒』は『藍』の系統と併せ用ゐるに適し、而して此併用は、多くの場合に於て憂鬱悲哀の情緒を服装に露はすものでありますから、これを撰ぶ人は其人の本來の趣好もありましやうが、餘程時と場合とを考ふるの必要があります。而して亦た『赤』と『雌黄』

の系統を併用するは最も調和のとれるもので、此時は前のと正反對で、重に愉快喜悦の表情をなすものです。何れにしても兩者併用の塲合には、何れも色の度合は自由自在に配合し得べく、同じ度合のもの、或は度合の違つたものでも、調和がよく取れるものであります。

「三」人と衣服との色の調和

衣服と衣服との色の配合の大體は、既に御話したやうなものですが、服裝の色の調和は、ソレのみでは決して滿足すべきものではありません。私し共は更に百尺竿頭一歩を進めて、「人と衣服との色の調和」といふことに就てせめて多少の智識を持つて居なければなりません。然り、此事は人間服裝の內で、最も大切な所で、而も今日の人々が、殆んど眼中において居ない所であります。

流行は洪水のやうな勢力を持つて居るものだとは誰やら申しましたが、私しは此流行といふ洪水を浴せかけられて、全く自分自身の天然の本領を忘却し、生來の美點を損なひ、自ら進んで他人の前に自分の沒趣味であることを表白する男女の多きに驚かざるを得ないのです。分けて年若き婦人の方々に到つては、如何なる謹愼の人と雖も噴飯せざるを得ない事が多ひのです。譬令ば、昨春頃より流行しました梅鼠が、青白ひ人も、血色ある人も、色黑な人も、背高き人も、背低き人も、痩た人も、肥滿せる人も、なべて年若き婦人の生命の色であるかのやうに用ひられて居る。ソコで梅鼠が歩行て居るのであるか、人があるひて居るのであるかといふ滑稽の感じが誰れにでも起されるではありませんか。流行はもとより勢力でありましよう、併しながら若し眞に自分の面目を保ち、趣味好尚を表白しようとおもへば、百人百色とか昔しより申してありますやうに、人各天然の色の持前がありますから、少くとも流行以上に起ちて、自分相當の色の撰擇となさなければなりません。色の配合よろしからんか、十金も千金に値するでしよう。然らずんば、千萬圓の大

金も、絹布錦繡も、自ら好んで泥中にすてると何の擇ぶ所はないのです。

『人と衣服との色の配合』！これはもとより複雑至難な問題で、却々一朝一夕でつくされるものではありませんが、私しは極大體な所丈けを茲に御話しすることにしよう。即ち衣服の撰擇に就ては、誰しも其を着る人の『血色』と、『肉付の程度』と『背の高低』とを標準としなければなりません。

血色の鈍ひ方即ち青白ひ方は、衣服は成るべく『赤』の原色を多く含める濃き色即ち『藤色』、『梅鼠』、『エビ茶』の如きを撰ばなければなりません。



血色ありて生々した方ならば、何んな色を用ひても能く調和するものです、けれども色の度合に於ては、濃き色よりも、寧ろ薄色が最も適するものです。

所が色の黒き方には、ゴク〳〵濃き色が似合ひ、薄色は引き立ちません。即ち原色では『赤』や『黑』のやうなもの、染色ならば、『濃鼠』『紺或は花色』、『濃茶』『ナンド』等の如き、旨く調和の取れるものです。

背高くして痩た人ならば、成るべく『赤』を遠ざから

ねばならぬ。ソコで「黑」、「鼠」、「ナンド」、「鐵色」など、最も適するでしよう。

背の低くして痩たる人は、赤色を帯べるもの、最も適合し、例へば「葡萄鼠」、「梅鼠」、「ボタン色」の如き、あつらへ向きであります。

肥滿せる人ならば成るべく、地味な色合が適し、例へば『濃茶』、『黛茶』、『鐵鼠』若しくは『濃鼠』の如き、最も妙と云はなければなりません。

右の外、委しく服裝に關して色の配合を知らんとせば、私し共は是非共、兩性の差別、年齡の相違、時候の變遷、晝夜時間の都合等に就ても、研究しなければなりません。併し其等の事は第二の問題に屬すべき事で、私しは何時か他日の機會を得て御話しすることにして、こゝには唯一般の人々、殊に家人の服裝を整調する任に當らるゝ婦人方の參考までに、特に必要な丈けを御話しした譯であります。

女子大學運動會

時は極月の朔日、北山颪寒けれど、輝る日麗らかに雲もなく、目白の臺に彩旗搖きて歡聲起る、是はこれ女子大學の秋季大運動會にぞありける、入來る淑女潮の如く、櫻楓樂隊の音色勇ましく優しき中に開會を宣せられ、午前の番組凡て十八、啞鈴、纏脚、球竿の諸體操の外、高女一年の「子守競爭」のあどけなきは乙女子を笑ませ、「家庭體操」は流石に家庭向とて奧樣連をしていたくも感に入らしめぬ、「桂の花」の艶麗に次で、「重陽の宴」と云へるハードウ井ック氏考案の新式運動は其用に供せる薇薔と菊のそれにも勝りて美しく、人の花なる幼稚園兒の「渦卷」と、「木の實拾ひ」、やんやの聲絶えぬ間に、早や自轉車の「御國の花」なる表情運動始まれり、之に次で「菊の花」「花の使」の二運動、花の少女の花の使うるはしなんど言ふ許りなし、高等選手の綱引二回にて正午休憩となり、高山の汁粉、サンドウツチ扨は鮨、辨當、彼方此方のバザーなどに急ぐ客足多かりき、軈て號鈴一振再開を報ずるや、來會者また倍し、午前にまさる混雜を極めぬ、番組は十二にして、中にも墨國の古戰場ベナヴ井スタに天の使降臨して往時を追懷せりと云ふデルサート式なる「古戰場の月」、先登急ぐ「勝の的」、解きては結び結びては解く「自轉車メープルダンス」など殆ど形容の言葉なきに苦みぬ、高女五年の表情體操「花實」、ピアノの音と共に歌ひつ舞ひつする姿態、自然の花とは是なるべし、次にアマゾン第五、希臘の神話其儘に一團の娘子軍の勇ましき運動ありたり。

新婚日記

某

○

新婦も新郎も共に結婚といふ事によつて相携へて人生の新らしき道程に上るのであるから新婦が化粧鏡の前に坐つて惚乎と「結婚」といふ熟語に冥想する時は即ち吾等新郎が會社に在つて同じく此熟語の冥想に耽つて計算をちがへてゐる時なのである。

○

午後の三時から謡の會があるので出掛けた。單獨で懸ブラリと出掛けるのは新婚後今日がはじめてだ、何となく家の事が忘れられない、「延び行く「鎖」のからまりて到る處に伴ふとゴールド、スミスの句を思出しながら歩くと路行く人は皆意味ありげに余の顔を見てゐる様に思はれる。三十にして家をなさずかと老成の言を吐いてをつた自分は這麼子供らしい事を考へて歩いてゐる中に二度小僧につき當つた、決心の失敗とは這麼ものかと思つて竊に快哉を叫んだ。

謡は散々の失敗で終つた。



○

明日からは顔を拭ふて出勤せねばならぬ、同僚にどんなに冷評さるゝ事かと思ふと玉を懐にして淵にのぞむ様な氣がする。

横になつて新聞を讀でゐると化粧萬端滞りなくすまして新婦君コツヒーをコツソリ枕邊へ持つて來た、頭を持上げる機會の拍子に目と目がかち合つたらニコリとやつたので僕もニコリとやつた落語家の所謂合せて四コリなるものを實驗したわけだ、

愉快なる實驗とは即ちこれだ！今迄婆やの製へて與たのよりは砂糖、牛乳、コーヒー凡の調合がよく、コーヒーをこれ程うまく味つたのは今日が始めてゞある這麽事は新婚のたれかれにある經驗であるが今は自分も其經驗者の一人であるといふ事を思ふと謂ふべからざる愉快を感ずる。愉快といふ文字は特に吾曹の爲めに存在するに非ずやと氣取つて見たくなる、

○

自分も其一人であつたが同僚と來たら惡口屋の親玉ばかりだ、先んずれば人を制すの格で頗る平然と飛び込んで居たら、いづれも通一り遍の挨拶をしたきり妙に澄し込んで時々あやしげなグランスを與へてをつたが其グランスは即ち嫉妬の表情であると悟つた時には自分は恰も征服者であるかの樣に感じた。

○

今日會社でK君が傍を通りしなに「君あ肥た樣だ」といつてプイと行過ぎた、呆れて見送つてをると入口の處でヂロリ余を見て一言肺腑を貫いたらうといふ樣な面相をして行てしまつた。

晩景新婦君と○○の田甫を逍遥した、此處の風趣は四季色々の趣を呈して余が淋しき幾年の逍遥を慰めて與れたのであるが、今日は暮れゆく日の光、たなびく靄のたゝずまひ、ゆく鳥、歸る人皆一脈の生氣を含でをる樣に思はれた、余は靜に新婦君の手をひいて「今日此處に立つ吾其人は昨の獨者であつた吾其人ではない、マーと驚きホヽと笑つて與れる第二の吾を得て新生涯に這入つた吾其人である」事を心窃に天神地神に告げた。

○

時は夢の如く過ぎつゝある！これ余が今の境遇である。

過般米國の老文士マーク、トウエンが妻を亡つて友に其悲愁を抒た文の中に「くしきかな結婚といふ一事によりて彼女の愛情はヂブラルタルの岸打つ浪の如く余に打寄せぬ」といつてをつたが余等の愛情も日にまし濃うなりゆくのみだ。

○

今日七時半に歸つたのに腹をへらして待つてゐたには驚いた、西洋料理で腹をこしらへて來たときいてアラーとラーを長くひいて見上げた目には三分の怨みに七分の愛であつた。

○

K君から自筆の繪端書がきた。口も八丁手も八丁といふが、却々器用に描いてある、二人お揃で散歩の處だ、「風教上害あるもの」と標題をつけて書いた文句は、

わたくしがイヤおれが掃くと新世帶、讀み終つた新婦君がマー嫌らしい、デモ氣輕さうな人れと話してをる處へK君は、はしなく新婦君探險のつもりでやつて來た。

K君は今年學校を出た許りの快活な青年である、新婦君が出て挨拶をするとK君、僕はKといふものです、と二度ばかり頭を急がしく下げ、新婦君が不束者でと低頭して居のを平然と熟視してをるのであたつた。

諸國正月物語

春告鳥

元朝や神代の事も思はるゝ。誰やらの言葉に「正月は二十世紀の文明時代に封建時代の面影を見るべき唯一の機會」だとあつたが、なるほど左樣だ。特に舊日本の中心である丈けそれ丈け、京都の正月には、古來の風習が遺つてゐる。

　春景色、急に師走の一イ二ウ三イ日、四オ日、五日暦もあら玉の、明治六の酉の年、日の撰みなく惠方さへ、よろづお廢止すつぱりと、頭丸めて年禮に、よい洋服を着そはじめ、銘々キヤツプを冠られて、鯔や廻はらぬ燒物は、鹽魚膳に据へおけば、どんな田舎もお正月、三府諸縣も一樣に、ならぶフラフも賑はうて、西洋學に日々進み、萬民和漢の學校建て、(中略)榮へ壽く御代の春、文明開化と仰ぐらん。

之は明治六七年の頃、大阪神戸より京都市中に行はれた淸元梅の春の換へ唄であるが、「日の撰みなく惠方さへ、よろづお廢止すつぱりと」と唄はれたのは表面丈けの事、明治四十一年の今日でも、元朝の格式、門松、雜煮餠、組重等の事は、舊幕時代とは、たんと相違つて居らない、先づ元旦に、八阪神社に參詣して、オケラを頂戴して、線香或は火繩にうつして、神棚に點して、その火で元日の雜煮を煮るなど、依然として舊日と異らない。

　三ケ日の膳部を見ても左樣である。塗膳五重の椀に家々の定紋、雜煮を祝ふ前に、屠蘇の外に、梅干と結昆布、宇治の池屋村より出てくる例の銘茶を入れた大福を飲むとも、矢張廢れずに行はれてゐる。爾して之は京都ばかりで無く、京都風を襲ふてゐる京阪、北國地方は大概、それであるが六日の年越、七日の七草、十五日小正月、二十日骨正月、それ〴〵古例を追ふて從來の風習は少しも廢れて居らない。

　併しながら京都の正月は、雅味があつて、古風は古風に相違ないが、舊都の正月は物の本にも出てゐて、

すでに世人に知られてゐるから、今更京都の正月でもあるまい。寧ろ正月の奇習異風ともいふべきは、比較的文化の及ばざる僻遠の地に多い。左にざつと、ノートブックに留め置ける正月行脚を書き記るして、讀者と共に、四十一年の正月を迎へましやう。

○琉球那覇の正月

我國に於て古例舊式を守つて、今に變らないのは、琉球の正月であらう。長幼序あり、夫婦別を置き、衣冠を正うして新年を迎ふるのは、那覇の正月である。百八の鐘の聲と共に、金鷄の旦を告ぐるや、主人は其國固有の衣冠束帶して表座敷に出づれば、家人一同も同じく正裝して、家長に年詞を述ぶるといふ丈けであるが、その服裝や態度は、支那の風習を帶びて、内地の正月には見られない圖である。最も服裝――冠や束帶は、身分に依りて色や地質に相違はあるが、元旦の琉球人は、皆儼然たる衣冠束帶の人で、なんとなく神々しい。そして、その祝の言葉は、

『えー、正月でーびる、若く爲りみしやる』

といふのであるが、えーは善き、でーびるはでござります、みしやるは爲さいましたかの意で、『よい正月で御座ます、若くお爲り爲さいましたか』と祝詞を述べるのであるが。假う飜譯してしまつては、琉球の正月が現はれない。矢張えー正月でーびる。若く爲りみしやる、といつた方が、閑雅で、悠長で、日本と支那の風習をちやんぽんにした琉球人の性格が、躍然と現はれてくる。斯くて一家の儀式が終ると、十三歳迄の男女は、衣服を飾りて、隣家や親戚に出掛ける。親戚では、豚の油で揚げた茶菓子を振舞ふのが禮式のやうに爲つてゐるが、なほその家の貧富によつて少きは二三錢、多きは二三十錢の錢を與へてやる、十四五歳以上の青年は、暫らく家人と新年を祝つてゐるが、終ると、近隣、親戚、友人の家を尋ねて、おなじく前掲の祝詞を述べてあるくのである。

爾して元日より十二日迄を年日といつてゐる。若しその年が子の年なれは子の日、丑の年なれば丑の日に盛宴を張るのが慣習である。無論暦は舊暦である。

○相州片瀨の奇習

琉球の年日は恰も內地の松の內に當るのであるが、一體此の松の內といふやつは、地方に依つて、日數に相違がある。東京は七日の七草で、門松を取り、京都は十五日迄は松の內、二十日の骨正月に各戶の注連繩を集めて焚き、その他地方によりて、多少の相違があるやうだが、中にも最も珍奇なのは、相州片瀨附近の正月である。三ケ日過ぐると、直ぐと門松を取り拂ふ始末方が、一と風變つて面白い。その取除ひた門松を村內の或場所に集め、小屋を建てゝ、その入口に提灯をぶら下げて、其處に村落の子供等は集つて騷いでゐ



てゐるのは他の地方に見受けない風習である。之は僧侶が松飾の下を潜るのを忌み嫌ふより來たのだといふ說であるが、門松を三ケ日で切り上げるのは、東京を遠く隔つて居らぬ丈け夫丈け、特種の興味を覺ゆる。然かも取り拂つた門松の

るのである。すると、村民は黄色、赤色、紫色の色紙を縦に繼ぎ、紙旗に製つて、それに「道祖神」又は「道祿神」と記るして、鏡餅と共に、紙旗を小屋に供ふるのは毎朝變らない、子供等は如何かといふに、十人、二十人、群を爲して、「道祖神の賽錢ぢや賽錢ぢや」と聲高に呼ばゝりながら、村内を廻はつて、集つた金は酒だ、肴だ、菓子だ何だと飲食の料に當てゝゐるので、十四日になると、村民一同集つて、紙旗と共に、小屋に火を放つて燒いて仕舞ふのである。左義長の遺風だといふが、北國地方の火祭といふのと、ちよつと似てゐる。

啻に片瀬附近ばかりでなく、名古屋附近も、三日目に門松を切り上げるが、併し相州地方のやうな奇習は無い、門松を取り拂ふた後も羽子の音高く、少女等は綺羅を飾つて、

正月はえいもんだ、赤いべゝきて、羽子ついて、
雪のやうな飯たべて、下駄の歯のやうな餅食て、

と唄ふ聲は四方に充ちてゐる、總じて東京式文明の普及せる地は、松の内は七日迄、京都式の風習の蔓延せる地方は、十五日の小正月に正月の段落を結び、三ケ日で門松を取り拂ふ地は、寧ろ正月風俗の除外例と見るべきであらう。

○上州太田町及越後地方の門松

开は兎も角も、此の門松の樹て方に就ても、地方によりて、それ〴〵違つてゐる。上州の太田町附近では家風に依り、貧富によりて、松ばかり樹てるのと、松と竹とを竝び樹てるのと、整然と區別がついてゐる。飾松も三蓋より七蓋と、所謂七五三に樹て、左右一ト株宛樹てゝ格式を張つてゐる。藁の垂れ方も、同じ七五三で、繩目には切り紙、松、及、鱓、昆布を挿んでゐる、門松の左方に、蠶神の錦繪、或は養蠶圖繪、又は機神圖繪を貼つてゐるのは、同地は機業地であるからであらう。最も不思議なのは、播州西の宮の風習で門松を逆に樹てゝゐる。之は同地の氏神蛭兒命は、深夜騎馬で通行相成る。その邪魔避の爲に、門松を逆さに樹てるのだといふ。

一家に不幸ある場合には、門松は如何するか、越後地方（魚沼、刈羽、頸城等の諸郡）では、門口に三尺許りの棒を立て、延引棒といはれてゐる、古志、三島蒲原等の諸郡では、門口に藁縄を張つて、遠慮縄だといつて、賀客を拒絶するの標章としてゐる。

日本一の商業地といはれて居る大阪商家の門松は、極めて嚴肅に樹てられる。店前に簾を下ろし金屏風を立て廻はし、軒先を離ること三四尺程の處に松の大木を樹て、或は松竹を取り交せて門松としてゐるのもあり、庭先は盛砂であるとは言ふ迄もない。



○各地の雜煮

今度は雜煮の調理方である。格式の本家本元なる京都の風習を擧ぐれば、雜煮は五臟を祭つて、胸の間を納むる爲めだと縁起を言ひ、雜煮の中には、若餅（丸い形の）それに頭芋、大根の輪切り燒豆腐、膳にはニラミ鯛と鹽鰯とを添へて置く、此のニラミ鯛は、三ケ日膳の一部に睨ませて置くので、食べる譯にはゆかない、鹽鰯は其の頭を鯛の鰭の間へ入れて置く。大阪は味噌雜煮、廣島は白味噌の汁に鰤を入れ、名古屋は菜雜煮で、中へ入るのは角切の餅。

膳部には田作と煮豆とを二個宛向ふに据へるのが例となつてゐる。百萬石の金澤は、昆布雜煮で、花鰹に味をつけて、結昆布を入れる丈け、極めて淡然としたものである同じ加賀領でも、越中の下新川郡へ赴くと魚津町などは、胡蘿蔔、牛蒡、芋、蒟蒻、燒豆腐等、雜然と入れてある。なほ越後の方へ赴くと、燕町などは、タンジヤク（蘿蔔を細く切りたるもの）刻牛蒡、豆腐、油揚、蒟蒻、鰑、鮭の鰭、鮭の腹部の八品を入れてある、奈良東大寺の御節會の食物は頗る奇拔だ、牛蒡豆、蕗、芹の四種に限られて居る、之は「御坊がまめで富貴せり」といふ緣起であるとか、序であるから書き添へて置く。

○正月に汁粉を用ゆる地方

で、同じく雜煮を食べるといふ中にも、名古屋などは、善哉或は汁粉を用ゐて居るが、越後の燕町では、雜煮の前に、黄粉餅或は、汁粉を用ゆる。それは飯椀に餅を置き。傍らに黄粉を皿に盛り、一ツづゝ食べるのだが、御雜煮の時も、飯椀に切餅を置き、一ツ宛汁に和して食べてゐる。

雜煮を用ゆるのは、一日、二日、三日と、計う何れの地方も三ケ日に極まつてゐるが、越後の燕町では、一日、二日、三日の三ケ日の外に、七日、十一日、十六日、十七日、二十日、と計ふ、八日間食べてゐる。八日間雜煮を用ゆる地方は、恐くは他にたんと例は有るまい。處ろが爰に元日雜煮を食べぬ地方がある、それは信濃の南安曇郡だ。元日には雜煮を食べず、二日に爲りて初めて雜煮を拵る。

○膳部の副物

雜煮の調理法は、前掲の如く各地方で異つてゐる。膳部の副物も、各地方多少の相違がある。京都は二ヲミ鯛に鹽鰯を添へるとは前に掲げたが、なほ元日には蛤の吸物、二日には鰤の餡掛、三日にはとろゝ汁、四日は鏡開きだといつて、壬生菜の入つた雜煮を食べる京都はどうしても日本随一だ。金澤市は鯨の吸物と極まつてゐる。

琉球は三日に爲ると、火の神に供へた豚肉を下げ、

大根、蘿蔔（方言キダイコン）に鶩を混へ、佛前に供へ、家内一同も之を食べる。火の神といへば、北國地方、特に越中魚津町附近では、一月の二十六日に、火祭を行ひ、子供等は大竹に、色紙を交へた幣を作つて、各町を練り歩く風習が行はれてゐる。廿五日の一夜、夜を徹して太鼓を撃き、二十六日に入ると、黎明より數十數百の兒童は、米袋を携へ、大僧は先達と爲り、各町各戸を見舞ひあるく。若し火を發せる家の前に至れば、腕一杯に太鼓を撃きて、鬨聲を擧ぐ。喧騒といつたら尋常で無い。午後になると、集めた米穀及金員で、酒肴を調へて、酒宴を開く。集るのは、十五歳以下の小若連中であるから面白い。片瀬附近の、道祖神の小屋を燒くのと風習は似てゐるが、琉球の火の神を重んずると目的は違はない。

膳部の副食物は、火祭に反れたが、全體からいふと鮭、鰤、鱓、或は數の子等を用ゆる地方が最も多い。



○鏡餅のいろ〳〵

鏡餅の寸法も、各地方おの〳〵異つてゐるが、竈神の錦繪を貼り下げる上州太田近邊では、白木で作つた器に鏡餅を供へて、なか〳〵仰々しいが、加州金澤市では、家長の爲に、特別に大きく製へた御鏡といふ餅を床に供へ、其の家に五歳以下の小兒ある時は、キネマキ（軍扇形の餅）といふのを製へて居る。女の兒が居ると、繭玉を製へる。

名古屋は、鏡餅には別段特色は見へないが、三寶に鏡餅、かや勝栗、白昆布、穗俵等を飾り、それに松竹梅の鉢物を備へるのを例とする。惠方棚を飾ると、京都式そつくりの風習である。

○京都の手鞠唄

元旦は午後に爲ると、大抵羽子を突く。左に京都に行はれてゐる羽子唄と、鞠唄とを擧げて見よう。

一イト目、二タ目、みやかしよめご、いつやのむさし、七やのやつし、九のやの十

といふのが普通に行はれてゐる羽子唄だが、鞠の方に爲ると、唄も複雜んでくる。

一イ二ウ三イ四オ、四方の景色は春と眺めて、梅に鶯ほう法華經とさいづり、明日は祇園の二軒茶屋で、琴や三味線囃してん〳〵手毬唄、歌の中屋ちよごん、五十がちよ六、六々ちよ七、七七ちよ八、八ちよ九が、九十でちよいと百ついた。

といふのが、最も行はれてゐる。なほ鞠には、絹手鞠といふのがあり、之は板の間に突くとは限らない、壁に投げ、下より上に突き上げてゐるのも見ゆる。

○各地の買初め

神代の光景の中に、現代の物質的風習を現はしてゐるのは、二日の買初であらう。

商業の本家本元である大阪は、型の如く店舗を飾り、荷車を數輛挽き列ねて、花客を廻はる勢といつたら無い。調子につれて謡つてゐる唄は斯うである。讀者は意味を取らずしてその調子を賞でた方が良からう。

ヨイ、ヨイ、よいとまかせ、よい嬶もろて、此の勞働、初荷が濟んだら……

この卑調の中に、正月の歡天地が現はれて居るではないか。廣島市も、中國の大都市である丈け、二日の光景は、盛大を極め、特に呉服屋は買物の多寡に拘らず、一番客へ反物一反を景物として出だし、酒屋は一番客へ一尺四五寸位の鏡餅一ト供へと、持參の器物に一杯、酒を與へ。一錢の購客でも、二錢の購客でも、景物に區別は無い。金澤市は、魚問屋多き安江町、八百物問屋多き近江町、小間物問屋の多い尾張町などでは、店舗は金屏風を建て廻はし、軒頭に球燈を掲げて、主人は固より、手代小僧に至る迄、紋付に袴をつけ、づらりと列んで、居坐を正してゐる。なほ二見浦、旭に鶴、張良等の人形の造り物を出して景氣を添へてゐる。

上州高崎の新年は、模樣が變つてゐる。「江戸の商家は元日多く戸を開かず、一日廢務なり」と俳諧歲事記に出てゐるが、啻に江戸ばかりでなく、日本全國いづれの地方でも、大抵元旦に商賣を廢するを例とせるに、獨り高崎市のみは、元旦に洗湯にゆく風習ありて、各自競ふて風呂屋に出掛ける風習が舊幕時代より行はれてゐる。若し仔細あつて、出掛けることが出來ない時は、此年は兇年だらうと御幣を擔ぐ。いづれの地も、洗湯の開業は、一般の商業と同樣、二日に洗湯を開くのを例とするに、關東脇差の高崎に此の風習があるのは、如何した譯だらう。けれど、都會では二日の買初は買初として、元旦に店を開いてゐる商人が多い。或は數年數十年の後には、漸次正月の舊習は消滅するであらう。

時世粧

染色と模樣

△今年の流行は如何

觀風子

茲に染色と云ひ模樣と云ふは、婦人の衣類の其れをさしたものであります。さて今年の流行界では、如何なる染色なり模樣なりが最も勢力を振ふでありませうか、之れが豫想をするに就いては、先づ過去及び現在の流行から推して考へねばなりませぬ。

昨年流行の染色や模樣に就きましては、昨春の本誌上に聊か記して置きましたが、從來一般の婦人社會に持囃されて居りました所の赤味を帶びた染色、即ち梅鼠であるとか葡萄であるとか小豆であるとか云ふ樣な色合は、一昨年頃から漸く勢力を失つてまゐりました處で如何なる染色が之れに代つて流行となつたかと云ふに、それは藍氣がゝつた色合でありまして、一昨年の秋頃から之れが徐々と流行界に勢力を得はじめたやうに思はれます。

併し其以前にも、或る一部の婦人社會には、藍氣の染色を禮裝に用ゐて居りました。或る一部と云ふことを有體に申すと、花柳界であります。花柳社會では如何いふ處から藍氣色の服裝を用ゐはじめたかと云ふに、三十八年日露戰役の最中、我軍の連戰連勝を祝して、特に勝色を撰んで、之れをお座敷着に用ゐた向がありましたが、抑もでありました。處が其頃赤氣の染色は既に流行の最極度に達して居りまして、稍飽き氣味を生じて居た折柄でありましたから、忽ち花柳界の或る方面に現はれた藍氣の染色が、婦人社會一般の眼を惹いて、弗々と此色合が採用され、一昨秋に至つて、愈よ流行と云ふ方に向いて來たのであります。乃で斯う云ふ事に就いて常に注意を怠らぬ三越吳服店は、一昨秋の新柄陳列會開催の當時、其廣告の美人畫に藍氣の服裝を見せて居ります。

昨年の春となり秋となつて、藍氣色は愈よ益々勢力

を得て、赤味を帶びた色氣のものは、餘程勢力を失墜して、新調の衣服と云ふと、何れも〳〵藍氣のものばかりと云ふ有樣になりました。尙ほ此の事に就きましては、昨冬三越呉服店員が、記者に語つた所を茲に御紹介いたしませう。

「小豆、葡萄、梅鼠など云ふ樣な、總て赤味がかつた色合が一時非常の流行で、今でも現に行はれて居りますが、今年となつて見ると最う流行おくれです。新らしい流行色と申すは、



模樣服にしましても縞物にしましても、一體に靑味がゝつたもので、即ち藍氣を主とした色合であります。其の色を一々申せば幾種もありますが、一寸四五種擧げて云ふと、御納戸、錆御納戸、桔梗、藍鼠、藍鐵などで、此中にも年齡により又人々の柄によつて、夫れ〳〵好みも異なるし、同じ樣な色合でも、濃くしたり淡くしたりしなければならぬと云ふ事は、今更申すまでもありません。幾ら靑味がゝつた色が流行だと申しまし

ても、極お若い方には、餘り藍氣勝ちのものでは、何うしても不似合ですから、多少赤氣を含んだ冴え冴えした色合を用ゐなければなりません。夫れには何が適當かと云ふに、御納戸に紫を含んだもの即ち桔梗色の樣なものに限ります。紫は御承知の如く赤氣を帯びた色で、之れによつて色が冴え〱して來る。乃で令孃方のお召物には、桔梗色が近頃非常に歡迎されて居ります。また縞物にしましても、新流行のものは、猶且藍氣を主とした色であります。云云。

次に之れも昨冬白木屋呉服店に就いて、聞いた處も亦前記三越の談話と同樣でありましたが、序でに記すと。

『株式賣買が盛んで、相場に非常な狂ひがあつて、一攫千金の富を得た人や、一夜乞食の出來た後は、大風の吹いた後のやうに、相場が釘附になるのと同じく、衣裳の流行も元祿とか何とか云つて大流行のあつた後は、一寸落着くもので、昨今は先づ持合と云ふ所でありませう。目下流行の色は、昨年以來持囃されて來た例の藍氣のもので、御納戸色、錆お納戸、縹、桔梗、藍鼠などの類で、之れに多少他の色を混合して、濃くしたり淡くしたりする位のものです』云々。

以上の如く、今は總て藍氣の色合が流行であります。處で此の流行が何時まで繼續するであらうかと云ふ問題になると、確かに斯うと豫想は出來ません。だが今の有樣から推測を下すと、少なくも今年一杯は藍氣のものであらうと考へられます。一昨年以來藍氣が流行とは云ふもの〻、實際を見ると、前にも述べた如く、昨年の春となり秋となつて、漸次に流行界に勢力を得て來たもので、廣く觀察すると、三越店員の談話にもある如く、今も尚ほ小豆色や、葡萄色の樣な赤味がゝつた色合が行はれて居る位でありますから。藍氣のものが一般に行渡つたとは無論言へない。でありますから、此處暫らくの間は、今の新流行色を繼續するに違ひないと思はれます。縦令變つた流行色が現はる

としても、白木屋店員の所謂藍氣に多少他の色を混合して、濃くしたり淡くしたりする位の物でありませう。

次に模様の事を申しませう。諺にも流行は繰返すと申します通り、一旦廢れたものでも、或る時機が來ると、夫れが又も流行となるもので、現に婦人服の模様が然うであります。一昨年頃までと云ふものは、猫も杓子も江戸褄模様でなければならぬと云ふ有様



で、裾模様は、一時全く屏息の體でありましたが、藍氣の染色が流行となつて、模様の圖柄を大きくするやうになつた處から、自然と元の裾模様が復活の機運に向つて來まして、昨年からまたも流行となりました。

白木屋呉服店員の談話にも、

「模様物としては、江戸褄は稍秋の扇と云ふ體で、新調のものは大抵が裾模様に移つて來ましたので、

従つて模様の圖柄が大きくなつて居ります」云々とありました。また三越呉服店の談話にも、江戸褄模様の勢力失墜の事を聞きました。今其談話を御紹介すると斯うであります。

「昨今は模様が總じて大きくなりまして、江戸褄にしましても、以前は高さ一尺二三寸止まりでありましたが、唯今では一尺五六寸と云ふ高さです。それから一時は白上り模様に淡彩を施したものが、一般のお好みに適して居りましたが、今ではそれが變つて來て、濃艶なる彩色を施したものが歡迎されると云ふ有様で、従つて純粋の江戸褄模様は、不流行に向つてまゐりました。今行はれて居る江戸褄は、前にも申しました如く、模様が以前のよりも高く且つ大きくして、江戸褄式裾模様とでも云つたら可さゝうです、斯う云ふ有様ですから、模様物は之れより追追と裾模様の昔に復つてまゐるに違ひありません。既に只今の處でも、裾模様が實際に於て半數を占めて居る程で、即ち江戸褄と半々の流行であります。また四五年前までは、小紋模様が流行でありましたが、昨今では全く廢れて了ひました。」云々。

模様の事は、右三越呉服店員の談話と、白木屋呉服店員の談話とに依つて、充分に今の流行が知れるでありませう。

乃で今年流行の模様は、彩色の濃艶なる裾模様であつて、染色は前にも述べた如く、總て藍氣のものが引續いて一般に持囃されることであらうと存じます。

新年の半襟

松殖門生

半襟の色合は、どんなのが今の流行であるかと云ふに、夫れは着物の流行色と同じである、一寸考へると半襟の色合と着物の色合とが同じ流行色であると、甚だ配合が悪い様に思はれるが、事實は決して然うでない、と云ふ譯は、流行色の紋服を着る場合には、主に白襟で、染色物の半襟を着ける場合には、着物は多くが縞物であるから、別に配合が悪いの何のと云ふことは

ないのである。併し縞物でも時の流行色に支配されて居ないではないが、紋附の地色と縞物の色合とは、大に趣を異にして居るから、半襟の色と衝突すると云ふ様なとは、先づ無いと云つてよろしい。

處で、今の流行色と云ふは、藍氣を主としたもので、即ちお納戸、花勝色、桔梗色などあつて、半襟も猶且是等の色合が専ら流行して居る。また半襟の地質は、縮緬、鶉縮緬、木賊織、鎧織などで、其他絽縮緬のもあるが、之れは夏向に限るのである。

さて新年の半襟は、如何なのが流行であるかと、例の新橋の襟治商店に就いて、店員の談話を聞いた所、今年も例に依つて、御題模様のものが、相變らず多く出るとの事であつた。同店員の曰く、『昨年の御題は新年の松で、今年の御題は社頭の松と云ふのですから、同じ松でも大に趣を異にした模様を出さなければなりませぬが、實を云ふと夫れが却々難かしい、而かも一種や二種の模様を拵へて置けば可いと云ふのでない、幾種も／＼拵へなければならないのですから、中には平凡なものも出來て、嶄新な圖案と云ふは、實際思ふ様に出來ません。處で今年出來ました御題模様の主なるもの丈をお話しいたしますと、葵に松、之れは加茂の社と云ふ趣向。次に矢筈に松並に鳩に松は、八幡社頭の松と云ふ意匠、其他神樂太鼓に松、千木に松八咫鏡に松、曲玉に松葉、鈴草に松、松皮菱に葵、松葉巴などあります。』云々。また色合と模様とに就いて曰く『昨今では錆勝色、錆納戸、鐵鼠、花勝色など、總べて藍氣がゝつた色合が流行で、以前なら赤襟と云ふ年頃の方が、唯今では桔梗色だの花勝色だのをお用ゐになると云ふ有様です。斯う云ふ風で、一體に色合は餘程質素ですが、其換り模様の方が以前のよりも遙かに大きくなつて居ります。而して刺繍が大流行で、今は染模様にしましても、多くが刺繍を配つてあります。また絞り模様が近頃盛んに行はれる様になりまして、以前は絞りの模様と云へば、意氣向に限ると云ふ有様でしたが、昨今では一般の流行となつて居ります。』云々。

外交官の妻となる資格

某外交官談

外交官の妻たらんとの希望は交際社會に活動することがエライさうに見ゆるからであらうが日本の女子が歐米の交際社會に出て果して活動をつゞけ能ふや否やは聊か疑ひがある、然し活動とまでは行かずとも交際社會に出て不覺を取らぬ丈けでも出來れば寔にエライと申さればならぬ、けれども交際社會に出て不覺を取らぬ丈けの力量を持つには餘程の素養がなくてはならぬ、此の素養がなくて飛び出したらば無論失敗する、それも日本なら譯けも無いが外國の交際場裡では却々である。凡そ交際界の女子は三つの能力を具備せれば駄目である、一に氣性、二に語才、三に趣味、以上三つ揃はればいけぬ。

△氣性はどんなのが好いか

氣性は男子優りでないければいけぬ、外國に於る交際社會の主體は女子である、女子が男子を操縦するのである、男子の先導者となるのである、故に氣性が強健でなければ駄目である、柔弱な、沈鬱な、男子の影に隠るゝ様な女子では到底交際社會に出られるものではない、此點に於ては遺憾ながら日本の女子は及第しない、不活潑で、陰氣で、外國の交際社會には相應しない、然らば如何にせば日本の女子が外國的に成り得るかと云ふに現時の日本では右に申す如き活潑な氣性に養成さるゝことは絶望と見ればならぬ、日本從來の慣習と教育方法から見て決して外國的女子の生ずべき理由は無い、故に余輩の考を以て言ふならば幼少より外國にて教育を受けた女子ならいざ知らず、外交官向の女子は我國に出ないと申すの外は無い、換言すれば外交官の妻たらんとする人は幼少より外國にて教育を受けた人でなければならぬ。

次に語才が無ければならぬ、然るに外國語と云ふものは男女を問はず日本人には厄難である、是れ日本語の語法脈絡が外國と全く違ふ故であらうが堂々たる男子にして尚且つ外國語の習熟に困難する、殊に女子の言語は男子の如く只通話し得る丈けでは滿足し難い、必ず奇麗に通話せればならぬ、故に男子よりは一層の困難に遭遇せればならぬ、尚一歩を進めて只奇麗に話す丈けでは滿足し難い交際社會にては必ず豐富に話されればならぬ、然るに遺憾ながら日本の女子は概して男子よりも人の前では寡言である、是れ交際社會の人としての大なる缺點である、余輩の考に依れば日本に居て一週四五時間の文法會話くらいで學習する語學では到底不完全を免れない、外國に留學して稽古するか又は洋人の家に寄宿して練習するで無ければ駄目であると信ずる。

△趣味はどんな工合か

最後に必要なのは趣味である、交際社會の趣味は多方面であるが、概して普通の高尚な趣味は美術、文學、音樂、演劇、園藝、等に關する

ものである、趣味は人の品位の要素である、即ち人格の土臺と云てもよい、尤も余輩が茲に趣味と云ふは主觀的に云ふのであつて、必ずしも自身で演藝をすることでは無い、文學趣味と云ても詩を作るにも及ばない、音樂趣味と云ても敢て演奏に堪能なれと云ふのでは無いが、趣味は一種の判斷である、人物の價値を示すものである、故に趣味の低い人は上流社會に容れられない、趣味は矢張り教育の結果であるが、不幸にして余輩は現時の日本婦人の敎育程度では外國の上流社會の趣味を感得することは覺束ないと思ふ、故に余輩の信ずる所は幼少より外國にて教育せられ、外國上流の趣味に養成された女子ならいざ知らず、さも無ければ決して外交官の妻たるに適するものでは有るまいと思ふ。

右申す如く三能力を具備せれば到底交際は駄目であるが、外交官の妻たらんとする人々は果して右の三能力に缺くる所はないと、自信し給ふや否、若し右の三能力が充分で無くして、交際社會などを夢想するならば、非常の間違と云はねばならぬ、余輩は必ず其誤見なることを忠告するに躊躇しないのである。

加之日本の女子には一の大缺點が有る、これは何しても脱れ難い大缺點あることを自覺せねばならぬ、從て此の缺點の埋合せとして一方に能力に於て優秀ならねば交際家としての價値が無い、一大缺點とは何であるか、余輩は忌憚なく言ふを憚るけれども、事實は事實として隱蔽する譯には行かぬ、外でも無い、日本の女子の形體の不美なる點である。

△何故に日本婦人の形體は不美なるか

日本女子の洋裝は滑稽である、皮膚の色が黄色であるから季節の流行色が釣合はない、顔面が割合に大いから、全身の釣合が醜く見ゆる、ソシテ眼が小く、鼻が低く、顔に表情なく、無感覺の樣な面相で、胸が扁平で、背が猫背で、腰に締りが無く、下肢が至て短い上に、足尖が内輪であるから、全體が誠に美で無い、又洋婦人の美は坐止よりも直立に在り、直立よりも動行に在るが、日本婦人には直立の美が無い上に、動行と來たらカラ駄目である、日本に居ては、右の不美が左程目立たぬが、歐米へ行て見れば善く目立つ、此點は外國を見ぬ日本女子には餘り感じがないかも知れぬが、日本で如何な美人でも歐米では決して美人の群に入らないのは事實である、凡そ人は先づ互に外形を以て見る、虛榮心と自負心に強き女子社會では、殊更深き感覺を以て人の外形を見るから、斯かる形體の日本女子が歐米の交際社會に出たらドーであらう、必ず彼等は輕侮の念を起すに相違あるまい、又斯かる形體の夫人を同道する日本外交官の感覺は如何であらう、晴れの場所に出たら必ず氣の引けることであらう、セメテ格好なりとも造りたいが、格好の要具はコルセットである、コルセットは幼少のときより慣用せねば不衛生であるのみならず、成長せる日本女子が急に之を用いても決して格好を成すものでない、依然として桶皮胴の一枚肋骨と云ふ樣な體裁であるから、實に見られたものでは無い。

されば私は決して外交官夫人なることを婦人に望まないが、しかし人の考は樣々であるから御希望の御方も澤山あらう、そこで私は右の形體上の缺點は日本人に生まれ付いた以上致方ないから他の點で補ふの外は無いとおもふ、即ち前陳の三能力を練らねばならぬ、若しも外交官の妻として右の能力が無いとすれば交際社會に出ずに閉居するか又は夫たる人に別れて任地に赴かず、日本に在住するの外は無いのである。

和歌

三宅花圃女史選

（天）露　千葉　小林よね子

八千草もうつろひぬれは
　物おもふ袖をたつねて露のおくらむ

評、あるべき趣向なれどいひなしおもしろうこそ。

（地）兄君のみまかり給ひしをりに　越後　坪井わか子

みなし兒はよき衣着しといさむなり
　御柩送る野の道にして

評、折々みるたゞめしかなしうて。

（地）枯野　東京　月枝

大空をもの逐ふて飛ぶ荒鷲の
　ゆくてかすむる奈須のしの原

評、大きやかなるけしきなり。

（人）秋夜　金澤　藤島小春

木がらしの聲こそわけてかなしけれ
　蟲も何もかれてきく夜は

評、今少しよおぼゆれど失意のまゝあはれなり。

（人）案山子　備後　杉原衣子

たましひはまもりし稲のみに入りて
　からのみ殘る案山子なるらん

評、かるくよみなし給へり。

佳調

田家秋　大阪　武内信子

掛け稲に里はかくれて見えねども烟賑ふ秋の賤が家

秋の夜　駿河　喜代子

たかどのゝ琴のしらべのいとさえてすみゆく月にかなる白菊

曉旅　大阪　人見やすな

鷄なきて宿は立ちしに小くら山また夜を殘すまつのした道

歳暮　東京　中村ちよ子

惜しめども月日は人を待たずして今年も暮になりにけるかな

夜擣衣　淺草　花子

幾千度まきかへすらむ里人の夜半もたゆまで衣うつ聲

失題　越後　みさ子

遠く遠くつゞく尾花の端にひくう夕日落ち行く秋の暮かな

失題　豐後　柳井うれ

水車かすかにめぐれる音はして紅葉の中を谷川の行く

夏夜の灯　岐阜　山田はぎ子

秋の夜の酒宴に更けし灯のまゝたきさびし紅葉がくれの

落葉　大阪　前澤物寿

落葉多く森の府にはらはらと紅葉三ツ四ツ又こぼれけり

朝霧　大阪　前澤初芽

朝ひかげしほのやほあひにかゞやきてこぎゆく舟のろの音いさまし

述懐　三重　永谷靜子

奥のれはさわがしけれど世のうさをきかぬいほりぞすみよかりける

述懐　下野　外塚あさ子

あつき日ひかわ鳴すの音も消えて夕風さむし小山田の里

歳暮述懐　陸中　越田あや子

老の身のなげきにかへて嬉しさの數そふ御代の年のくれかな

述懐　攝津　宗野まこと

久かたの星の林のきらめくは空にも咲くか木枯の風

妹のいはた帶したるにつきてよめる　下谷　田代いと子

ひろ紘の生さきいはふいはた帶むすぶけふこそめでたかりけれ

すゝ拂　河内　岡市喜志子

朝はらふみにちりひぢの塵なし函のおもてに煤はおほへど

歳暮　佐賀　織田信乃子

なすことのなき身ながらも自ら心せかるゝ年の暮かな

述懐　北海道　磯部照子

澁柿の一つのこりて秋かれて賤がやれ戸に影うつなり

紅葉見むとて鹽原にあそびて　小石川　渡邊愛子

はつ時雨しほばら越ればゆく森の峯かさなりぬうす紅葉して

秋月　姫路　錦子

月清き手稲の里の小夜砧つちの響も空に澄みける

述懐　大阪　山口靜子

行末知らぬ野道にゆきくれて砧の音を聞く夜寒かな

時雨　和歌山　松島百枝

村しぐれはやくもすぎぬふり來ぬとかどのほしもの取いるゝまに

時雨　安藝　豐節幸

はるゝかと見れば程なく時雨れつゝ影定まらぬ夜半の月哉

初冬山　京都　前川幸

あらし山散のこりたるもみぢ葉に初霜みえて冬はきにけり

谷川氷　美濃　片田きぬ子

谷川の水はしらべも松風にゆづりてこほるころとなりけり

述懐　伊賀　服部うた子

柿紅葉みなちりはてゝ二つ三つ殘る熟柿にしぐれふるなり

立てかけし張もの板に夕日はえて背戸の竹村百舌なきしきる

街上月　千葉　吉原勤子

明月や下町通り迷られてゆめとたどりしその夜をぞ思ふ

述懐　山梨　岸由次子

辛崎の松吹く風に霧晴れて月影清し志賀の大和田

幾千巻ふみは讀むとも我にかせん身に行はんこゝろなければ

寒夜埋火　香川　山西民子

幾度も炭さしそへて面白き話に更る夜半の埋火

述懐　滋賀　久子

もみぢ葉は夕べの風にちりしきてけさ庭かはる霜のはつはな

失題　靜岡　中村正子

いく千代もかはらぬ松によりそひてつたのもみぢの色美しきかな

失題　大阪　後藤八重子

吹く風も月の光も凍るらむ夜を守る犬の聲おほれなり

逸題　　麹町　豊子

さらぬだに淋しきものを山里の木の葉はちりて空はしぐれて

年暮感　　攝津　尾崎篠代

年ごとにかわらぬものはくれ竹の一よをおしむ思ひなるらむ

小山田霜　　岐阜　堀川龍子

霜の色は冬になるこの穗くちてむすびかへたる小田の初霜

庭雪　　廣島　田上濱子

よきほどに綠のこして庭の面の松おもしろく積る雪かな

初冬山家　　越後　坪井和歌

更くる夜に賤が碓ひく唄やみてひとり水車のおとを聞くかな

雁　　同

たび衣襲ふ手とゞめて北に飛ぶかりの行方をうちまもりつゝ

冬川　　同

渡し舟氷にとぢて川つらをたゞ木枯の風ふきわたる

冬の月　　駿河　泉としこ

あら海の沖邊の小島ほのみえて光つめたくさゆる月影

山家　　長野　岩崎とら尾

花にくれ月とあかして春秋をしづかにおくるやまげのいほ

逸題　　京都　砂川澄子

さらぬだに淋しき物をたびの夜の寐ざめの床にあめの音きく

風に散る紅葉一ひら手に受けて幸うすき身の行末おもふ

漁漫戲　　伊勢　ひで子

はちす葉の枯葉くち葉に音たてゝ雨ふるなりしのばずの池

逸題　　神戸　今村米子

雁なきてさむき朝げの霜しみの色とも見へず木々のもみぢ葉

木枯　　静岡　中山さな子

物思ふ身には殊更ひゞくなり楢を渡るこがらしのおと

前號に揭られたる大内の御事ともを拜しまつりていと
かしこさにかくよめる　　筑前　木村こま

久かたの雲井の雁のこゑきけばいとゞ身にしむ秋のよの月

燈火　　下谷　鍋島潤子

夜もすがら學びの窓にともし火のこゝろのやみを照らしがほなる

逸題　　本郷　今井とみ子

月も蟲も夕べにひゞく鐘の音もおもひぞまさるふる里のそら

山内一豊夫人　　三河　村上逸子

玉手匣秘めし黄金の花の香はときえて咲きし色にぞありける

長き夜　　岐阜　井川松枝

長き夜の更くるも知らでしきしまの道にたのしむともし火の下

失題　　水戸　榊いち子

星一つ北に流れて消え失せぬ吼るがごとき島の夜あらし

晩秋　　水戸　榊八重子

小山田に殘る案山子の骨見えて暮れゆく秋の村の淋しさ

秋の夕野路　　青森　三浦愛子

夕露をふみつゝきけば蟲の音を讃みつゝ行けば月さしいでぬ

折にふれて　　紀伊　佐田柳子

はら〳〵と散る紅葉を手にうけて逝く秋惜しむ初霜の庭

伊吹進水式につき　　澁谷　櫻錦子

新らしき御軍艦やおろすらん人こそつどへ吳の港に

殘菊　　名古屋　江原たつみ

鹿の音も眞萩もかれし山陰にのこるは千代のしら菊の花

折にふれて　河内　田中八須子
言はずとも色には見ゆる彼の人のこゝろにいたる口なしの花

暮秋　河内　田中八須子
小山田の鳴子の縄も朽ち果てゝ引止められぬ秋の暮かな
早稲晩稲みなとりいれて千町田のながめもひろき秋の暮かな

柿　河内　田中八須子
夕風にゆられて一ツ柿の實の梢に殘る秋の色かな

亡兄をおもひて　長門　飯田ふじ
おもはしと幾度か胸にくり返すさわれ此乳を誰にあたへん

折にふれて　麻布　池上強子
村時雨はれにしけふの小春日に咲にし菊の人をまつらん

菊　丹波　篠川繁子
おく霜に庭の千草も枯れはてゝ垣根に匂ふ黄菊白菊

折にふれて　四谷　加藤菊子
初秋に立てにしちかひふみもせで今年もあだに過しつる哉

題しらず　下總　岩瀬不二野
むら雀はた〳〵とびて荒小田のなるこに殘る秋のゆう風

海邊の雪　讃岐　松本史子
小夜更けて潮風寒み澄む月の影も氷れる雪の白濱

朝落葉　弘前　ひろ子
けさはかりはいき持つ手のたゆたひぬにしき敷きたる庭の落葉に

冬夜偶感　河内　櫻井貞子
うみし見をすかす霜夜のちゝ乞やなくにもまさるつらさなるらん

白菊　千代子
語らひし君もいまさずたゞひとり眺め淋しき庭の白菊

紅葉　伊豫　渡邊春子
夕へ〳〵入日やそめし初時雨またふらぬまに紅葉たりしは

逸題　京都　相原満壽代
水白う北風寒う橋の上に尼君二人佇みたまふ

惜年　岐阜　度會よし子
この年も殘り少くなりにけり學の道はまだ遠くして

菊　丹後　太田八重子
おく霜に操破らぬ菊の花人もかくこそあらまほしけれ

時雨　名古屋　江原よし子
出る日を待かひなきは二見潟しぐれて明しあしたなりけり

千鳥　紀伊　佐田柳子
磯山の松には白く霜見えて友やよぶらんさよ千鳥なく

鹿　青森　文子
三日月の影落かゝる山の端にあはれもよほすさを鹿の聲

逸題　上總　美曾野藤子
まちわぶる人は歸らず小夜更けて千鳥友よぶ秋の夜の月

題知らず　周防　貞弘すみ
とり出でゝ又かなづれど憂き秋の小琴の音にも思ひますかな

暮秋　長野　清水あや子
妹がうつきぬたの音も身にしみて秋ふけたりな信濃路のさと

船上冬月　山口　石田あい子
荒波は舷うちて衣手のしふきに凍る冬の夜の月

霜夜　越後　佐藤せい子
榾たきて霜夜の酒をあたゝむる窓にさびしく木兎のこゑ

遠山初雪　陸奥　田中たけ

ふりそめし甲田の畔の初雪にかばねさらせし人なこそおもへ

年暮　　鶴町　須田豊子

この年も暮むとすなりつもりこし心の塵をまづはらはゞや

冬月　　鶴町　ばゞ

照月の影すさましく湖の面にうつりて寒き冬の夜半かな

折紅葉　　三河　小出珠子

けふ一と日山あそびして歸るさの道そひ紅葉また手折かな

月下の菊　　近江　清水とし子

をさなごと身を白菊になぞらへむやけき月の宵の君にして

茶の花　　岐阜　桐井とみ子

花もよしにほひもゆかし茶の花の何おふむたゞうつむきて

逸題　　常陸　今泉智子

明けぬれば刈田のあとに霜見えて朝戸出さむし雞のなく

秋川　　京都　清子

めだかとるかなひもさりて寒川の水音さむし秋の夕くれ

初冬　　松山　芳子

水がくれに人目しのびし柿の實もあらはにみえぬ冬やきぬらむ

寒蟲　　岡山　美子

哀れとや霜枯れの間ないのちともしらで千草に蟲の鳴くらむ

逸題　　靜岡　鈴木輝子

すきまもる風に衿元かきよせてせがきぬ送る街道りすなり

朝霧　　青森　佐々木あや子

朝霧の菊の園生に君よべば返すみ聲の風香なりくる

折にふれて　　伊勢　瀬川朋子

いさめせと門におとなふ賤の女の籠につゆけき七草の花

別選

しのぶ草

松岡　小越龍代子

○初はる嬉しげにすこやかなる子らの打ならべるを見て

かぎりなく消しうるはしゝげり合ふ小松が原のはるのながめは

○一月中山の初雪をみて

朝月あけてむかふ高手の初み雪目さむるばかりめづらしきかな

○ある朝とくより夫川事ありて遠き里に出立ちしが、いつよりわきて寒さきびしきにぞ

あさ風よ霰よ氷よ野に山に分けゆく君につゝがあらすな

○春あさきころ野べにて

よはなべて梅の花のみまつかげのやなぎのはなに鶯のなく

○大津都にありける頃ある夜故郷の夢をみて

ふる里のゆめ打さめしさ夜中にあらいそ波の音のみぞする

はゝ君のみ聲はみゝにのこりつゝうつゝともなきゆめの後かな

○窓前梅

鶯の聲もきこえて日かげさすみなみの窓に匂ふうめがゝ

短文

甲賞

冬の夜

相模　武子

實に靜かなる夜かな、淺茅の露にむせかへりつゝも哀れにうたひし蟲の聲はいつしかかれて、霜夜の風のそよとだに音せぬに、只何となう物の思はれて、まちがほの書の上には、むなしく照らす燈火の影明う、折しも一しきり軒の小笹にそよと名のりもあへず障子の隙よりつき入る風の鋭く身は自ら戰かれぬ、向ふの滿庭美しかりしも、見る影なうやせよろぼひて、月を宿せし尾花が袖もつくろはんよしなきまでやれほころび、力なげに伏しなびく姿の偲ばれて、哀一しほ、こよひも獨り友なき室に衣つゞりやし給ふらんと、間の襖引き開けて、母樣何をかしおはしますといへば、今しもそなたが着替への衣縫ひ終へし處ぞ、見よとの給ふ、光あまれき天つ日も隱るゝ夜半はあるものを、親の情の暖かに、此冬をも知らで過すなるべし、といと忝けなさに數多度おしいたゞかれぬさても疲れ給ひぬらん、御肩もみ參らせんとうしろに廻れば、心細うも肉落ちて手にふるゝ御骨のあらは、村時雨の又もめぐり來て、滿窓にそそぐ音いと寂し、かゝる夜にこそ一きは身にしみて、さらぬ別れのなくもがなとぞ。

乙賞

返り花

赤坂　西森英子

高く澄み渡つた天に霙か糸遊か煙のやうに浮いて居る、陽氣に欺されてか垣の外の櫻が返り花をつけたのが哀れに見える、文子樣のお目出度いお荷物が御門から出で、花の下を靜かに行く、あゝ此度こそは眞の御夏緣であらう、文子樣のお身の上にとこしえに幸多かれと見送つた。

乙賞

夕暮の河畔

靜岡　天野光子

城山の上は空一面に黄橙色をなしてゐる、紫の山から出て來る大井川の夕榮の色を浮べて悠々と流れる樣は金絲銀絲で織つた布が柔かい風に揺られるやうである、パシヤンと水音がして渡船がつく、夕榮は漸く消え山は黑ずんで來た。乘らうとすると、東の山の端に鏡の樣な月が出た、今宵は十三夜である。

丙賞

朝

熊本　秋晴子

妹をお負つて出た、冬の朝で有る、白く乾いた庭を踏むので下駄が妙にカラコロと響く、花畑へ廻ると殘んの菊が淋しく露に霑ふて居る、妹へ見せると可愛い手を出す、手がシツとりと濡れた、寒いので紫色になつた足を袂で包むでやつて甘藷畑の方へ行く、鶏が餌をつゝ突いて居る、お隣の方で釣瓶の音がギーツときこえる。

丙賞

愛兒の寫眞を友に送りて

滋賀　ゆき子

靜子さん笑つちやいやよ。何んだかはづかしいは、こんなにはやくおつ母さんになつちまつて、名ですか、宿のかしら文字とつて敏夫とつけたんですよ。瓜のつるに茄子はならぬとか……、でもまあよく肥ッて居るところをほめてやつて下さいよ、ネ、ネ……。

丙賞

家庭日誌

京都　相原鶯子

昨夜所天に笑はれたから、今日はと思つてゐたに、復失敗つた、水が過ぎたからか、火が烈しく燃えた故か、臭いと氣付いた時、已に晩しもうご飯は焦げ付いて居た、これで家事專修科を卒業したとはどうして言はれやう、寔に愧かしい事、吁今日の日誌も一つの汚點を遺した。

冬景色

長野　山櫻

龍田姫のうるはしき紅葉の衣も、吹き渡る峰の嵐にさそはれて見るだにあはれのいやまさる冬の時節とはなりぬ、昨日に變る今日の野ら、うらかれ果てゝ色さむく、殘る松さへ淋しげなる峰に、木枯冴へ渡りいつこも／＼眞白に、賤が伏屋を時ならぬ雪の白かれうづ高く、枯木の梢は時ならぬ花に滿ち、あしたは繁き霜おきそへ、夕はすさぶ風凛烈、あはれ淋しき冬景色か。

春の心

長野　宮澤寅勢

垣根の雪は消え初めて、時知らぬ松の葉色も春めき、野末の藪の寒椿は一雨毎に笑顔を見せぬ、山の端白み渡りて紫たちたる細き雲の棚引く春の曙いかでしろがれの世界に劣るべしやは、咲き揃ふ梅は雪の如く、春風一度渡れば花片ひらひらとして水面に浮び、愛らしき緋鯉一ッ二ッ池の面に浮び出でぬ。

逝にし友

淺草　淸水せい子

さなきだに淋しき秋を、月にも花にも睦みあひ、同胞のなき身をいとゞ戀しう慕ひしに、妾を殘して遠く／＼逝きませる友の笑顔忘れがたう、共に培かひし庭の黃菊や白菊は、今を盛りと匂ひこぼれしも、誰にか見せん、誰と共にか樂まん、あゝなゝ其れよ、せめてもの心やりに君が御墓に一枝をたむけん哉。

コスモス

青山　酒井溫子

もう四時になつたから、襟だけくけ殘つたけれど、止して仕度にかゝる今朝咲いた眞紅の常夏の小鉢をお書齋の机の上に置くと、白いコスモス花が際だつてはつきりする、五時半御歸り。お好な物二三品卓へ並べると、「ヤア御馳走だナ、うん土曜か」つて徐ろにお盃をお取りになる、恰ど六時……。

美いちやん

備後　天野貞子

花様の御葩物還しと門邊に立てば、おゝいお月夜、流石に初冬の四方はしんゝ靜まつた、折しも姉様と後に聲してひら〳〵と白いものが散つた、「何に？」、近よると高い香りにそれとうなづかれた、實に困つた美いちやん、もう幾度言つたつて敎へたつて駄目、亡き友の紀念の白菊またもちぎつて……。

あまりの事に此度は叱る勇氣もなくなつて、「美いちやんあのうつくしい菊をちぎつて、まあ可愛かなくつて、御覧よ、明日の朝はれきつとないてるからと云つたきりぼんやりと立つて居ますと、「どうなすつたの？」と花様にふいに聲かけられて嬉しさに何かも打忘れ家にかけ入りました、翌朝美いちやんはゝせて來て姉様勘忍して頂だいれ、私もう採らないから、ほんとよ、彌れ泣いてよ、あどけなくわぶる其面の愛くるしさ花園に露をやどせし白菊とやさしはいづれ おとらで私は思はずしかと手をとりました、美いちやんはやはりいゝ子、あゝ今迄は全く私の敎へかたが惡かつたのでした。

庭の殘菊

播磨　三澤喜努

おく霜に庭の色もそめかはり、なく蟲の音さへかれゆくこのごろ、もみぢ吹く風さそひけん、まがきがもとよりかよひくる菊の香いとたかし、昔の人はうたひけりとか、「つゆにしもにむすびかへてもうつろはぬ菊こそ花のときはなりけり」と、げにたふときかな、きくの花人の操もかくてこそ。

おく霜にまがへる庭の花みれば、秋のかたみときくのひと本。

暮秋の夜半

宇都宮　君島喜美子

そゞろに興を覺ゆるまゝに、更くるも知らで尚も讀みもて行く程に、埋火いつか消へ果てゝいとはだ寒きに、ふと心づけば、夜や、いたう更けぬらん、萬籟死して聲なく、瀨戸の笕のせゝらぎのみ咽せぶが如くさらさらとひゞき、四邊いと物靜かなり、やをら書とぢて起ち上りつ、月やいかにと窓押せば、玲瓏たる朧月いと冴やかに、今しも西の山の端にかゝり、小やかなる庭面をくまなう照し出せり、彼方の袖垣の下に、一叢のほほけし尾花の、風のまに〳〵、さながら白浪のよせては返すらんやう、右へ左へと白妙の袂連れて打靡く様、なんとなう物さびしう覺へて、そゞろに暮秋の哀れを思はしむ、叢がくれ夜毎に咽せびし蟲の音もはや枯れはてゝ打絶へたるに、ひとりこうろぎのみ露の命をもろくも消へなん果敢なき我身をかこつが如く聲も哀れに ころ〳〵といと悲しげに咽せ入るも一入哀れを添うるぞかし、折しも里の乙女や夜ふけて衣打つらん、かすかに通ふ砧の音、風にまぎれて絶へては又つゞきつ、遠く近くたゆみつしきりつ、其の音も哀れに、斷、又續。

寄宿舍の窓

山口　山中たか子

あゝなつかしい寄宿舍の窓、妾はいつも其窓下にて故鄉からのこひしき手紙を幾度となくゝり返して、何となし泣いたり、姉様のやうに仲のよかつた友とあの頃より大好きだつた「夕空はれて秋は來たり」の唱歌をうたひ見たり、悲しい時も樂しい時もあの窓が友達となつてくれた、あゝ其窓、今は何んな美しい人の心を朝夕慰さめて居るであろう。

田舎の秋

和歌山　澤崎はる子

時々しぐるゝ秋雨をきづかうてや、鎌をもつた爺さんに婆さんが空を眺めて物語り……稲をかついで忙はしく走せ來る屈強な男、あれはんかつぎに應たつ女、案山子にかはつた田畔の人、仰むく牛や、くびさげた馬、いづれも紅葉の色は目に入らず、秋風も身にしまぬ風情……。

乳呑子

名古屋　江原露子

なれぬ男の、子守うたを、涙聲して、泣く乳呑兒を揺り揺りてなぐさめつつ、師走月の月の冱へたる夜中に、垣根つたひて貰乳に行くぞいたはしき限りなり、嗚呼泣く兒よりは泣かるゝ人の涙は如何ならん、愛し兒あとに殘し、永しへに眠りし兒の母の地下の夢やいかならん。

軒端の葡萄

千葉　吉原勤子

秋立ち初めし昨日今日、ふと眼にとまりしは軒の葡萄の房にぞありける日頃はさまで心にもかけざりしが、蔓延び延蔵りてところ〴〵に露滴らむばかりなる紫の房の、秋風に吹かれてゆらぎたるいひ知らず美くし、その房その房これなくば寂るゝひまのあらましものを、この葡萄の今は却つて追懐の種となれるこそいとも悲しけれ、げに果敢なきは人の命なり、朝顔の花に宿れる白露の朝日待たぬ果敢なきさまの、げにそれにも似たるかな、わが妹は此悲しき命なりき、秋風はもとのまゝに吹き初め、葡萄は昔ながら實れども、あはれ去年の人は既に在らず、春夏は榮え秋冬は哀なる無情の草木に比しても、なほ果敢なきは人の命のそれなりけり、あゝ。

秋の一夜

愛知　三井たか

一夜燈火の下に書を繙く、讀み來り讀み去る程に時はうつり行けり、父君母君は床につきませり、今しがた聞えし賤ひく臼の音も斷えにけり、庭の千草にすだく蟲の音もいとゞ哀れに覺ゆ、されど獨り置時計のみカチカチと音高く妾の心を勵まさんとてか。

稲刈

駿河　豐島喜美江

暖い麥の御飯とお汁でお腹をこしらへて、太陽の出る頃前の田圃に出て稲刈をする、朝は隨分冷たうございますが、十時頃からは暖くなつて、黄い美しい稲田を眺めながら、ザクザクと稲を刈るのは、大層心地が宜うございます、一ト田圃を刈つて了ふと、お父樣と兄樣は、麥蒔きの仕度にと後を耕す、お母樣と、妾は他の田圃へ行つて刈るのです、よしちやんは金坊のお守をしながら、落穗を拾ふ、賣つて(家で買ふとしてあるのです)貯金をすると云つて居る、夕方になると、刈つたのを凡て稲木へ懸けて歸り、そしてお湯に入つて後、明いランプの下で、家族そろつて美味しく御飯を戴きます、秋は本當に忙しいが、最と樂しい時でございます。

秋の一日

紀伊　佐田柳子

小春日和の一日弟と共に近き野の邊に出で立ちぬ、前を流るゝいさゝ川の水清く後の峰の樹々の梢は紅葉して、折々聞ゆる百舌鳥の囀り、興深かう恍惚たりし折柄、日は漸に暮しつゝ殘れる菊の香も高し弟の唱歌の聲に我にかへれば、折柄風一陣、美しの紅葉、三つ五つ、清き流れに。

一口噺 ㊞印入賞

◎ 薩摩 日高妙子

男「僕は今までこれはと思ふ美人を二三人程見ましたよ」
女「え、もう一人は何人なの？」

◎ 山形 伊藤俊子

子供「お父さんお隣りのおしんちやんが近眼鏡をかけて居ると何故生意氣と云ふんでせう」
父「それはチー人が小さく見へるからさ」

◎ 日本橋 金子幸子

客「頼もう」
家人「ヘイ、どうか門の呼鈴を押して下さい、改めて取り次ぎに出ますから」

△ 京都 相原富子

母「お前十五にもなりやもう大人じやないかへ、お菓子をねだるなんてこどもの樣に……」
娘「はい」
母「お前好い着物を着たがるなんてこどもの癖に何の事です」
娘「……」

△ 佐渡 千鶴子

客去つて後下女奥様に向ひ下女「あの方はどちら様の御親類の方ですか」奥様「旦那様の弟で辯護士の方だよ」下女「へー道理で御話振りのはつきりとして御上手ななか〳〵雄辯なお方で入らつしやいますね」

△ 下總 藤崎美禰子

娘「お母さん、妾は獨り娘だから幾人も姉妹が在つたと思つて、何かを澤山買つて下さいな」
母「お前は獨り娘だ、何人ぶりも獨りで働きなさい」

△ 日本橋 齋藤ひさ子

令孃「美人は醜夫に添ふと云ひますが、眞個でせうか」
新細君「ソンナ事はないから安心なさいよ、私の夫を御覽なさいな」

△ 東京 後藤光子

奥様「雷と云ふものは電氣の作用なんだよ」
下女「でも私の田舎には電氣も何も無いのに何うして雷樣が鳴るので御ざいませう」

△ 東京 桃井つれな

母「これ坊や、何故さう、鼻の下を、引張るのだね」
坊「でも母ちやんが何時でも、先生の眞似をしろと云つたから」

△ 靜田 藤掛濱子

濱子「花ちやん、お姉さまはおいくつなの」
花ちやん「姉さまは十八なの、そしてね、長男なのよ」

△ 山梨 韓小舟

下女「奥さん、私ィ時事新報社へ頼んで美人の女と比べてもらひますべいか」
「アラマア和女が……」
「へエ、でも奥さん今朝八百屋さんがチマへの頭の毛といひ何といひ樣子のいゝ事は美人にも劣らないと云ひましたもの」

△ 栃木 武田たか子

父二子の旅行に際し「お前等は何れも年の割には小さいから汽車は半額の切符を買へよ」
子「私等は十六歳に十四歳ですが丈が低いのですから半額の切符を下さい」

△ 青森 三浦愛子

子供「お母樣、うちのお三の母がね大病だそうですから、裏の柿をとつて食べさせやうぢやありませんか」
母「何故ですか」
子供「初物を食べると七十五日長生をすると云ふぢやありませんか」

△ 靜岡 岩佐花月

錢遣者「其傷のある方で能から安くして呉れ」
島屋「傷のあるのは却て高う御座いますよ、どうも昨今は傷のある方が能く賣れるので態々傷をつけるには彈代がいりますから」

△ 下野 大島生

遊蕩學生金錢に困り國元の親へ電報にて「イノチナイスグカ子チクレ」
國元の父親「カ子ナラヌイノチイラヌ」

△ 徳島 平島政子

娘「兄さんの所へ歸る樣に電報を打ちますからお金を下さい」

父「近頃出來た無線電信でやれば錢はいらぬぢやないか」

△　相州　KS女

小供「アーお父樣ぼくとお父樣とどちらがえらいか」
父「おとう樣だよ」小供「なぜ」
父「おとうさんはひげがあるから」
小供「ひげなんぞ、家のねずみだつて生いてゐるぢやないか」

△　本鄕　柳友子

下女獨語して曰く「アヽおつるさんはうらやましい判任官になつてほんに女でも官員さんだわ」
傍の幼曰く「竹や其人お父さんのやうにおひげはえてるの」

△　佐賀　永野笑子

令孃「私しは才も勇もある方を夫にえらびますわ」
青年「僕はあなたとボートで出掛て轉覆したら直に助ける事が出來ます」
令孃「それは勇ましいでせうが轉覆させるなんか氣がきゝませんね才がなさすぎておかしいわ」
青年「いーえ才智もあります故意にボートを轉覆さのせるです」

△　筑後　長岡朝子

米國へ旅行する人、しなれて居る妻君にむかひ
夫「何も心配しないでいゝよ大きな船で行くんだから」
妻「でも二十日も御船ばかりで行らつしやるのですもの、私心配でなりませんわ、もし難船でもする樣でしたら直に電報で知らして下さいよ」

△　東京　花子

大家内の家の子、新世帶の家に遊びに來り、臺所に妻なる人の少し許りづゝ四品五品獻立し居るを見て「お伯母さんまゝごとするの？」

△　大阪　小谷靜江

田舍者芝居の前に立ちて「モシ／＼芝居は看板通りするのですか」
「ハイ其の通りします、サー入つて御覽なさい」
「イヤ、此通りなら看板で結構だ」

ものはづくし

△うれしいもの

初見の初聲
見合のあと
夫の歸朝
姑のなさけ
月夜の琴の音
戀人の手紙
縫ひ上げて着せた衣服が夫にキチンと合つた時
夫の改心
古鄕の音信
暗夜の燈火
歸省の前夜
母のほゝえみ
嫁入の前日
母上の手紙
母よりの小包
卒業後の結婚
雲間の月
縮緬の振袖

信濃　長谷川ます
埼玉　法師きよ
京都　藤田靜枝
伊豫　谷川賤子
神田　孤蝶
美作　蘅香女
韓國　里喜子
錦町　篠崎さく子
備中　江見定子
信濃　松尾節子
神田　中川月の子
兵庫　瀧たれ子
大阪　秋田萩子
信濃　中野みさを
大阪　中村よれ子
名古屋　永井すま子
茨城　谷口鞠子
芝　小島喜鶴子

我子の成業　山梨　尾谷こま子

△たかいもの

債主の顔
天の川
夕方の影法師
夜の川音
松茸の香
アルプス觀測所
妾宅の噂
新高山
大隊長の號令
月の桂樹
女學生の理想
角力の櫓太鼓
秋の夜の月
貴婦人の裝飾品
淺草の十二階
官營煙草
ニコライの塔
按摩の下駄音
お妾が身の代
新婚旅行の價
紳士のカラー
乞食の天井
博士の診察料
卒業證書
令孃の高髷
清水のぶたい

京都　藤田靜枝
京都　小倉慶子
伊勢　佐々木らく
大阪　糸若柳枝
新潟　大塚代根子
香川　松浦かすゑ
伊勢　田中こまき
愛知　眞田政子
信濃　中野みさを
備前　岡崎なか
下野　田代てい子
京都　深谷銀子
東京　梅澤雅子
錦町　篠崎さく子
岡山　太田かめの
周防　高木壽賀
攝津　石川清
韓國　掛橋郁子
下の關　清水豐子
群馬　栗原康子

△くへないもの

夏の牡丹餅
食後のお汁粉
棚
隣家の菓物
道樂むすこの涙
不馴れな手料理

京都　藤田靜枝
伊豫　谷川賤子
横濱　岡田芳枝
尾張　間瀨子

妾の半生

愛染女史

どうぞ御笑ひ下さいますな、私は思ひ出しますと胸が苦しうなりまして、誠に御恥しいですが此通り知らぬ間に涙が溢れまする。

丁度六年前でした、夜も晝も小止みなく掻きくらして一月餘りも降り續きました五月雨の頃、夫は頭痛がすると申して、軍醫の診察を受けました、すると、只當坐の風邪との事でしたが、怠らず服藥して居ましたら二週間許りで、すつかり快復致しました、それに如何云ふ事か、二週間も過ぎますと、變な咳嗽をいたしますから、又御風邪召たかと申すと、何直治癒るよと申して氣にも止めずに居りましたが、私は却々安心が出來ませんで非常に神經を惱ましました、何故かと申すと、御舅樣が何處でいつの間に御傳染遊ばしたか、其頃恐ろしい肺結核で御療養中でしたから、若しやと存じて、夫にすゝめ何之位の事がと申すのを、押出す樣にして、病院の診察を受けさせ、何卒私の心配は取越苦勞に成る樣にと祈つて居ましたのに、實に情なう御座いました、醫は肺尖加答兒と斷言して入院を勸告したのでムいます。

夫は職務上、御舅樣や御姑樣を郷里に殘して、程近き市に假寓して居ましたが、不取敢職を辭して引拂つて郷里に歸り、翌日直に縣立病院に入りましたから、私は三つになる幸夫と呼ぶ可愛い坊を養育して、自宅に淋しい月日を送つて居りました、一週に二度づゝは必ず玉章の往復致しましたが、夫の方からは毎も日増に好い、體重も何程か増した、此樣子では不日退院疑ひなければ、少しも心配は不用ぬ、御身必ず不養生をせぬ樣、坊に注意を賴むよと、眞實に嬉しい優しいお便のみでした。そのお便は誠となつて、嬉しや三月計りで、退院の許可を得て欣々と、歸宅致した姿を見て私は覺へず嬉し涙に咽びました、體格も肥へ太りまして元氣もなか〳〵旺盛でしたから……。

夫れより二三日在宅して、轉地療養の爲、知多半島

から三河の海岸かけて、寫眞機を携へて出發致しました、慰みに撮影しました風景や土地の風俗と共に相變らず容體は異狀なし氣分は爽快との嬉しいお音信でした、が此嬉しいお便りも二十日許りにして失せました。ある日の午前、郵便と呼ぶ勇ましき聲に急いで出ましたら、懐かしい夫よりの音信、嬉しさに波打つ胸を押靜めて居間に返つて開封致しましたら、少し風邪を引ひたから當地の醫の診察受けて居るが、心配には及ばぬ、少し熱が下ると一先歸宅すると認めて有りました、それより丁度十日の後、晝過ぎから雨になりまして物寂しい午後の四時頃、無體に焦悴れて歸宅りました姿を仰いで、私は暗涙を呑み、誠に落膽致しましたのは、忘れもせぬ神無月の末の日曜でした、それから一週間毎に六七回病院に通ひましたら、御蔭で癒りました、が、其後になつて考へて見ますと、全治つたのでは有ませんでした、又三月の中頃から咳嗽出しまして、病院へ通ひ始めました、さうして遂々四月の十三日の午後から、又もやそこの病室の人となりましたので私の小さい胸中は、はや、亂れ狂ひました。

◎良人の全快を祈る心の中

月日は流水の譬に洩ず。夢の間に二ケ月を經過して、世間は田植に急がしい水無月始となり何方を眺ても、樹々の梢は若緑して、只さへ茂つて居ます廣庭は一層小暗ふなり、氣も欝々と致す樣になりました、其頃病院からの御音信は、坊を木蔭へ遣らぬ樣毛虫が居からくれ〴〵も注意する樣にと、和歌を添へて、さうして身體大切に必々病氣せぬ樣にと、相變らず御優しい御玉章。

其時御舅樣は大層御惡く、他の病院へ御入院中でした、御姑樣は、御舅樣の御看護にいらしつてお留守でしたから、私は頑是ない坊を相手に打沈む心を自ら勵まして、家事を整理して夢現の境に月日を送りました。

此時宅に居りましたは、お老人の御祖母樣と、私と坊と、下女と、下男とでした、此物寂しい心細い際に當つて、大切の〳〵幸夫に腫物が出來ましたから、かかりつけの醫師の診察を受けましたら、風熱のよつたのだと言つて、塗布藥と服藥とを呉れ、二三日過ぎる

と全治るからと申されましたが、二十日許り經過ても少しも効なく、却つて大きうなつた樣に思はれましたから、夫の居る病院へ連れて行つて診察を受けましたら、入院は不可能が、今の間に手術すると輕ふ濟むとの事、親切に言ふて下さいました故、病室の夫と相談の上入院させまして、魔藥で切開術を受けました、處が僥倖にも經過が良好う御座いましたから、

三十二日目に全治退院して歸宅致しました。

夫れから一ケ月許りは、別に事もなう過しましたしが



或る日の午後二時過ぎでした、いつもの樣に幸夫に晝寢をさして置きましたら、非常に吸呼が困難の樣に見受けられましたから、じつと眺めて居りますと、目をぱつちり開けまして苦しさうな聲で泣き出しました私は驚いて、取る物も取あへず、慌てゝ近村の醫師を呼びましたら、診察の後氣管支加答兒といふ事でした。

私は猶安心し兼まして、かかりつけの町の醫師を招き診察を受けましたら、急性胸膜炎だから、明日連れていらつしやい、水を取つて

上るからとの事。既うとつぷりと日は暮れて、御空仰ぎましても星影もなく折々雷の聲は耳をつんざき、今にも槍の様な雨が斜に凄じく降り相で、誠に物凄い晩でありました。

私は此大病を町の御醫師様では心許なく存じ、博士の診察を受けさせ様と決心致し、提灯携へて道具倉庫へ行き入院の覺悟で二三枚づゝの浴衣の用意仕て、其夜は夢さへ結ばず、未明に宅を出て、車を病院へと急がせました、車上坊は呼吸せまり、微かに泣く音を洩らして居ますから、冷した牛乳を一口づゝ飲ませていつもならば二時間の路を三時間餘を費し漸く辿り着きました。お醫師様は丁寧に診て首をかたげられ入院と申されました。坊の擔任は學士でしたが、此病院は博士と學士と隔日の回診でした、病名は恐るべき膿胸との事、博士は一刀兩斷の處置で、骨を切斷して大手術をすると言ふ、學士は小兒の事故出來得る限り、服藥と塗布藥とで平癒させせんと盡力下さいました、日夜祈りました神佛の加護と、一方ならぬ御醫師の盡力とによりさしもの大病も四十日餘りですつかり癒り退院の許可を得ました、其折看護婦や近室の患者の申ますには、入院當時の御様子では、誠にお氣の毒だが壽命はない事と噂して居たと申して、坊の全癒を不思議がりました、然るに坊の病中夫は喀血して容體が非常に悪いと言ふ報を得ました、夫は坊の病氣を露存じませんでしたが、病人に斯様な心配を聞かしてはと存じ隱して居ました。

夫れから暫らく無事に過しましたが、十二月の二十四日でした、私はどうも氣分がすぐれませんから舅に申して二三日の暇貰ひ里へ遣つて頂き里から病院へ行きましたら、胸の痛いのは神經痛故別に心配いらぬと申されましたので、私はつとめて平然として、病室に夫を見舞ました。

◎細心なる良人の注意

夫は何時見舞ましても來るな來るなと申て居ました申さずともお了解でしやうが、夫の病は肺結核になり

ましたから、自分には看護人を雇つて、私を成る丈遠ざける様に仕たので厶いました、是は一意に坊が可愛い爲でしたらう、只今其當時の御心中察しても、涙が溢れます。

來なくても宜いから自分の身體と坊とを大切にせよとは、何時の音信にも必ず書てありました、自分は名醫の下に居るから、少しも心配不用ぬ、夫れより御身油斷して風邪など病かぬ樣注意せよ、若し少しでも風邪の心地がしたら、直ぐ醫師の診察受けよ、必ず等閑にせぬ様にと、いつも〳〵繰り返し書いて有ました、さうして其頃退院して自宅に居られました



舅の肺を感染らぬ様にと、坊の玩具から食器、箸、書籍に至るまで、夫れは〳〵細々と注意して、北里博士閲の結核豫防書迄求めて郵送て呉れました。

其頃私は引續ひて服藥致して居ましたが、一月の慥か十日でした實家の父が參り、私の顏を見て大層顏色が惡いと申して、病院へ連れ行き特別診察を受けさせましたところが、丁寧に診て下さいました醫師は私を退けて、父に對ひ、あれは肺の初期ですと告げた相です、私は何時の間に感染つたのでしやう……一生懸命注意して居たつもりでしたのに……、あゝ忘れもせぬ、私は一月二十五

日遂に、忌はしき入院患者と成りました。

肺の初期と擔任の醫の申された時です、父は舅のなり夫のなりを感染つたのであらうとは知りながら、醫師に向ひ特發でしやうか、それとも感染したのでしやうかと問ひましたら、無論感染です、特發等の事は斷然有ませぬと答へ、父の求めに應じて、診斷書を認めて呉れたさうです、これから父は直ぐに私の婚家の前にある新家へ行きまして、診斷書を見せましたら、實に〳〵冷淡では有ませんか、叔父の申しますには、既う其樣事であらうとは疾くから知つて居ました、あなたが門を這入つていらつしやる御顏色を見て乾度そうだらうと推察して居ましたと言つて、空うそぶいて義理にも氣の毒なとも言つて呉れなかつた相です。

此叔父は外見は誠に善人の樣に見へますが、極く性質は邪けた方です、其所謂猫撫聲の優げなる外見に、初會の人は皆冠りますが、交際した事の有方は皆つま彈きして居る相です、それから極く親切な、無邪氣な東隣りの新家の伯父樣は此日不在でしたが、そこへ大東の新家の伯父が來合せて私の病氣を聞き父に向ひて、實に何とも形容の出來ぬきつい目付をして、口を尖らせながら、村方の誰某の嫁は、大病でも少しも療養させず、死ぬ日の朝迄こき使つた、病氣になつてから幾度も實家へ遣つて下さいと頼んでも、どうしても遣らなかつた、死ぬ日の朝非常に頼んだから、澁々許可し、そして實家へ行くには、まさかに醫者に診せぬわけにはゆくまいからとて、行きがけに朝倉（醫者の名）へ寄せたら朝倉の玄關で卒倒した相な、すると醫者が此大病人を車で出すとは不注意千萬だといつて、其儘病室へ入れて、實家の兩親を呼ぶと云ふ大騷動で遂に夕方病室で逝つたのである、と、それを世間での嫁待遇の例として言ひまくり、何ともいへぬ厭らしい顏して目をいからし口を尖らしていつた相です、舅樣は勿論同意だと見へます、少しも心配して下さらなかつたですから……さりとは餘り冷酷では有ませぬか。

◎一週間も樂しく夢の間

私は其時丁度嫁してから七年目になりました、此様な事を申ますと、何だかきたない様で御座いますが、前に申ました様の次第で、二ケ所の病院合せて六ケ月に餘る入院の少なからぬ費用を少しも出して下さいませぬでしたから、これは皆な實家から支出して、療養させて與れたのでムいました。

始めの病院では擔任の醫師が初期だからどうかして肋膜に吸收したいと申して、責任を以て盡力下さいました御陰で、私は忌はしい肺を免れて肋膜炎と



なりまして、百日餘りで退院の出來る様になりました其時には九分も治つて居ましたから醫の勸告に從ひまして、海岸へ轉地療養に出掛ました、御醫師様から知己の病院長の某學士へ宛てた添書を頂いて行きましたから、誠に心丈夫でした、一週間を樂しう夢の様に過ごしますと藥もなくなりましたから、病院に行き、照會狀を出して診察を乞ひましたら、書面を讀み終つて診察して驚ろかれました、書面には既う大抵宜いと

して有ますが、私の診た處では宜しく有ませぬ、餘程水が有ます、是之通り濁音ですと打診して聞かして與れられ、御入院なさい取つて上ましやうからと申されました。

　此言葉を聞きまして、私は今更ながら驚き何と答へましたやら……、直に歸國致して、舊の病院へ行き夫が心配いたしますから、他のいろ〱名高い内科醫の診斷受けましたら、三ヶ所の內、二ヶ所の先生は轉地先の醫の診斷と符合致しましたから、其中で實家から一番近い或る名高い病院に又々入院して三日目に手術を受ける事になりました。

　嗚呼申すも涙の種、私は何と言ふ情ない運命で御座いましやう、手術後三日目に夫の訃音に接しました、壯健な身でさへ明日の命はゝかられぬもの、逢ふが別れと申す故、豫て期しては居ましたが、此樣なに早いとは夢にも思ひがけませぬでした、私は直にも飛んで行きたくて氣のみあせりましても、主治醫は許して與れませぬでした、里の親が事情打明けましても、相成べくは患者に知らしたくないと斷言して許可しませんでしたから、血の涙を呑んで身の運命に泣きました。

　氣はいらちても、手術後僅かに三日目でしたから、經過の都合により再び手術を要するやも知れぬ、靜かに動かぬ樣との醫の命に服從しまして……籠の鳥、自由になりませぬでした、……この時の辛さ御察し下さいまし。私は何と言ふ不幸な身でしやう……、其當時、既に〱婚家から排斥されたので御座いました。

　私は八十日の餘病院に起臥致しまして、漸く退院の許可を得て里へ歸りました。

　退院後二週間目でした、丁度亡夫の百ヶ日に相當りましたから、御醫師に尋ねましたら、極く靜かにとの許可を得ましたから、久し振りで婚家に歸り、懐かしい、生前極めて涙の多かつた、亡夫の奧都城處に額つた姿を仰ぎました時の胸中、御推察下さいませ。

　嗚呼私は既に〱排斥されて居ました、御位牌には鮮かに中央に夫一人の法名でしたから、私は氣が遠くなりました茫然して涙も出ませんでした。

御祖母様の御法名も御祖父様のに並んで乗つて居ます、疾くに亡くなられた夫の實母の御位牌も御舅様と御二人の御法名、夫のには私のが乗つて居るのが、當り前であるのに、それが乗つてゐませんでした……。

あゝ私は夫が不歸の客と成りました當時既に排斥されたので御座いました。どれ程嫁が憎ければにや此樣なに酷な處置が取られたものでしやう……餘り殘酷では有ませぬか、私は最後に夫に會ひました節に、數數依頼も受けました、從つで私も堅く誓ひましたら、



病氣の爲に弱つたのでしよう、涙さへ浮べて滿足致しました、非常に喜んで既うとても全癒る身體ではないから、明日逝つても少しも心殘りはないとさも〳〵嬉しげに淋しい笑を洩らしまして、あゝ安心したと申ました、夫は諦めて居ました樣子でした、既う今夜死んでも宜いなどゝ申ました、が何う仕ましやう……、御舅樣は私の病氣中に一言の御挨拶も遊さず、斥られて御仕舞遊ばしました、然うして置いて歸れ〳〵と仰有いましたが、何うして歸れましよう……未だ病院に通

つて居ますもの……、父や母や兄も其當時は歸しませんでした、癒り難き病を辛うじて退けた許りの、未だ不充分の身體で、歸すなら舅の肺を又すぐ感染すると、必ず命に係はるから、極く壯健になつた上でと申まして…………。

◎鬼か惡魔か蛇のやうな人

私は墓參の爲四五日づゝ歸つては、又實家へ來て養生致して居りましたが、其墓參の爲歸つて居ます折、御舅様がかう仰有いました、お前病氣は既うどうかと私は既う癒りました様で御座います、未だ御藥を頂いて居ますがと答へましたら、何が全治つて居るものか、肋膜に吸收して全癒つた積りで居ると大間違で既う今頃は肺の二期だと仰有つて、親の爲身を犠牲にするは當然だと誠に厭なむつかしい御顏を遊ばしました……。

私は邪魔にされ、排斥されて居る身でしたから、歸りますなら不充分の身體を村方の去る御嫁さんの様に無體にこき使はれて肺を感染して死ぬるか、若し間違つたらいじめ出されるに決まつて居ますもの、兎に角も私は夫が世を去りましたに就いて、厄介視されて居ますもの……、歸れぬ様にして置いて、歸れ〳〵と無暗に仰有るのも、私を斥ける一つの方便ですもの……、世人は口を揃へて既う御離縁ですかと申て居た相です、其筈です、尤もです、村の二ケ所の寺院に夫一人の法名の御位牌が收めて在ますもの、世人が彼是批評しますのに少しも無理はありません。

◎二枚舌を使ふて平氣なる人

私は此様な口惜しい事は有ませぬでした。御舅様は惡性の肺患で御座います、夫は御舅様のを傳染したらうとは、十人の等しく發する言葉でしたが、お先に彼の世へ旅立ちました。又繰り返しますが私は、病氣中に排斥されまして感情を非常に害されて居ました、此酷な侮辱の無念を忍んで、生前に誓ひましたし、依頼も受けました事故、誠に口惜しい、侮辱を忍んで、身

體も壯健に復したから、身を幸夫の犠牲に仕樣と決心して、お舅樣に願ひましたが、幼少の幸夫にはとても相續はさせられぬからと仰有つて、養育さへも許して下さいませぬでした、舅樣達は、私が必ず死ぬと思つて居らしたのに癒りましたから、案外して、遂に本性を現されたので厶います、幸夫の身の上は夫が萬一歿しましても、私が全力をそゝいで立派に養育する筈に誓つて置きました、夫は誓の言葉を聞きまして涙ぐんで喜びまして、既う坊の事は安心した少しも心殘りは無い、滿足だと申しました、是は私の退院の日看護人を斥けて、しみ〴〵物語した一端で御座います、夫れから轉地の前日に會ひましたが、情なや是が最後になりました、其節にはからずお舅樣と一緒になりました爲、別に物語とてはしませんでしたが、表情に富んだ夫の目には、安心の色が表れて居ました、以心傳心とやらで、私の誠意が夫の精神へ感通して居たものと見へます、御笑ひ下さいますな嬉しげに淋しうほゝ笑みまして、頼むよと申ました折の面影が、只今でも夜半の夢は言はずもがな晝間でさへ眼前に髣髴きます、夫の臨終の際、家は必ず嫡孫の坊に相續させるからと、斷言して喜ばせて置ながら、是は私の父も聞いて居ましたから、其當時お舅樣が誰にも彼にも自ら御吹聽遊ばした御言葉です、男らしくもない人です、只今仰有るお言葉を御精神としますると、御舅樣は二枚舌を御遣ひ遊ばす誠に卑劣な方でした。

◎悔いて歸へらぬ不幸の結婚

私は可愛い可愛い今年八歳になる坊が有ますのに理由もなしに無體に排斥遊ばしました。夫れに私は只の嫁では有ませぬでした、父の里へ嫁きましたのでした。慈愛深き父や母はたつた一人の娘だからと苦心に苦心して、數多き中にて辛うじて相應しきを見付て、結納濟して安心して居ましたのを、どこで聞き出しましたか、お舅樣の弟で私の父にも弟の（私の父はお舅樣のすぐ弟ですから）前にも申ました猫の樣に不可ない伯父と今は故人の極く宜い伯父と二人參りま

して、兄が頼みますから俊子さんをどうぞ私の方へ下さいと言つて、何と言つても泊り込んで動きませぬ。

他へ婚約したから今更仕様がない斷れぬと父が申ましたら、私共がどこ迄も責任を以て破約しますからどうぞ承諾して下さいと言つて却々動きませぬすると

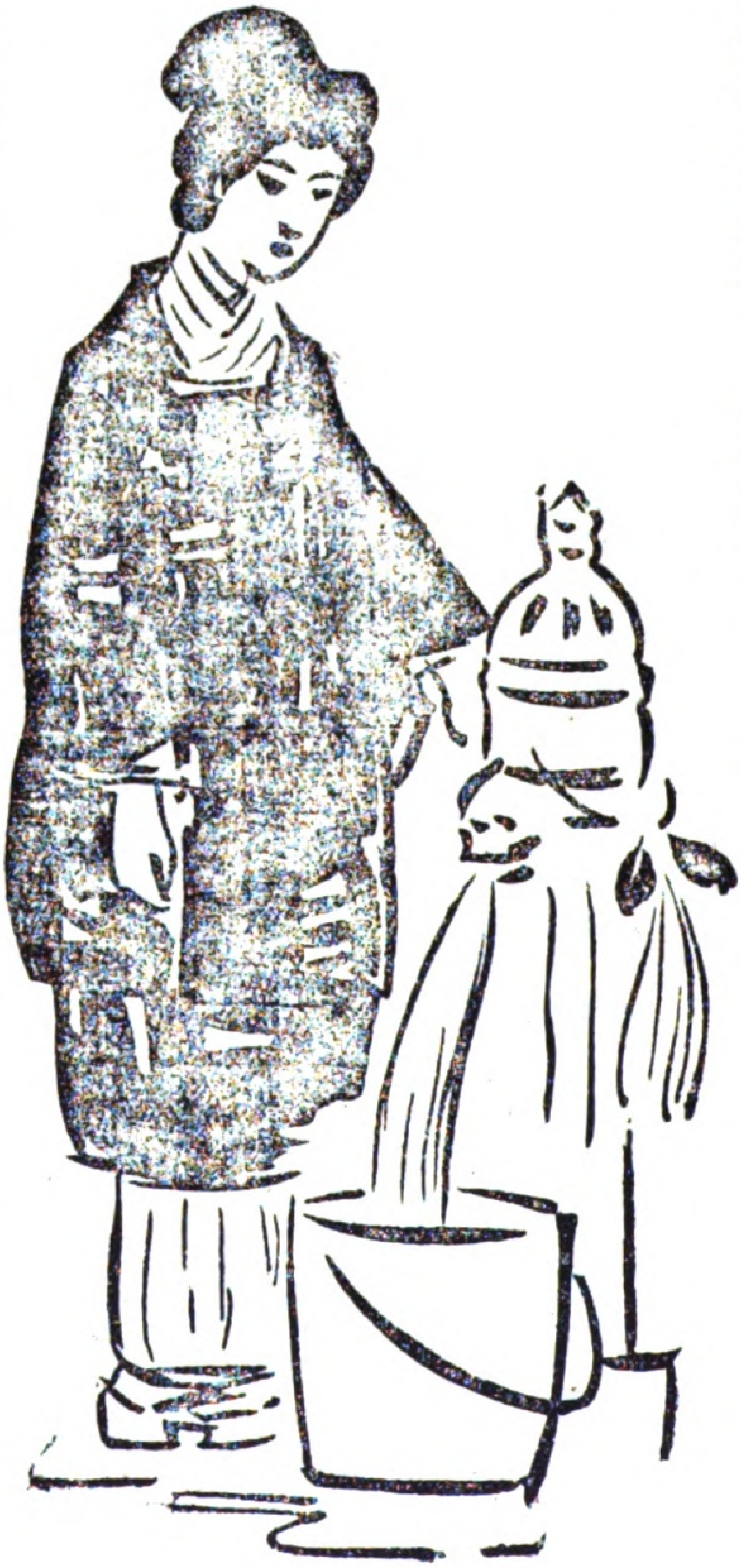
私の父が申すには、吾々は不幸にも早く父に別れたから、若い兄の厄介に兄弟四人もなるは氣の毒と思つて、自分は斯く養子に出て、手本を示したるにも係はらず、汝達は弟で在りながら、三人共分家を强請して嘸満足して居るであらうが、自分は塵程の分配も受けて居らぬし、我兄乍ら性質も好ましくないから、どうぞ自分の實家ながら遣る氣になれない殊に繼母の處へはと言ひまして、斷然拒絶しましたから、一先歸つて行きました。

◎人の口には迂濶に乗れぬ

一兩日の後再參りまして、俊子さんは此方へもらう心組で居ましたから、既うどうか何も仰有らないで私の方へ下さい、先方へは私が出掛けまして破約をしますから、必ず當家に惡意を持たせませぬ、誓つて私共が責任を負ひますから、どうか左樣して下さい、兄も誠に濟まなかつたと言つて居ます、其代りといふては何だか變に聞へるが、財産悉皆娘の所有物となる事だから、どうかそこは忍んで、此方へ呉れる樣盡力して呉れと、出掛に呉々も申ました、誠に兄が熱心で有ますさうして仕度は何も不用ぬと申ます、翌年から何も彼も出來して着せるからと申て居ります。

繼母は至極評判の能くない人ですから、彼んな人は屋敷内に一丈位の塀を建てゝ、家の中の見へぬ樣に隱居させて仕舞つて、差出口などは塵程もさせませぬ、俊子さんには私共の母つまりお祖母樣を姑と思つて來て欲しい、私共が誓つて住み難い樣な待遇はさせませぬ、前約破約ではない必ず實行させますから、どうぞどうぞよい返事を持たせて下さいと只管頼むの一點で動きませぬから、父が申ますには一人の娘の事であるから、見苦しくない樣にする考で居たが、里へ遣るに

就ては勿論仕度は馬鹿らしくて出來ない、然し必要品は何々か尋ねて來いと申て歸しまして、種々御相談遊ばしたが、結局御祖母様も御壮健で在らつしやるし、英治も極く温順な性質で有から、他人の處よりよいかも知れぬ、ことに彼んなに熱心に望むので有から、一層思いきつて遣る事に仕様と相談は決りましたが、姑が繼母故母や祖母様は不滿で有ました相でした。



兩三日經つと伯父が參りまして、此頃の御話兄に申聞けましたら、紋付三枚の打掛と、白一重ねと赤一重ねと、各々に附屬の帶と、上等の縞物一通りと普通の縞物一通りと、平常着一通りといふ注文でしたが、私が可哀相だからといつて、腹立てながら大層出來して下さいました、私は十七の春無意識に從弟の許へ嫁しました。

前からも申て居ましたが叔父は彼んなに言ふて居るが繼母だから一層大切にする様にと、出發の折別室にて泌々申聞けました。

夫は私と七つ違ひで一年志願兵を濟ました豫備の軍人で、性質は男子としてはいかゞかと思ふ位温順な方でした。

◎世の中には斯んな姑も　ありますぞ

此度私が口惜しい、口惜しい侮辱を忍んで、身を坊の犧牲として亡夫に誓つた、亡夫の意志を全ふ仕樣と決心をして願ひましたものを……斯ふ言ふ事情の有ますにも係はらず、一言の下に排斥遊ばしたは常識ある方の行爲でせうか。御舅樣も叔父樣も種々の契約を只の一つも實行して下さいませんでした、舅や伯父は私共を沒義道にも欺いたのでした。

私は人には知れぬ辛い〳〵憂目を幾百度しましたでしやう。

私嫁して程なく耳に入りましたが、御姑樣は御自分の姪とやらが欲しかつた相で御座いましたから、從つて私を非常に御憎み遊ばしました、墓參に行きました折の事ですが、私に琴をひかぬかと仰有いましたから、私は夫の病氣と戰爭の爲、滿二年の餘手に取りませぬから忘れてひけませぬと幾度も辭退致したものを……早御自身には箱から琴をお出し遊ばして、西の座敷へ持つて御出になり、お呼び遊ばして强てひけ〳〵と仰有いましたから、進まぬながら私はお言葉に叛くは不爲と存じまして、千鳥之曲を變手と合奏しまして雲井の曲に移りました中程にお客が有ましてお舅樣がお姑樣をお呼びになりましたが、お廳へのみ遊ばして却々お止めになりませぬでした、夫故後で御小言仰有いましたら、俊子が温習つて呉れと賴んだから、仕方がないでひいて居たと仰有いまして、御自身の罪を私に負はせて平氣でいらつしやいました、するとお舅樣が俊子は未だ琴などひいて居るつもりかしらと仰有つた私は緣側で微かに聞きましたから、無實の罪をすゝぎに出やうかと一歩踏み出しましたが、其時、汝は嫁であるから忍べと何物か囁く樣な氣が致しました、あゝ私は嫁でしたもの……泣いて忍びました……。

琴二面の合奏ですから音も高く響きます、夫が永眠致しましてやう〳〵一週忌の折でしたから、世間の人に私の行爲を惡う〳〵思はせん爲の御姑樣の策略でし

た、御自身御琴を持出してさあお前もと強いて〳〵仰有つて、さながら命令的に相手をさせて置ながら…何といふお情ないお言葉でせう……、是は只一例にすぎません。

◎器物とて物は云はねど無體な姿

あゝ私は、私はお舅様やお姑様に憎まれまして、可愛い可愛い坊を殘しまして……再び名のらうとは夢にも思ひませんでした實家の姓に復しました……、再びは歸らじと誓ひました實家の家族の一人となりました。



荷物受取に行きました節、書籍の數が大層減つた樣でしたから調べて見ましたら、書籍、雜誌取交て四十三冊影もなく紛失して居りました、此中には私に取つては非常に高價な書籍も交つて居ます、十九冊は無體に毀して他の本箱に入れて有ました、御舅様はこわして有本も紛失せし本も皆頑是ない坊にかずけて居らつしやいましたが、毀した方は直ぐに解りました、それにしても紛失書籍の只今の持主は誰で御座いませう……そうして火

鉢は私が一つは用ひましたが、一つは新の筈ですのに、二個ながら幾百と言ふ煙管の打傷で、實に無體な姿になつて居ました、實に亂暴では有ませぬか、責任はお舅樣に有ます、いかに打てばくぼむ樣な火鉢だとて餘り御無體では有ませぬか、お扣のは一度も煙管でお打ち遊ばした事はありませぬから、愈故意で遊ばした樣に存じられます。

靈魂不滅とか申ますから、夫は天津み國から此處置を見まして、必ず苦々しく腹立たしく思し召て、屹度私に同情して下さるだらうと信じて居ます。

天地の八百萬の神樣は、正義は必ず御助け遊ばすとか聞いて居ますから、私は此沒常識な酷な冷遇を泪を呑んで天に任して忍んで居ます。皆神樣にお任せ申て堪へられぬ無念をも忍んで居ます。神樣は決して惡を御祐けにはなりません。

◎我子ながら孤兒にはしたくなし

亡夫は壯健な折に始終お舅樣やお姑樣にいぢめられ通しでした、氣の小い（此氣の小さいのは幼少から繼母に育てられた故でせう）極く溫順な方でしたから、言葉返しは露仕ませんでしたが、種々の難題を馬耳東風と聞き流しては居ましたが、夫とてやつぱり感情の動物ですもの、必ず餘程精神を痛めて居た事と存じます。極端ですが換言しますると、夫はお舅樣やお姑樣に責め殺されたので御座います。眞實に亡夫は不幸な方でした。從つて私も薄倖の數には洩れませぬ、可哀相に坊は廣い廣い世の中に、父もなき母もなき同胞もなき、誠に誠に可憐な子供で有ます。坊の祖父樣は實に常識では論ぜられぬ方で有ます。私は只々坊が無事に成長して、立派な人になる樣に孤兒と人にそしられぬ樣にと、是のみ日夜祈つて居ります。

私は慈愛溢るゝ父上母上の御丹誠で、只今では病氣前よりも壯健ですが、彼の際若し實家が貧窮でしたら傳染して置きながら、少しも顧みても下さらぬでしたから、疾くに私は此世には居ませんのです、夫れを思

ひますと私は幸福で有ます、不幸などゝ陷ちましては、慈愛深き父母に對して濟みませぬ、ですけれど、御恥しい次第ですが愚痴が出まする。

夫れでもお舅樣は殊勝げに、御佛前へも御參詣遊ばすが、御墓參をも遊ばします少しは良心がお有なると見へます、が、亡夫は必ず横向いて居るで御座いませう。

あゝ坊の祖父樣は眞實に〳〵殘酷な方で有ます、勿論そこには御舅樣より以上に酷な方が居て斯かる處置に出させましたのかも知れませぬが、夫れは私の手前では間接ですから、私は直接のお舅樣を（今更御舅樣とか伯父樣とか申ますは實に馬鹿らしう御座いますが、斯樣に呼びました頃の事ですから、夫れ故始終御舅樣伯父樣といふて置きました）沒常識な方、沒義道な方と斷言するを憚りません。

前に私が妖獸の樣な性質で極く不可ないと申ました伯父の御舅樣に譲らぬ非道な方で有ます、實に活馬の目でも拔き兼間じき方で有ます、私の父にも多大の損をかけて居ます、到底沒常識沒義道の名を免るゝ事は出來ません。

天は公平で有升から、邪な人にはいつかは無形の裁判を下し給ふで御座いませう。

私既う只今では諦めて居ります、よく〳〵幸うすき運命の下に生れし身と……諦めて居ります。

＊　＊　＊　＊　＊

今や年改まりて、長閑なる春の女神はゆくりなくも皆樣の家々をおとづれ給ひて、花笑ひ、鳥歌ふ、實に幸ある新年を壽ぎたまふ折柄、わらは風情がかゝる薄命のくり言を申すは、異なものながら、これ偏に皆樣の前途に幸福多かれがしと祈るのあまり、いさゝか身をもて前車のくつがへりを示し、妾が愛する同胞姉妹の爲めに再びかゝる憂ひのなからん爲めに甘んじて犧牲となつた次第であります、さらば皆樣幸多く行末めでたく榮へに榮へたまへよや。

才媛閨藻 懸賞募集（締切一月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（百二十字以內）

▲謎（一人三解）

▲一口噺（一人一題）

▲諸國珍料理（百字以內、成可珍奇なるを採る）

▲家庭日記（百二十字以內）

◎用紙は總てはがきの事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品　▲一等一圓▲二等五拾錢　▲三等叁拾錢（圖書切符）　▲謎と一口噺は入賞叁拾錢

毎月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

◎本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
◎御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
◎總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年一月一日發行　第八卷第一號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

女(後付の一)

告（後付の二）

明治四

博文館發行定期

太陽

▲東洋雜誌界の覇王政治、文學、科學、經濟、宗教其他各方面に亘り雄大壯嚴名海外に轟く。

毎月一回一日發行▲定期增刊年四回▲大判(四六判二倍大)紙數二百五十六頁▲寫眞版光澤紙四頁二色刷二頁普通十二頁▲本文中寫眞版數十個挿入

正價(●壹冊參拾錢 郵稅參錢) 前金(郵稅共)(●四冊壹圓廿九錢●八冊金貳圓四拾四錢●十六冊金四圓六十錢)

商工世界 太平洋

▲商工界の絶好機關當世第一流の意見と實業界の事情を網羅す又職業案内調査資料等見るべきもの多し。

毎月二回一日十五日發行▲外臨時增刊▲大判(四六判二倍大)紙數百十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價(●壹冊拾貳錢 郵稅壹錢五厘) 前金(郵稅共)(●六冊金七拾七錢●十二冊壹圓五拾參錢●廿四冊貳圓九拾六錢)

實業少年

▲本誌は實業に志す少年諸子の親切なる指導者、監督者、相談對手となり。方向を敎へ立身出世の道を授けんとす

毎月一回一日發行▲外臨時增刊▲大判(四六判二倍大)紙數七十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價(●一冊拾錢 郵稅一錢五厘) 前金(郵稅共)(●四冊金四十三錢●八冊金八十五錢●拾六冊金一圓六十二錢)

農業世界

▲農事改良の急務に應ぜんとするものにして、實に國本培養の良資料主筆は石阪農學士なり。

毎月一回十日發行▲外臨時增刊▲菊判紙數二百四十頁▲水彩畫(石版彩色刷)二枚▲光澤紙寫眞版四頁普通寫眞四頁

正價(●壹冊貳拾錢 郵稅貳錢) 前金(郵稅共)(●三冊金六拾三錢●六冊壹圓貳拾三錢●十二冊金貳圓四拾錢)

文藝倶樂部

▲小說に、詩文に、將た美文に、天下の名篇を蒐む、活社會の消息、藝苑の事情、最新の流行等を網羅せり。

毎月一回發行▲定期增刊年四回▲菊判紙數百貳拾頁▲木版刷錦繪一枚▲原色寫眞版一枚▲光澤寫眞版二色刷二頁普通八頁

正價(●壹冊貳拾錢 郵稅貳錢五厘) 前金(郵稅共)(●四冊金壹圓五錢●八冊金貳圓●十六冊金四圓九十錢)

鐵道汽船旅行案内

▲交通旅行の好案內諸其印刷の鮮明と時間の正確とは新書中他に見ざる所

毎月一回一日發行▲年刊十二冊▲菊判紙數約二百頁

正價(●壹冊拾錢 郵稅壹錢五厘) 前金(郵稅共)(●三冊金三拾三錢●六冊金六拾三錢●十二冊金壹圓貳拾錢)

冒險世界

▲冒險小說、探檢奇譚、冒險的成功談、書生顛實、陸海軍壯談、學校評判記、運動界情況等を滿載す。

毎月一回五日發行▲外臨時增刊▲菊判(四六判二倍大)紙數百二十八頁●原色寫眞版口繪一枚●光澤紙寫眞版四頁

正價(●壹冊拾五錢 郵稅壹錢五厘) 前金(郵稅共)(●四冊金六拾五錢●八冊金壹圓貳拾八錢●拾六冊金貳圓五拾二錢)

幼年畫報

▲就學幼童唯一の良友。繪畫寫眞等滿載し、美粧な、記事は是れ小波山人獨得の理想。

毎月一回五日發行▲定期增刊年四回▲菊判美麗畫本▲石版極彩色繪畫十六頁▲色刷木版寫眞刷込十六頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價(●壹冊拾錢 郵稅五厘) 前金(郵稅共)(●四冊金四拾錢●八冊金七拾九錢●拾六冊金壹圓四拾八錢)

十一年

刊行十五大雜誌

少年世界

▲國定教科書に連絡し、記事口繪共遙に同種他雜誌に超絶す。

毎月一回一日發行▲定期增刊年四回▲菊版紙數百卅六頁（内八頁着色二度刷）▲原色寫眞版標本畫、彩色毛筆畫各一枚▲光澤寫眞版四頁

正價（●一冊拾錢 郵稅壹錢五厘）前金（郵稅共）（●四冊金四拾四錢●八冊金八拾七錢●十六冊金壹圓六拾四錢）

少女世界

▲少女に最も適應せる諸學科を網羅し家庭に於ける子女教育を裨補せんことを期せり。

毎月一回一日發行▲定期增刊年四回▲菊版紙數百二十頁（内十六頁着色二度刷）▲石版極彩色刷口畫二枚▲寫眞版四頁

正價（●一冊拾錢 郵稅壹錢）前金（郵稅共）（●四冊金四拾貳錢●八冊金八拾參錢●十六冊金壹圓五拾六錢）

女學世界

▲趣味實益兼備なる家庭必讀の好雜誌女子品性智識の寶庫、女學生最良の課外教師。

毎月一回一日發行▲定期增刊年四回▲菊版紙數二百八頁▲習畫帖七頁▲光澤寫眞版四頁▲普通四頁▲附錄（美麗繪葉書）

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）前金（郵稅共）（●四冊金八拾參錢●八冊金壹圓六拾壹錢●十六冊金參圓拾貳錢）

中學世界

▲中學程度各種學生の必讀誌、學生の需むる處盡く備はれり。

毎月一回十日發行▲定期增刊年四回▲菊版紙數二百四十頁▲習畫帖五頁▲光澤紙寫眞版四頁▲普通四頁▲附錄（美麗繪葉書）

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）前金（郵稅共）（●四冊金八拾參錢●八冊金壹圓六拾參錢●十六冊金參圓拾貳錢）

文章世界

▲人間一日も文章なかるべからず、本誌各種の文體を[illegible]縱横に說き實益に資せり。

毎月一回十五日發行▲外臨時增刊▲菊版紙數二百四十頁▲水彩畫（石版彩色刷）二枚▲光澤紙寫眞版四頁▲普通四頁▲附錄（美麗繪葉書）

正價（●一冊貳拾錢 郵稅貳錢）前金（郵稅共）（●三冊金六拾參錢●六冊金壹圓貳拾參錢●十二冊金貳圓四拾錢）

英語世界

▲英語研究者必須の[illegible]

毎月一回五日發行▲年刊十二冊▲菊版紙數六十四頁▲光澤紙寫眞版二頁▲本文中普通寫眞版多數挿入

正價（●一冊拾錢 郵稅壹錢）前金（郵稅共）（●三冊金參拾壹錢五厘●六冊金六拾錢●十二冊金壹圓拾四錢）

數學世界

▲數學上の諸科目全般に渉り。新說を紹介し、定理を說明し親切に問題を研究す

毎月一回二十日發行▲外臨時增刊▲菊判紙數百二十八頁▲光澤紙寫眞版二頁▲木版挿圖數十個挿入

正價（●一冊拾五錢 郵稅壹錢五厘）前金（郵稅共）（●四冊金六拾五錢●八冊金壹圓廿八錢●十六冊金貳圓五拾貳錢）

史傳地理書類

▲歴史傳記書類

● 東京帝國大學教授文學博士萩野由之君編
大日本通史 (全三册…中下卷近刊)
上卷 大判一〇〇〇頁 脊皮上製 正價壹圓五拾錢 小包料 拾 貳錢

● 法學博士文學士有賀長雄君著
大日本歴史 (全二册…下卷近刊)
上卷 大判一〇五〇頁 脊皮上製 正價貳圓 小包料拾 六錢

● 法學博士有賀長雄君著
帝國史略
全一册 大判一〇三〇頁 脊皮上製 正價壹圓參拾錢 小包料拾 貳錢

● 落合直文君 池邊義象君共著(畫伯數名密畫挿入)
新撰日本外史
全一册 大判一一〇二頁 脊皮上製 正價壹圓貳拾錢 小包料拾 貳錢

● 文學博士萩野由之君著 沿革地圖挿入 (文部省檢定濟)
中等教育 **日本歴史**
上下二册 中判 六七五頁 脊皮上製 正價各五拾五錢 郵稅各 八錢

● 文學士木寺柳次郎君著
日本歴史 ▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢
全一册 大判 三七六頁 洋 並製 正價四 拾錢 郵稅八錢

● 文學博士原秀四郎君著
中等國史教科書
第一學年用 正價四 拾錢 郵稅六錢
第二學年用 正價五拾錢 郵稅拾錢

● 東洋大學講師三石賤夫君編
學生參考叢書 **日本史年表**
全一册 小判 一六八頁 洋 並製 正價拾 參錢 郵稅貳錢

● 松井伯軒君著
新撰 **大日本帝國史**
全一册 大判 五六四頁 洋 並製 正價四 拾錢 郵稅拾 貳錢

● 文學博士栗田寬君校閱 增田于信君著(西洋木版畫挿入)
新撰日本小歴史
全一册 大判 二一七頁 洋 並製 正價拾 五錢 郵稅六錢

● 足立栗園君著
通俗日本歴史
全一册 大判 三三四頁 洋 並製 正價貳 拾 五錢 郵稅八錢

● 坪谷善四郎君著
通俗明治歴史
全一册 大判 三五〇頁 洋 並製 正價貳 拾 五錢 郵稅八錢

● 岸上操君著
通俗德川十五代史
全一册 大判 三三四頁 洋裝並製 正價貳 拾錢 郵稅八錢

● 陸軍大將野津道貫君序 藤野房次郎君著(寫眞版挿入)
平壤包圍攻擊
全一册 大判 七八二頁 洋布上製 正價七 拾錢 小包料拾 貳錢

● 海軍大將伊東祐亨君題辭 平田勝馬君著(寫眞版挿入)
黃海大海戰
全一册 大判 八三八頁 洋布上製 正價九 拾錢 小包料拾 六錢

● 文學士久保天隨君著 全部十二册割引金五圓 小包料五拾錢
東洋通史
全部十二册和裝 大判一册三百頁 正價一册五拾錢 郵稅一册 八錢
● 第一卷より第二卷……漢族生育時代
● 第三卷より第六卷……漢族繁榮時代
● 第七卷より第九卷……蒙古優勢時代
● 第拾卷より第拾貳卷……歐人東漸時代

● 丸井文學士 高島米峰君共著
學生參考叢書 **東洋史**
全一册 小判 一八七頁 洋 並製 正價拾 參錢 郵稅貳錢

● 文學博士箕作元八君著
學藝叢書 **歴史叢話**
全一册 大判 二三〇頁 洋 並製 正價四 拾錢 郵稅六錢

● 文學士木寺柳次郎君著 **中等教育東洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一冊背皮上綴 正價八拾錢
大判 二八八頁 郵稅拾貳錢

● 文學士幸田成友君著 **東洋歷史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三二四頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 參謀本部御編纂 **明治三十三年清國事變戰史**
全六冊洋並綴 正價拾貳圓
太陽判二〇五六頁 小包料四拾四錢
▲洋布特製 正價拾五圓 小包料四拾四錢

● 國府種德、梅田又次郎、田山錄彌君著 **訂正日露戰史第一卷**
全一冊洋布上綴 正價金壹圓廿錢
大判 七一八頁 小包料拾貳錢

● 法學士山本信博君著 **北米合衆國史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三一〇頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 坪井文學博士閱 堀、竹村兩文學士編纂 **露國の實相**
全一冊洋布上綴 正價七拾錢
大判 三二〇頁 小包料八錢

● 以太利馬加威里著 日本男爵林董君譯 **羅馬史論**
全一冊洋布上綴 正價壹圓八拾錢
大判 六六〇頁 小包料拾貳錢

● 法學士須崎芳三郎君著 **現代露西亞**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 四二六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 法學士須崎芳三郎君著 **露國侵略史** 銅版地圖挿入
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 二七八頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學士木寺柳次郎君著 **中等教育西洋歷史** 沿革地圖及密畫挿入（文部省檢定濟）
全一冊背皮上綴 正價七拾錢
大判 二六六頁 郵稅拾貳錢

● 文學士吉國藤吉君著 **西洋歷史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三四八頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學士（史學專攻）阪本健一君著 **世界史** 上卷
洋裝背皮上綴 正價壹圓六拾錢
大判一〇八〇頁 小包料拾貳錢

● 同 **同** 下卷
洋裝背皮上綴 正價貳圓
大判一四五四頁 小包料拾六錢

● 長谷川天溪君著 **通俗世界歷史**
全一冊洋並綴 正價貳拾五錢
大判 三三四頁 郵稅八錢

● 文學士久保天隨君著 **日本歷史寶鑑**
全一冊洋布上綴 正價參圓
大判一六〇〇頁 小包料貳拾錢

● 文學博士萩野由之君譯述 **日本歷史評林**
全一冊洋布上綴 正價壹圓八拾錢
大判一九一二頁 小包料拾六錢

● 文學士常盤大定君著 **印度文明史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三四七頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學博士高山林次郎君著 **世界文明史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三七六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學士大町桂月君著 **日本文明史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三〇二頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學士白河次郎君 國府種德君共著 **支那文明史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三二六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 文學士久保天隨君著 **朝鮮史**
全一冊洋裝 正價四拾錢
大判 三三六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

● 國友重章閱 恒屋盛服君著（地圖挿入） **朝鮮開化史**
全一冊洋布上綴 正價壹圓
大判 五六六頁 郵稅拾四錢

● 文學士阪本健一君著（密畫挿入） **日本風俗史**
全一冊洋並綴 正價四拾錢
大判 三四二頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

東（發行の五）

- 電田駿次郎君著 ● **世界風俗志**（各國風俗寫眞廿三個入） 全一冊洋並製 中判 四六三頁 正價五拾錢 郵税八錢
- 法學士山内正瞭君著 ● **世界殖民史** 全一冊洋並製 中判 三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢
- 文學博士萩野由之君編述 ● **中等教育日本歴史要解** ▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢 全一冊洋布上製 中判 四二四頁 正價五拾錢 郵税六錢
- 文學士中澤澄男 八木奘三郎君共著 ● **日本考古學** 全一冊洋布上製 大判 三九六頁 正價壹圓貳拾錢 小包料八錢
- 文學士齋藤隆三君著 ● **元祿世想志** 全一冊洋並製 大判 三四八頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- 全國教育家大集會編 ● **帝國六大教育家** 附 名家談叢 全一冊洋並製 大判 二八〇頁 正價五拾錢 郵税八錢
- 文學士蜷川龍夫君著 ● **日本高僧之人格** 全一冊紙布上製 大判 二三八頁 正價四拾錢 郵税六錢
- 太陽評論記者 鳥谷部春汀君著 ● **明治人物小觀** 全一冊紙皮上製 中判 四二八頁 正價參拾八錢 郵税八錢
- 長田秋濤君著 ● **世界富豪の表裏** 全一冊洋並製 大判 二六二頁 正價參拾五錢 郵税六錢
- 太陽評論記者 鳥谷部春汀君著 ● **明治人物評論** 全一冊紙皮上製 小判 四二三頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- 同 ● **續明治人物評論** 全一冊紙皮上製 小判 四四八頁 正價參拾錢 郵税六錢
- 海軍省教育本部大島貞益君譯 ● **英國水師提督子ルソン傳** 全一冊洋布上製 大判 一三二〇頁 正價壹圓六拾錢 小包料拾貳錢
- 豫言者宮崎虎之助君著 ● **基督觀** 全一冊洋並製 大判 二四八頁 正價四拾錢 郵税六錢

▲地理紀行書類

理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著

● **大日本地誌** 全部拾冊大判背皮上製 總紙數約一千頁

巻	地方	圖版	國名	紙數	正價
第一卷	關東	都市彩色地圖拾葉 寫眞銅版貳百餘圖	相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆、七島及小笠原島	紙數九百三十頁	正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢
第二卷	奥羽	石版彩色地圖八葉 寫眞銅版百七十圖	磐城、岩代、陸前、陸中、羽前、陸奥、羽後の七ヶ國	數紙九百六十頁	正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢
第三卷	中部	石版彩色地圖九葉 寫眞銅版二百圖	尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、美濃、飛驒、信濃、	紙數千五十餘頁	正價貳圓五拾錢 小包料拾六錢
第四卷	近畿	石版彩色地圖拾葉 寫眞銅版九拾四圖	山城、大和、河内、和泉、攝津、伊賀、伊勢、近江、丹波、丹後、播磨、紀伊、淡路、	紙數千三百餘頁	正價參圓 小包料拾六錢
第五卷	北陸	都市彩色地圖四葉 寫眞銅版百六十圖	若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、	紙數七百五十頁	正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢
第六卷	中國	都市彩色地圖五葉 寫眞銅版百六圖	美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、	紙數八百四十頁	正價貳圓五拾錢 小包料拾貳錢

● **日本新地理** 理學士佐藤傳藏君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三一四頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **通俗日本地理** 大和田建樹君著
全一册 大判 二九六頁 洋並綴 正價參拾錢 郵税八錢

● **學生參考叢書 日本地理** 志賀重昂君閲 設樂金三郎君著
全二册 小判 二三二頁 洋並綴 正價拾參錢 郵税貳錢

● **日本名勝地誌** 野崎左文君 田山花袋君 島田定知君 藤本藤蔭君共著
全十二册 中判 五一〇〇頁 洋並綴 正價一册參拾錢 郵税一册六錢

● **學生必携 修學旅行案内**（關東の部） 八木奘三郎君書
全一册 三六判 六九二頁 洋布上綴 正價四拾五錢 郵税八錢

● **本邦地理詳説** 中村士德君 大久保千濤君共著
全一册 大判 七〇〇頁 洋布上綴 正價壹圓八拾錢 小包料拾貳錢

● **中等教育 地理學教科書**（上巻日本ノ部）（下巻外國ノ部） 理學士佐藤傳藏君著
全二册 大判 四二四頁 脊皮上綴 正價一册五拾錢 郵税一册八錢

● **萬國新地理** 理學士佐藤傳藏君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三三八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **學生參考叢書 外國地理** 上下 哲學館大學講師三島定之助君著
全二册 小判 一五五頁 洋並綴 正價一册拾參錢 郵税一册貳錢

● **通俗世界地理** 遊江保君著
全一册 大判 三四〇頁 洋並綴 正價參拾錢 郵税八錢

● **清國商業地理** 法學士勝部國臣君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三五八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **韓國新地理** 文學士田淵友彦君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三五〇頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **韓國總覽** 農商務省商工局員德永勳美君著
全一册洋布上綴 大判 一五〇〇頁 正價三圓拾錢 小包料拾六錢

● **地文學** 理學士吉田弟彦君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三二八頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **學生參考叢書 地文學** 理學士八巻悌次君 設樂金三郎君共著
全二册洋並綴 大判 一九〇頁 正價拾參錢 郵税貳錢

● **政治地理學** 法學士山本信博君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三三〇頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **地質學** 理學士佐藤傳藏君著
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢
全一册 大判 三三六頁 洋並綴 正價四拾錢 郵税八錢

● **日本國史地圖** 文學博士文學士原秀四郎君著
▲大判着色地圖二十四枚 ▲細圖百餘枚挿入
全一册洋布上綴 大判本文一九三頁 正價壹圓七拾錢 郵税拾四錢

● **中等國史地圖** 文學博士文學士原秀四郎君著
▲大判着色石版六拾有餘圖
全一册洋布上綴 大判本文三〇頁 正價壹圓拾錢 小包料八錢

● **全國鐵道線路名所古蹟明細旅行案内地圖**（五二共進會銀牌受領） 麻生鍬三君著
最新式新案折本 正價四拾五錢 郵税四錢

● **中等教育 日本地圖**（統計表及寫眞版三十二葉入） 理學士佐藤傳藏君著
全一册 洋上綴 大判 七〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢

● **中等教育 萬國地圖**（統計表及寫眞版四十葉挿入） 理學士佐藤傳藏君著
全一册 洋上綴 大判 八〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

女（附付の七）

● 帝國教育會編纂
世界現勢地圖
大判縱三尺五寸横四尺七寸 精巧銅刻美麗ニ彩色シ折圖調製
附錄 山高、海深、大河、面積、列國面積其他七圖
正價（軸仕立正價金六圓荷造拾五錢送料實費 / 帙入正價金五圓小包遞送料金拾六錢）

● 理學士吉田弟彦君著
改訂 日本商業地圖
大判縱一尺二寸横八寸八分附錄重要統計四十圖
全一冊 洋上綴 大地圖十一圖 正價壹圓 小包料拾貳錢

● 英國リーステール原著 水田榮雄君譯述
大英貴賓の日本觀
全一冊 洋並綴 中判 三八〇頁 正價五拾錢 郵税六錢

● 松永聽劍君編纂
樺太及勘察加
全一冊 洋並綴 大判 三六〇頁 正價五拾錢 郵税八錢

● 河口慧海君著（石版地圖及寫眞銅版挿入）
世界の秘密國 西藏旅行記
全二冊 洋布上綴 大判 八九〇頁 正價一冊壹圓 郵税一冊拾貳錢

● 博文館編輯局主幹坪谷善四郎君著
日本漫遊案内
（上下共）府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖、全國兩半部彩色刷大地圖添附
全二冊 洋布上綴頗美本 中判一三〇〇頁 正價一冊壹圓 郵税一冊拾錢

● 東京市役所編纂
東京遊覽案内
附錄 東京明細全圖
全一冊 紙布上綴 小判 三二六頁 正價四拾錢 郵税四錢

● 野崎左文君 田山花袋君共著
改訂增補 漫遊案内
全一冊 洋布上綴 小判 六二六頁 正價五拾錢 郵税八錢

● 大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
增補 千山萬水
全一冊 洋布上綴 小判 七〇二頁 正價五拾錢 郵税拾錢

● 大橋乙羽君著（寫眞版二十八葉挿入）
續千山萬水
全一冊 洋布上綴 小判 六五〇頁 正價五拾錢 郵税拾錢

● 文學士久保天隨君著
檜木笠
全一冊 紙皮上綴 小判 五〇〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

● 大町桂月君著（寫眞版八葉挿入）
一蓑一笠
全一冊 紙皮上綴 小判 三七六頁 正價參拾錢 郵税六錢

● 大橋乙羽君著（彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入）
歐山米水
全一冊 特別上綴 大判 一七〇頁 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

● 大橋乙羽君著（寫眞版挿入）
歐米小觀
全一冊 洋布上綴 小判 二六二頁 正價四拾錢 郵税四錢

● 鎌田榮吉君著（寫眞版挿入）
歐米漫遊雜記
全一冊 紙皮上綴 小判 四二四頁 正價四拾錢 郵税六錢

● 水田榮雄君著（寫眞版挿入）
大英國漫遊實記
全一冊 紙皮上綴 小判 七〇〇頁 正價七拾錢 郵税拾錢

● 松井廣吉君著（寫眞版十六葉挿入）
米國漫遊雜記
全一冊 紙皮上綴 小判 二八六頁 正價參拾八錢 郵税六錢

● 安部磯雄君著
北米の新日本
全一冊 洋並綴 中判 二二三頁 正價參拾五錢 郵税四錢

● 醫學得業士橋公行君著
八丈島保養案内
全一冊 洋並綴 三六判 一八四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

● 飯島榮太郎君著（寫眞版挿入）
米國渡航案内
全一冊 紙皮上綴 小判 三七二頁 正價四拾錢 郵税六錢

● 木村芳五郎君 井上胤文君共著
最新正確 布哇渡航案内
全一冊 洋並綴 大判 二三六頁 正價參拾八錢 郵税六錢

● 西園寺侯爵題辭 香川悅次君著
支那旅行案内
全一冊 洋並綴 三六判 六〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

● 森次太郎君著
歐米書生旅行
全一冊 洋並綴 三六判 三二〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

女（後付の八）

文學及作文書類

文學博士高山林次郎君著　姉崎博士　齋藤學士共輯（全部六卷）

- ●樗牛全集第一卷 **美學及美術史**　全一冊洋布上綴　大判五五二頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢
- 同 ●樗牛全集第二卷 **文藝及史傳** 上　全一冊洋布上綴　大判一〇〇〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾六錢
- 同 ●樗牛全集第三卷 **文藝及史傳** 下　全一冊洋布上綴　大判七七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢
- 同 ●樗牛全集第四卷 **時論及思索**　全一冊洋布上綴　大判一一一八頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾六錢
- 同 ●樗牛全集第五卷 **想華及消息**　全一冊洋布上綴　大判六七〇頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

文學士太田善男君編
●**文學概論**　全一冊洋並綴　大判三〇〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士林森太郎君著
●**日本文學史**　全一冊洋並綴　大判二五二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士久保天隨君著
●**日本儒學史**　全一冊洋並綴　大判二九二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士笹川臨風君著
●**支那文學史**　全一冊洋並綴　大判三二二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

奧村信太郎君著
●**日本文學汎論**　全一冊洋並綴　大判三二六頁　實價貳拾錢　郵稅八錢

文學士橋本忠夫君著
●**世界文學史**　全一冊洋並綴　大判二八六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

太陽記者長谷川天溪君著
●**文學訓**　全一冊洋並綴　小判三五〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

文學士小川鋠次郎君編
●**世界美術史** 上下　全二冊洋並綴　大判六四八頁　正價一冊四拾錢　郵稅一冊八錢
▲特製本　洋布上綴　正價一冊五拾五錢　郵稅一冊拾錢

文學士小川鋠次郎君著
●**近世美術史**　全一冊洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅一冊拾錢

文學博士高山林次郎君著
●**近世美學**　全一冊洋並綴　大判三二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士石倉小三郎君著
●**西洋音樂史**　全一冊洋並綴　大判三一五頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

東儀鐵笛君著
●**音樂通解**　全一冊洋布上綴　中判二六四頁　正價五拾五錢　郵稅六錢

文學士吉川秀雄君編
●**美術概論**　全一冊洋並綴　大判三一六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　小包料八錢

文學士有馬祐政君著
●**藝術論**　全一冊洋並綴　大判三二〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士遠藤隆吉君著
●視話音字 **發音學**　全一冊洋並綴　大判二七〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　一冊五拾五錢　小包料八錢

栗原文學士・藤澤文學士共編
英國文學史
全一冊 大判 洋並製 三一四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學士大町桂月君著
日本文章史
全一冊 大判 洋並製 二九二頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士高山林次郎君著
時代管見
全一冊 小判 紙皮上製 五二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

文學博士高山林次郎君著
文藝評論
全一冊 小判 紙皮上製 四八〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

文學士大町桂月君著
文集 **雜木林**
全一冊 小判 洋並製 三〇〇頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

黎山川崎三郎君著
古人今人執是執非 風雲月露大珠小珠 **小文章**
全一冊 小判 紙布上製 三〇四頁 賣價[illegible]錢 郵稅四錢

大和田建樹君著
新文林
全一冊 中判 洋並製 四三二頁 正價貳拾錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
文章組立法
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
書簡文作法
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

田山花袋君著
美文作法
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

天城安政君著
商業作文法
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

青柳篤恒君著
支那時文軌範
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

西村酔夢君著
紀行文作法
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

福田琴月君著
寫生文範
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

河井醉茗君編
論說記事文範
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

西田敬止君編
女子消息文範
全一冊 中判 洋並製 三二〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

文學士森田米松君編
書翰文範
全一冊 中判 洋並製 二六六頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君編
日記文範
全一冊 中判 洋並製 三〇六頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

石崎篁園君編
祝賀弔祭文範
全一冊 中判 洋並製 三二七頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

文學士山川直五郎君編
中等學生文範
全一冊 中判 洋並製 三三二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

文學士生田星郷君編
明治時代文範
全一冊 中判 洋並製 三〇〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

內山幻堂君著
中等學生作文寶鑑
全一冊 中判 洋布上製 六二〇頁 正價七拾五錢 郵稅拾貳錢

佐々木信綱君著
女子消息 **文のしをり**
全一冊 大判 洋並製 三〇〇頁 正價五拾錢 郵稅八錢

佐々木信綱君・湯淺雅子女史共著
新撰女子用文
全一冊 大判 洋並製 二二六頁 正價參拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君著
日本婦女用文
全一冊 中判 洋並製 三三四頁 正價拾八錢 郵稅六錢

學習院女子部長下田歌子女史著
女子書翰文
全一冊 大判 和並製 二二八頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

賣(綴付の一〇)

文學博士重野安繹君序　石崎篁園君編述　**國民作文軌範**　全一冊紙皮上製　三六判五六〇頁　正價四拾錢　郵稅六錢

大和田建樹君著　袖珍實用　**作文寶典**　全一冊洋布上製　小判一〇二〇頁　正價六拾五錢　郵稅六錢

百東持中君編　**作文熟語字典**　全一冊洋布上製　小判九八〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢

文學博士萩野由之君著　中等教育　**作文法**　全一冊洋並製　中判五〇〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

宮川鐵次郎君著　**通俗文章學**　全一冊洋並製　大判三〇〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

上村左川君編　**記事論說文範**（美麗寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判二四四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著　女子**作文の栞**　全一冊和並製　大判二三六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

岸上操君編　**作文自在**（彩色木版寫眞銅版挿入）　全一冊洋並製　大判二七四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著　**作文組立法**　全一冊洋並製　大判一六九頁　正價拾五錢　郵稅六錢

池田一倒君著　今體**作文六大秘訣**　全一冊紙皮上製　小判三二二頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

堀江秀雄君著　學生必携　**作文資料**　全一冊洋並製　小判二[illegible]頁　正價拾五錢　郵稅四錢

井上敏夫君著　國語漢語　**作文錦囊**　全一冊紙皮上製　小判四[illegible]〇頁　正價[illegible]拾五錢　郵稅[illegible]錢

文學士武島又次郎君著　**修辭學**　全一冊洋並製　大判三〇六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢

博文館編輯局編纂　**祝辭演說法**（彩色木版寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

中島氣崢君著　**演說活法**　附　演說法名家談　全一冊洋布上製　小判二二六頁　正價參拾錢　郵稅四錢

宮田修君著　**通俗言語學**　全一冊洋並製　大判三五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

文學博士金澤庄三郎君、後藤朝太郎君共譯　**言語學**　上下　全二冊洋並製　大判　頁　正價一冊四拾錢　郵稅一冊八錢
▲特製本　洋布上製　正價一冊五拾五錢　郵稅一冊拾錢

石橋思案君校　星野麥人君編　**紅葉書翰抄**　全一冊洋並製　大判橫綴　一[illegible]頁　正價五拾錢　郵稅六錢

幻堂內山正如君著　實用**普通作文寶鑑**　全一冊洋布上製　中判五〇〇頁　正價七拾錢　郵稅拾四錢

神戶高等商業學校教授中川靜君著　**書翰文研究**　全一冊紙皮上製　中判長形四[illegible]頁　正價六拾五錢　郵稅八錢

中村秋香君著　**書翰文大成**　全一冊洋布上製　大判三四八頁　正價壹圓　小包料拾貳錢
▲和裝帙入　正價壹圓　小包料拾六錢

內山幻堂君著　**明治書翰文大全**（寫眞版八葉挿入）　全一冊洋並製　大判四六〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

大和田建樹君著　**書簡組立法**　全一冊洋並製　大判一六〇頁　正價拾五錢　郵稅六錢

樋口一葉女史著　**通俗書翰文**（彩色木版寫眞版挿入）　全一冊洋並製　大判二四六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

物集文學士　長文學士共編　散文韻文　**美文辭彙**　全一冊洋布上製　三六判九七〇頁　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾錢

國文和歌書類

第二高等學校教授岡澤鉦次郎君著
●新式日本文典原理
一名理論的日本文典
全一册洋布上綴 大判七三二頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

文學士岡田正美君著
●解說批評日本文典
上下二册洋並綴 大判六〇八頁 正價各四拾錢 郵稅各八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵稅一册拾錢

落合直文君著
●中等教育日本文典（文部省檢定濟）
全一册脊皮上綴 中判四八八頁 正價六拾錢 郵稅拾錢

落合直文君著
●中等教育文法教科書
全一册脊皮上綴 大判一二六頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

學習院女子部長下田歌子女史著
●女子普通文典
全一册和並綴 大判二四六頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

文學士鈴木暢幸君著
●日本口語文典
全一册洋並綴 大判三一六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲洋布特製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

哲學館大學講師三石賤夫君著
●學生參考叢書國文典
全一册洋並綴 小判一六二頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

文學士小倉博君著
●學生參考叢書國文熟語詳解
全一册洋並綴 小判一八二頁 正價拾參錢 郵稅貳錢

內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註
●校註神皇正統記
全一册洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

中村秋香君校訂
●吉野拾遺詳解
全一册洋並綴 大判一五二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君删定
●中等教育删定徒然草（文部省檢定濟）
全一册洋並綴 大判一一二頁 正價拾八錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
●校註徒然草
全一册洋並綴 大判二〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

北村季吟君著
●枕草紙春曙抄
全七册和裝 大判和紙刷 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

文學博士萩野由之君校註
●標註枕草子
全二册洋並綴 大判五三四頁 正價一册參拾錢 郵稅一册六錢

佐々木信綱君校註
●校註竹取物語
全一册洋並綴 大判七六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

同
●校註土佐日記
全一册洋並綴 大判五〇頁 正價拾錢 郵稅貳錢

同
●校註方丈記
全一册洋並綴 大判六〇頁 正價八錢 郵稅貳錢

同
●校註伊勢物語
全一册洋並綴 大判一〇六頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

同
●校註更科日記
全一册洋並綴 大判九四頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君 落合直文君 池邊義象君校註
●日本文學全書
全部廿四册 中判一册約四百頁 正價一册廿五錢 郵稅參錢 完

●第一編 ○竹取物語 ○伊勢物語 ○住吉物語 ○徒然草 ○紫式部日記
●第二編 ○土佐日記 ○枕草紙 ○更科日記
●第三編 ○方丈記 ○十六夜日記 ○落窪物語 ○辨內侍日記
●第四編 ○とりかへばや物語 ○堤中納言物語 ○四季物語
●第五編 ○中務內侍日記 ○蜻蛉日記 ○讃岐典侍日記 ○和泉式部日記
●第六編 ○濱松中納言物語 ○大和物語 ○唐物語

●第七編
○宇治拾遺物語
○多武峰少將物語
●自第八編至第十二編
○源氏物語五冊に分本
●自第十三編至第十五編
○榮花物語上、中、下三冊

●自第十六編至第十八編
○太平記上、中、下三冊
●第十九編
○保元物語
○平治物語
○秋夜長物語
○鴉鷺合戰物語
●第二十編
○平家物語

●第廿一編
○古今著聞集
●第廿二編
○公事根源
○十訓抄
●第廿三編
○水鏡
○大鏡
●第廿四編
○増鏡

大和田建樹君選
●古文讀本
▲正價一卷ヨリ五卷迄貳拾五錢　六卷參拾五錢
全六册和竝綴　大判七五六枚　正價壹圓六拾錢　郵稅一册四錢

國學院編纂
●名文評釋
全一册洋竝綴　大判四五二頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

落合直文君編
●中等教育國文軌範
全一册洋竝綴　中判三八〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
●新撰假名遣活法
全一册洋竝綴　小判一七〇頁　正價拾五錢　郵稅貳錢

大和田建樹君著
●歌まなび
全一册洋布上綴　中判一〇三八頁　正價壹圓五拾錢　小包料拾貳錢

佐々木信綱君著
●増補詠歌自在
全一册洋布上綴　中判七八〇頁　正價壹圓　郵稅拾貳錢

落合直文君著
●新撰歌典
全一册洋竝綴　中判六一〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●詠歌の栞
全一册和竝綴　大判二一〇頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君著
●詠歌辭典
全一册洋布上綴　小判一三七六頁　正價七拾五錢　郵稅八錢

宮澤春文君著
●作歌自在（彩色木版寫眞版挿入）
全一册洋竝綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

文學士武島羽衣君著
●霓裳歌話
全一册紙皮上綴　小判三四〇頁　正價貳拾錢　郵稅六錢

佐々木信綱君校註
●賀茂眞淵翁全集
全二册洋竝綴　中判一〇〇〇頁　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●本居宣長翁全集
全一册洋竝綴　中判五四二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●香川景樹翁全集
全一册洋竝綴　中判一〇二三頁　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●小澤蘆庵翁全集
全一册洋竝綴　中判五二二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●近世名家々集
全二册洋竝綴　中判一〇七二頁　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註
●近世長歌今樣歌集
全一册洋竝綴　中判五七〇頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●桂園門下家集
全一册洋竝綴　中判五七〇頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君校註
●明治名家々集
全二册洋竝綴　中判一一五四頁　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

加茂眞淵翁編
●賀茂翁家集
全五册木版刷　中判二百廿三枚　正價六拾錢　郵稅拾錢

黑澤翁滿翁編
●むぐらぬ集
全三册和本綴木版刷　大判　正價八拾錢　郵稅拾錢

佐々木信綱君校註
●校註明倫歌集
全一册洋竝綴　大判二二二頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

女（後付の一三）

佐々木弘綱君　佐々木信綱君校訂

●日本歌學全書

全部十二册正價一册廿五錢
中判毎册約四百頁郵税六錢宛

●第一編
○古今和歌集　○躬恒家集　○友則家集　○貫之家集　○忠岑家集

●第二編
○後撰和歌集　○元輔家集　○順家集　○能宣家集　○天徳歌合

●第三編
○拾遺和歌集　○紫式部家集　○公任家集　○清少納言家集

●第四編
○後拾遺和歌集　○相模家集　○經信母集　○高陽院歌合

●第五編
○金葉和歌集　○詞華和歌集　○堀川百首

●第六編
○千載和歌集　○永久百首　○忠度朝臣集　○後京極自歌合

●第七編
○新古今和歌集　○自讚歌

●第八編
○鴨長明集　○林下集　○源三位頼政集　○山家集　○金槐集

●自第九編至第十一編
○萬葉集上、中、下三册

●第十二編
○悦目抄　○無名抄　○歌おたり　○にひまなび　○新學異見　○歌よくろ　○調の直路

學本宗道君校註
●校註古今和歌集
全一册洋並綴　中判二四八頁　正價拾五錢　郵税四錢

佐々木信綱君校註
●百人一首講義
全一册洋並綴　中判三〇〇頁　正價貳拾錢　郵税四錢

佐々木信綱君著
●おもひ草
全一册洋布上綴　中判五二頁　正價五拾錢　郵税六錢

佐々木信綱君編纂
●竹柏園集
全二册紙皮上綴　小判一〇七〇頁　正價一册卅五錢　郵税一册六錢

子爵黑田清綱君、稅所敦子女史共撰　村松今朝太郎君編
●庭の摘草　附歌鐺記
全一册和上綴　中判二六二頁　正價參拾五錢　郵税六錢

従五位末松房泰君著
●冠詞例歌集
全一册紙皮上綴　小判二一〇頁　實價四拾五錢　郵税四錢

中郡秋香君著
●新體詩歌自在
全一册洋布上綴　中判八三四頁　正價壹圓貳拾錢　郵税拾錢

大和田建樹君著
●新體詩學
全一册洋並綴　小判二二四頁　正價拾五錢　郵税四錢

鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著
●美文韻文 花紅葉
全一册洋布上綴　小判四二二頁　正價參拾錢　郵税六錢

文學士大町桂月君著
●美文韻文 黄菊白菊
全一册紙皮上綴　小判四〇二頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

文學士土井晩翠君著
●天地有情
全一册洋布上綴　小判二三〇頁　正價貳拾五錢　郵税四錢

文學士武島羽衣君著
●美文韻文 霓裳微吟
全一册紙皮上綴　小判二六八頁　正價參拾五錢　郵税六錢

文學士鹽井雨江君著
●美文韻文 暗香疎影
全一册紙皮上綴　小判三五四頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

佐々木信綱君、印東昌綱君合著
●美文韻文 磯馴松
全一册紙皮上綴　小判四一二頁　正價貳拾八錢　郵税六錢

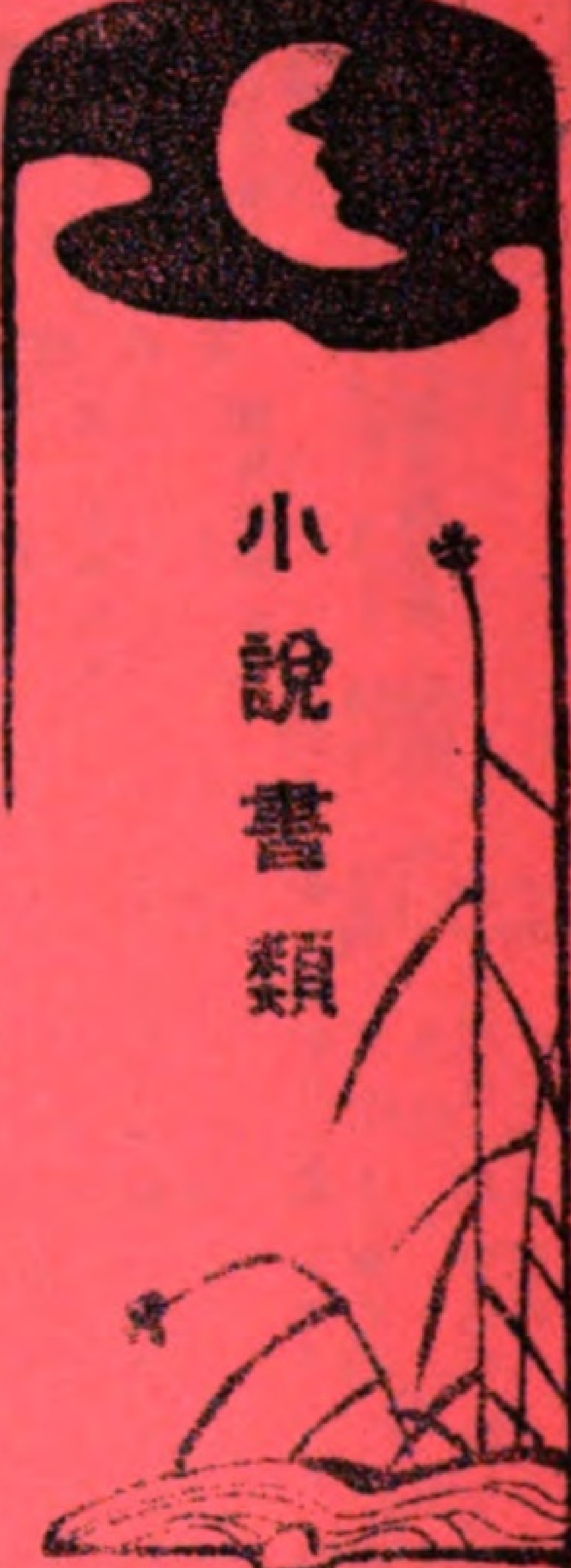
大和田建樹君著
●散文韻文 雪月花
全一册紙皮上綴　小判六二六頁　正價參拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著
●散文韻文 深山櫻
全一册紙皮上綴　小判七〇二頁　正價四拾錢　郵税六錢

大和田建樹君著
●散文韻文 藻鹽木
全一册紙皮上綴　小判五九〇頁　實價貳拾五錢　郵税六錢

四村醉夢君著
●美文韻文 創作要訣
全一册洋並綴　中判二〇六頁　正價拾貳錢　郵税六錢

女へ後付の（四）



故尾崎紅葉君著、小波君思案君校訂

紅葉全集

全部六冊洋装大判總クロース
金字金模樣附堅牢美本

▲正價一冊壹圓八拾錢全部金拾圓小包料拾貳錢宛
▲紙數一冊約九百餘頁總紙數五千六百頁

- 第一卷　色懺悔　巴波川　戀の蛻　關東五郎　猿枕　二人むく助　風猫娘　南無阿彌陀佛　此ぬし　お色懺悔　わかれ蚊帳　二人女房　新桃花扇　拈華微笑　夏痩　文ながし　七十二文命の安賣
- 第二卷　伽羅枕　紙きぬた　おぼろ舟　夏小袖　むき玉子　戀の病
- 第三卷　三人妻　心の闇　侠黒兒　袖時雨　男ごゝろ　むらさき
- 第四卷　隣の女　三箇條　青葡萄　不言不語　冷熱　八重襷　驚料理　浮木丸
- 第五卷　多情多恨　千箱の玉章　安知歇貌林　寒牡丹
- 第六卷　金色夜叉前編　續金色夜叉　煙霞療養　金色夜叉中編　續々金色夜叉　紅葉山人傳　金色夜叉後編　紅葉著作年表

元祿姉さん者 現代生活裏面觀察

呪はれたる女

全一冊洋装並製 大判 二一〇頁 正價參拾五錢 郵税八錢

博文館編輯部編
ふた昔
全一冊洋装並製 大判 六四〇頁 正價五拾錢 郵税五錢

故松陵子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂
忘れがたみ
全一冊洋装並製 中判 六二二頁 正價八拾錢 小包料八錢

江見水蔭君著
地底探檢記
全一冊洋装並製 大判 二四四頁 正價四拾錢 郵税八錢

巖谷小波君著 和田垣謙三君著
戀の繪葉書
▲一名 [illegible]
全一冊布上製 中判 四六〇頁 正價壹圓 郵税拾錢

同 小波君著
洋行土産
全二冊洋布上製 中判菊形 八〇〇頁 正價一冊壹圓廿錢 郵税一冊拾貳錢

同君著 休暇之友
笑の國
全一冊洋布上製 中判 三七七頁 正價金六拾錢 郵税八錢

海軍主計中監 窪田重光君著 日露戰役紀念
彈片
全一冊洋装並製 三六判 五〇〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

千葉紫草君纂譯
最近外交秘密
全一冊洋装並製 小判 三一七頁 正價參拾錢 郵税六錢

泉鏡花君外十四名合作
換菓篇
全一冊新形美本 中判 三〇〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

村井弦齋君著（木版彩色挿畫挿入）
女道樂
全一冊和装上製 大判 四六六頁 正價八拾錢 郵税拾貳錢

村井弦齋君著（木版彩色挿畫挿入）
酒道樂
全二冊洋布上製 大判 五五四頁 正價一冊五拾錢 郵税一冊八錢

江見水蔭君著 軍事小說
武裝の卷
（石版彩色木版畫口繪挿入）
全一冊石版表紙 大判 二四八頁 正價貳拾五錢 郵税八錢

理學士 綠依軒主人著 社會主義 新小說
文明の大破壞
全一冊洋装並製 大判 四五四頁 正價四拾錢 郵税八錢

著者	書名	體裁	頁數	定價	郵税
内田不知庵君著	社會百面相	全一冊洋並綴 大判	五五四頁	正價五拾五錢	郵税拾貳錢
樋口一葉女史著	一葉全集	全一冊洋並綴 大判	四八六頁	正價四拾錢	郵税拾錢
大橋乙羽君著	花鳥集（彩色大版密畫挿入）	全一冊洋布上綴 中判	一二〇八頁	正價壹圓	小包料拾貳錢
大橋乙羽君著	初子集（彩色木版密畫挿入）	全一冊洋布上綴 小判	五九六頁	正價四拾錢	郵税六錢
大橋乙羽君著	風月集（彩色木版密畫挿入）	全一冊洋布上綴 小判	四二二頁	正價參拾五錢	郵税六錢
大橋乙羽君君	若榮籠（彩色木版密畫挿入）	全一冊和本綴 小判	三二〇頁	正價貳拾八錢	郵税四錢
大橋乙羽君著	政治小說 累卵の東洋	全一冊洋並綴 小判	二〇六頁	正價拾八錢	郵税四錢
幸田露伴君著	ひげ男（木版彩色密畫挿入）	全一冊洋並綴 大判	三四八頁	正價參拾錢	郵税六錢
饗庭篁村君著	聚寶盆	全一冊紙皮上綴 小判	四九二頁	實價貳拾五錢	郵税六錢
巖谷小波君著	女波男波（寫眞銅版挿入）	全一冊紙皮上綴 小判	六二二頁	正價四拾錢	郵税八錢
巖谷小波君著	笑（寫眞銅版挿入）	全一冊紙皮上綴 小判	五三八頁	正價參拾五錢	郵税六錢
江見水蔭君著	戀（寫眞銅版挿入）	全一冊紙皮上綴 小判	三八二頁	正價參拾錢	郵税四錢
江見水蔭君著	星（寫眞銅版挿入）	全一冊紙皮上綴 小判	六八四頁	實價貳拾五錢	郵税八錢

著者	書名	體裁	頁數	定價	郵税
怒濤庵江見水蔭君著並畫	實地探檢 捕鯨船	全一冊洋並綴 大判	二〇〇頁	正價參拾五錢	郵税六錢
若松賤子女史譯述（肖像入）	小公子	全一冊洋並綴 大判	三七四頁	正價參拾五錢	郵税八錢
森田思軒君譯述（寫眞版密畫入）	十五少年	全一冊洋並綴 大判	二九六頁	正價參拾五錢	郵税八錢
露國レオ、トルストイ伯著 田山花袋君譯	哥薩克兵	全一冊洋並綴 大判	二三〇頁	正價拾八錢	郵税六錢
高橋光威君譯述	ロビンソン 絶島漂流記	全一冊洋並綴 大判	四九八頁	正價四拾錢	郵税八錢
櫻井鷗村君譯述	勇少年冒險譚 初航海	全一冊紙皮上綴 小判	三一八頁	正價貳拾五錢	郵税四錢
押川春浪君著	海底軍艦	全一冊紙皮上綴 小判	三九八頁	正價參拾錢	郵税六錢
同	英雄小說 武侠の日本	全一冊紙皮上綴 小判	四八二頁	正價四拾錢	郵税六錢
同	海國冒險奇談 新造軍艦	全一冊紙皮上綴 小判	三五一頁	正價參拾錢	郵税六錢
同	英雄小說 武侠艦隊	全一冊紙皮上綴 小判	三三二頁	正價參拾錢	郵税六錢
同	英雄小說 新日本島	全一冊紙皮上綴 小判	三七二頁	正價參拾五錢	郵税八錢
同	傳奇小說 銀山王	全一冊洋並綴 小判	三二七頁	正價參拾錢	郵税六錢
同	海島探險 塔中の怪	全一冊紙皮上綴 小判	三三二頁	正價貳拾五錢	郵税四錢

女（袋付の一六）

一一編 太平記
一二編 紀海音浄瑠璃集
一三編 續近松浄瑠璃集
一四編 近松半二浄瑠璃集
一五編 後太平記 ▲附 北條五代記
一六編 脚本傑作集上（禁賣）
一七編 京山全集
一八編 校訂 落語全集
一九編 並木宗輔浄瑠璃集
二〇編 紀行文集
二一編 一九全集
二二編 漂流奇談全集
二三編 邯鄲諸國物語 續種彦傑作集
二四編 校訂 續紀行文集
二五編 續水滸傳
二六編 傾城水滸傳
二七編 文耕堂浄瑠璃集
二八編 白縫譚上
二九編 白縫譚下
三〇編 北雪美談 時代鏡
三一編 常山紀談
三二編 萬物滑稽合戰記
三三編 續一九全集
三四編 校訂 黄表紙百種
三五編 校訂 俳優全集
三六編 校訂 俗曲大全
三七編 續々紀行文集
三八編 續馬琴傑作集
三九編 脚本傑作集下
四〇編 續京傳三馬傑作集
四一編 釋迦八相倭文庫上
四二編 釋迦八相倭文庫下
四三編 種彦短編傑作集
四四編 俊傑神稲水滸傳上
四五編 俊傑神稲水滸傳中
四六編 俊傑神稲水滸傳下
四七編 校訂 近世奇談全集
四八編 校訂 名家短編傑作集
四九編 佛教各宗 續高僧實傳
五〇編 校訂 名家漫筆集

曲亭馬琴翁著（木箱入）
● **南總里見八犬傳**
全五十册和本綴 大判三〇五一枚 正價九圓五拾錢 運賃五拾錢

文學博士坪内逍遙君序文 青々園伊原敏郎君著
● **日本演劇史**
全二册洋並綴 大判七八五頁 正價一册八拾五錢 郵税一册八錢
▲特製合本 洋布上綴 正價壹圓八拾五錢 小包料拾貳錢

文學博士坪内逍遙君著
● **新樂劇論** 緒論
全一册洋並綴 大判九八頁 正價貳拾錢 郵税四錢

同君著
● 新曲 **浦島**
全一册洋布上綴 中判五四頁 正價八拾五錢 郵税六錢

同君著
● 新曲 **かぐや姫**
全一册和本綴 大判五四頁 正價八拾五錢 郵税六錢

福地櫻痴居士新作
● 肥後武士 江戸藝者 **花盛劇楓葉**
全一册洋並綴 大判一一八頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

福地櫻痴居士作
● **山中平九郎**（密畫挿入）
全一册洋並綴 大判一六八頁 正價參拾錢 郵税六錢

福地櫻痴居士作
● **芳哉義士の譽**（密畫挿入）
全一册洋並綴 大判一五二頁 正價參拾錢 郵税六錢

依田學海君著
● 脚本 **小御門**
全一册洋並綴 小判一八二頁 正價五錢 郵税貳錢

石橋思案君校訂
● **落語全集**
全二册洋布上綴 中判一〇九二頁 正價六拾錢 郵税四拾錢

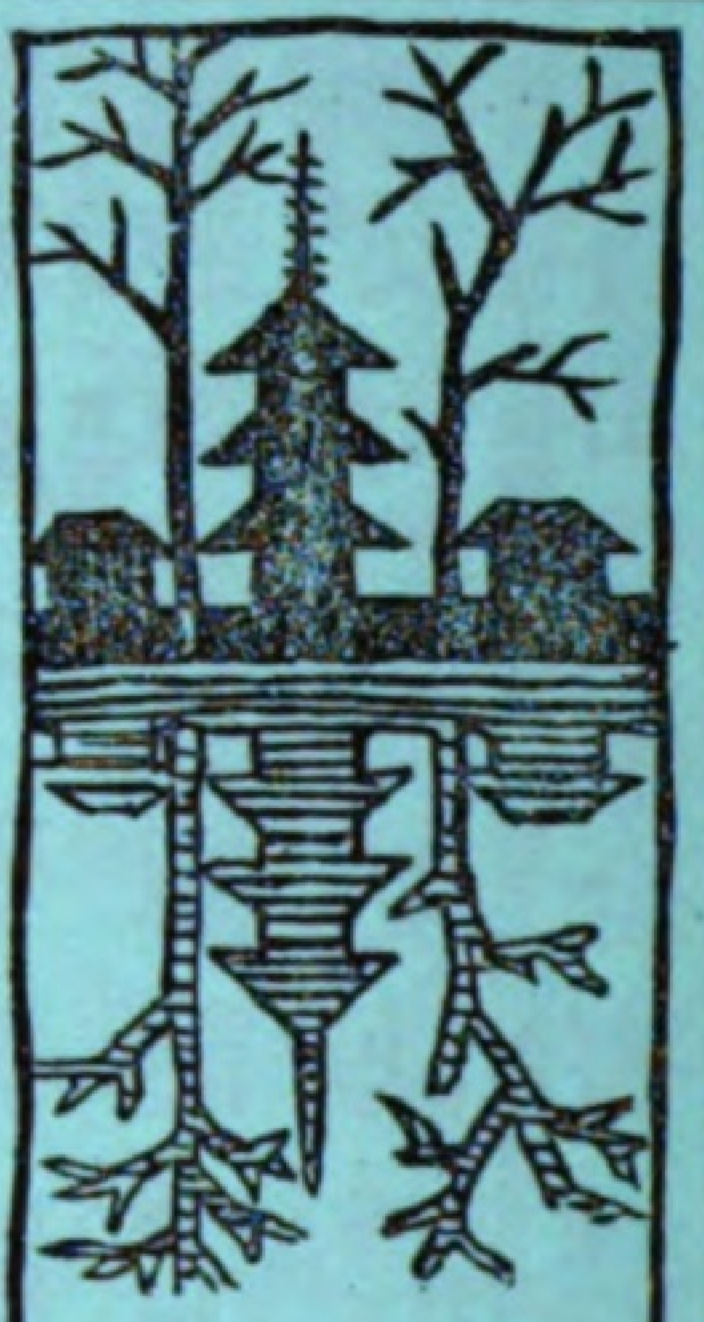
博文館編輯局編
● 新撰 **落語大全**
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵税貳錢五厘

博文館編輯局編纂
● **軍談大鑑**
全一册洋並綴 大判三二〇頁 正價貳拾五錢 郵税貳錢五厘

依田學海君序文 松林伯圓翁講演
● 伯圓講演 **菅公**
全一册洋並綴 大判二五四頁 正價參拾五錢 郵税六錢

松林伯圓翁講演
● 前講演 **中山大納言**
全一册紙皮上綴 小判三七四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

鶯亭金升君著
● 新撰落語 **福**
全一册紙皮上綴 小判三一二頁 正價參拾錢 郵税六錢



戯曲書類

大和田建樹君著
●増補謡曲通解　全一册背皮上綴　大判一七八六頁　正價壹圓八拾錢　小包料拾六錢

大和田建樹君著
●謡曲評釋　全八册洋並綴　大判各約三〇〇頁　正價各三拾五錢　郵税各八錢
▲第三輯まで既刊以下印刷中

大和田建樹君著
●謡曲文粹　全一册紙皮上綴　小判五三〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

幸田露伴君校訂（上卷狂言記、中卷續狂言記、下卷狂言記拾遺）
●校訂狂言全集　全三册和紙横綴　中判一三〇〇頁　正價一册五拾錢　郵税一册八錢
▲上帙入合本　正價壹圓六拾錢　小包料拾貳錢

大和田建樹君著　彩色木版及寫眞銅版挿入
●謡と能　全一册洋並綴　大判二七六頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著（毎編密畫挿入）
●能のしをり　全六册洋並綴　中判一二九〇頁　正價一册四拾錢　郵税一册六錢

鶯亭金升君著
●風雅文庫　全部六册小判洋裝紙皮上製　金文字入紙數各約三百頁

正價●一册金貳拾錢　●六册金壹圓拾錢　▲郵税一册金四錢

【一】都々逸の栞　【二】冠句の栞　【三】狂歌の栞
【四】狂句の栞　【五】狂體句の栞　【六】雜俳の栞

博文館編輯局編纂（彩色木版及寫眞銅版挿入）
●聲曲自在　全一册洋並綴　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞銅版挿入
●琴曲獨稽古　全一册洋並綴　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

鶯亭金升君著
●都々逸一千題　全一册紙皮上綴　小判五六〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

芳賀文學博士　三上文學博士序文　山本九馬亭君著
●浄瑠璃通解　全六册和上綴　大判約一三〇〇頁　正價一册卅五錢　郵税一册六錢
▲全部正價金貳圓　小包料貳拾錢

水谷不倒君校訂
●義太夫百番　全一册洋布上綴　小判六七六頁　正價壹圓　郵税拾貳錢

水谷不倒君編（寫眞銅版挿入）
●竹本攝津大椽　全一册和上綴　大判二三〇頁　正價四拾錢　郵税八錢

饗庭篁村君校訂
●近松時代浄瑠璃　全一册洋布上綴　中判一〇〇八頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

博文館編輯局校訂
●近松世話浄瑠璃　全一册洋布上綴　中判一〇四四頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

水谷不倒君校訂
●續近松浄瑠璃集　全一册洋布上綴　中判一〇九〇頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

同君校訂
●近松二十浄瑠璃集　全一册洋布上綴　中判一〇九〇頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

同君校訂
●江戸作者浄瑠璃集　全一册洋布上綴　中判一〇六〇頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

博文館編輯局校訂
●浄瑠璃名作集　全一册洋布上綴　中判一〇〇〇頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

幸堂得知君校訂
●忠臣藏浄瑠璃集　全一册洋布上綴　中判一〇八〇頁　正價六拾錢　小包料拾貳錢

女（奥付の一九）

家庭衛生書類

- **家政學** 學習院女子部長下田歌子女史著 岸上操君著（彩色木版寫眞銅版挿入） 全二册和装 大判四三〇頁 正價一册參拾錢 郵税一册六錢
- **家政案內** 學習院女子部長下田歌子女史著 全一册洋装 大判二五六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **家事要訣** 報知新聞家庭記者天野誠齋君著 全一册和装 大判二八二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- **臺所改良** 家庭寳典 東京女子高等師範教授喜多見佐喜子女史著 全一册和上装 大判二四〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
- **裁縫指南** 家庭百科全書 東京治庖會講師龜井まき子君著 全一册和上装 大判二三六頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- **和洋菓子製法** 家庭百科全書 中村鈴子女史編 全一册和上装 大判三〇〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- **家庭の模範** 曾我部純一君著 全一册洋布上装 中判四二四頁 正價參拾八錢 郵税六錢
- **最新家計簿記** 學習院女子部長下田歌子女史著 全一册洋装 大判一三四頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **女子手藝要訣** 飯田呉服店裁縫部主任小岩井規太郎君 同副主任鹽田直三君合著 全一册和装 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- **實用裁縫全書** 全一册和装 大判二六六頁 正價五拾錢 郵税八錢

- **實用刺繡術** 刺繡術專門磯村大次郎君著 全一册洋装 大判一二四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢
- **實用造花術指南** 山田興松君著 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入 全一册洋装 大判一〇〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢
- **裁縫と編物** 吉田淵子君著 三輪田高等女學校長三輪田眞佐子女史著 全一册洋装 大判二六二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **新家庭訓** 家庭百科全書 森田洪、鈴木古拙、牧野等君共著 全一册和上装 大判三一〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- **應用家庭美術** 博文館編輯局編纂 木版刷錦繪及寫眞版挿入 全一册洋装 中判三四〇頁 正價四拾錢 郵税六錢
- **衣服と流行** 坪谷善四郎君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入） 全一册洋装 大判二三六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **增訂日本女禮式大全** 全一册洋布上装 大判五九二頁 正價九拾錢 小包料拾貳錢 ▲蒔繪函入特製 和上装 正價壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢
- **女子普通禮式** 學習院女子部長下田歌子女史著 全一册洋装 大判二六二頁 正價參拾五錢 郵税八錢
- **和洋禮式** 大橋乙羽君著（木版刷錦繪及寫眞銅版挿入） 全一册洋装 大判二四八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **新撰小學女禮式** 中島義式君著 密畫挿入 全一册洋装 大判二二〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢
- **四季料理** 家庭百科全書 大日本割烹學會長石井泰次郎君著 全一册和上装 大判三〇〇頁 正價四拾五錢 郵税八錢
- **紳士の顧問** 米國法律學士宮本桂仙君著 全一册洋装 三六判二三〇頁 正價參拾錢 郵税六錢
- **家庭衛生訓** 千葉勝泉君 鹿島峨巷君共編 全一册洋装 小判四〇八頁 正價參拾五錢 郵税六錢

★（發付の二〇）

軍醫隱岐海軍大敬治郎君譯	女子衛生學	全一冊 小判	三二〇頁 洋並綴	正價參拾錢 郵税四錢
西田敬止君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入）	育兒と衛生	全一冊 大判	二四四頁 洋並綴	正價貳拾五錢 郵税六錢
學習院女子部長下田歌子女史著	婦女家庭訓	全一冊 大判	三六二頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税八錢
同	桑西所見 家庭教育	全一冊 大判	二五二頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
報知新聞家庭記者中村木公君編	實驗問答 日本家庭節用	全一冊 三六判	一二七四頁 洋布上綴	正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢
學習院女子部長下田歌子女史著	家庭の心得	全一冊 大判	二六八頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
同	母親の心得	全一冊 大判	二六八頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税八錢
同	學校の心得	全一冊 大判	二三〇頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
文學士大町桂月君著	女學生訓	全一冊 小判	二五六頁 洋並綴	正價貳拾五錢 郵税四錢
松原岩五郎君著	女學生の栞	全一冊 大判	三三〇頁 洋並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
干河岸櫻所君評釋	女訓評釋	全一冊 大判	四一六頁 和上綴	正價六拾錢 郵税拾錢
村井弦齋君著	挿繪入 下女讀本	全一冊 大判	一一〇頁 洋並綴	正價拾五錢 郵税四錢
近藤正一君著	女子職業案內	全一冊 三六判	四七〇頁 洋並綴	正價四拾五錢 郵税六錢
干河岸櫻所君編（木版錦繪口繪挿入）	日本女子立志編	全二冊 大判	七三六頁 和並綴	正價一冊六拾錢 郵税一冊八錢

學習院女子部長下田歌子女史著	外國少女鑑	全一冊 大判	二三八頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
同	內國少女鑑	全一冊 大判	二二八頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
同	庭訓お伽噺	全一冊 大判	二三四頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
同	お伽噺教艸	全一冊 大判	二四二頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税六錢
同	女子遊戲の栞	全一冊 大判	二三〇頁 和並綴	正價參拾五錢 郵税八錢
濱本義顯君著（木版錦繪挿入）	婦女教育 明治姬鏡	全一冊 大判	三一四頁 和紙刷	正價六拾錢 郵税八錢
讀賣新聞記者關如來君著（寫眞版十三葉三十九孃挿入）	明治の令孃	全一冊 中判	一八二頁 洋並綴	正價參拾錢 郵税六錢
治庖會第四教場主幹龜井まき子女史著	家庭料理法	全一冊 大判	二三〇頁 洋並綴	正價參拾五錢 郵税八錢
學習院女子部長下田歌子女史著	料理手引草	全一冊 大判	三三〇頁 洋並綴	正價參拾五錢 郵税八錢
藤本藤隆君著（木版刷錦繪及寫眞銅版挿入）	實用料理法	全一冊 大判	二八四頁 洋並綴	正價貳拾五錢 郵税六錢
佐々木孝君著（木版刷錦繪及寫眞版挿入）	西洋料理法	全一冊 大判	二五四頁 洋並綴	正價貳拾五錢 郵税六錢
醍醐山人編	料理早指南	全二冊 中本	和装 和紙刷	正價貳拾五錢 郵税六錢
阪本隆哉君著	衛生食物調理法	全一冊 大判	一五四頁 和並綴	正價參拾錢 郵税六錢
阪本隆哉君著	病者の食餌	全一冊 中判長形	紙皮上綴 一五六頁	正價貳拾錢 郵税四錢

日本婦人矯風會々長中島義弌君著　新撰日用女禮式　全一册洋並綴　大判一八六頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

中島義弌君著　新撰女子作法書　全一册洋並綴　大判一四〇頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

同君著　西洋男女交際法　全一册洋並綴　小判一二六頁　正價貳拾五錢　郵税四錢

東京女學館講師西田敬止君著　帝國女子修身鑑　全四册和紙刷　大判四二四頁　正價一册拾錢　郵税一册貳錢

鈴木光次郎君編　明治閨秀美譚　全一册洋並綴　小判一七二頁　正價貳拾錢　郵税貳錢

八百善主人著　八百善料理通　全三册和装　中判和紙刷　正價參拾八錢　郵税六錢

小田原屋主人編　漬物早指南　全一册和装　中判和紙刷　正價拾貳錢　郵税四錢

風羅山人編　料理いろは庖丁　全一册和装　正價拾八錢　郵税四錢

保養院醫長門脇眞枝君著　精神病看護學　全一册洋布上綴　大判二四六頁　正價五拾錢　郵税八錢

仙臺醫學校教授須田勝三郎君著　衞生化學　一名飲食物日用品嗜好品檢查法　全一册洋並綴　大判四一五頁　正價四拾錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　小包料八錢

醫學士伊庭秀榮君著　復習問答　簡明產婆學　全一册洋並綴　中判一二〇頁　正價五拾錢　郵税六錢

產科專門稻生鑑次郎君纂著　實習產婆學　上卷　通常產　全一册洋並綴　大判三六〇頁　正價七拾錢　郵税拾錢

同君著　同　下卷　異常產　全一册洋並綴　大判二九〇頁　正價八拾錢　郵税拾錢

醫學士守矢親國君譯述　生殖器新書　全一册洋布上綴　中判四五六頁　正價九拾錢　小包料八錢

醫學博士三輪德寬君講述　家庭衞生講話　一般救急法　全一册洋並綴　大判一六〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

醫學博士森林太郎君述　衞生學大意　全一册洋並綴　大判一六〇頁　正價三拾五錢　郵税六錢

醫學博士林春雄君述　藥物の大要　全一册洋並綴　大判一六〇頁　正價三拾五錢　郵税六錢

醫學博士緒方正清君述　姙產婦の心得　全一册洋並綴　大判一六〇頁　正價三拾五錢　郵税六錢

醫學士田村貞策君　朝夷孤舟君共譯　衞生指針　姙產婦の務　全一册洋布上綴　大判四二八頁　正價七拾五錢　郵税八錢

醫學博士井上通泰君監修　家庭衞生叢書　全十二册洋並綴　大判各約一六〇頁　正價一册貳拾錢　郵税一册四錢

醫學博士三島通良君著　はゝのつとめ　全一册洋布上綴　大判三一二頁　正價七拾五錢　郵税拾錢

女學世界衞生顧問糸左近君著　四季應用　通俗治療法　附　養生秘訣　全一册洋並綴　中判二九二頁　正價貳拾八錢　郵税六錢

醫學士小川劍三郎君著　通俗衞生　眼のはなし　全一册洋並綴　中判一一四頁　正價拾八錢　郵税四錢

藥學得業士金澤駿君著　通俗治療救急法　全一册洋並綴　小判三一〇頁　正價貳拾五錢　郵税四錢

醫學士小玉龜藏君著　延命長壽法　全一册洋布上綴　三六版四四〇頁　正價六拾錢　郵税六錢

俳諧書類

● 中川霞城君著 平言俗語 俳諧美學　全一冊 洋並綴 大判二五〇頁　正價參拾錢 郵稅六錢

● 雪中庵雀志宗匠校閲 五乳人釣雪君編 俳諧提要　全一冊 和本横綴 中判三五五頁　正價五拾錢 郵稅八錢

● 老鼠堂永機君編 俳諧自在　全一冊 洋布上綴 小判一二三〇頁　正價壹圓 郵稅拾貳錢

● 內藤鳴雪君著 鳴雪俳話　全一冊 洋並綴 三六判二五〇頁　正價貳拾八錢 郵稅四錢

● 今井柏浦君編 中村不折君畫 新撰一萬句　全一冊 和裝横綴 中判五二〇頁　正價四拾五錢 郵稅八錢

● 內藤鳴雪君閲 今井柏浦君編 明治一萬句　全一冊 和裝横綴 中判四四〇頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 三宅青軒君著 俳諧獨學（彩色木版寫眞銅版挿入）　全一冊 洋並綴 大判二五六頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 廣田精知君著 和歌俳諧節用集　全二冊 和紙銅刻 小判二九二枚　正價參拾五錢 郵稅四錢

● 伊藤松宇君校訂 付合作法全集（名家手蹟寫眞銅版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三六三頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂 芭蕉全集（寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三〇四頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 老鼠堂永機君 阿心庵雪人君校訂 其角全集（寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判二八〇頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 榮忩無角君編 俳家成美全集　全一冊 洋並綴 小判五二〇頁　正價貳拾錢 郵稅八錢

● 其角堂永機宗匠外四大家校 森婁直君編 修身俳諧不朽集　全二冊 和並綴 中判一八二頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

● 雪中庵雀志君校訂 嵐雪全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判二九〇頁　實價貳拾錢 郵稅八錢

● 老鼠堂永機君 其角堂機一君校訂 支考全集（名家手蹟寫眞挿入）　全一冊 洋並綴 大判三四〇頁　實價貳拾錢 郵稅八錢

● 大野洒竹君校訂 許六全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三〇〇頁　實價貳拾錢 郵稅八錢

● 岡野知十君校訂 也有全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判二八四頁　實價貳拾錢 郵稅八錢

● 不白軒梅年君 雪中庵雀志君 雪袋人宇貫君校訂 蓼太全集（寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三二二頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 大野洒竹君校訂 素堂鬼貫全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判二八八頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 角田竹冷 佐藤飯人 大野洒竹三君校訂 蕪翁句集　全三冊 木版 美濃判和紙刷　正價壹圓 郵稅拾錢

● 大野洒竹君校訂 蕪村曉臺全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三〇〇頁　正價參拾錢 郵稅八錢

● 大野洒竹君校訂 一茶大江丸全集（名家手蹟寫眞版挿入）　全一冊 洋並綴 大判三二〇頁　正價參拾錢 郵稅八錢

老鼠堂永機君 晉雪庵柳涯君校訂
●蕉門十哲集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三〇二頁 正價參拾錢 郵稅八錢

大野洒竹君校訂
●芭蕉以前俳諧集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋並綴 大判六三〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

大野洒竹君校訂
●元祿名家句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判二八六頁 正價參拾錢 郵稅八錢

角田竹冷君校訂
●俳諧句合全集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判二一八頁 正價參拾錢 郵稅八錢

犀崎紅葉君校訂
●俳諧類題句集（名家手蹟寫眞版挿入）
全二冊洋並綴 大判七二〇頁 正價一冊參拾錢 郵稅一冊八錢

俳諧社寺中校
●一茶句集
全二冊和裝 木版和紙刷 正價貳拾五錢 郵稅六錢

竹村秋竹君編
●明治俳句
全一冊紙皮上綴 小判五〇〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

內藤鳴雪翁題句 高濱虛子君序文 峯青嵐君編著
●俳句資料解釋
全一冊和並綴 小判三〇〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

幸田露伴君序文 幸堂得知君解
●略解 時代狂句選
全一冊洋並綴 三六判三五〇頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

芭蕉翁編
●掌中俳諧七部集
全二冊 和裝小本 正價貳拾貳錢 郵稅四錢

一葉舍仙堯翁輯
●俳諧玉葉集
全一冊 和裝長本 正價拾五錢 郵稅四錢

北村季吟君撰 高井蘭山君訂
●俳諧增山の井
全二冊 和裝中本 正價貳拾貳錢 郵稅六錢

禾木園主人輯
●俳諧今人發句集
全二冊 中本橫綴 正價參拾錢 郵稅拾錢

巖谷小波君校訂
●俳諧文集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三二八頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（●本朝文鑑●和文藻●芙蓉文集●新編俳諧文集●秋風ノ文集●雞口集）

巖谷小波君校訂
●俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三三〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（玉くしげ●俳諧●南北新話●俳諧耳底記●三草紙●俳諧一串抄●蕉門俳諧錄●俳諧參話●柿晉問答●山中問答●湖東問答●俳諧或問俳諧七草）

巖谷小波君校訂
●讀俳諧論集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三〇六頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（芭蕉二十五ヶ條●俳諧有也無也關●俳諧十論●俳諧十論爲辨抄●續五論●片歌二夜問答●十二話●白雄夜話●俳諧雪おろし●俳諧七草）

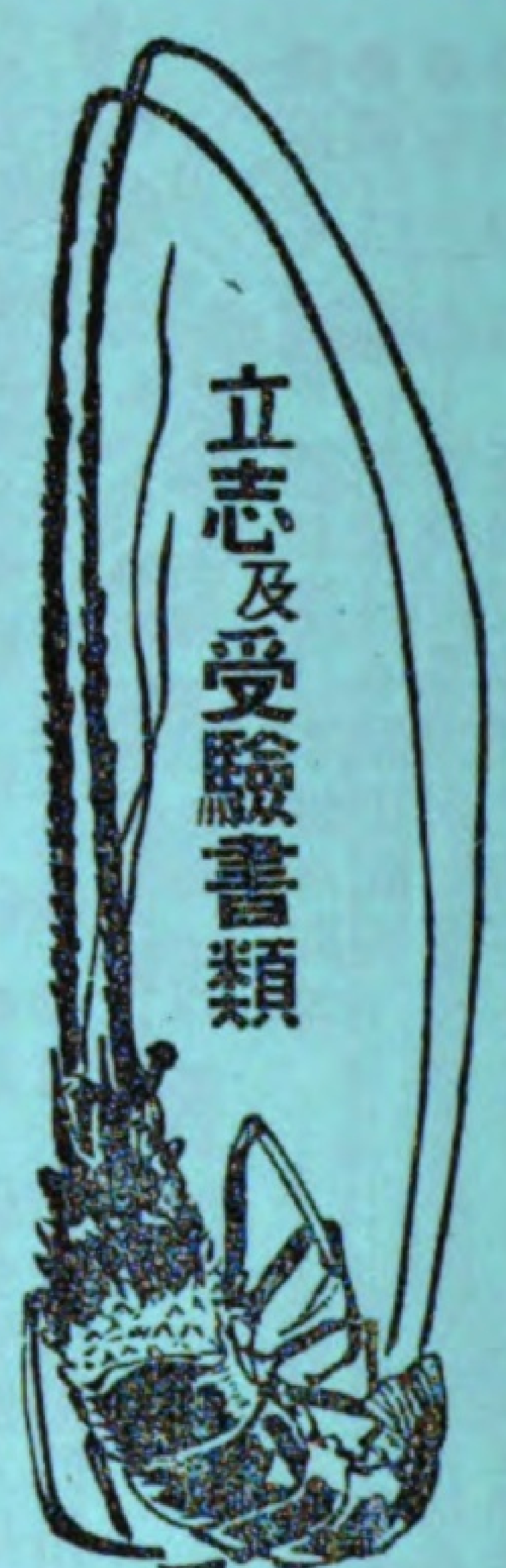
大野洒竹君校訂
●俳諧珍本集（名家手蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三一八頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（立圃句集●梅翁宋因句集●兩吟一日千句●俳諧破邪顯正●丙寅紀行●俳諧爪作●青すだれ●新三百韻●のぼり鶴●節文集●俳諧古選●春泥句集●涼袋獨吟集●花見次郎●舍利風語）

佐藤飯人君校訂
●俳諧紀行全集（大判古俳人手蹟寫眞入）
全一冊洋並綴 大判四〇〇頁 賣價貳拾錢 郵稅八錢
目次（發凡七則●俳諧紀行全集提要●日本行脚文集●野洒紀行●翁間抄●奥細道菅菰集●奥細道拾遺●椎の葉●陸奥千鳥●摩詰庵入日記）

鴨澤四了君校訂
●俳諧逸話全集（名家眞蹟寫眞版挿入）
全一冊洋並綴 大判三三二頁 正價參拾錢 郵稅八錢
目次（滑稽太平記●行脚怪談袋●蕉翁消息集●俳家奇人談●俳人百家選●歌俳百人選●續俳家奇人談●名家叢談）

角田竹冷君校閱 星野麥人君 牧野望東君合著
●俳諧年表
全一冊和上綴 大判二八六頁 正價六拾錢 郵稅八錢

女（後付の二四）



立志及受驗書類

- ●軍國訓　文學士大町桂月君著　全一册洋並綴　小判三三六頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢
- ●學生訓　文學士大町桂月君著　全一册紙皮上綴　小判二四八頁　正價貳拾錢　郵稅四錢
- ●續學生訓　文學士大町桂月君著　全一册紙皮上綴　小判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢
- ●青年訓　文學士大町桂月君著　全一册洋並綴　小判三一八頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢
- ●處世訓　文學士大町桂月君著　全一册洋並綴　小判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢
- ●成功要錄　慶應義塾教授菅綠陰君著　全一册紙皮上綴　中判二二〇頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢
- ●言行要錄　慶應義塾教授菅綠陰君著　全一册紙皮上綴　中判二六八頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●改正西國立志編　文學博士中村正直君譯述　東京女學館教授西田敬止君編　全一册洋並綴　中判六〇八頁　正價貳拾七錢　郵稅八錢
- ●益軒十訓　讀賣新聞記者田村逆水君著　全一册背皮上綴　中判一〇二頁　正價壹圓　小包料拾貳錢
- ●成功と人格　大町文學士序文　全一册洋並綴　大判一八〇頁　正價參拾五錢　郵稅八錢
- ●帝國修身軌範　文學士秋原朝之助君著　全四册和並綴　小判三六九頁　賣價一册拾錢　郵稅一册四錢

- ●處世要訓　高等師範學校教諭本田增次郎君著　全一册洋並綴　中判二四〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●學生立身策　法學士田中次郎君譯述　全一册洋並綴　小判一七六頁　正價拾貳錢　郵稅四錢
- ●成功遂志勤學要訣　米國ジョン、トツト氏原著　吉田巳之助君譯述　全一册洋並綴　中判四七〇頁　正價貳拾八錢　郵稅六錢
- ●日常行爲法則　法學士丸尾雄君著（彩色木版密畫寫眞版挿入）　全一册洋並綴　大判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- ●勤學と處世　法學士桐生政次君著（彩色密畫挿入）　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- ●世界格言大全　澁江保君著　全一册洋布上綴　小判一三七二頁　正價四拾錢　郵稅四錢
- ●武士道叢書　文學博士井上哲次郎君　文學士有馬祐政君共編　全三册洋裝　大判約一、六〇〇頁　正價一册五拾錢　郵稅一册拾貳錢　▲下卷に限り郵稅拾四錢
- ●現代大家武士道叢論　秋山悟庵君編纂　全一册洋並綴　大判約四百餘頁　正價五拾錢　郵稅拾錢
- ●武士道家訓集　文學士有馬祐政君　秋山悟庵君共編　全一册洋並綴　大判三三六頁　正價四拾五錢　郵稅八錢
- ●日本武士道史　文學士蜷川龍夫君著　全一册洋並綴　大判三七二頁　正價八拾錢　小包料八錢
- ●人間天職論　文學士杉谷泰山君著　全一册洋並綴　大判三〇八頁　正價五拾五錢　郵稅八錢
- ●天則百話　文學博士加藤弘之君著　全二册洋並綴　大判三〇八頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- ●況翁閑話 附況翁欵片　男爵石黑忠悳君著　全一册洋並綴　大判三〇〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢
- ●人事百話　子爵福羽美靜君著　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

女（後付の二五）

赤堀又次郎君校訂 ●**心學叢書** 全六册和本上綴 大判約一九〇〇頁 正價一册四拾錢 郵稅一册拾錢

故中江兆民君著 ●**一年有半** 全一册洋並綴 大判二八八頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

同 ●**續一年有半** ▲一名無神無靈魂 全一册洋並綴 大判三六六頁 正價參拾八錢 郵稅八錢

京都帝國大學內自彊會々員共編 學界之先蹤 星野久成君著 ●**青年修學指針** 全一册洋上綴 三六版七〇〇頁 正價六拾錢 郵稅八錢

山田樋太郎君編 ●**讀書法** 全一册洋並綴 小判二二二頁 正價拾錢 郵稅四錢

博文館編輯局編纂 ●**博士試驗論文集** 寫眞版挿入 全一册洋並綴 大判二八六頁 正價參拾錢 郵稅六錢

官私立諸學校 ●**就學案內** 改訂新版 全一册洋並綴 大判二二八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

飯泉規矩三君著 ●**學術自修法** 全一册洋並綴 小判二四八頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

北一凾君編纂 現行 ●**試驗規則大全** 全一册紙皮上綴 小判六八八頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

●受驗問答叢書

▲全部卅六册洋裝袖珍紙皮金文字入上製

正價 ●壹册金貳拾錢 ●拾册金壹圓八拾錢 ●貳拾册金參圓五拾錢 ●卅六册金五圓四拾錢 ▲郵稅壹册四錢宛

全部書目

●第一編 改訂增補新撰日本地理問答……上村左川君編
●第二編 新撰日本歷史問答……宮田修君編
●第三編 新撰世界地理問答……武田櫻桃君編
●第四編 新撰東洋歷史問答……松原岩五郞君編
●第五編 新撰西洋歷史問答……長谷川誠也君編
●第六編 新撰國文問答……鷲野勇雄君編
●第七編 新撰漢文問答……太田才次郎君編
●第八編 新撰算術問答……竹貫登代多君編
●第九編 新撰代數問答……竹貫登代多君編
●第十編 新撰幾何問答……竹貫登代多君編
●第十一編 新撰化學問答……武田櫻桃君編
●第十二編 新撰物理問答……上村貞子君編
●第十三編 新撰動植物學問答……寺崎留吉君編
●第十四編 新撰地文天文問答……木村定次郎君編
●第十五編 新撰法制經濟問答……中村重造君編
●第十六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答……小野拓君編
●第十七編 新撰倫理敎育問答……永廻藤一郞君編
●第十八編 新撰鑛物地質問答……寺崎留吉君編
●第十九編 新撰心理論理問答……德谷豐之助君編
●第二十編 新撰和英文典問答……上村貞子君編
●第廿一編 新撰農業要項問答……志岐守二君編
●第廿二編 新撰英語會話作文問答……森美文君編
●第廿三編 明治三十六年文官高等試驗答案集……相澤新八君編
●第廿四編 新撰商業要項問答……濱田四郎君編
●第廿五編 新撰獨逸文典問答……藤井憲君編
●第廿六、七編 新撰工業要項問答(上下二册)……加野友次郎君編
●第廿八編 新撰作文問答……西村眞次君編
●第廿九編 新撰衞生生理問答……醫學士石原喜久太郎君閱 首藤環君編
●第三十編 新撰家事問答……近藤正一君編
●第卅一編 新撰憲法行政法問答……法學士辻宏吉君編
●第卅二編 新撰商法問答……法學士太田資時君編
●第卅三編 新撰國際公法私法問答……土屋法學士編
●第卅四編 新撰刑法問答……法學士石原磊三君編
●第卅五編 新撰民刑訴訟法問答……法學士清水孝藏君編
●第卅六編 新撰民法問答……宮川大壽君編

繪畫習字書類

●地方自治經營（賜天覽）
内務省地方局御編纂
太陽判寫眞畫帖 百五十枚 正價壹圓參拾錢 郵税拾四錢

●後援事業と慈惠設施（賜天覽）
同 御編纂
太陽判寫眞畫帖 百二十枚 正價壹圓參拾錢 郵税拾貳錢

●水彩繪手本（全四帙）
中村不折君著并畫 花卉山水人物
第一輯既刊（附錄水彩畫手引）
大判一組六板 正價五拾五錢 郵税四錢

●女性と趣味
丸山晩霞君著 水彩畫法
全一冊洋布上綴 大判四三〇頁 正價貳圓 郵税拾四錢

●鉛筆畫法
中村不折君著
全一冊洋布上綴 中判一一七頁 正價六拾五錢 郵税八錢

●水彩畫手引
三宅克己君著
全一冊洋並綴 中判二七〇頁 正價七拾五錢 郵税六錢
▲總クロース上製正價九拾錢 郵税八錢

●水彩習畫帖
諸大家執筆
〔第一卷〕三宅克己君筆 〔第二卷〕丸山晩霞君筆
〔第三卷〕大下藤次郎君筆 〔第四卷〕三宅克己君筆
各冊原畫六枚 習畫六枚 正價各參拾五錢 郵税各貳錢宛

●海軍寫眞集第一輯
海軍省御認可 日露戰役
太陽判寫眞五十枚 正價貳拾五錢 郵税六錢
▲特製本光澤紙刷 正價七拾五錢 郵税八錢

●同
同
自第二輯至第四輯 太陽判寫眞各五十枚 正價一冊參拾錢 郵税一冊六錢
▲特製本光澤紙刷 正價一冊八拾錢 郵税八錢

●初心毛筆畫譜
毛筆畫研究會編
全五冊和裝木版 和紙彩色刷 正價一冊拾貳錢 郵税一冊四錢

●子供遊び畫帖
小林永濯君畫
全一冊和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓五拾錢 郵税貳拾錢

●花鳥畫譜
瀧和亭翁畫
全一冊和裝上製 大判錦繪木版刷 正價參圓 郵税拾四錢

●光琳百圖
酒井抱一畫伯編
全二冊和紙木版 大判七二枚 正價五拾錢 郵税四錢

●探幽百富士
狩野探幽畫伯筆
全四冊和紙木版 大判一一〇頁 正價壹圓 郵税拾四錢

●聚珍畫譜
狩野康信君編 探幽縮圖
全三冊和紙木版 本書大判六九枚 正價貳圓 郵税拾四錢

●本朝畫纂大全
谷文晁畫伯筆 谷文晁
全四冊和紙木版 大判一一〇枚 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢

●祐信畫鑑
西川祐信君著
全三冊和紙木版 大判五三枚 正價四拾五錢 郵税拾錢

●三體千字文
柳澤小陽君書
全一冊和紙木版 半紙刷七五枚 正價四拾錢 郵税四錢

●一六蘭亭帖
巖谷一六君書
全一冊和紙刷 半紙判二七枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

●鳴鶴蘭亭帖
日下部鳴鶴君書
全一冊和紙木版 半紙判二五枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

●明治書翰文
大和田建樹君著 巖谷一六居士書
全一冊和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾錢 郵税四錢

●新撰應用書翰
依田學海君著 巖谷一六居士書
全一冊和紙木版 大判八五枚 正價參拾五錢 郵税四錢

●初學手紙の文
河村吉之輔君著
全二冊和紙木版 大判一〇〇枚 正價參拾五錢 郵税六錢

理科及數學書類

理學士福井政一君著 **普通物理學** 上下二冊洋並綴 大判六三〇頁 正價一册四拾錢 郵税一册八錢

岐阜縣師範學校教諭蒔田宗次君著述 中等教育 **新撰物理學楷梯** 全一册洋布上綴 中判三八八頁 正價五拾錢 郵税八錢

理學士龜高德平君著 **有機化學** 全一册洋並綴 大判四〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士眞島利行君著 **無機化學** 全一册洋並綴 大判三五四頁 正價四拾錢 郵税八錢

福岡東筑中學教諭松村寺之助君著 受驗適用 **新撰化學參考書** 全一册洋布上綴 中判二六〇頁 正價四拾八錢 郵税六錢

仙臺醫學專門學校教授須崎勝三郎君著 **應用定量分析** 全一册洋並綴 大判三四四頁 正價四拾錢 郵税八錢

▲右四種共各洋布特製一册正價五拾五錢 郵税拾錢宛

藤野修吉君 花井七三郎君 草野堅藏君共著 **通俗理化一斑** 全一册洋並綴 大判三三〇頁 正價參拾錢 郵税八錢

池上秦次郎君著 受驗必携 **物理學演習** 全一册洋並綴 小判一五〇頁 正價拾五錢 郵税四錢

理學士須藤傳治郎君著 **星學** 全一册洋並綴 大判三三二頁 正價四拾錢 郵税八錢

▲特製本洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

農學博士稻垣乙丙君著 農藝物理 **氣象學** 全一册脊皮上綴 大判五四〇頁 正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

理學士岡田武松君著 **近世氣象學** 全一册洋並綴 大判三三八頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士一戸直藏君著 **高等天文學** 全一册洋並綴 大判三二四頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士杉原拳吉君編 **最新電氣學** 大判三一五頁 正價四拾錢 郵税八錢

▲右二種共各洋布上綴一册 正價五拾五錢 郵税拾錢宛

▲特製本洋布上綴 正價五拾五錢 小包料八錢

理學士盧野敬三郎君編 科學藝術 **純正寫眞術** 全一册洋布上綴 小判三五八頁 正價壹圓 郵税八錢

藥學得業士金澤嚴君著 **寫眞及幻燈** 全一册洋並綴 大判二三二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

人類學專攻八木奘三郎君著 **普通人類學** 全一册洋並綴 大判三六二頁 正價四拾錢 郵税八錢

▲特製本洋布上綴 正價五拾五錢 小包料八錢

第二高等學校教授理學士安田篤君著 增補訂正 **植物學汎論** 全一册脊皮上綴（密畫挿入） 大判六四八頁 正價貳圓 小包料拾貳錢

理學士飯塚啓君著 **植物學新論** 全一册洋並綴 大判三一四頁 正價四拾錢 郵税八錢

▲特製本洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

理學士遠藤吉三郎君著 日本有用 **海產植物** 全一册洋布上綴 大判二二八頁 正價壹圓廿五錢 郵税八錢

理學博士石川千代松君述 學藝叢話 **動物學叢話** 全一册洋並綴 大判二三二頁 正價四拾錢 郵税六錢

理學士會田龍雄君著 **新撰動物學** 全二册洋布上綴 大判五六〇頁 正價一册四拾錢 郵税一册八錢

▲特製本洋布上綴 正價一册五拾五錢 郵税一册拾錢

川村守義君著 **通俗動物學**（密畫入） 全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價貳拾錢 郵税八錢

理學士飯塚啓君著 **海產動物學** 全一册洋布上綴 大判六八〇頁 正價貳圓 小包料拾貳錢

東京帝國大學助教授理學士飯塚啓君著
動物發生學
全一册洋並綴 大判三五〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

腹卷助太郎君編 理學士大築佛郎君 理學士八谷彪一君 共著
實用 鑛物及地質
全一册洋並綴 中判二五九頁 正價參拾錢 郵税六錢

鑛物學
全一册洋並綴 大判三六四頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

農學博士稻垣乙丙君著
農學校用 氣象學教科書
全一册洋布上綴 大判一四六頁 正價六拾錢 郵拾八錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
新式算術講義
全一册洋布上綴 大判四七〇頁 正價壹圓 郵税拾貳錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君著
新撰算術
全一册洋並綴 大判三〇六頁 正價四拾錢 郵税八錢

東京帝國大學教授理學博士高木貞治君 京都帝國大學教授理學士林鶴一君著
新撰代數學
全一册洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
新撰幾何學
全一册洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
新撰解析幾何學
全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
新撰三角法
全一册洋並綴 大判二八二頁 正價四拾錢 郵税八錢

理學士松村定次郎君著
新撰微分積分學
全一册洋並綴 大判三五六頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲右四種共各洋布特製一册 正價五拾五錢 郵税拾錢宛

理學博士坪井正五郎君著
學藝叢書 人類學叢話
全一册洋並綴 大判二三六頁 正價四拾錢 郵税六錢

理學博士三好學君著
學藝叢書 植物學叢話
全一册洋並綴 大判二四〇頁 正價四拾錢 郵税六錢

工學士重見道之君著
工業叢書 工業數學
全一册布上綴 中判三〇〇頁 正價九拾錢 郵税拾貳錢

第六高等學校教授松尾哲太郎著
中等新撰 用器畫教科書解說
全一册洋布上綴 大判一七三頁 正價五拾錢 郵税八錢

同
中等新撰 用器畫教科書圖式
全一册厚表紙綴 太陽判石版摺 正價五拾錢 郵税六錢

理學士林鶴一君著
初等平面 三角法教科書（文部省檢定濟）
全一册洋布上綴 中判一二〇頁 正價四拾錢 郵税四錢

理學士藤田外次郎君著（上卷算術代數の部 下卷幾何學の部）
文部省檢定受驗用 新撰數學講義
全二册洋並綴 中判五七八頁 正價一册卅八錢 郵税一册六錢

佐久間文太郎君著
中等教育 算術教程
全一册洋並綴 大判二二二頁 正價四拾錢 郵税六錢

理學士松村定次郎君著
代數學難問解義
全一册洋並綴 中判四三〇頁 正價六拾錢 郵税拾錢

竹貫婁文君補 竹貫直人君編
實用 新式速算法
全一册洋並綴 中判二九四頁 正價參拾五錢 郵税六錢

竹貫登代多君編
算術手引草
全一册脊皮上製 中判四七六頁 正價五拾錢 郵税六錢

三山暉信君著
實用 數學一萬題
全一册洋並綴 中判五一〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

竹貫直人君著
數學遊戲
全一册紙皮上綴 小判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

竹貫直人君著
少年算術遊戲
全一册洋並綴 中判二五〇頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

時事新報速記主任熊崎健一郎君著
最新速記術
全一册洋並綴 中判三二〇頁 正價六拾錢 郵税八錢

遊戲及技藝書類

石橋思案君序文 加野孤雁君編 新案 **福引種本** 全一冊新形美本 中判一六〇頁 正價拾八錢 郵稅四錢

石橋思案君序文 加野孤雁君 有田鐵笛君共編 征露紀念 **續福引種本** 全一冊新形美本 中判一四六頁 正價拾八錢 郵稅四錢

安藤謙吉君著 **福引集** 全一冊洋並綴 小判一四四頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

日本遊戲研究會編纂 **模範運動會法** 附新式舞踏遊戲 全一冊洋並綴 中判三〇〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

早稻田大學野球撰手橋戸信君著 **最近野球術** 全一冊紙皮上綴 三六判二七五頁 正價參拾錢 郵稅六錢

前山口縣知事法學士武田千代三郎君著 理論實驗 **競技運動** 全一冊洋布上綴 大判六七八頁 正價壹圓貳拾錢 小包料拾貳錢

津田素彥君著 心身鍛錬 **少年競技運動** 全一冊洋並綴 小判一五四頁 正價拾八錢 郵稅四錢

同 **ベースボール クリケット** 全一冊洋並綴 小判一二六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

野田圭圓君著 **庭球術** 全一冊洋並綴 小判一五〇頁 實價八錢 郵稅貳錢

竹貫直人君著 少年遊戲 **奇術種本** 全一冊洋並綴 三六版二五〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

山[illegible]久光君閲 等問醉肉君編 新式圖解 **馬術** 全一冊洋上綴 三六判四〇六頁 正價六拾錢 郵稅六錢

小川文雄君著 新案圖解 **玉突術** 全一冊紙布上綴 大判二一八頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

同君著 別案圖解 **玉突術續篇** 全一冊紙布上綴 大判一八〇頁 正價五拾錢 郵稅六錢

三宅鈍骨君著 **玉突術** 全一冊洋並綴 小判一六〇頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

志岐守二君著 **室內遊戲法** 全一冊洋並綴 小判二三二頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

太田才次郎君著 **全國兒童遊戲法** 全三冊洋並綴 大判四五〇頁 正價一冊拾錢 郵稅一冊四錢

神刀流擊劍劍武術開祖日比野雷風君著 武道根本 **劍武術** 全一冊洋並綴 中判二四二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

適心齋井口義爲君著 露國征伐 **劍舞獨習圖解** 全一冊洋並綴 中判二四六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

血達磨鵜飼貞君編 **夢判斷** 附夢占法 全一冊洋並綴 中判一四〇頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

澁江保君著 西洋秘傳 **魔術** 全一冊洋並綴 大判三五〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

戸田主獵局長校閲 報知新聞記者高橋迎月君著 名家實談 **銃獵秘訣** 全一冊洋上綴 三六判二四六頁 正價參拾錢 郵稅六錢

佐野信三郎君 內藤健行君合著 **銃獵案內** 全一冊洋並綴 小判一九六頁 正價拾貳錢 郵稅貳錢

志岐守二君著 **鳥獸狩獵法** 全一冊洋並綴 小判一四八頁 實價八錢 郵稅貳錢

川口清五郎君著 **諸鳥飼養全書** 全一冊洋布上綴 大判二一九頁 正價九拾錢 郵稅拾錢

前田閑亭君著 **金魚飼養法** 全一冊洋並綴 大判一六二頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

女(後付の三〇)

石井研堂君著
釣遊秘術 **釣師氣質**
全一冊洋布上綴 大判七〇〇頁 正價九拾五錢 小包料拾貳錢

滿尾藤次郎君著
漁魚術
全一冊洋並綴 小判一二〇頁 賣價八錢 郵税貳錢

加藤進君 向井正治君合著
最新游泳術
全一冊洋並綴 中判二六二頁 正價參拾錢 郵税四錢

田邊蓮舟翁閲 内山曻君著
弓術教範
全一冊洋並綴 大判一五〇頁 正價參拾五錢 郵税六錢

田邊蓮舟翁閲 内山曻君著
弓術新書
全一冊洋並綴 大判九八頁 正價貳拾八錢 郵税四錢

津田粂彦君著
射的術及弓術
全一冊洋並綴 小判一二〇頁 正價八錢 郵税貳錢

故七段 小林鐵次郎君遺稿
男二段 小林鍵次郎君編述
圍碁全集
全部拾貳冊 和裝中判 一冊八十有餘頁
正價（壹冊金拾五錢 六冊金八拾五錢）拾貳冊壹圓六拾五錢 郵税一冊ニ付金貳錢

【一】圍碁入門
【二】圍碁初歩
【三】圍碁定石
【四】圍碁詰方
【五】圍碁布石法
【六】評釋古今名家打碁集
【七】互先定石集（上）
【八】同（中）
【九】同（下）
【十】近古名人打碁集
【十一】近世名人打碁集
【十二】今代名人打碁集

小林健太郎君著 小林鐵次郎君
初學指針 **圍碁活法**
全一冊和上綴 中判三一〇頁 正價六拾五錢 郵税六錢

中川龜三郎君 巖崎健造君合著
圍碁大鑑
全二冊和紙上綴 大判二〇〇頁 正價六拾錢 郵税六錢

本因坊土屋君校訂 山田楯平君著
新撰圍碁錦嚢
全三冊和紙上綴 小判三一八頁 正價五拾錢 郵税四錢

方圓社員六段大澤銀次郎君編
絶妙秘訣 **圍碁獨習案内**
全二冊和紙上綴 小判一〇一枚 正價參拾五錢 郵税四錢

方圓社員六段大澤銀次郎君編纂 田村君補輯
新撰定石 **圍碁獨稽古**
全三冊和紙上綴 小判一〇七枚 正價參拾五錢 郵税六錢

平田純一郎君編述
圍碁と將棊
全一冊洋並綴 大判二三八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

岡崎淵沖君著
各傳比較 **點茶活法**
全四冊和上綴帙入 大判六〇〇頁 正價貳圓五拾錢 小包料拾六錢

江刺家協一君著
茶の湯大全
全一冊洋布上綴 中判五〇八頁 正價六拾錢 郵税八錢

博文館編輯局編纂 木版刷錦繪及寫眞銅版挿入
茶の湯と生花
全一冊洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

吐月齋惠一烏君編纂
挿花盆石 **四時の詠**（優雅木版畵）
全三冊和紙上綴 大判一四〇枚 正價五拾錢 郵税六錢

秀貫齋月一甸君編纂
挿花盆石 **正風花鏡**（優雅木版畵）
全三冊和紙上綴 大判二〇二枚 正價五拾錢 郵税六錢

大露庵河村一洗君選
新撰活花圖式
全二冊 美濃紙木版刷 正價四拾錢 郵税六錢

榮雲齋先生編
挿花大樂抄圖會
全二冊 美濃紙木版刷 正價四拾錢 郵税六錢

江原春夢君著
盆景、盆山 盆石、盆庭 **秘訣圖解**
全一冊洋並綴 大判二二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

順石軒翁編
盆山百景圖
全一冊 大判 木版刷 正價壹圓 郵税拾四錢

女（後付の三二）

繪葉書類

● 故宮岡永洗君畫 **佳人の装** 島の子紙卅六度手摺 正價壹圓 郵税二組迄貳錢
目次 お花見 涼しき窓 双美 野の花 嫁入姿 艶なる雪

● 水野年方君筆 繪はがき **古今美人** 鳥の子紙卅六度刷 上、下各六枚一組 各正價壹圓 郵税二組迄貳錢

● 水野寛方君寫 繪はがき **寛政美人**（享和時代の美人風俗） 六枚一組鳥の子紙二十四度刷 正價六拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 歌川國峰君筆 繪はがき **時代美人** 六枚一組鳥の子紙三十二度刷 正價八拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 寺崎廣業君筆 繪はがき **やまと風俗** 六枚一組鳥の子紙三十五度刷 正價壹圓 郵税二組迄貳錢

● 齋藤松洲君選 **北齋漫畫** 第一輯、第二輯、第三輯、各六枚一組 正價各貳拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 鈴木華邨君畫 東都名所 **四季のながめ** 六枚一組 正價四拾五錢 郵税貳錢

● 跡見花蹊女史畫 繪はがき **四季の花** 上下 各六枚一組 正價各參拾錢 郵税貳組迄貳錢

● 三宅克己君筆 **水彩繪葉書** 上下各六枚 試筆用ケント付 正價貳拾五錢 郵税貳組迄貳錢

● 同君畫 **水彩十景** 上下二組 各五枚一組 正價貳拾錢 郵税三組迄貳錢

● 橋本邦助君畫 **スケッチ繪葉書** 上下各六枚一組 正價一組拾貳錢 郵税二組迄貳錢

● 丸山晩霞君畫 **山と水** 六枚一組 正價拾八錢 郵税三組迄貳錢

● 大下藤次郎君畫 大下水彩はがき **山紫水明** 六枚一組 正價貳拾五錢 郵税貳錢

● 三宅克己君畫 水彩スケッチ **山水美** 下 五枚一組 正價拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 佐藤生巣君畫 **カードハガキ** 浮出六枚一組 正價貳拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 山田清君畫 **銀燭** 六枚一組 正價拾八錢 郵税二組迄貳錢

● 和田三造君筆 **ペン畫** 六枚一組 正價拾八錢 郵税二組迄貳錢

● 竹久夢二君筆 **戀日記** 六枚一組 正價拾八錢 郵税二組迄貳錢

● 本多穆堂君畫 **花？人？** 六枚一組 正價卅五錢 郵税二組迄貳錢

● 丸山晩霞畫並説明 **花** 六枚一組 正價貳拾五錢 郵税二組迄貳錢

● 織田一馬君畫 **花の水彩** 六枚一組 正價拾八錢 郵税三組迄貳錢

● 野道三君畫 **精美** 六枚一組 正價貳拾五錢 郵税三組迄貳錢

● 太田三郎君畫 **愛の面影** 六枚一組 正價拾八錢 郵税三組迄貳錢

● 小杉未醒君畫 **今昔六種** 六枚一組 正價拾八錢 郵税三組迄貳錢

女（後付の三二）

女學世界
（明治四十一年一月一日發行 每月一回一日發行）　第八卷第壹號　（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）（本號ニ限リ郵稅貳錢五厘）